東方～青狼伝～

白夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
東方～青狼伝～

【Ｎコード】
Ｎ１３２０Ｐ

【作者名】
白夜

【あらすじ】
自分の世界に不満を持ち、知らず知らず“拒絶”した少女がいた。彼女は記憶を持ったまま別の世界に生まれ変わる。
妖怪となった彼女は何を見て、何を思って生きていくのか…

◆プロローグ（前書き）

ちょっと修正しました。

◆プロローグ

――この世界はつまらない

街中にはビルが建ち並び、化学の発展に伴い自然は減少。温暖化による砂漠化も進んでいる。

私はこんな世界がつまらないと感じた。だから無意識に私はこの世界を“拒絶”していた。

そして…私は未知の体験を望んだ。

その結果、私は……

とんでもない経験をすることになる。

聞こえるのは風とそれによって揺れる草の音だけ。私はゆっくりと瞼を開く。

「……ここ何処？」

辺りを見渡せば草原が広がっており、遠くに山も見える。こんなに沢山の自然を私は見たことがない。

私は自分の部屋で休日を満喫していたはずだったのだが…

「たしかパソコンで暇を潰して、それから昼寝をしてたはずなんだけど…」

私は立ち上がって伸びをすると額に手を当てて考える。

まず此処は何処なのか……確実に私の住んでいた街ではないだろう。私の住んでいた街はビルが立ち並ぶごみごみとした街だったから自然なんて道端に植えてある並木ぐらいのものだ。

次になんでこんな所にいるのか……さっぱりわからない。寝ている時に誰かにさらわれたのだろうか？

ありえないこともないが、私は結構感覚が敏感でなにかあればすぐに目を覚ます。

…となると一瞬で場所を移動した？

…いやいや、ありえない。たしかにそうなら素敵だろがそんなゲームの世界みたいなことができるわけが……

「……ん？」

そこで私は額に当てていた自分の手に違和感を感じて目の前にもってくる。するといつの間にか爪が伸びていた。しかもかなり鋭い。

よく見れば服も青い毛皮でできたコートみたいなものを着ている。もちろんこんな服は持っていないし、着た覚えもない。

私は慌てて全身をチェックした。その結果、なんと獣耳と尻尾があった。

「って、なんで私はこんなに冷静なんだ?」

驚きはしたが違和感というものが全くない。まるで生まれた時からこうだったような…

「不思議だわ…なんだか体も軽いし…」

私が趣味でやっていたゲームに東方があったがあれに出てくる妖怪達もこんな感じで…

「…まさか私、東方の世界にでも来たのかしら?そして妖怪になったとか…いやいや、まだ決まったわけじゃないしこれが夢である可能性だってあるし…」

私はとりあえず何かないか探すついでにしばらく歩き回ることにした。

歩きながらポケットを探ると鈴がついた桜の花びらの形をした髪飾りがあったので付けてみた。歩くたびに小さくリンリンとなるのがなんとなく気に入ったのでそのままつけておくことにした。

草原を歩くこと約３０分。見事に何もない

「さて、困ったわ…」

流石に私もこれが夢ではないことを嫌でも理解するしかなくなった。

周りは草原、山、丘、花畑以外何もないし、人どころか動物の気配さえない。

「食べ物とかどうしよう…」

私はあてもなくふらふらと歩き回っていたがいい加減うんざりしてきたのでたまたま見つけた池の淵に腰を下ろした。

「さて、これからどうしよう…」

本日何度目かの同じ独り言を呟く。

「まぁ…何とかなるわよね…うん、頑張るのよ私！何たって私は…あれ？私は……？」

独り言を言ううちに私は大変な事に気がついた。

「名前が思い出せない……？」

自分の名前を思い出せなくなっていた。

その後、しばらく呆然としていたが我に返ってから何となく池に顔を写してみる。

記憶にある自分の顔…獣耳がついているし髪の色も青っぽくなっているが顔は変わっていない。気分が沈んでいるためか獣耳は力無くぺたんと垂れている。

「帰りたい……いや…」

ぽつりと呟いた一言。だが私はその一言に疑問を覚えた。

帰りたい…本当に?あんな退屈な世界に?家族がいて、友達がいて……

…ただ、それだけの世界。

私は自分のいた世界を否定して、拒絶して、新しい世界を求めていた。つまらない日常にうんざりして…

それが現実になっただけの話じゃないか。それなら…別に帰りたいとは思わない。帰っても今までみたいなつまらないにちじょうがあるだけ…

そう、元の世界なんて

「帰らなくていいか…」

他人事のようにどうでもいい世界だったんだから。

その瞬間、頭の中にふっ、と一つの言葉が浮かんだ。

『ありとあらゆるものを拒絶する程度の能力』

やっぱり私は違う世界に来たようだ。

しかも、自分の世界を“拒絶”して。

おそらく、それが私の望んだ運命なんだ。

◆自分の力（前書き）

今回は主人公の能力の確認です。彼女の名前は次の話で出したいと思います。

◆自分の力

池の淵に腰を降ろしてから気持ちの整理をしていた私は落ち着いてきたのでとりあえず立ち上がる。
髪飾りについた鈴がリンと鳴るのを聞きながらとりあえずいろいろと確認することにした。

まずは自分のことについて。尻尾や耳があるということは何か動物の妖怪である可能性が高い。

動物の姿になれるかもしれないのでイメージしたり力を入れてみたりといろいろ試してみる。すると一瞬光ったかと思うといきなり視線が低くなった。

池を覗き込むと青い毛の色をして髪飾りを付けた狼がうつった。

「おお…カッコイイじゃない…」

髪飾りのせいで若干可愛く見えてしまうがそこは仕方がない。

そういえばこの髪飾りは何なのか…。何故かポケットの中に入っていたから私に関係あるのかもしれないが思いだそうとしても覚えがない。まぁ、たいした理由ではないのだろうから気にしないでおこう。

次に能力についてだが、この『ありとあらゆるものを拒絶する程度の能力』は使い方しだいではチートに近い。

試しに『私は空を飛べない』という事実を“拒絶”してみる。するとあっさりと私は空を飛べるようになった。

他にも『私は妖力に限界がある』という事実を“拒絶”すれば全く妖力を消費しなくなった。

妖怪は年月を重ねるごとに妖力が増えていくが、私は増えるだけ増えて使っても減らないという反則的な体になったわけだ。

ただし、この能力にもできないことがある。それは『命』に関わることだけは“拒絶”できないのだ。

例えば『相手の存在』を“拒絶”したり『目の前の人物は生きている』という事実を“拒絶”することはできない。つまりこの能力で人を殺すことはできないのだ。反対に死んだ生物を生き返らせることもできない。

それとは別に『私はいつか死ぬ』という事実を“拒絶”して死なない体にしようとしたら怪我の治りが早くなり不老不死になる。これは大丈夫だ。延命はＯＫなのか？と疑問に思うができてしまうのだから仕方ない。

ちなみに命に関わる能力の実験はそこら辺にいた虫でしたので人に効くのかまだ確証は持てない。私以外に妖怪も人間もいないのだから仕方がない。

おそらくだが私はとんでもなく大昔にきたのではないだろうか？まだ虫以外の生き物がいないようだから間違いないだろう。

私はとりあえず人類が生まれるまで能力の鍛練をしながら生活す

る事にした。一人は寂しいがここは我慢だ。

人類や妖怪が生まれたらきっと毎日が楽しくなるだろうから…

私はそう心のなかで思いながら池の淵に座り込むとアクビをしてそのまま眠った。

明日はどんなことを試そうかな、とワクワクしながら。

◆邂逅、氷の妖精チルノ（前書き）

タイトルからわかるようにチルノが出ます。

◆邂逅、氷の妖精チルノ

私がこの世界に来てから五百年たった。

毎日能力や妖術の訓練をしていたらあっという間に時間が過ぎていった。妖怪になったからか時間が流れるのを早く感じてしまうがそれは仕方ないのかもしれない。

この五百年という月日が流れる間にいろいろなことがあった。

まず動物達が生まれ、人類も誕生して文明を築き始めた。といってもまだできたばかりの旧石器時代。私はまだ彼等と触れ合うつもりはない。

次に大規模な地震があった。私は池の淵でひなたぼっこをしていたので突然の地震に驚いて池に落ちそうになった。

しかも地震のせいで地下の水脈でも掘り当てたのか池の真ん中から凄い勢いで水が噴き出してきた。

私は急いで空中に避難したのだがみるみる池は水の量を増やし、ついには湖になってしまった。

おそらく活断層のずれが影響だと思われるが湖の近くあった小さな山がさらに高くなり、そこから川を伝って湖に水が流れ込むようになった。

…あれ？山と麓の湖？どこかで似たような場所を聞いたことがあ

るような…

まぁいいか。とにかく周りの環境に関してはこんな感じである。

次に私自身に関してだが、どうやら私は妖怪の中でも強い部類に入るようだ。例の山が出来てからというもの山に小妖怪が住み着くようになった。妖怪の仲間だからとコミュニケーションをとろうとしたが、私を見た瞬間襲い掛かってきたのであっさりと返り討ちにした。

すると、私を見ていた妖怪達は一目散に逃げだしたのだが私はそんなことよりも力は弱いとはいえ妖怪を倒したことに驚いていた。今まで私以外の妖怪に会ったことがなかったのでわからなかったが今の私の力はもしかしたら大妖怪に達するくらいかもしれない。

よく考えてみれば私は普通に人の姿になれるが、普通妖怪が人の形になるにはそれなりに力をつけなくてはならない。

と、なると私は最初から力のある妖怪だったことになる。うわぁ、今更だけど私って何なんだろう…

そんなことを考えながら湖を眺める。しかしこの湖、最近になって気温が下がったり昼間には霧がかかるようになった。おかげで見通しが悪くなってしかたがない。

「ここから眺める景色好きだったのに…」

私は誰に言うわけでもなくぽつりと呟いた。

「へぇ〜、あんた結構変わり者なのね」

「そうかな？私は普通だと……あれ？」

普通に返事をしていたがここには私以外誰もいないはずだ。

私は慌てて戦闘態勢になると妖力を解放する。

「ちょっとまちなさいよ。誰も戦うなんて言ってないわ」

そう言って声の主は霧の中から姿を現す。青い服に青い髪、青いリボンに氷の羽の生えた小柄な少女。この少女を私は知っている。

「…チルノ？」

そう、目の前にいるのは？で有名な氷の妖精チルノである。

「あれ？なんであたいの名前を知ってるのよ？」

あ…しまった。ついつい名前を呼んでしまったが彼女とは今日が初対面、名前を知っているはずがない。

「え、えっとそこの山にいる妖怪達が言ってたのよ」

我ながら苦しい理由ではあるがチルノを含めて妖精は頭があまりよくないらしいので深くは追求されないだろう。

「ふ～ん、まぁいいわ。確かにあたいは氷の妖精チルノよ。あんたは？」

なんだろ…この落ち着いたチルノは？私の知っているチルノは相手の素性なんて気にせずに突っ込んで行くやつなんだけど…

「ちょっと、聞いてるの？」

「…え？ああ、名前だったわね。私は……そういえば私、名前がないわ」

「はぁ？あんた名前がないの？」

チルノが呆れたような視線を向けてくるが今まで名前が無くても大丈夫だったために名前のことをすっかり忘れていた私は反論できずに俯く。

チルノに呆れられるって…泣いてもいいですか？

「仕方ないわね、名前がないと呼ぶときに困るからあたいが一緒に考えてあげるわ」

「…え？」

私は耳を疑った。あのチルノが私の名前を一緒に考えてくれるとは……

「な、何よそんな驚いた顔して。あたい何か変なこと言った？」

「い、いえ…何でもないわ」

チルノってこんなだっけ？なんか違うような…

「ねぇ、あなた本当にチルノ？」

「はぁ？当たり前じゃない。さっきあんたからあたいの名前を呼んだじゃない。矛盾って言葉知ってる？」

え？チルノが目茶苦茶まともなんですけど！？

「妖精ってもっと頭が悪いと思ってた」

「それは偏見よ。妖精だって頭がいい奴もいれば悪い奴もいる。全てが同じじゃないわ」

どうやらこの世界のチルノは普通に落ち着いた性格みたいだ。『無謀は勇気』って言っていた原作のチルノとはまるで正反対だ。

「それで、あんたの名前なんだけど…」

え？ああ、だいぶ話がそれたけど私の名前を考えてくれるって話だったっけ。

「桜花…鈴音桜花（すずねおうか）っていうのはどう？あんたの髪飾りから考えてみたんだけど」

「あ…うん！それいいね！気に入ったよチルノ、ありがとう！」

私が笑顔でそう言うとチルノは照れたのか顔を赤くしながら視線をそらした。

「き、気に入ったならよかった。まぁ、あたいが考えたんだから当然よ。あたいってば…」

「天才ね！でしょ？」

「な!?あ、あたいの台詞取らないでよ!」

「あはははは～」

やっぱり性格は多少違えどチルノはチルノだった。

それにしても最後にこんなに笑ったのは久しぶりだ。これもチルノのおかげかな…頭撫でてあげよう

「うわぁ!いきなり何すんのよ!」

「何って、名前のお礼だよ。ありがとうチルノ」

「むぅ～、なんか子供扱いみたいで嫌だわ」

「私からすれば誰でも子供だよ」

「…うぅ～」

さて、やっと楽しくなってきた。今度は何が起きるのかな?

◆邂逅、氷の妖精チルノ（後書き）

次に誰を出そうかひたすら悩んでます（汗）

◆人間の成長と新たな出会い（前書き）

オリキャラが出ます。

◆人間の成長と新たな出会い

チルノと出会ってからさらに五百年が経ち、私がこの世界に来てから千年が経った。

チルノと出会ってからは毎日話をしたり遊んだりして過ごしたので退屈はしなかった。

チルノは口は多少悪いが基本親切で思いやりがある。そのためか最近はいろんな妖精が湖にやってくる。

チルノがいて霧がかかるならここが霧の湖で近くの山が妖怪の山となるのだろう。

私はチルノや集まってくる妖精達と毎日遊んでは寝るという生活を送っていた。チルノは「桜花以外があたいの縄張りに入るな！」と集まる妖精達に怒鳴るが結局追い出そうとはしなかった。チルノも実はまんざらでもないのではないのだろう、無意識に笑顔を見せることもある。

「ねぇ、桜花ってば！」

「え？」

どうやらチルノが私を呼んでいたようだ。あきらかに不機嫌そうにこちらを見ている。

「えっと…ごめん、チルノ。ちょっと考えごとしてたよ」

私の言葉にため息をつきながらチルノは仕方ないとばかりに腕を組む。

「これから人間の村に行くって話をしてたんだけど…」

ああ、そういえば昨日そんなことを言っていた。

「たしか人間の村の様子が最近おかしいんだっけ？」

昨日湖に来たとある妖精から人間の村が最近急に賑やかになっているらしく、それを聞いたチルノが興味がわいたとか言い出して見に行くことになったのだ。

「なんだ、覚えてるじゃない。なら早速行きましょうか」

そう言うとチルノは背を向けてさっさと飛び去って行った。私は行動力だけは原作通りなんだなと心の中で呟きつつチルノの後を追って空へと飛びたった。

「……」

「なによ…これ」

ちなみに上がチルノ次が私だ。今私達は人間の村…いや、村だっ

た場所の上空に浮かんでいる。

私が人間の村を最後に見たのが五百年前、チルノに出会う少し前だ。その時はぎりぎり村と言えるくらいの状態でまだ家さえまともなものがない程度の発展具合だったのだが…

「桜花、あたいの目がおかしくないならこれは村じゃないよね？」

「…ええ」

眼下に広がるのは村なんて規模じゃない面積の町並み。どちらかと言えば都だ。平安時代くらいの都ができていたのだ。

「桜花、人間って凄いね…」

「いやいや、おかしいわよ。五百年でここまで発展するわけないでしょ」

元人間の私からしてもこれはおかしい。いくらなんでも石器時代くらいの文明が五百年でここまで発展するだろうか？

「…出鱈目だわ」

とにかく私とチルノは村…じゃなくて都の入口近くに降りると私は耳と尻尾と妖力を隠してから門へと歩いて行った。

門番は私を人間であると思って通してくれた。チルノも最初は止められたが妖精であるのがわかるとあっさりと通してもらえた。

門をくぐって見たのはまさに平安時代の町並みだった。チルノを

見ても何も言わないところからすると妖精は珍しいものではないようだ。

反対に私は凄く居心地が悪い。皆の視線が集中しているのがわかる。まぁ、私の格好はこの時代からすれば珍しいだろう。平安の文化にコートなんてないだろうし。

私達は一通り歩き回り、町並みを見て回ったり町の人からどのようにして文明が発展したのか聞くと湖に帰った。

「人間って凄いのね～」

チルノが腕を組みながらうんうんと頷いているのを横目に見ながら私は考える。

五百年であれほど文明が発展したのなら今から五百年か千年すればあっという間に平成と同じかそれ以上に文明は発展するだろう。町の人から聞いた情報によるとたまたま文明の発展が最近になって進んでいるから、らしい。しかし、そんな歴史は聞いたことがないし…

まさか何かあって一度文明が滅びるのだろうか？そういえば地上の発展した文明をもった者達が月に行って月人になったんだっけ？ならあと数百年したら永琳あたりに会えるかもしれない。

「いやはや人間ってわからないものだね…」

私はそう呟くと私を呼ぶ妖精達の方へと歩き出すのだった。

それから二百年程経ったころ、人間の都は江戸時代前半の町並みとなってきていた。

そういえば、最近人間が文明を築いていくのに対抗するかのように妖怪の山にいる妖怪達も力をつけ始めてきた。すでに大妖怪も何匹か現れ始めている。どうも発展する人類が気にくわないらしい。

今のところ私が説得して渋々何もしない状態なのだがいつ不満が爆発するかわからない。まぁその時は私が力で押さえ付けるつもりだが。

今のところ私に勝てる妖怪はいない。私のように千年以上を生きている妖怪はおらず、私が妖怪の中では最強という立場にいる。

ちなみに最近尻尾が増えた。ある朝起きたら尻尾が二本になっていたのだ。長生きして力を蓄えた妖獣は尻尾が増える。最高は九本で代表的なのでいえば九尾の狐なんかがそうだが何故九尾の狐以外に例がないのか不思議でたまらない。ちなみに尻尾の数は力を、長さが賢さを表すらしい。

結局まぁ考えても仕方ない、とチルノに会いに行くとチルノが私を見た瞬間固まった。何事かと思ったが視線が尻尾にいっていたのでふりふりと動かしてみると勢いよく尻尾に抱き着かれた。私の尻尾は長さが一メートルくらいで太さはちょうどチルノが抱き着ける程度だ。

「もふもふだ～」

と言いつつ私の尻尾からなかなか離れなかったが我に返ったのか突然ハッとした顔になるなり勢いよく離れると顔を真っ赤にして慌てだした。

「こ、これは違うの！前々から触りたかったけど別にそこまで気になってたわけじゃなくて…」

どうやら今まで尻尾に触りたかったが恥ずかしくて言い出せず我慢していたらしい。しかし尻尾が増えたのを見たせいでついに我慢できなくなったようだ。

「別に言ってくれれば触らせるのに」

「だって恥ずかしいじゃない！」

「ほらほら～」

「うぅ～（泣）」

結局チルノは我慢できずに私の尻尾をたまに抱き枕にしている。ただチルノと一緒に寝ると無意識に冷気を放つためかなり寒い。なのでたまにだけということで我慢してもらっている。

さて、私は現在妖怪の山に来ている。ここ何百年かの間に妖怪の数もだいぶ増えたが、殆どが小妖怪で中妖怪や大妖怪は少ない。私

が通りかかる度に小妖怪達は道を開けるように左右に避ける。尻尾が増えてからというものそれは顕著になり逆にこっちが恐縮してしまいそうになる。

しばらく山を登り頂上付近の広場までやって来た私を出迎えたのはこの山で特に力が強い大妖怪やその部下的な位置にいる中妖怪だった。

何度かこうして広場に円を作るように座り、情報の交換や話し合いをやっているのだ。

「それで…桜花よ、まだお前の気持ちは変わらんのか？」

熊のような姿の妖怪が私を見ながらそう問い掛けてきた。私の気持ちというのは「まだ人間に手を出さない」ということだ。

「ええ、彼等はまだ私達に対抗しうる力を持っていない。まだ様子を見るべきよ」

「…むぅ」

私の答えに周りの妖怪達は不満そうな顔をする。人間が力をつけていつか妖怪に対して反抗するようにならないかが心配なのだ。

「たしかに最近の人間の成長は凄いけどまだ私達より力は下、大丈夫よ」

私は立ち上がると皆に背を向けて歩きだした。

「…桜花」

「…ん？」

歩き出した私に先程の熊の姿をした妖怪が再び声をかけてきた。

「何故お前は人間にそこまで肩入れするのだ？」

「……そうだね」

私は振り返らないまま答えた。

「…人間が好きだから、かな？」

そう言うと、私はよく晴れた空へと飛び立った。

空へと飛び立った私は何処へ行くわけもなくふわふわと空を飛び続けていた。ちなみに、この後チルノ達と遊ぶ約束をしているのでそこまでのんびりするつもりはないが…

私は妖怪の山での会話を思い出していた。あの時の言葉に嘘はない。元人間である私は人間が嫌いではないし、できれば争い以外で解決したいと思っている。その方がいいに決まっているし、なにより平和的だ。

「まぁ、あいつらが我慢してくれれば……ん？」

私が独り言を呟いた瞬間、こちらになにかが近づいてきているの

を感じた。妖力を感じるからおそらく妖怪だ。

「それにしても…速いわね」

こちらに近づいてくる気配の速度がかなり速いのだ。私でさえ追いつけない程のスピードである。

「誰だろ…私より速いといえば文くらいだと思うけど…まだ生まれてないはずだし…」

そうこうしている間に相手は私の目の前までやってきた。

「あ、見つけましたよ！鈴音桜花さん！」

「……は？」

「いや～、探すのにだいぶかかりましたけどやっとお話が聞けます！」

いきなりビシッと音が出るくらいの勢いで指差されて私は唖然とした。いや、それだけではない。私を指差している妖怪の顔が…

「え？…文？」

幻想郷最速と言われることになる烏天狗の射命丸文にそっくりなのである。

服装が動きやすそうな着物というくらいで他は文そのままである。しかし、彼女はまだ生まれていないはずである。原作にも文にそっくりな人物なんていないし――と、なると…

「あなた…名前は？」

「あややや、すいません。私は射命丸真矢（しゃめいまるまや）といいます。以後お見知りおきを！」

やっぱり…射命丸ということは文の先祖か、もしくは母親にあたる関係だろう。原作にいないキャラだから私が知るはずもない。

「射命丸真矢さんですね？私に何か？」

「はい！実は私、興味のある妖怪の資料を作るのが趣味でして…妖怪の中でも最年長で最強の桜花さんの資料を作りたいと思って探してたんです！」

なるほど、どうやら文の取材癖は先祖からの遺伝のようである。

「別にいいけど…変なこと書かないでよ？」

「あ、大丈夫です。そこはちゃんとしますよ。自分の資料に嘘書いたってなんの特もないですし」

まぁ、それもそうか…

「ではまず…」

「はぁ……」

文みたいに色々と聞かれるんだろうなと私は心の中で苦笑いをした。

余談だがその後、夕方になるまで取材されるはめになり、帰った時にチルノから約束を破った罰として一週間毎日尻尾を抱きまくらにされて非常に寒い思いをした。

今度から約束はしっかり守ろう…

◆遭遇～宵闇の妖怪、ルーミア～（前書き）

キャラクタープロフィール

鈴音桜花（すずねおうか）

性別・女
年齢・約千二百歳
身長・１７０ｃｍ
種族・狼の妖獣
能力『ありとあらゆるものを拒絶する程度の能力』

この小説の主人公。自らの能力で自分の世界を拒絶した少女。人間としての日常に退屈し、新しい日常を求めた結果、東方の世界に記憶の大半を持ちながら妖怪として誕生。新しい日常を歩みだした。青い髪と目、青い毛皮のロングコートを着ている。狼の姿の時は人間の成人男性を乗せれるくらいの大きさがある。現在の尻尾の数は三本。

以前は平凡な高校生で年齢は１８歳。黒髪黒目だった。本名は不明。名前が思い出せなかったために現在の名前をチルノにつけてもらった。

◆遭遇～宵闇の妖怪、ルーミア～

私がこの世界で妖怪として暮らし始めて千二百年、人間がなかなかの速度で文明を築き始め、あるとき急発展して江戸時代並の町を築いて…それに驚きつつも人間に妖怪の力を見せ付けるだの言っている妖怪の山の連中を黙らせたり…

と、なかなかに忙しいようなのんびりしているような毎日を送っている私だが…現在は人間の町で人間になりすまして生活をしている。

理由は人間の発展具合をすぐ側で見られるから…である。

ここ数年間は特に変化もなくいたって平和であり妖怪の山の連中も少し落ち着いてきた。

あと、最近チルノに新しい友達ができた。少し大きめの羽にエメラルドグリーンの綺麗な髪をサイドポニーにした可愛らしい姿。言わずもがな大妖精、通称大ちゃんである。

あるときチルノが珍しく笑顔で私に「新しい友達ができた！」と言って大妖精を紹介された。その後、大妖精が恥ずかしさと緊張からか「だ、大妖精でしゅ…あぅ／／／／」と噛み噛みで私に自己紹介してきた時は思わず抱きしめたくなった。

それからは大妖精…大ちゃんとチルノは毎日一緒に遊んでいる。私が人間の町に移動してからもよく遊びに来る。

ちなみに私は人間の町で「なんでも屋」をやっている。主に町の

外へと出る人達の護衛の仕事が多い。他には火事で燃えた家の修理を手伝ったり、子供の遊び相手、寺子屋での臨時教師など…料金も安いため結構頻繁に依頼がくる。なかなか充実した日々だったのだが…

「妖怪退治…ですか？」

ある日のこと、とある男性が私に妖怪退治を依頼してきた。

「はい、あなたは妖怪を軽くあしらう程の実力者だと聞いています。どうか私の友人の仇をとってほしいんです！」

この男性、一昨日の夜に友人と町の外へと出ていたらしいのだが、そこで妖怪に襲われて友人が喰われてしまったらしい。夜に町を出たので自業自得なのはわかるがどうしても友人を喰った妖怪が許せないらしい。

私は悩んだ。たしかに私は「なんでも屋」であるからなんでもするが流石に同じ妖怪を退治するのは気が引ける。とにかく情報が欲しい私は彼からもっと詳しく話を聞いてみることにした。

「なるほど、わかりました。その妖怪の特徴を教えてください」

「はい…と、言いましても奴は暗闇に紛れて襲ってきまして…詳しい姿はわからないのですが人間の子供のような姿だったと思います」

「人間の子供の姿をした妖怪ですか？」

「はい、なんと言いますか…松明さえ役に立たなくなるほどの暗闇から両手を広げた少女らしき影を見ました。目が赤く光っていたので恐ろしくて…」

闇、少女、赤い目、両手を広げた姿…ああ、彼女で間違いなさそうだ。

「わかりました。その依頼お受けします」

「本当ですか!?ありがとうございます!!…あ、でも無理をしないでくださいね?」

私は笑顔で大丈夫です、と言うと夜を待ってから出発することにした。

数時間後、すっかり周りが暗くなった頃、私は町外れの森を歩いていた。ちなみに姿は人間のままである。

歩き回ること数分で彼女は現れた。周りが急に暗くなり視界いっぱいに闇が広がる。そして背後から近づく気配。

「あなたは…食べてもいい人類?」

私の予想はやはり正しかった。私はニヤリと笑うと振り返りながら彼女の闇を“拒絶”する。

「…え?」

闇が消え去り、彼女の驚く声が聞こえ、同時に姿も現れる。金髪

に黒を基準にした服を着た赤い瞳の少女。

「はじめまして、宵闇の妖怪、ルーミア」

私の言葉にルーミアは驚いた表情になるがすぐに大きく飛びのいて距離を取った。

「あなた…何者？」

原作でいつも見ていた彼女とは違う雰囲気、口調、頭にリボンがないところから封印前のルーミアらしい。しかし、まだ私よりも力は弱い。

「まあまあ、私はあなたと戦いに来たわけじゃないよ。お話に来ただけ」

「それで？私になんの用かしら？」

私を睨んだままのルーミアに私はゆっくり近づく。

「あなたを退治しろって言う依頼がきてるの」

「ふ～ん、じゃああなたは私を殺しに来たの？」

彼女との距離は五メートルほど、ルーミアは私を睨んだまま少しずつ戦闘態勢に移行している。

「違うよ、ただ…一緒来てほしいの。安全な場所、教えてあげる」

私は笑顔でルーミアに手を伸ばす。ルーミアは不思議そうに私を

見ている。

「あなた、変わってるわね。人間のくせに私を助けようとするなんて」

「私は人間じゃないよ。…ほら」

隠していた尻尾と耳を出して妖怪であることを教える。

「……三尾」

そう、最近になってまた尻尾が増えた。人助けばかりしているから信仰でもあつまっているのか、それとも単純に妖力が増えたからなのかはわからない。

「どうする？私はあなたを助けたいんだけど…」

「嫌よ。私は私の好きなようにする。誰の指図も受けない。邪魔するなら…殺すわ！」

そう言うとルーミアは私に向かって走り込む。五メートルの距離を一瞬で詰めると右手を前に突き出してくる。私はそれを左手で受け止めると右手でルーミアの首を掴み地面に叩きつけた。ドゴンッという鈍い音が響きルーミアが苦しそうに顔を歪める。

「がっ……はぁ…」

私は掴んでいる手を離すと立ち上がり彼女を見下ろした。

「ルーミア、あなたが嫌だと言うなら…私はあなたを殺さなきゃな

らなくなる。私はあなたを殺したくない」

私はもう一度手を差し出す。

「もう一度言うわ。ルーミア、安全な場所を教えてあげる。だから私と来て」

ルーミアはしばらく考えると諦めたのか私を見上げながら不満そうに頷くとぽつりと呟く、

「しばらく人間は食べれないわね」

ルーミアはため息をはいて私に案内を頼んできた。

「そうだ、名前を言ってなかったわね。私は鈴音桜花。これからよろしくね、ルーミア」

「…ふん」

私は霧の湖のチルノ達としばらく一緒にいるのがいいと考え、朝になってから彼女を連れて行くことにした。

朝になってから私はルーミアを霧の湖へと連れて行った。

「ここが霧の湖よ。しばらくここで生活してもらうけど…」

「ええ、不本意だけど仕方ないわ。私もまだ死にたくないし」

「ごめんなさいね。ここには知り合いの妖精がいるから、彼女達と仲良くしてあげてね？」

すると、ちょうどチルノと大ちゃんがやって来た。

「あれ、桜花じゃない」

「あ、おはようございます桜花さん」

「おはよう、二人とも」

私は二人に挨拶を済ませるとルーミアを紹介する。

「この子はルーミア、妖怪よ。色々あってね、しばらくここで一緒に生活してもらうけどいいかしら？」

「あたいは構わないよ。大ちゃんは？」

「…えっと、私も、大丈夫…です」

「うん、じゃあルーミア。時々私もここには来るからなるべく人間に見つからないようにね」

「はぁ…なんで私が隠れなきゃならないのよ？」

ルーミアが不満げに私を見てきたので私は苦笑いをする。

「今回は私が来たからいいけどそのうち他の力のある人間に退治されても知らないわよ？」

「私は人間なんかに負けないわよ」

「我慢して、今私の依頼主に見つかったら本気で退治しなきゃいけなくなるし…」

「じゃあ依頼破棄すればいいじゃないの…」

「私はきちんと仕事はこなすのが主義なの！」

「私が生きてるうちは依頼をこなしたことにならないわよ？」

「今回は特別よ。それとも…まさか殺されたいの？」

「冗談言わないで。そんなわけないじゃない！」

「それじゃあ、しばらく大人しくしててね」

「…わかったわよ」

その後、ルーミアは集まった妖精達に引っ張られて戸惑いながらも一緒に遊びはじめた。まぁ、満更でもなさそうだし、いいかな。

そんなルーミアを見ながら依頼主にどんな嘘を言おうか考えながら今日も一日は過ぎていくのだった。

◆邂逅、八意永琳（前書き）

えーりん！えーりん！

◆邂逅、八意永琳

私が人里に顔を出し始めてから三百年が過ぎた。町並みはもう平成の文化をあっさりと過ぎ、見たこともない最新技術の発達した未来都市のようになっていた。

私は今も変わらず街中で何でも屋を経営している。私の姿が変わらないことに疑問を持つ人はいない。そうなる前に能力を使って『私の姿が変わらないことを不審に思う』ということを拒絶した。結果として、私が何十年経っても変わらない姿をしているのに気づかない。

それから尻尾も増えて現在四本。チルノは勿論、最近では大ちゃんやルーミアまで私の尻尾を抱きまくらにしている。

驚くべき事にチルノはここ数十年で私やルーミア、大ちゃんや他の妖精達と一緒にいても寒くならないようにと自分の力を完璧に制御できるようになった。また、それでコツを掴んだのか最近はメキメキと力をつけ、中妖怪と互角に渡り合う程になっている。

ルーミアは妖精達と暮らすのが楽しいのかずっと霧の湖から離れないでいる。時々妖怪の山の状況を教えてくれたりもしてくれて頼もしい限りだ。

ルーミアによれば妖怪の山の連中は近いうちに人間の街に攻めようと考える者が増えたらしい。最近は人間を脅かそうとしても武器で反撃されるらしく、このままでは妖怪を恐れる人間がいなくなり、

最悪の場合消滅である。

私は街中を歩きながらどうしようか考えていた。何とかして平和的に解決できないか…難しいのは分かっているが、私は諦めたくない。幻想郷はまだできていないが…なるべくそれに近い状態にまでもっていけたらいいと私は考えている。

ふと前を見ると街の子供達が数人、道端に座り込んでいた。

「どうしたの？」

私が子供達に話し掛けると一人の少女が振り返り、私を見ると近づいて来た。私は屈んで目線を合わせる。

「あのね、道の端っこにお花が咲いてるの！」

「花？」

私は珍しいと思いながら子供達の上から覗き込むように見てみた。この街は地面も全て人工的に作られたコンクリートのような物質で覆われているので植物なんて普通生えない。

「これは…」

目の前にあるのはギザギザした葉に黄色い花…たんぽぽ。

地面に少し亀裂が入っていてそこから生えてきたようだ。自然の

力は凄いと改めて感じさせられる。

「お姉ちゃん、このお花なんて名前？」

ふと、一人の少女が私にたずねてきた。化学技術の発達した街中に住んでいれば花の名前もわからなくて当然だ。街中にあるのは並木くらいで花なんて見かけないし、子供だけでは街の外には出られないから花畑なんか見たこともないのだろう。

「これはね、たんぽぽっていうんだよ」

「へぇ～、お姉ちゃん物知りだね！」

「そうね…いつか私が花畑に連れて行ってあげるわ。たくさんの花、見せてあげる！」

「本当！？お花がいっぱいあるの！？」

私が頷くと子供達は早く行きたいと言わんばかりに喜んだ。それを見ている私も自然と笑顔になった。

「お姉ちゃん、約束だよ！」

「ええ、約束するわ」

少女は右手をさしだすと小指を立てる。

「指切りしようよ！忘れないように！」

私は頷くと自分の小指を少女の小指と絡めた。

「じゃあまたね～！」

走って行く少女を見送ると私は再びたんぽぽの花へと視線を向けた。

「約束…か」

そのまま、私はしばらくたんぽぽの花を見つめたままその場に佇んでいた。

「あら、珍しい…花なんてしばらく見なかったわね…」

突然聞こえた声に振り返ると、そこには１５歳くらいの少女が立っていた。

「たんぽぽ…か、本当に珍しいわ。それに…」

彼女は私に視線を向けると少し目を細める。

「…妖怪に会うのもね」

「…！？」

私は驚きを隠せずにその場に立ち尽くした。

「…どうやら当たりみたいね」

「…何でわかったの？」

私が質問すると彼女は肩を竦めて再びたんぽぽへと視線を向けた。

「別に…何となく人間じゃない雰囲気をしてたから、それなら妖怪じゃないかと思ったのよ」

私はどうしようか迷いながらその場に立ち尽くしていた。彼女は再びたんぽぽに目線を向けて何やらぶつぶつ呟いている。なんというか…この沈黙が私の神経を擦り減らしていくように感じて落ち着かない。

このままだと精神的に危なくなりそうなので何か話そうと私は彼女に話しかけた。

「ねぇ、私のこと怖くないの？」

「ん？別に怖くはないわね。さっき子供達と話してるのを見てたから」

「でも…あなたを襲うかもしれないわよ？」

すると、彼女は私に視線を戻して軽く微笑んだ。

「あら、襲うつもりなの？」

「…いや、違うけど」

「ならいいじゃないの」

私は何も言えなくなってしまったのでため息をつくと彼女に背を向けた。

「あら、帰るの？」

「まぁね、今日は疲れたわ。主に精神的に」

私が帰ろうと一歩踏み出した時、突然コートを引っ張られる感覚がしたので振り返る。

「……」

そこには今話をしていた少女、よく見ると長い銀髪が丁寧に結んであり顔もなかなかの美人だった。

彼女は私の全身を上から下までくまなく見ると何かを考えだした。

「…どうかしたの？」

私が少し屈み込む形で尋ねると彼女はニヤリと口元を歪めた。

あ、絶対何か企んでる顔だ…

「ねぇ、あなたこれから少し時間あるかしら？」

「え？まぁ、あるけど」

私の返事でますます笑顔になる彼女を見て私は今すぐ逃げ出したい気持ちになってきた。

「ちょっと私の家まで来てくれないかしら？話したいことがあるのよ…」

「…ちなみに拒否権は？」

「ないわよ」

…ないのかよ！じゃあ尋ねる必要ないじゃないの！

「断る！……って言っても帰してくれなさそうね」

「ええ、その時は街の警備隊にそこで妖怪に会ったって伝えるわ」

さすがに警備隊を呼ばれて一騒動…なんてことになるのは面倒だし、何よりこの街にいられなくなりそうだ。能力を使って記憶を消す、という方法もあるが…ちょっとだけだがこの少女に興味がわいたので言うことを聞いてみよう。

「はぁ…わかったわよ…じゃあとりあえず自己紹介しましょうか。私は鈴音桜花、妖怪よ」

私が手を差し出すと、少女は私の返事に満足したのか笑顔で握り返してきた。

「私の名前は八意×××よ。…あ、この名前は発音しにくいかしら？」

…ん？八意？それに発音しにくい名前…まさか！

「そうね、じゃあ永琳と呼んでちょうだい。八意永琳よ、よろしく、妖怪さん」

…そのまさかでした。まさかこんな形で永琳と出会うなんて…。
たしかによく見れば記憶にある永琳の面影がある。何で気がつかなかったんだ私は…。

「どうしたの？私の顔に何か付いてるかしら？」

「いや、何でもない…」

彼女の後を付いて行きながらやれやれ、と私は心の中でため息をつくのだった。

―少女移動中―

場所は変わってここは永琳の家である。いや、家と言うには少しばかり違うか…何というか、屋敷と呼ぶ方が合っているほど広くて大きいのである。

「大きい家ね、羨ましくなるわ」

「そう？普通じゃないかしら」

そんな会話をしながら中へと入ると、物音さえしない玄関を抜けてリビングへと向かう。

「ねぇ、永琳。他には誰もいないの？」

あまりにも静かすぎるので私は自然と永琳に尋ねていた。

「ええ、ここは私の研究所も兼ねてるから普段は誰もいないわ」

「寂しくならない？」

「私は静かな方が好きなのよ」

永琳の入れてくれたお茶を飲みながら部屋を見渡してみる。白い壁には写真がいくつか飾ってあり、どれも最近のものばかりである。両親らしき人物と写っている写真や、あきらかに偉そうな人と写っている写真等…

「永琳はこの家の掃除とかはどうしてるの？一人じゃ大変でしょ？」

「掃除は機械達が自動でやってくれるから大丈夫よ」

「そう…」

ふと、近くにあった時計を見てみるともうすぐお昼になる頃だった。

「あら、もうお昼ね。何か作るわ、何がいいかしら？」

「いいの？ご馳走になっても」

「いいわよ、たまには誰かと食べるのも悪くはないわ」

「じゃあ…野菜炒めがいい」

「貴女、妖怪なのに肉は食べないのね」

「野菜が好きな妖怪がいてもいいでしょ？」

「ふふ、そうね」

その後、永琳の作った料理を食べ、私はリビングでくつろいでいた。もうすっかり友達の家に遊びにきた感覚である。

「で、結局永琳は何で私を家に招待したの？」

私と同じようにくつろいでいる永琳に質問すると永琳はクスクスと笑いだした。

「何でかしらね。気になったから…とでも言うしかないわね」

「ふ～ん、永琳ってやっぱり変わってるわね」

「変人とでも言いたいのかしら？」

「さぁ、どうでしょうね」

私達はお互いの顔を見て笑い合った。

「ねぇ、貴女は…」

「う～ん、その呼び方何とかならない？なんかしっくりこなくてさ。桜花って呼んでよ。」

「そう？じゃあ…桜花は何の妖怪なの？」

さすがの永琳も私の正体は見破れないらしい。ちょっぴり優越感

だ。

「私は狼の妖獣よ」

そう言って尻尾と耳を出す。永琳は突然現れた耳と尻尾を交互に見るとゆっくり近付いてきた。

「ねぇ、触ってもいいかしら？」

「え？あ、うん…いいけど」

「それじゃあ…」

永琳は興味津々な様子で私の耳を触りだした。

というか永琳、触るなら堂々と触ってくれないかしら？中途半端だとくすぐったい。

「尻尾が四本…あら、これふかふかして気持ちいいわね。一本もらえないかしら？」

「冗談やめてよ」

「あら、本気だったんだけど」

今の永琳なら小柄だから私の尻尾を布団変わりに寝ることもできるだろう。と、いってもさすがにそこまではしないが。

「四本ならだいたい５００歳くらいかしら？」

「ん？何が？」

「あなたの年齢よ」

「私の年齢？たしか１５００歳は越えてるはずだけど？」

私の言葉に永琳は驚いた顔をしていた。

「あなたって凄い妖怪なのね」

「まぁ、今のところ私より長生きの妖怪は知らないし、私より強い妖怪に会ったこともないわね」

「それじゃあ、あなたが妖怪の中では最強なのね？」

「う～ん、どうだろう…意外といるかもしれないわよ？私より強い妖怪」

それから私は永琳にいろいろ質問されてそれに全て答えた。何処に住んでいるか、どんな能力を持っているか等…勿論答えたらまずいものは答えなかったけど…

「何というか…あなた変わった妖怪ね」

全てを聞き終えた永琳からそんなことを言われて私は苦笑いするしかなかった。反論しようにも事実なので何も言えないし…

「永琳に変だって言われる筋合いはないわね」

永琳はあら酷い、とわざとらしく泣きまねをしたので私は自然と

笑顔になった。

ふと壁にかけてある時計を見ると5時になっていた。あんまり長くいると悪いから私はそろそろ帰ることにした。

「じゃあ、私そろそろ帰るわ。今日はありがとね、永琳」

「あら、もうこんな時間なのね。こちらこそ久しぶりに楽しい時間を過ごせたわ。ありがとう、桜花」

「また来てもいいかしら？」

「勿論よ」

私は耳と尻尾を隠すと永琳に見送られながら帰路についた。

ふと、振り返り永琳の家を見ると家の向こう側のだいぶ離れた場所にロケットのようなものが発射台に固定されているのに気がついた。

もしかしたら永琳が月に行く日はそう遠くないのかもしれないと思いながら私は再び帰り道を歩き出したのだった。

◆邂逅、八意永琳（後書き）

最近、友人の天（そら）がニコ動の「レッツゴー陰陽師」に洗脳されてきています。…ちょっと心配です。

◆チルノの今とこれから（前書き）

今回はチルノが桜花をどう思っているのかがわかります。

◆チルノの今とこれから

季節は冬…紅葉していた葉も全て落ちてしまい、時々雪も降るようになってきた。

この季節はあたいの一人舞台だ。

あたいは氷の妖精チルノ。霧の湖を縄張りに毎日他の妖精達と遊ぶだけの毎日を過ごしてる。

妖精は大自然そのものであり、それ故に死ぬことはない。だから死を恐れずに無鉄砲な事をやらかす妖精もいる。まぁ、あたいはそんなことしないけど…

そんなわけで毎日湖や人間の街で遊び回る毎日を送っているあたいだけど今日は違う。

久しぶりに桜花が帰ってくるからだ。桜花はここ数百年を人間の街で過ごしているが、たまに帰ってくるのだ。

鈴音桜花…これはあたいがつけた名前だ。あたいが生まれた時から湖にいた狼の妖獣で、毎日湖に来ては景色を眺めて帰るという変わった妖怪だった。

この霧の湖から少し離れた場所に“妖怪の山”がある。山全体が妖力を持っていて妖怪の住家にはもってこいの場所だ。その山の麓から霧の湖まで川が続いているため、たまにだが妖怪が流れてくることがある。と、いってもほとんどが河童で、昼寝をしていたら流された、といった感じなのだが…

彼女も最初は妖怪の山で暮らしていたみたいだったけど、何故かこの湖に入り浸っていた。そんな彼女にあたいは興味がわいて何日も隠れて観察をしていた。

ある時、湖に来た彼女は霧がかかっている湖を眺めながらむう、とつまらなそうに目を細めた。霧がかかっているせいでいつもの景色を見れないからだ。

「ここから見る景色、好きなんだけどなぁ」

その言葉を聞いた時、あたいは彼女に声をかけていた。

「ふ～ん、あんた変わってるわね」

あたいに気がついた彼女は少し驚いた顔をした。振り返った時に彼女がつけている桜の花びらの髪飾りからリンと鈴の音がする。何だか不思議と癒される綺麗な音色だった。

自己紹介をしていて彼女には名前がないことがわかった。名前がないなんてどんな生活をしていたんだろうか、と気にはなったが聞かないことにした。あたいは彼女の名前を考えるためにいろいろと思考するがなかなかいい名前が浮かばなかった。

ふと、彼女が髪をかきあげる時に再びリンと鈴が鳴る。綺麗な鈴の音と桜の花びらの髪飾り、鈴の音…桜の花びら……鈴音…桜花…うん、これにしよう！

こうして彼女は鈴音桜花という名前を気に入り、今もその名前を使っている。そしてたぶん…これからも…

桜花はあたいにとっての最初の友達であり一番長く一緒にいる大切な存在。友達というより姉妹のようだ。

あたいはこの関係が嫌いではない。むしろ好ましいと思っている。でも、あたいは素直じゃないからなかなか言葉じゃ表せない。“大好き”だとか“これからも一緒だよ”と言ってみたいけど、どうしても恥ずかしくて言えないままだった。

そんなある日、彼女から尻尾が二本になったと聞かされた。彼女の尻尾はふかふかしていて触り心地は最高だ。あたいは小柄だから彼女の尻尾一本がちょうどいい抱き枕になる。あたいは普段は素直になれないから、せめて寝る時だけでもと思って彼女の尻尾を抱き枕にして寝ることにした。“いつまでも一緒にいよう”という意味を込めて…

桜花は妖怪の中でも反則的に強い。他の妖怪よりも長生きで、妖力がずば抜けて高いということもそうだが、一番の原因は能力だ。

あたいに『冷気を操る程度の能力』があるように彼女にも能力があった。

それが『ありとあらゆるものを拒絶する程度の能力』だ。

彼女曰く、これは見方を変えれば何でもできるという事であり、反則な力らしい。以前彼女と能力の確認のための模擬戦をしたこと

があった。その時、彼女は“攻撃が当たる”ことを拒絶した。するとあたいの攻撃は桜花に当たる直前で突然向きを変えて明後日の方向に飛んでいった。本当に反則的な力である。

ただこの能力、拒絶するものの規模で消費する妖力が違うらしい。最近になって「今なら死んだ人間も生き返らせることができる」と言っていた。ただし、妖力の大半を消費するので数日はまともに動けなくなるらしい。

じゃあ妖力が減るのを拒絶したらいいじゃんとあたいが言ったところ、どうやら妖術等で消費する妖力はなんとかできるが能力で使う妖力はどうにもできないらしい。意外なところで不便な能力だ。

まぁ、桜花が無理するような事はあたいがさせないけど…あ、勘違いしないでね？あたいは桜花が倒れたら看病が面倒だからこう言ってるだけだからね！？べ、別に心配はしてないんだからね！？

…ん？そもそもあたいは誰に話してるんだろ？

そういえば今日は妖怪の山で大きな宴会があるとか…新しい妖怪も増えたから顔を合わせる事も踏まえてるみたいだけど…

まぁ、何でもいいや。桜花や大ちゃん、ルーミアがいるならあたいはどこにいても楽しいから。

それにしても桜花…遅いなぁ。遅れた罰として今日も寝る時は桜花の尻尾を抱き枕にさせてもらおう。わざと甘えてみるのもいいかもしれない。

ああ、これからも彼女と一緒に笑い合えたらいいな…

これはあたいの願い。小さいけど、大切な思いなんだ。

その思いを胸に秘めてあたいはようやくやって来た彼女に手を振るのだった…

◆動き出す妖怪（前書き）

オリキャラプロフィール

射命丸（しゃめいまる）　真矢（まや）

種族・妖怪（鴉天狗）
性別・女
能力・『眠りを操る程度の能力』

鴉天狗。性格は礼儀正しい。おそらくだが、射命丸　文の先祖か親戚と思われる。見た目は服装が着物であること以外は文そっくりで、気になる妖怪や妖精等の所を訪れて取材を申し込んでくる。
取材した内容は文章にして資料として保管するらしい。

彼女の能力である『眠りを操る程度の能力』はその名の通り眠りを操る。対象を眠らせることができるし、反対に眠りから覚ますこともできる。
この能力で眠らされたらなかなか起きない。その気になればまる二日は眠らせることもできるらしい。そのため彼女はこの能力と持ち前のスピードを生かして危険な相手や場所からはすぐに離脱できる。
ただし、力のある妖怪達には効果が薄いため数時間で目が覚める。しかし、彼女にとっては数秒だけ時間があれば逃げきることができるので大した問題ではないようだ。

桜花とは特に仲が良く、よく彼女のもとへ遊びに行くようだ。年齢は４００歳前後で妖怪の山ではなく別の山（※）で暮らしている。

※なんでも妖怪の山の妖怪は特に怖くて安心できないとか…

◆動き出す妖怪

季節は冬…私が永琳に出会ってからちょうど一ヶ月経った。

最近は毎日永琳の家に行ってお茶を飲みながらたわいのない会話をして帰る、という生活だった。

今日もいつものように永琳と私は縁側でひなたぼっこをしながらお喋りをしていた。

「ふ～ん、じゃあもうシャトルの打ち上げ準備は済んでるの？」

「ええ、数日中には月に向かって出発するわ…」

永琳によると、この辺りの人類の文明は発展し過ぎてしまい、世界のバランスを崩してしまったらしく、他の地域の文明が同じように発展するまで月で生活して世界のバランスを取り戻す計画らしい。

「あなたともお別れになるわね…もう、二度と会えないと思うわ。他の文明の成長速度から見ても数百年…いえ、数万年は帰ってこないでしょう……私も人間だもの、そんなに長生きはできないわ」

永琳は少し寂しそうな顔をするとゆっくりお茶を飲んだ。

「そっか～、むこうでも元気でね…永琳」

私の返事に永琳は不思議そうな顔をしながら私へと向き直る。

「…どうかした？」

「いえ…あなたって不思議よね。普段は人間みたいなのにこういう別れの話に関しては軽い気持ちでいられるところは妖怪らしいんだから」

「妖怪は仲間の死や別れへの関心が薄いから…まぁ、それだけじゃないんだけどね」

「…？」

永琳は将来幻想郷にやってくる。ならば私が死なない限りまた会えるだろう。だから話せないのは寂しいけど絶対に会えないわけじゃないから悲しくはない。

「さて、じゃあ私はそろそろ帰るとしましょうか」

「あら、今日は早いのね、まだお昼を過ぎたくらいよ？」

「それがね、何だか知らないけど妖怪の山で宴会があるんですって。私も招待されたから行こうかなって」

そう、昨日ルーミアから妖怪の山で宴会があるという話を聞かされた。なんでも新しい妖怪も増えてきたので一度顔合わせも兼ねて宴会をするんだとか…

妖怪の山の連中とはあまり仲良くないので呼ばれないと思っていたのだが…珍しいこともあったものだ。

「妖怪の山ね…最近そこの妖怪達がここを襲おうとか考えているん

でしょ？あなた大丈夫なの？」

「うん、たしかに仲は悪いけど殺し合いになるほどじゃないしね」

「そう……宴会で気を緩めないようにしなさいよ？」

「うん、わかった。じゃあ、また明日」

私は永琳に別れをつげると街の外へと歩き出した。

「あ、桜花お姉ちゃんだ！」

突然名前を呼ばれたので立ち止まり振り返ると、以前花畑に連れていくと約束した少女がいた。そういえば昨日永琳から名前を聞いたんだった…たしか

「リンちゃん…でよかったかしら？」

「うん！」

リンは9歳くらいの少女だ。一ヶ月前に花畑に連れていく約束をしたが忙しくてなかなか連れていけないでいる。

「桜花お姉ちゃん、今からまたお仕事？」

「違うよ、今日は友達の所で宴会なのよ」

「そうなんだ…ねぇ、明日はお仕事ある？」

「ないわよ？」

私の言葉にリンは目を輝かせた。彼女のここまで嬉しそうな笑顔は見たことがなかった。まぁ、知り合って一ヶ月しかたっていないから仕方ないのだが…

「明日は私も学校がお休みなの！桜花お姉ちゃん、お花畑に行こうよ！」

「そっか…うん、いいよ。じゃあ明日一緒に行こうか！」

「やった～！約束だよ！」

私は再び彼女と指切りをすると手を振って走って行く彼女を見送ってから再び歩き出した。

「遅い！」

霧の湖に着いてチルノと合流した時の第一声はそんな言葉だった。チルノの他には大ちゃんとルーミア、そしてなぜか真矢もいた。

「あれ？真矢が何でここに？」

「あややや、実は私もお誘いを受けまして…ただ一人で行くのは何というか…その…怖くて」

わからないでもない。妖怪の山に住んでいる妖怪達は攻撃的な輩が多い。怖くなるのも当然だ。

「ちょっと！あたいを無視するな～！」

「はいはい、ごめんなさいね」

お詫びとばかりに頭を撫でてやるとう～、と唸りながらも大人しくなった。

「桜花、今日は久しぶりに皆で寝ましょう？」

ルーミアの言葉にチルノと大ちゃんは賛成！と手を挙げる。あなた達の目的は私の尻尾でしょ…。

ふと、隣を見ると真矢が何やら元気が無く、俯いて何かを考えているようだった。

「真矢？」

「…え？あ…何ですか？」

「大丈夫？元気が無いみたいだけど…具合でも悪いの？」

「い、いえ！大丈夫です！ちょっと考え事をしただけですから…」

明るく振る舞おうとしているがあきらかに様子がおかしい。しか

し、この時私は深く追求するべきではないかなと思いこれ以上何も聞かないことにした。

「うわぁ…」

「賑わってるね～」

会場である妖怪の山の頂上に着いた私達が見たのは様々な妖怪と妖精達だった。その様子はまさに宴会という文字がピッタリだろう。

「桜花、あたい達も早くいこう！」

「わかったから引っ張らないで～！」

その後は妖精も妖怪も気兼ね無く料理を食べたり、酒を飲んだりした。

「楽しんでますか？」

「あ、真矢」

私が酒をちびちびと飲んでいると隣に真矢がやってきた。

「今日の宴会は特別なんです…」

「…特別？」

真矢は頷くと私の前に立つ。その顔は少し悲しそうだった。

「…真矢？」

「この宴会が開かれた本当の理由はですね…悔いを残さないためなんですよ」

「それはどう…いう……っ！？」

突然私は目の前が霞み始めて頭もぼんやりしてきた。

「明日には二度と仲間に会えないかもしれない…だからこうして思い出を作るんだそうです――」

霞む視界の中で真矢の言葉だけがはっきり聞こえる。私は何とか意識を保とうとして真矢の顔を見上げる。その時――

「ごめん…なさい…」

彼女は泣いていた。何度も私に謝罪の言葉を呟きながら。

その理由を考える前に、私の意識は闇に沈んでいた。

―――
――
―

「…ん」

私は肌寒むさを感じて目を開ける。回りは夕日に染まっていた。辺りを見渡すと妖精達は固まって寝ており、ルーミア以外の妖怪達の姿はなかった。ルーミアも私の尻尾に抱き着いたまま寝ている。

「私は…」

そう呟きながら記憶を遡る。たしか宴会に誘われて…酒を飲んでいたら真矢が来て……そうだ、彼女の顔を見ていたら急に眠気が襲ってきて…

私はもう一度周りを見渡す。会場にいるのは霧の湖のメンバーと妖精達だけ。他の妖怪達は誰もいない。

何だろう…嫌な予感がする…

私はルーミアを尻尾から引きはがすと周りの気配を探ろうとした。しかし、次の瞬間――

ドゴォォォン！！

「！！」

突然遠くから爆発音が聞こえた。私はすぐに空へと舞い上がる。すると遠くで煙が上がっているのが見えた。あの方角は…まさか！

「人間の街…です」

私が振り返ると、そこには全身に怪我を負った真矢がふらふらと飛んでいた。

「真矢！？どうしたの、その怪我！？」

私が真矢に近づくと彼女は勢いよく頭を下げた。

「ごめん…なさい」

彼女の肩は震えており、泣いているのか声が震えていた。

「桜花さんを…私の『眠りを操る程度の能力』で眠らせろ…と妖怪の山に住む妖怪達に脅されて…私…怖くて…」

そこまで聞いた私は最悪の事態になったことを確信した。妖怪の山の連中は彼女を利用して私を眠らせ、その隙に人間の街へと攻め込んでいたのだ。

「でも…その怪我は？」

現状は把握したが何故彼女は怪我をしているのかわからない。彼らに協力した彼女が何故怪我をしているのだろうか。

「私、やっぱり…こんなことといけないと思いまして…彼等をを説得したんです。こんなことやっぱりいけないですよって…そしたら…」

「…もう、いいよ」

私は真矢を抱きしめると能力で“彼女は怪我をしている”という事実を拒絶して傷を治した。

「真矢はチルノ達を見てて。私は行かなきゃならないから…」

「はい…気をつけてくださいね。それから…本当にごめんなさい…」

私は顔だけを真矢に向けて頷くと人間の街へと向かって全力で飛んだ。

私を騙してまで人間と争うなんて…しかも同じ妖怪の真矢まで傷つけて…流石の私も頭にきた。とにかく急がなければ……

私はいっこくも早く争いを止めるために飛ぶスピードを速めた。

◆文明の崩壊とたんぽぽの花（前書き）

今回の話で一旦区切りをつけたいと思います。

◆文明の崩壊とたんぽぽの花

私が街の上空に到着した時、街のいたる所から煙が上がり、時々火の手も上がっていた。街の入口は破壊され、門番らしき人間は体中を切り裂かれており、かろうじて人間だったのがわかるくらいの変わり果てた姿になっていた。

私は急いで門をくぐると街の奥を目指して走りだした。

遠くに見えるシャトルが無事であるところをみるとまだ奥までは妖怪達は侵入していないようだ。

――宴会だからって気を緩めたらだめよ？

永琳の言葉が頭をよぎり、私は自分の不甲斐なさに歯を食いしばる。私がもっと注意していればこんなことにはならなかったのに…！

大通りの曲がり角を曲がり、前方で交戦中の複数の人間と一匹の妖怪の姿を見つけた。

私は速度を落とさずに妖怪の懐に走り込むと腹を殴って気絶させる。

「皆さん、今のうちに逃げてください！」

私が振り向くと人間達は怯えるように後ずさる。

「あ、あんた…妖怪だったのか！？」

「…え？」

私を見た人間の一人がそう言って私に武器を向ける。私は今、耳と尻尾を隠していなかった。

「落ち着いてください！私は…」

「うるさい！妖怪なんか信用できるか！」

「…っ！」

彼等の言葉を聞いて私は思わず言葉が出なくなった。一緒に暮らしていた街の住人からそう言われ、私は悲しくなりながらも何とか口を開く。

「…急いで避難してください」

「……」

そう言って私は先を急いだ。背を向けても攻撃してこないのは混乱しているのか…それとも同じ街で暮らしていたよしみなのか…私にはわからなかった。

街の奥に向かうにつれて人間と妖怪の死体が増えてきた。きっと数分前にはこの場所で激戦が繰り広げられていたのだろう。

死体を避けながら走り続けていると街の中にある公園に出た。よく子供達が遊んでいたこの場所も今は無数の死体が転がっている。

地面は流れる血によって真っ赤に染まっており、戦いの跡が生々しく残っていた。

ふと、真っ赤な地面の中に黄色い色が見えて私は思わず立ち止まった。

黄色い色の正体はたんぽぽの花だった。この街は冬でも温かくなるように街全体が熱を逃がさない構造になっている。そのため冬であるにも関わらず色んな花が咲くのだ。

たんぽぽの花は公園の隅にある茂みから花の部分だけを覗かせていた。

急がなければならない状況で私はそのたんぽぽの花が何故か妙に気になって近くまで歩いていった。

そこで気がついた。茂みの中で誰かが俯せで倒れていた。片手にたんぽぽの花を握りしめて…しかも人間の少女らしい。

――まさか

私は恐る恐る倒れている少女の体を起こす。

「ぁ……」

そこにいたのは知っている顔で――

「あ…ああ…」

傷は脇腹にある切り傷だけ。ただ、その傷は深くて…既に出血もない。

「…う…ぁ…あ…」

生気のない顔から少女が既に死んでいるのがわかった。

――約束だよ！

少女と数時間前にした約束が頭をよぎる。

「うあぁ…あああぁぁぁ…！」

片手にたんぽぽの花を握りしめて、まるで眠るように、リンという名の少女がそこにいた――

「あぁあぁあああぁぁぁぁああ！！」

私は冷たくなったリンの体を抱きしめてこの世界に来てから初めて大声で泣いた。

―永琳Ｓｉｄｅ―

一体何時間経ったのだろう…

突然妖怪達が街に攻め込んできて…街の人々は逃げ惑い、殺され、生き残った者達も怪我人ばかりだった。

私がいるのはシャトルの発射台のある施設で、ここはいざという時のためにシェルターの役割も果している。

壁はミサイルの攻撃にも耐えられるほど頑丈で、妖怪だろうとこの壁を壊すには時間がかかるだろう。

「八意さん、準備が整いました」

シャトルのメンテナンスをしていた作業員からの報告を受けて私は頷く。

「怪我人を優先させてシャトルに乗り込みなさい！できるだけ早く！」

施設内に私の声が響き、私も怪我人に手を貸しながらシャトルへと避難を開始した。

戦況が不利であることが判明した今、私達は予定を変更して月に向かうことになった。できればこんなことになる前に出発すればよかったと心の中で悔やんだがもう遅い。今はどれだけの人間を救えるかが問題だ。

「正面入口、突破されました！！」

妖怪達と戦闘をしている部隊の一人が走り込んで来た。どうやら正面入口が突破されたらしい。このままではこの場所も数分後には戦場になる可能性がある。

「避難を急いで！」

私はシャトルの入口の扉にたどり着くと他の皆を誘導する。

「（よし、このままいけばなんとか…）」

「グオオォォォ！！」

「…っ！？」

そう考えた瞬間、壁を突き破って熊のような姿をした妖怪が現れた。それに続いて様々な妖怪達も流れこんでくる。

「くっ…皆急いで！」

シャトルの入口にはまだ大勢の人間が取り残されている。勿論、

私もその一人だ。

妖怪達は私達の方へと近づいてくる。

「（だめ…このままでは…！）」

私が自分の死を確信した瞬間――

ドゴォォォン！！

突然の轟音と同時に妖怪達と私達のちょうど間の壁が吹き飛び――

「…桜花！」

少女の死体を抱き抱えた友人がそこに立っていた。

―桜花Ｓｉｄｅ―

私が施設にたどり着いた時、既に妖怪達は建物の中へと侵入していた。私は回り道をしている時間はないと判断して、壁にあった案内の地図を参考にシャトルの入口までの最短距離を導き出すとすぐに移動を開始した。

最短距離でたどり着く方法…そう、壁を壊して進めばいいのだ。

「ちょっと衝撃がくるかもしれないけど…我慢してね？」

そう、抱き抱える少女に呟く。既に死んでいる彼女から返事がないのはわかっている…けれど話し掛けずにはいられなかった。

「じゃあ、いくよ！」

私は全力で壁を蹴った。分厚い壁は私の蹴りを受けて粉々に砕ける。そのまま私は次々と壁を壊しながら目的地まで急いだ。

そして最後の壁を破壊する。そこは今までの廊下よりかなり広い場所だった。私の記憶が正しければここが丁度シャトルの入口の目の前であるはずだ。

「…桜花！」

左側から聞き覚えがある声がして振り向くと複数の人間に混じって驚いた顔をした永琳がいた。

「永琳…よかった、無事だったのね」

安心して私が微笑むと永琳は私が抱き抱えているリンに視線を向ける。

「その子…リン、なの？」

「ええ…」

永琳は悲しそうな顔をすると私に視線を戻す。

「…っ!?……桜花、泣いてるの?」

いつの間にか私の頬を再び涙が伝っていた。それを拭ってから彼女に背を向ける。

「永琳、ここは私が食い止める。今のうちに逃げて」

「…大丈夫なの?」

彼女の心配そうな声が背後から聞こえてくる。それに振り返らずに頷くだけで返事をする。

「そうだ、シャトルに爆弾とか積んでない?広範囲を吹き飛ばすくらいのでかいやつ」

「一応防衛用に積んであるけど…それがどうしたの?」

「安全な高さまで飛んだらこの街を――破壊して」

「なっ!?あなたはどうするの!?」

「私は大丈夫。ただ、この文明をそのまま残すのは…ちょっとね。よそから来た人達がまた同じように文明を発展させたらまずいでしょ?」

「それはわかるけど…」

「自分達の街でしょ？自分達で何とかしなさいよ。私が一軒ずつ壊して回るはめになるなんて嫌よ？」

「わかったわ…」

そう言うと永琳はシャトルの中に入りドアのパネルを操作する。ゆっくりと静かにドアが閉まっていく。あと少しというところで永琳の声が聞こえた。

「さようなら…桜花」

私は顔だけ振り返ると、笑顔でこう言った。

「違うでしょ？…また会いましょう、永琳」

永琳は少し驚いた顔をしたがすぐに笑顔で頷いた。

「そうね…また会いましょう。あなたのことは忘れない。人間の為に戦って、人間の為に涙を流してくれたあなたを…私のことも…覚えていてちょうだいね？」

「永琳みたいな人間は忘れたくても忘れられないわよ」

ゆっくりとドアが閉まり、永琳の姿はもう見えなくなった。

同時に何かが飛び立つ轟音が響く。シャトルは無事に出発したみたいだ。

私は一度深呼吸すると妖怪達へと向き直る。妖怪達は私達の会話の間はずっと呆然としていた。

それもそうか、突然やって来たのが宴会で眠らせたはずの最強の妖怪で、しかも人間と普通に会話して涙まで流してるんだから。

「さて、あなた達には言いたいことがたくさんあるけど…まぁ、いいわ。もうすぐここは爆破されるから急いで避難しなさい」

私はリンを抱き抱えたまま彼等の脇を通りすぎて外へと向かう。

「…待て」

ふと、熊の姿をした大妖怪に呼び止められる。

「…何？私は行きたい場所があるの、用があるなら早くして」

大妖怪は私を見ながら問い掛けるように話してきた。

「我等を咎めないのか？」

「なぜそんなことする必要があるの？」

「我等はお前を眠らせて勝手なことをしたのだぞ？お前はどうも思わなかったのか？」

「別に…私を眠らせようが、人間を襲おうが構わないわよ。ただ…」

私は妖力を全開にして妖怪達を睨んだ。ざわり、と私の髪や尻尾が風もないのに逆立つ。それだけで大妖怪以外の妖怪達は怯えはじめた。

「私をどうしようが構わない。けどね…真矢を傷つけたのはどういうこと?同じ妖怪のくせに簡単に傷つけて…この子だって…」

私のリンを抱き抱えている腕に力がこもる。

「いくら人間が反撃してこようとも、子供まで殺すことはなかったはずじゃないの?」

「お前は人間に味方するのか?」

「私は人間が嫌いじゃないだけよ」

それだけ言うと私はすぐに外へと歩いて行った。爆破までもう時間がない。

時間は丁度夜が明ける直前だった。私は街を見下ろせる丘の上から朝日が昇るのを眺めていた。

空から一つの黒い球体が街へと落下してきて…次の瞬間には凄まじい閃光と轟音が響き渡る。ほんの一瞬…それだけの時間で人間の街は消え去り、何も残らなかった。

その後、私は霧の湖の近くにある花畑に来ていた。理由は約束を守るため。

「ほら…花畑にきたよ、リンちゃん」

私は抱き抱えている少女に向かって呟く。

「約束…だったからね」

私は花畑の中心に彼女を寝かせると、頭に付けていた桜の花びらの形をした髪飾りを外すと鈴を取り外して花びらの部分だけを彼女の頭に付けた。

「私の友達でいてくれたお礼だよ」

鈴の部分には新しく紐を通して再び自分の髪に結ぶ。

その後、土を掘り起こし、彼女を埋めてお墓を作った。近くにあった大きめの岩を削って墓石にする。

――花を愛した少女、ここに眠る

そう墓石に刻むと私は両手を合わせる。

守ってあげられなくてごめんなさい…ゆっくり休んでね…

「桜花…」

突然名前を呼ばれて振り返るとチルノとルーミア、大ちゃん、真矢が立っていた。私が驚いているとチルノがお墓に目を向ける。

「これ…誰のお墓？」

チルノが私の隣にしゃがみ込みながら聞いてきた。

「私の…友達だよ。…人間の女の子」

チルノは何も言わずに手を合わせる。他の皆も同じように手を合わせてくれた。

「皆…ありがとう」

それからしばらくして、あの花畑の中でそのお墓の周りだけ、たんぽぽの花が咲くようになったのだった――

◆文明の崩壊とたんぽぽの花（後書き）

次回は時間が一気に進みます。

◆四季のフラワーマスター、風見幽香（前書き）

幽香登場！

◆四季のフラワーマスター、風見幽香

私がまだ人間だった頃、よく“月日が経つのは早いな”と、考えたものだ。

それは妖怪になってからは顕著になったように感じる。妖怪に日付という概念があまり意味の無いものだからだと思うが…

妖怪になってからというもの回りの環境が変わると何百年か経ったように感じるのだが実際は数千年も経っていたり…

永琳達が月に旅立ってからかなりの年月が経った。私は途中から数えるのが面倒になって数えていないから詳しい年数はわからない。…そうだ、チルノに聞いてみよう。

「ねぇ、チルノ」

「なによ?」

この日、私とチルノはリンが眠る花畑で花の手入れをしていた。

「私とチルノが出会ってから何年経った?」

「えっと…だいたい一万年くらい？」

「…え？」

…聞き間違いじゃないよね？

「…チルノ、もう一回言って」

「だから、一万年くらいだって言ったでしょ？」

あれ…そんなに経ってたんだ。ほんの数百年かと思ってた。

えっと…永琳が月に行ったのが私が千五百歳くらいの時だから…

…八千五百年　経ったわけだ。私の歳もついに万の桁に入ったのか

…何だか実感がないな。

「桜花、長生きし過ぎて頭ボケてきたんじゃないの？」

…チルノには言われたくない。チルノは妖精だから年齢を当て嵌めることは意味のないことだがあえていうなら自然が生まれた時からの年月だろう。つまり私より遥かに年上になるわけだ。

でもチルノが「万の年月を生きる妖怪より年上だと思うか？」と、きかれてもまったくそうは思えない。なんといっても見た目が幼女なんだから。

「ど、どうしたのよ、あたいの顔に何かついてる？」

「…いや、何でもない」

私はチルノから視線を外すと自分の両手を見つめる。

私が妖怪として生まれてから一万年…私の姿も変わらない。精々尻尾が九本まで増えたくらいだ。

今ではチルノ、ルーミア、大ちゃんの三人は私の尻尾なしでは眠らなくなった。朝には尻尾を一本にすることで掴むものがなくなった三人が目を覚ます、という目覚まし的な役割も果たしている。

話が逸れたけど、自分の姿がいつまでも変わらないのは人間だった私としては不思議でたまらない。

…といっても、もう人間の心はだいぶ薄れてしまったけど。

私が人間だったと実感できるのはリンの墓を見ている時だけだ。あの時以来誰かのために涙を流すようなことはなくなった。これは私が完全に妖怪になってきている証拠なんだろう。

「桜花～、そろそろ帰ろうよ～」

あ、いけない。チルノが呼んでる。

私は一度だけリンの墓を見ると手を振るチルノの方へと歩きだした。

―???Ｓｉｄｅ―

私は朝日の眩しさに瞳を開く。

体を起こして周りを見れば木造の小屋の中にいることがわかる。

昨日たどり着いた向日葵の咲く小さな畑がある小屋。誰も使っていないらしく中は結構埃っぽいが掃除をすれば生活に困ることはないだろう。

私は外に出るとベッドと同じくらいの面積しかない畑へと向かう。そこには立派に咲いた向日葵が畑いっぱいに広がっていた。

「今日もいい天気ね…」

私は向日葵達にそう言うとそっと花びらを撫でる。

私にとって花は自分の分身みたいなものだ。だから大切に毎日手入れをする。いつかはこの辺り一帯を向日葵でいっぱいにしてみたいと思っている。辺り一面の向日葵に囲まれながらのティータイムなんていうのも洒落ていると思う。

「さて…」

私は此処に来たばかりでまだ近くに何があるのか知らない。私にとって脅威になるもようなものはないと思うけど…一応調べてみるとしましょうか。

私は日傘を片手に空へと舞い上がると辺りを見回す。

へぇ…、あの鈴蘭が咲いてる丘の向こうに見える山、妖怪がたくさん住んでるみたいね。でも私より強い妖怪の気配はしない…ん？

「何かしら…この不思議な気配…」

妖力に混じって霊力を感じる…いや、違う…妖力と霊力が混ざったような気配がする。私は少し気になったのでその気配がする方へと飛んだ。

先程見た山の近くには湖があり、その湖から少し離れた森の中に小さな広場のような場所があった。

その場所に降り立った私が見たのは辺り一面に広がる花畑…あまりの美しさに私は思わず見とれてしまった。

我に返った私が注意深く花を見ると、なんと全ての季節の花が咲いていることがわかった。

それと同時にこれは誰かが意図的にやった事であるとわかった。誰だか知らないけど面白い事をするものだ。

私は気配を辿って花畑の中心へと向かう。

「これは…」

そこには大量のたんぽぽに囲まれた岩があった。苔が生えていて見るからに古いが何かを守るような印象を受ける。

不思議な気配はこの岩の下から感じる。私は岩にそっと触れてみた。

（あなたは誰？）

「……っ！？」

突然声が聞こえて私は咄嗟に構えをとる。

「…誰！？」

辺りを見渡すが誰もいないし気配もしない。一体どこから…

（ねぇ、お姉ちゃんは誰？）

再び聞こえた声はどうやら少女のものらしい。私は日傘を握り直す。

「他人に名前を尋ねる時は自分から名乗るものよ」

（そうなの？私はリンっていうの。お姉ちゃんは？）

「私は風見幽香、花の妖怪よ」

私が名乗ったのと同時に岩から感じる気配が強くなる。私が驚いて身構えると、岩の上にうっすらと少女が座っているのが見えた。頭に桜の花びらの髪飾りをつけている。いや、それよりも私が驚いたのは…

「私…？」

髪や目の色は違うし、見た目は本当に子供だ。しかし、顔が私にそっくりなのだ。私をそのまま子供にしたような少女がそこにいた。

（幽香お姉ちゃんだね！はじめまして！）

そう言って笑う少女…リンは楽しそうに足をプラプラと揺らしている。

「あなたは…何者？」

私は今だに構えたままリンに問い掛ける。

（私は…えっと…幽霊？）

自分でもわからないのか首を傾げながらリンは目を閉じてうんうん唸っている。私は何だかバカらしくなって警戒を解いた。

「あなた死んでるの？」

（うん、私はもう死んじゃったんだ）

自分は死んだと言いながらも明るく振る舞うリンの態度に私は疑問を覚えた。何故死んだのにそんなに明るいのだろうか。

「あなたは見たところ人間だったみたいだけど…何故そんなに楽しそうなの？悲しくないのかしら？」

（全然悲しくないよ！だって桜花お姉ちゃんがいるから）

「…桜花？」

（うん、この髪飾りも桜花お姉ちゃんがくれたの！）

そう言って嬉しそうに頭の髪飾りに手をそえる。なるほど、不思議な気配の正体は人間の幽霊であるリンの霊力と桜花という人物からもらった髪飾りに染み付いた妖力が混ざっていたせいだったのか。

（それで、幽香お姉ちゃんはここに何しに来たの？）

「私はただ気になったから来ただけよ。でも、いろんな花が咲いていて驚いたわ」

（たしかお花の妖怪さんなんだよね？）

「ええ…」

人間があまり好きじゃない私がこんなにも話をするなんて思いもしなかった。相手がもう死んでいるからなのか、それとも子供だからなのか…

（桜花お姉ちゃんも妖怪なんだよ！）

「桜花…その髪飾りをあなたにあげた人…いや、妖怪か」

（うん！桜花お姉ちゃんはね…優しくて、綺麗で、人間の為に戦った凄い妖怪なの！）

人間の為に…戦ったですって？

私は一瞬耳を疑った。妖怪が人間の為に戦うなんてありえないと思っていた。しかし、リンの様子から嘘をついているとは考えられない。だとしたら…

「…ずいぶんと変わった妖怪なのね」

（そうかな？私とこの花畑に行こうって約束したんだよ。でもその前に私が死んじゃったから…）

さっきまでにこにこしていた顔が悲しそうになる。私に似ているのでそんな顔をしないでほしいのだけど…

（急に妖怪が街にやって来て何人も殺された…私もその一人）

「当然でしょうね、人間と妖怪は相いれない存在よ」

妖怪は人間の恐怖や畏れの象徴。人間が妖怪を畏れなくなれば妖怪は消える。だから妖怪は生きるために人間を襲うのだ。

（でもね、桜花お姉ちゃんは違ったんだよ。お姉ちゃんは私のために泣いてくれた。約束守って花畑に連れてきてくれた。人間の為に一人で同じ妖怪と戦った。だから私は桜花お姉ちゃんが大好きなの）

「……」

私は墓石に目を向ける。

「花を愛した少女、ここに眠る…」

墓石に書いてあった文字を読む。ふと顔を上げればリンが墓石にのったまま私に笑顔を向けてきた。

なるほど、この少女が嫌いになれないのは私とどこか似ているからかもしれない。顔つきだけではなく花を愛する心とか、そんなところが…

「それにしてもかなり古いお墓ね？一体いつのものなの？」

（ん～っと、昨日桜花お姉ちゃんと妖精さんが話してたけど私が死んだのは八千五百年前だよ）

「なっ…八千五百年前！？」

八千五百年前なら私が生まれるずっと前だ。勿論その桜花という妖怪はまだ長生きなことになる。

「ねぇ、その桜花って妖怪の歳は知ってる？」

（うん、もうすぐ一万歳だって言ってた）

信じられない、そんな昔から生きている大妖怪がいたなんて。…少し興味がわいてきた。

「ねぇ、その桜花は何処に住んでるの？」

（えっと、近くの湖に妖精さんと他の妖怪さんと一緒に暮らしてるよ。青い髪で青い服を着てる狼の妖獣さんだよ）

「わかったわ、ありがとう。あなたと話せて楽しかったわ。また来

てもいいかしら？」

（うん！また来てね！桜花お姉ちゃんには私の姿は見えないし、声も聞こえないみたいだからお話相手がほしかったの）

「そうなの？なら来ないわけにはいかなくなったわ」

リンは目を輝かせながら私を見ていた。余程嬉しかったようだ。

（約束だよ！）

「ええ、それじゃあ」

私は花畑をあとにして湖へと向かった。

湖の上空まできたけど霧がかかっていて見通しが悪い。仕方ないから私は湖のほとりへと降りる。

「あら、この辺りじゃ見ない顔ね？」

私が降りた場所にいたのは黒い服を着た金髪の少女。瞳は赤くて鋭く、一目で妖怪であるとわかった。

「最近この近くに来たのよ。…あなた、桜花って名前の妖怪、知っ

てるかしら？」

桜花という名前に少女は反応する。しばらく考えるような動作をした後、私に背を向けた。

「案内するわ、ついてきて」

「あら、あっさりと教えてくれるのね」

あまりにもあっさりと案内を引き受けたことに若干のつまらなさを感じた。

「私の力じゃあなたに勝てないしね。まだ死にたくないのよ」

そう言うと少女…ルーミアというらしいけど、とにかく私は彼女の案内で湖のそばにある大きな木の前まで来た。

「呼んでくるから待ってなさい」

そう言ってルーミアは木の中へと入っていく。さてどんな奴なのか楽しみだわ。

―桜花Ｓｉｄｅ―

私が幽香の気配に気づいたのは数十分前だ。どうやら花畑へ向かったようだ。リンも新しい客に喜ぶかもしれない。

リンは死んだ後、魂が体から離れる前に私が付けた髪飾りに宿る妖力を取り込んでいた。おかげで彼女の魂は現世に残り、今も花畑に住んでいる。彼女は妖精と亡霊の中間のような存在だが、どちらかと言えば花の妖精に近い。あの花畑を触媒にして彼女は現世に留まっている。そのおかげなのかあそこは季節に関係無く花が咲いている。花が好きなリンのおかげだろう。ただ、まだ魂が安定していない為か私にはリンの気配はするものの姿は見えずに声も聞こえない。もう少し時間が必要みたいだ。

数分後、幽香の気配が近づいてくるのがわかった。わざと気配を強く出しているみたいだから大方私と戦いたいとか考えてるんだろう。

風見幽香…『花を操る程度の能力』を持つ妖怪で敵だと判断した相手は容赦なく滅ぼしにかかる妖怪らしい妖怪だ。

彼女の特徴はその妖力と身体能力だ。彼女の『花を操る程度の能力』は戦闘には使えないが、彼女の身体能力自体はとんでもなく高い。さらにその身体能力に妖力を加えてくる。普通の妖怪ならあっという間にやられるだろう。

まだ生まれてからそんなに経ってないし、元祖マスタースパーク

もまだ使えないと思うけど…一応会ってみましょうか。

「桜花、お客さんよ」

そんな考えをしていたら丁度ルーミアが私を呼びにきた。

「最近近くに引っ越してきた妖怪ですって。あなたに会いに来たらしいわよ？」

「わかったわ、ありがとうルーミア」

私は立ち上がると鈴の飾りを結び直す。小さくリンとなる鈴の音を聞きながら、私は外へと出た。今の私は妖力を抑えているから尻尾は一本だけだ。彼女はどんな反応をするだろうか…

外に出た私の目の前にいるのは緑の髪にチェックのベストとスカートをはき、日傘を持った風見幽香だ。

髪に付けた鈴が再びリンと鳴る。

「はじめまして…私が鈴音桜花よ」

私はとりあえず、彼女にとびっきりの笑顔を見せてあげることにした…

◆友達（前書き）

今回の戦闘シーンは凄く短いです。

◆友達

桜花は尻尾をフワリと動かしながら目の前にいる妖怪を見る。

目の前にいるのは日傘をさして緑の髪を風になびかせ、チェック柄のベストとスカートの女性…風見幽香。その顔は微笑みを浮かべており余裕の表情と言える。

「はじめまして、花の妖怪さん」

先に口を開いたのは桜花だった。にっこりと笑いながら挨拶をする。

「こんにちは、貴女が桜花って妖獣で間違いない？」

幽香も笑みを深くしながら挨拶をする。

「ええ、私の事はリンから聞いたの？」

「ええ、人間の為に戦ったらしいわね。貴女、変わってるわね」

「人間が好きなだけよ」

「ふ～ん、そう…」

一見なんてこともない会話だが二人から放たれる妖力で周りの空気は段々と重くなる。

「私、貴女に興味があるの…」

「あら、私にそんな趣味はないわよ？」

「…変なふうに考えないで！」

クスクスと笑う桜花に幽香が日傘を向ける。

「貴女と戦いたいの。私と勝負しなさい！」

「勝負？…いいよ、やりましょうか」

桜花は幽香にしばらく待つように言うと、チルノ達を集めた。

「…というわけで、今から彼女と戦うから近くに来ないようにね」

「了解よ、まぁ…あたいは桜花が負けるとは思わないけど…」

チルノは半分呆れたように言うと、他の妖精達やルーミアと一緒に離れた場所に移動した。

チルノ達が離れたのを確認してから桜花は幽香へと向き直った。

「おまたせ」

「やっぱり貴女って変な妖獣ね。妖精や他の妖怪に気を使うなんて…」

「みんな私の友達だからね」

「そう…」

幽香は日傘を握り直すと桜花へと駆け出した。

桜花は軽く半身に構えると幽香の攻撃を待つ。

「はぁっ！」

日傘で右下から掬い上げるような攻撃を繰り出してきた幽香に対して、桜花は一歩前に踏み出して右手で日傘を持つ幽香の左手を掴むと合気道の要領で投げ飛ばした。

「…ちっ！」

幽香は空中で一回転しながら態勢を立て直すとそのまま桜花の頭に踵落としを繰り出す。

体を少し右にずらすことで攻撃を回避した桜花と地面を砕いた幽香のお互いの視線が交わる。

二人の瞳に宿る感情は『歓喜』であった。

―桜花Ｓｉｄｅ―

私は今純粋に楽しいと感じている。万の年月を生きてきた私にとっての最大の敵は“退屈”だった。

今までチルノやルーミアと戦闘訓練をした事はあっても真剣勝負

はした事がない。…故に、いつも物足りなさを感じており、毎日それればかりを続けていた私は退屈だった。

だから今幽香と勝負をしていて何とも言えない楽しさが込み上げてくる。もっと戦いたい…。

おっと…私らしくないわね。私の妖怪としての本能かしら？

以前より妖怪らしくなってきたことを自覚してからというもの、私は精神的に不安定になっていた。上手く言葉が見つからないが…ふとした瞬間には私が別人になってしまうのではないかと不安になる。

私としては人間の心は失いたくない。だが精神は肉体に引き寄せられる。いつ“人間らしさ”を失うかわからない。だから私はよくリンの墓へと行くのだ。あそこなら自分が人間らしい生活をしていた頃を思い出せるから。

「戦いの最中に考え事なんて随分余裕ね」

「…っ！」

私が気づいた時には目の前に幽香の拳が迫っていた。慌てて両腕で幽香の一撃を防ぐ。しかし、踏ん張りがきかなかった為か少し離れた場所の木まで吹き飛ばされた。

「あいたた…腕が痺れたわ」

防いだ両腕が少し痺れたのでぷらぷらと振ってみる。

「本気で殴ったのだけど…頑丈なのね貴女」

幽香は日傘で肩を軽く叩きながら呆れた顔をしていた。

現在の私は尻尾を三本まで出している。つまり三分の一の力しか出していないのだ。幽香がそれに気づいているのかどうかはわからないが私の全力と勝負するには力がまだまだ足りない。

「悔しいけど、どうやら私ではまだ力不足のようね…全力の貴女には勝てない」

正直この発言には驚いた。あの幽香が自分の負けをあっさり認めたのだ。明日は槍でも降るんじゃないだろうか。

「でも、私としては傷一つくらいは付けたいわけ…と、いうことで」

日傘を私へと向けて構える。…ん？あの構えって…

「くらいなさい…」

日傘の先端に妖力が集まって球体を作る。間違いない、マスタースパークだ！

「はあぁぁぁぁ！」

…私が予想していたよりも遥かに妖力が多い！もはや幽香の姿が見えないくらいまで集まった妖力を見て冷や汗が流れる。

「マスタースパーク！！」

幽香の叫びと同時に“ズドンッ”と空気が震える。そして私は咄嗟に尻尾五本分まで妖力を解放すると目の前に障壁を作り出す。

マスタースパークと障壁がぶつかり合い、凄まじい衝撃が辺り一面を揺らす。

時間にして数秒…しかし私には数時間にも感じた攻防の末、幽香はその場に座り込み、私も安堵のため息をはく。

「はぁ…はぁ…貴女、とんでもないわね。私のマスタースパークを防ぎきるなんて…」

荒く息を吐きながら話す幽香を見ながら私は安心するのと同時に嬉しかった。まさかあの風見幽香に勝てるなんて思ってもいなかったからだ。

「貴女、全力じゃなかったでしょ？」

「まぁね…能力も使ってないし」

「そう…」

幽香は日傘を使って立ち上がる。

「さぁ、私は貴女に負けた。好きにしなさい」

私は一瞬何を言われたのかわからなかったが今の勝負が一応殺し合いだったのを思い出した。

「別にどうもしないわ。私、誰かを殺すのは嫌いなの。それよりも

友達になりましょうよ」

私がそう言うと幽香は少しの間ポカンとした表情をした後、腹を抱えて笑い出した。そんなに笑わなくても…

「あははは…あ、貴女…やっぱり変わってるわ。でも…嫌いじゃない。いいわ、友達になってあげる」

幽香は笑いすぎて出てきた涙を拭くと日傘をさして背を向けてる。

「また遊びにくるわ。いいでしょ？」

顔だけで振り向いた幽香に私は笑顔を返した。そんなの、答えは決まっている。

「勿論、いつでも来てちょうだい」

お互いに微笑むと幽香は空に舞い上がった後、一度だけこちらを見るとすぐに飛んでいってしまった。

「…予想してたよりも話しやすかったわ」

私はそう呟くと雲一つない青空をしばらく眺めていた。

―幽香Ｓｉｄｅ―

私は再び花畑にやってきた。地面に着地した後、花を踏まないように中心にある墓まで歩いた。

『あ、また来たんだね！』

墓の上にはリンが座っていて私に手を振っていた。

「桜花に会ってきたわ」

私がそう言うとリンは笑顔になった。

『どう？桜花お姉ちゃんに会ってみた感想は？』

リンの顔を見てこの子は答えがわかって質問してきているのがわかった。それでも私は素直に答える。

「そうね…おかしな妖獣だったわ。…まぁ、嫌いじゃないけれどね…」

『ふふ、でしょ？』

私は日傘を閉じてリンの墓の隣に座ると空を見上げる。雲一つない青空。桜花の瞳と同じく澄んだ青…

生まれてはじめて負けたけれど全然悔しくない。寧ろスッキリしている。

「次は負けないわ」

私が空を見上げてそう言うと、隣にいるリンが微笑むのがわかっ

た。

『頑張ってね、幽香お姉ちゃん！』

リンの言葉に頷くことで返事をした私はもう少しこの空を眺めてから帰ろうと思い、いつもよりも綺麗だと感じる空の青さを堪能するのだった。

―オマケ―

「……」

「桜花…そんなに落ち込まないで」

桜花とルーミアの目の前には倒壊した桜花の家があった。幽香のマスパと桜花の障壁がぶつかった時の衝撃で周りの木々は全て倒れており、その中には桜花が家として使っていた木もあった。実は桜花はこの家を結構気に入っていたりする。

「桜花、大丈夫?…って、泣かないでよ!?」

「違うわ…ルーミア、これは心の汗よ」

「はぁ…なにそれ？」

「…気にしないでってことよ」

「へぇ…そーなのかー」

その日、チルノとルーミアと大妖精は珍しく桜花の尻尾には触れず、まるで慰めるかのように隣に寄り添って眠ったという…

◆友達（後書き）

幽香は実は優しいんじゃないか、と思うのは私だけかな？

◆再会（前書き）

人間は時として凄い事をやってのけるものです。

◆再会

幽香との出会いから数年。彼女は週に一日のペースで私の所に遊びに来る。

―もふもふ

私も最初は驚いたものだ。なんといってもあの風見幽香が勝負とかではなく、純粋に“遊びに来ている”のだから。

―もふもふ

今日私はリンの墓の手入れをしているのだが…

―もふもふ

「…幽香、読書するのは勝手だけど何で私の尻尾を椅子がわりにしてるの？」

墓石を磨く私の背後で幽香は尻尾に埋もれた状態で本を読んでいた。

「あら、いいじゃないの。別に減るものじゃないし」

「いや、気になるっていうか…」

「凄く気持ちいいのよ、貴女の尻尾」

まぁ、私も自慢の尻尾だから褒められるのは嬉しいけど…

『いいなぁ、私も触りたいよぉ～』

目の前の墓からリンの声がする。幽香と出会ってから私もリンの言葉を聞けるようになった。姿はまだ幽香にしか見えないけど、約八千五百年ぶりのリンとの会話である。思わず泣きそうになった。

幽香と新しい関係になったし、リンは時が経っても変わらなかったし…変化するものとしないもの…どちらにしろ私には喜ばしいものだ。

「あ、いたいた。桜花～！」

森の方からチルノが飛んできた。

「お昼は何を食べるの？食材が必要ならあたいが取ってくるよ？」

変化といえば最近チルノがまた強くなった。私の他にルーミアや幽香とも模擬戦をやっていたのだが、幽香曰く「侮れない妖精」だという。大妖怪の幽香にここまで言わせるなんて…チルノはどこまで強くなるのやら…

「そうね、今日はチルノが好きな山菜の炒め物を作りましょうか」

「本当！？じゃあ、材料集めてくるね！」

嬉しそうなチルノを見送ってから私と幽香も湖へと戻った。

「ごちそうさま」

私の隣に座っていた幽香が満足そうに両手を合わせた。

「桜花、貴女料理が上手よね」

「まぁ、だてに今まで長生きしてないからね」

料理は全て私が作っている。鍋やフライパンは私の能力を使って鉄を加工したもので、火は妖術で出せるため大丈夫。周りに燃え移ることもない。

「お昼も食べたことだし、私はそろそろ帰るわ」

幽香は立てかけていた日傘を手に取ると立ち上がる。

「あら、今日はやけに早いお帰りね？」

いつもなら夕方くらいまでいるのだが…

「今日は私の家の改装と、向日葵達の世話をするのよ」

そういえば幽香は引っ越して来たんだっけ？

「わかった、じゃあまたね」

「ええ」

幽香は軽く微笑みを浮かべながら飛んでいった。

私は食器を片付けると、チルノと大ちゃんを連れて再び花畑を目指した。

―少女&ａｍｐ;妖精移動中―

さて、花畑についたのはいいのだけれど…

「…でね、その時のお父さんの顔がね」

『うんうん…あはは！なにそれ～！』

見知らぬ少年がリンの墓石に話しかけていた。声から察するに何か話しているようだが…

「桜花、あの子人間の里から来た子供だよ」

「私も以前人里に行った時に見かけました」

チルノと大ちゃんの話から人里の子供のようだ。よく一人でここまで来られたものだ。周りの森は危険な妖怪だってたくさんいるのだが…

『へぇ～、そうなんだ…あ、桜花お姉ちゃん！』

私が考え込んでいると、リンが私達に気づいたのか声をかけてきた。少年も振り返ってこちらを見た。

「こんにちは」

私はとりあえず微笑んで挨拶をしてみる。少年は驚いた顔をするとリンの墓石の裏に隠れた。

『ケイタ、ほら私が話した桜花お姉ちゃんだよ』

リンがそう言うと少年…ケイタは私をしばらく見た後、墓石の裏から出てきた。

「こ、こんにちは…」

まだぎこちないながらも挨拶を返してくれた。歳はリンと見た目が変わらないくらいだから10歳くらいか…顔を赤らめているから恥ずかしいのかな?可愛いじゃないか!

…あ、一応言っておくけど、私はただ子供が好きなだけで変な意味じゃないからね!?

「あなた、どうやってここに来たの?」

私はしゃがんで自分の目線を彼の目線に合わせる。これは小さい子供を安心させる方法の一つだ。

「あ、その…花を」

ケイタは近くの花を指差した。そこにあったのはピンク色のチューリップに似ている花だった。

『この花は妖怪が嫌いな匂いを出してるの。だから持ってたら妖怪は襲ってこないんだよ』

私はリンの知識に関心すると同時に今までそんな花があったのかと驚いた。ケイタはこの花を持っていたから安全にここまで来られたのね…ん?まてよ?

「リン、私には別に嫌な匂いとかしないけど?」

私だって妖怪だ。それなら私にだって何かしらの影響が出るはずなのに。

『桜花はこの花が咲いた時からここにいたから…たぶん免疫でもできてるんじゃないかなぁ?』

そうなのかしら?わからないわね…

「そういえば、ちゃんとした自己紹介をしてなかったわね。私は鈴音桜花、妖獣よ」

「あ、ケイタっていいます…よろしく」

妖獣という単語に少し反応したがケイタもきちんと自己紹介をしてくれた。

「あたいはチルノ、最強の妖精だよ!」

「大妖精です。…よ、よろしく」

それから五人で夕方近くまで話しをした。人里の様子も聞けたので丁度よかった。

その後、暗くなった森を帰らせるのは危ないので私が空を飛んで人里まで送ってあげた。

人里は私が最後に見た時よりもだいぶ里らしくなっていた。流石に永琳のいた時ほど文明の進化は早くない。これなら安心だ。

ケイタと出会ってから数ヶ月、ある日目を覚ました私は奇妙な違和感を感じた。

「ん？なんだろ…この力」

私の持つ力は妖力だけだが…何故か別の力が混じっている。

「桜花、おはよう…って、どうしたの？」

私を起こしにきたチルノが私を見て首を傾げる。

「チルノ、私の中に変な力が混じってるんだけど？」

チルノは私をまじまじと見つめると、わかったと言わんばかりに指差した。

「桜花、あなた神様になってる！」

……はい？

「…チルノ、もう一回言って？」

「だから、神様になってるって言ってるの！なんか神々しいんだもんその力！」

いやいや、有り得ない。私は別に信仰を集めてもいなければ人助けすらしていない。そんな私がどうやって神様になると？

「おはよう…って、桜花…神になったの？」

すると、丁度ルーミアがやってきたので彼女にも聞いてみる事にした。

「ルーミア、朝起きたらこうなってたんだけど何か知らない？」

ルーミアは少し考える様な仕種をした後、何か思い出したのかハッと顔を上げる。

「そういえば…さっき花畑の近くを通ったのだけど…墓石の後ろに何か建ってたわね…」

「花畑に？」

私はチルノとルーミアを連れて確認の為に花畑へと移動した。

―少女達移動中―

「これは…また立派な…」

私達が花畑に到着した時に見た物はリンの墓石の裏に建つ立派な祠だった。

「リン、何があったの？」

私はとりあえずこの場所にずっといるリンに話を聞いてみる事にした。

「あ、桜花お姉ちゃん！」

いつもなら声しか聞こえないはずのリンだったが今日は違った。

…なんと、姿が見えるのだ。

「リン！？…姿が見える！！」

墓石の上に座るリンは最後に見た時の姿のままだった。頭には私がつけてあげた桜の髪飾りもある。

「…っ！リン、あなた…神力が…！」

私と同じ様にリンからも神々しい力を感じる。これはつまりリンが神になったということ…

「ケイタが私と桜花お姉ちゃんのことを里に帰ってから話したみたい。そしたら里の人がここまで来て、『里が平和でいられるように』って私と桜花お姉ちゃんを祭った祠を立てたんだよ」

私の知らないところで私は神様として崇められていたのか……だからこうして神様になった。

「実はもう一つ、いいお知らせがあるんだよ」

「……？」

リンは墓石からゆっくりと地面に足をつける。死んでから今までこの墓石から移動できなかったリンが八千五百年の時を経てはじめて地面に足をつけて歩いた。

そのまま私に向かって歩いてくると目の前で歩みを止める。私も自然としゃがんでリンと視線の高さを合わせる。

「ほら…」

リンはゆっくりと私に抱き着いた。

そう、“抱き着いた”のだ。今まで魂だけの存在で触れることができなかったリンに新しい肉体ができていたのだ。

「やっと…やっと…触れた…！」

震える声で私に強く抱き着くリンを抱きしめ返す。私は一瞬何が起こったかわからなかった。ようやく理解して、昔のようにリンに再び触れるようになったんだとわかった。視界がぼやけてよく見えなくなったけど構わない。今は…再び感じることができたこの小さな温もりを少しでも感じていたかった。

私達はこの瞬間、本当の意味で再会した。

「また…会えたね」

私がそう言うとリンは泣きはじめた。声をあげて、涙を流して…今まで我慢していたものを吐き出すかのように…

チルノとルーミアの姿はない。たぶん気を使ってくれたんだね…

私はこの祠を作った人間達に感謝しつつ、泣き続けるリンを彼女が泣き止むまで抱きしめ続けた。

◆再会（後書き）

次回からは新しい展開になります！

◆諏訪の地にて（前書き）

ケロちゃん登場！

◆諏訪の地にて

皆さん、お元気でしょうか?鈴音桜花です。現在私はとある地方に来ています。どこかというと…

「へぇ〜…ここが諏訪大社かぁ」

ケロちゃんこと、洩矢諏訪子に会いに諏訪の地まできたのです。

諏訪大社は現代の長野県にある神社で諏訪市にある上社と諏訪郡下諏訪町にある下社の両方の総称である。主祭神は上下社とも建御名方神(たけみなかたのかみ)・八坂刀売神(やさかとめのかみ)である。古来、狩猟神・農業神・武神として信仰を集めてきたとされている。7年ごとに御柱祭(おんばしらまつり)が行われるので有名だ。

私が何故此処にきたのかというと、神力の使い方を教えてもらいに来たのだ。

神となってから一年が経った頃、相変わらず信仰されたままの私とリンは神力の使い方について色々と試行錯誤していたのだが…これがなかなか難しい。

リンは元人間であるから仕方ないが、私は一応妖力を使ってきた。だから神力も同じように扱えると思っていた。…が、そんな私の思いも虚しく全く操れない。妖力と違って繊細な力の循環が必要なだけだから簡単だと思ったのだが…

一万年も妖力ばかり使ってきた私がほいほいと新しい力を使いこなすのは簡単ではない…と、痛感したのである。

結局、いつまでも上手くいかないことに嫌気がさした私が直接神力を使っている神様に聞いた方が楽だと思い至ったのだ。

そんなわけで…私の知識の中にある友好関係を作りやすい神様を探した結果がケロちゃんだったわけである。

人里の発展具合からして今は紀元前３００年前後だとわかったから彼女が生まれている事もわかった。…神に対して生まれるという表現が正しいかはわからないが…

そんなわけで、霧の湖を出発したのが一週間前…それから途中の村に立ち寄っては諏訪はどの方角か等を聞いて回っていた。

しかも途中で妖怪達にも襲われたので返り討ちにしたり、夜盗に襲われて返り討ちにしたり、私の水浴びを覗いていた人間の男を縛りつけて三日間罰を与えたり…と、なんやかんやしていたら一週間もかかっていたのである。

あれ…？余計な事をしなかったらもっと早くついたではないか？

まぁ、ともかく無事に諏訪大社まで来られたからよしとしましょうか…

「それにしても…」

私は諏訪大社を真正面から見る。

うん、デカイです。その辺の神社なんか比べものにならない。

「とにかく、入ろうか…」

そのまま立ち止まったままだと周りの人に迷惑なので人間に化けて境内にはいる。妖力と神力は一応隠しておく。

境内は予想よりもかなり人が多かった。流石は諏訪子さま、と言ったところだろうか。

「…あれ?」

よく見ると本堂の屋根で誰かが昼寝をしているのが見えた。目を懲らしてよく見ると見たことのある帽子を被っている。つぶらな瞳(?)のついた帽子を被り、気持ち良さそうに寝ているのはまさしく洩矢諏訪子である。

遠くから見ても幸せそうな寝顔だとわかるほど顔がにやけている。心なしか帽子の目も気持ち良さそうに細くなってるし…

すると、何かを感じたのか帽子の目がパチリと開いて諏訪子が体を起こした。キョロキョロと周りを見渡している。

すると、私と視線がぶつかった諏訪子は首を傾げると屋根から飛び降りてこちらへと歩いてきた。気配を消しているのだろう、周りの人は気がついていない。

はて、私は妖力は完璧に隠したはずだが…ばれた?それとも服装が珍しいからかしら?

諏訪子は私の近くまで歩いてくると、しげしげと私を上から下まで見る。一応気づかないふりをしてるけど何だか恥ずかしい。

「ねぇ、気づいてるでしょ？」

諏訪子は私のコートを掴むと少しだけ引っ張った。

「あら、これはビックリだわ…まさか神様に声をかけてもらうなんて」

私がそう言うと諏訪子は目を細めて私をもう一度見ると「ついてきて」と言って本堂へと歩き出した。私もその後に続いて本堂へと歩いていく。

「さて…」

本堂の中に入った私達は向かい合う。それにしても諏訪子は本当に幼女だ。身長に差がありすぎる。私が１７０ｃｍくらいだから諏訪子は自然と見上げる形になる。

「まぁ、座りなよ」

諏訪子に言われて腰を下ろす。本堂は外から見てわかっていたけどだいぶ広かった。

「それで、あんたは何者？人間じゃないでしょ？」

「…なんでわかったんですか？」

完璧に力は隠せたと思ったのに、どうやって見破ったのだろうか。

「あ～う～…何て言えばいいかな…ああ、そう！気配を隠し過ぎてるんだよ」

私が首を傾げると諏訪子は苦笑いをしながら私を指差した。

「普通、人間だろうと妖怪だろうと必ず気配がある。妖怪なら妖力、人間なら霊力…これはわかるよね？」

私が頷くと諏訪子はニコニコと笑顔になった。

「つまり、今のあんたからは何も感じない。だからおかしいの。普通の人間ならそんなことできないからね」

なるほど…気配を隠し過ぎて逆に目立ってしまったわけね…

「あらら…私もまだまだ甘いわねぇ」

私はため息をはいて苦笑いをした。

「いやいや、凄いと思うよ？それだけ気配を消すのが完璧だと…私も背後に立たれても気づけないかも」

おお、諏訪子に褒められた！

「おっと、自己紹介がまだだったよね？私は洩矢諏訪子。この地方を治める神だよ。あんたは？」

諏訪子が名乗ったので私も隠していた妖力と神力を出す。耳と尻尾が一本だけ現れて本来の私の姿に戻る。

「私は鈴音桜花。妖獣であり、一応神でもあるわ」

諏訪子は私を見て「ほぉ…」と息を漏らしてしばらく私を見ていたが再び笑顔に戻った。

「それで…私に何か用事でも？」

私は頷くと姿勢を正して諏訪子に頭を下げる。

「この度は諏訪子様を偉大な先輩として神力の使い方を教えていただきたく足を運びました」

諏訪子は一瞬驚いて目をパチパチさせると突然笑いだした。

「なんだ、そんなことなら引き受けるよ。それから敬語はいらないよ。神としては私が先輩かもしれないけど…そっちが年上でしょ？」

「あ…そう？ならお言葉に甘えて…よろしくね諏訪子」

それから私達は酒を飲みながらお互いの事を話した。

私は自分が最古の妖怪で私の知る限り私より先に生まれた妖怪がいない事を告げると、諏訪子は酒を噴き出すほど驚いて「信じられない」と呟いた。

証拠として私が妖力を全開にして九本の尻尾を全て見せた時は顔が青ざめていた。

「な、何…その妖力…」

と、諏訪子が本気で怖がっていたのですぐに元に戻したけど…

「桜花が敵になったら私、絶対に戦いたくない…」

と言われて私は苦笑いするしかなかった。

次の日から私の神力を操るための特訓が始まった。

「まずは神力を自分の周りに留めてみて」

神力を操り体の周りに留める。

「…こう？」

「うん、ちょっとムラがあるけど大丈夫だよ。次はそれを手の平に集めるんだけど、普通にやると失敗しやすいから…イメージとしては球を作る様にするの。あと、余計な事は考えないでね」

私は頷くと早速やってみる。一応丸い形にはなったけど安定していない。ちょっと触るとすぐに霧散しそうだ。

「う～ん…イメージが足りてないみたいだね…何か具体的なものをイメージしてみたら？例えば…氷の塊とか」

氷の塊だったらいつもチルノのが傍にいたから想像しやすい。チルノが氷を操っている姿をイメージして再び挑戦する。

すると…

「おお、できた～！」

私の手の平には綺麗な丸になった神力の塊があった。

「凄い…全然無駄がないし、何より安定してる」

これはチルノに感謝しなきゃいけないかな…ありがとう、チルノ

それからはとても順調だった。自分やチルノ、幽香、ルーミアの戦い方をイメージしつつ当て嵌めるようにして神力を使う。すると綺麗に形が整うのだ。

そんなこんなで一年が過ぎた頃…

「あ～う～…桜花って万能？私が教えること無くなっちゃったよ～」

すっかり慣れた神力の扱い方を諏訪子に見てもらい、無事に合格をもらった。

「ありがとう、諏訪子。おかげで助かったわ」

「ん……役に立てたならよかった」

諏訪子と一緒にお茶を飲みながら境内を眺める。いつ見ても人がいっぱいだ。

「桜花…ちょっとお願いがあるんだけど、いい？」

「ん、何？」

諏訪子は真剣な顔で一言、私に用件を伝えた。

「近々…大きな戦いが起こる」

それだけ言うと視線を私に向けたまま黙ってしまった。おそらく私の返事を待ってるんだろう。

「いいよ、諏訪子…私でいいなら加勢する」

諏訪子は少し申し訳なさそうに帽子を被り直した。

「…ありがとう」

私はお茶を啜りながら青空を眺めた。大きな戦いとは間違いなく諏訪大戦のことだ。洩矢諏訪子と八坂神奈子の対決…それをこの目で見られるのだから凄いことだと思う。

私は帽子の上から諏訪子の頭をぽんぽんと軽く叩いた。諏訪子はキョトンとして首を傾げている。

「…大丈夫」

私は笑いながら立ち上がると振り返りながら諏訪子に笑いかけた。

「きっと上手くいくよ！」

諏訪子は帽子を少し持ち上げると口元を緩めながら私の隣に歩いてくると空を見上げた。

「上手くいく…かぁ……桜花に言われたらそんな気がしてくるから不思議だよ」

空を見たまま笑う諏訪子と同じように空を見上げる。そこには雲一つない青空が広がっている。

ふわりと風が吹いて私の髪を揺らし、髪を縛っている紐についている鈴が“リン”と鳴る。

その音色が私には何かの始まりを告げる音に聞こえた気がした。

◆諏訪大戦（前書き）

諏訪大戦です。

ゆっくり読んでいってね！！

◆諏訪大戦

私が諏訪子のもとに来てから三年が過ぎた頃、ついに八坂神奈子が攻め込んできた。紀元前三百年頃…諏訪大戦の勃発である。

私と諏訪子は湖の上で神奈子と向き合っていた。神奈子は巨大なしめ縄を背負ったいつもの格好で腕を組み、いかにも神様らしい堂々とした雰囲気を醸し出している。

「さぁ、おとなしくこの地を明け渡しな、洩矢諏訪子！」

「寝言は寝ていいなよ、八坂神奈子！」

諏訪子は私にちらりと視線を向けてきた。

私は諏訪子に一対一で戦うから、かわりに社を守っておくように言われていた。

「桜花、任せたよ」

「わかってる。諏訪子も頑張って」

諏訪子は私に笑いかけると神奈子と一緒にさらに上空へと上がっていった。

私は足元で既に始まっている諏訪子の軍勢である土地神達へと気を配りつつ諏訪大社の屋根の上に移動して能力を発動させる。

「『この敷地内に攻撃がくる』ことを拒絶する！」

私が両手を広げながら言葉を紡いだ瞬間、社の周りを囲むように薄い青の結界ができた。これでどんな攻撃がきても社に傷がつくことはない。

私は屋根の上に腰を下ろすと上空で戦っている二神を見上げた。

―ＳｉｄｅＯｕｔ―

諏訪湖の上空で洩矢諏訪子と八坂神奈子は戦っていた。

諏訪子は鉄の輪を両手に持ち、次々と神奈子へと投擲するが、それを神奈子は何処からか取り出した御柱を振り回して弾くと、諏訪子に向けて全力で投げつけた。

「なかなかやるね、八坂神奈子！」

「まだまだ、こんなものじゃないよ！」

諏訪子が御柱を回避したところに神奈子は御柱を何本も投げつける。それを諏訪子は絶妙な体の捻りで回避すると鉄の輪を持って一気に接近するとそのまま振りかぶり、切り付ける。

「あまい！」

神奈子は御柱で防ぐと左手を諏訪子の持つ鉄の輪に向ける。する

と、みるみる鉄の輪は錆び付き、崩れ落ちてしまった。

「…チッ！」

諏訪子はすぐにその場を離れて新しい鉄の輪を作りだした。

力は互角、しかし若干諏訪子が不利なようである。

―桜花Ｓｉｄｅ―

神奈子が御柱を投げるたびに湖が水しぶきを上げている。湖には既に何十という御柱が立ち並び、異様な光景だと感じられる。

想像してみてください…美しい湖に巨大な柱が何十と並び立つ光景を。う～ん、不気味だ…

力は互角みたいだから長期戦になるのは予想できるのだが、いかんせん諏訪子には決定的にダメージを与えるすべがない。頼りにしていた鉄の輪も神奈子の力の前では殆ど無力である。

それに対して神奈子は御柱を投げつけたり振り回したりと一方的である。しかし…まぁ、本人に言ったら怒るだろうが諏訪子は幼女体型…つまり小柄で動きが速いため神奈子はなかなか攻撃が当てられないでいる。

互いに相性が悪いため苛々しているのがわかる。しかし冷静さを

失えばあっというまに隙ができてノックアウトである。

ちなみに、攻撃が当てられない場合はどうやって相手のミスを誘えばいいのか、それは――

「はんっ！口ほどにもないねぇ…小さいからって逃げてるだけかい！？」

「そっちこそ、やたらとデカイ柱ばかり振り回してるけど全然当てられないじゃないか！」

ご覧の通り、言葉による挑発である。相手を刺激してミスを誘う。これも戦いにおける戦略の一つなのだが…

「ふ…ふふ…言ってくれるじゃないか、この幼女が！」

「ふふ…その幼女より年下のくせに随分と老けて見えるけどねぇ？」

挑発の内容が段々と幼稚になっている気がする…

こうなると大戦と言うより姉妹喧嘩のように見えてくる。『喧嘩するほど仲がいい』とはよく言ったもので、将来この二人が早苗を含めて一つ屋根の下で一緒に生活するようになるなんて誰も考えもしないだろう。

「幼女のくせに生意気だねぇ！！」

「うるさい！この老け顔がぁ！！」

ああ…こんな幼稚な喧嘩が諏訪大戦と呼ばれるようになるとは…

…未来の歴史学者が聞いたら揃って卒倒するに違いない。それ以前に神様がこんな感じでは研究を投げ出してしまうのが先かもしれないが……

「あんたより下にいる青い奴の方が神様に見えるよ、この幼女!!」

「当たり前だ!桜花は私より年上だし、私より全然強い!それより、あんたは桜花より老けて見えるけど!?」

「ちょっ…私を話題にしないでよ!しかも二人ともちゃっかり見た目のことは言い続けてるし!!」

外野である私にまで影響してくるなんて…駄目だこいつら、早く何とかしないと!!

私が痛くなってきたこめかみに指をあてて考えていると、神奈子が投げていた御柱が一つ、私の方に飛んできた。

その時、いい考えが浮かんだ私は咄嗟に結界から出ると御柱をすれ違い様に爪で削り取った。

言いたいほうだいの二人へのささやかな悪戯…もとい、仕返しである。

「…できた、じゃじゃ~ん!『ゆっくり神奈子』と『ゆっくり諏訪子』~!!」

目の前にあるのは御柱を削ってできた『ゆっくり神奈子』と『ゆっくり諏訪子』である。うん、我ながらいい出来栄えである。

後は能力でこれが“喋らない”ことを拒絶してやれば…

「がお～」

「ゆっくりしていってね！」

はい、出来上がり。この棒読みといい、なんだかちょっとむかつく顔といい、正に“ゆっくり”である。私がニヤニヤと二人の方を向いた瞬間――

「ゆっくりして…『ドゴン！！』」

「ゆっくり…『ズバッ！！』」

二つのゆっくりは降り注ぐ御柱と鉄の輪によって粉々になってしまった！

「ああ！ゆっくり神奈子ぉ～！ゆっくり諏訪子ぉ～！」

「なんだい、今のむかつく生首は！？」

「そうだよ桜花！神奈子のだけならともかく、私のまで作るなんてどういうこと！？」

「はぁ！？私のならともかくってどういうことだい！？」

「そのままの意味だよ！」

「可愛かったのに…」

上空で顔を真っ赤にしながら睨み合う二人の下で私は渾身の力作を破壊されたショックで両手を地面に付けてうなだれていた。

「なっ…桜花、私の方が可愛かったでしょ！？」

「何を言ってるんだ、私のだって可愛かっただろう！？」

「あんたが可愛いとか言ったらちょっと危ないよ！？」

「なっ、なんだって！？」

「ちょっと二人とも、なんかおかしい方向に話が進んじゃってるよ！？私が言うのもなんだけど、勝負はいいの！？」

「「そんな事は後でいい！！」」

「いいの！？」

もはやグダグダである。

下で戦っていた軍勢達も最早戦闘意欲を失い、若干呆れた様に今だに口論している二人の神を見上げている。

結局、その後はちゃんとした勝負ができるはずもなく、諏訪子は

神奈子の振り回した御柱の直撃を受けてノックアウト……

歴史通り諏訪大戦は八坂神奈子の勝利で終わったわけである。内容は殆どがグダグダだったのだが……

その後は原作通りに表向きは神奈子だが本当の祭神は諏訪子であるという形になり、和解した私達は夜中に三人で酒をのんでいる。

「あ～う～、桜花ぁ～！わらし負けちゃったよ～！」

酔った勢いで泣き出した諏訪子を宥めながら私も酒を飲む。

「らんだい、二人ばっかりイチャイチャとぉ～。あらしも混ぜろ～！」

こちらは神奈子だ。さっきから執拗に絡んでくる…絡み酒である。

「いやぁ～、桜花はわらしのものらの～！」

「いいじゃらいかぁ～、ちょっとくらい～」

私は二人の神に挟まれて両腕を引っ張られている状態になっている。…って痛い痛い！尻尾を引っ張らないで！毛が抜ける～！！

「わらしの～！」

「いいや、あたしんだよ～！」

「…もう、好きにして」

今度からこの二人にはいろんな意味で注意しようと心に決めると、私は考える事を放棄して二人にされるがままになっていた。

「わらしの方が桜花の事しってるもん！桜花は耳が弱いんらよねぇ～？」

そう言うと諏訪子は私の頭にある耳を両方とも引っ張ってきた。

「ひゃん！？な…す、諏訪子！？やめてよ～！」

「ほぅ～じゃあ私はこっちら～！」

神奈子は私の背後に回ると尻尾に抱き着くと、あろうことか逆撫でしてきた。

「やぁ～！やめて～！」

「あはは～楽しい～！」

「本当だねぇ～！」

私を散々玩具にした二人は結局そのまま私に抱き着いたまま眠ってしまった。二人の神様によって私の移動は完璧に封じられている。仕方がないのでこのまま私も寝よう。

「いや、しかし…」

私は仰向けに寝転がった状態で独り呟く。たぶん顔には自然と笑顔が浮かんでいるに違いない。

「なんだかんだあったけど、楽しかったわね……」

その後、疲れていたのか私の意識はすぐに闇の中へと落ちていくのだった。

◆諏訪大戦（後書き）

次回から舞台は再び霧の湖へと…

◆境界の妖怪　八雲紫（前書き）

今回は短いです

◆境界の妖怪　八雲紫

「お世話になりました」

私は神奈子と諏訪子に深々と頭を下げながらお礼を言った。諏訪大戦の後、なんだかんだで一週間も守矢神社で過ごしてしまったからだ。

「もう行っちゃうの？もう少しゆっくりしていけばいいのに…」

諏訪子が寂しそうに言うので私は苦笑いしながら諏訪子の頭を撫でる。

「また遊びにきなよ、歓迎するからさ」

「うん、ありがとう神奈子」

一週間の間、一緒に暮らしているうちにお互いの事をよく知ることができたからか、今は多少ぎくしゃくしているが諏訪子も神奈子もお互いを認め合うようになりはじめている。

「じゃあ、いつかまた！」

私は手を振る二人に背を向けて空へと舞い上がった。空を飛ぶのも一週間ぶりだから結構気持ちいい。

「それにしても…」

私は懐から一つの笛を取り出す。一見ただの木製の笛に見えるが

材質が凄い。なんと、神奈子の御柱から削り取った特別製なのである。音色が綺麗だし、何より頑丈なのが特徴で簡単には壊れない。

「いい物貰ったわ♪」

貰ってから早速古い記憶を探って諏訪子に「ネイティブフェイス」を、神奈子には「神錆びた古戦場跡」を吹いてあげた。楽器の演奏は初めてだったけど能力でなんとかした。二人とも喜んでくれたからよかった。

静かな空の旅も好きだけどせっかくだから何か一曲吹いてみようかな…

「～～♪～♪～～～♪」

空を飛びながらゆっくりとしたテンポで「ネクロファンタジア」を吹いてみる。原曲はスピード感のある曲だけどゆっくり吹いてみたらなかなか神秘的になるから不思議だ…これもこの曲のモデルである彼女のせいなのだろうか……ちなみに――

「……」

さっきからやたらと視線を感じる。辺りに気配はないけどずっと見られているような…こんな事ができる人物は私の記憶の中で一人しかいない。まぁ、正確には人ではないのだけど…

「さっきからじろじろと…姿を見せなさい、スキマの妖怪さん?」

私は笛をしまうと何もいない空間に話しかける。

すると、突然目の前に横にスッと赤いリボンが両端についた線ができたかと思うとゆっくりと開いて目玉がたくさん見える奇妙な空間が現れ、一人の女性が中から出てきた。

私より少し低い身長で整った顔立ち。長い金髪に紫色が基準の服。頭にかぶっている白いＺＵＮ帽に赤いリボン。

――――八雲紫

幻想郷最強の妖怪。幻想郷の創立者であり、幻想郷を囲む結界の一つを管理している大妖怪である。

何より恐ろしいのは彼女の能力…「境界を操る程度の能力」である。ありとあらゆる境界を操る彼女は原作ではその力を使い「実と虚の境界」を曖昧にして月に攻め入った事もあったらしい。力は私と同格…いや、先に能力を使われたら若干私が不利になる。もし戦いになったら先に私が彼女の能力を封じなければ危ないだろう。

「まさか気づかれるなんてね…」

紫は手に持った扇子で口元を隠すと胡散臭い笑みを浮かべる。実際に見るのは初めてだけど本当に胡散臭いなぁ…。

「それで、私に何か用かしら？スキマの妖怪さん」

多少警戒しながらも一応話しかける。紫はクスクス笑いながらもわざとらしく驚いて扇子を畳むと私に軽く頭を下げた。

「あら、失礼しました。私、八雲紫と申します。よろしくお願いしますわ。鈴音桜花さん」

敬語で話してるけどどこか信用できない。本当に胡散臭い奴だなぁ…

「敬語はやめてよ、名前も呼び捨てで構わないわ」

「あら、じゃあ遠慮なく…よろしくね、桜花」

少しは遠慮しろよ…どれだけ図々しいのかしらこの紫ババアは！

「…しまった、私の方が年上だった」

まさかの自爆である。

「…えっと、大丈夫？」

私が勝手に落ち込んでいると紫が口元を若干引き攣らせながらも心配してくれた。

「だ、大丈夫よ…話が逸れたわね。何の用かしら？」

「え、ええ…実は私は今、ある計画を立てているのだけど…」

計画…というのはおそらく幻想郷の事だろう。まぁ、私は元々協力するつもりだけど…。

「私は人間と妖怪が共存できる…そんな理想郷を作りたいの。そこで、あなたにも協力してほしくて」

やっぱり、幻想郷の話だった。

「協力するのはいいけど、何で私なの？」

「あら、貴女のことは妖怪の間では有名よ？長い年月を生きた妖獣、だけど一度も人間を襲わず、逆に人間を助けた事もあるらしいわね？しかも今では人間に崇められて神になったとか…」

日傘をクルクルと回しながらにこにこと笑う。胡散臭い笑みは相変わらずだけど瞳には強い光が宿っている。

「まぁ、合ってるけど…」

「でしょ？貴女は私の理想を既に作り出してるのよ」

「それで私に協力しろって言うのね…別にいいけど」

「ありがとう、一応貴女が住んでいる辺りに作ろうと考えてるんだけど大丈夫かしら？」

「ええ、構わないわ。でも妖怪の山にいる連中はどうするの？あいつらは人間が嫌いなのよ？」

紫は再び扇子で口元を隠すと悪戯を思いついた子供のような顔をした。扇子で隠してもわかるくらいなのだから口元は凄くにやけているに違いない。

「大丈夫、私に考えがあるわ。でも、こちらもいろいろと準備があるから暫く待ってちょうだい」

「ええ、わかったわ」

紫は扇子を畳むと自分の隣にスキマを開いた。

「今日は挨拶しに来ただけだからもう帰るわね。また会いましょう」

「えぇ、また会いましょう」

「あ、そうだ…」

スキマに半分ほど入った時、不意に紫が顔だけスキマから出して再び私の方を向いた。

「ん、どうしたの？」

「貴女、私の式にならない？」

「…紫、あなた年上でしかも神を式にするつもりなの？」

その後、紫は「冗談よ」と言ってスキマに入っていった。だけど私は聞いた…スキマが閉じる瞬間に彼女が舌打ちするのを…

次から彼女には隙を見せないようにしなきゃ…

◆境界の妖怪　八雲紫（後書き）

さぁ、次回から原作キャラが続々と出ますよ～

◆神社と巫女と私と…（前書き）

キャラクタープロフィール（改定版）

鈴音桜花

種族・妖獣（神）
性別・女
年齢・約一万歳
能力・ありとあらゆるモノを拒絶する程度の能力

主人公。最近神となりさらに強くなった。現在は諏訪地方から帰ってきたところであり一年ぶりの我が家を楽しみにしている。

能力は磨きが掛かってきており、できない事は殆どない。今では対象の存在を拒絶して完全に消滅させることも可能である。

◆神社と巫女と私と…

「ただいま～！！」

紫と別れた私は二日かけて霧の湖へと帰ってきた。修行に出発してから約一年ぶりの我が家と呼べる場所である。

「チルノ～！、ルーミア～！、大ちゃ～ん！」

湖は相変わらず霧に包まれていて視界は悪い。大声で三人を呼ぶが返事は返ってこなかった。

はて、おかしいな…リンの花畑にでも遊びに行ったのだろうか。

私はすぐに湖の近くにあるリンの花畑へと向かった。

花畑に着くとリンと幽香が一緒に花の手入れをしていた。

「リン、幽香、ただいま！」

私が声をかけると二人はこちらを振り返り、笑顔を見せた。リンは私を見た瞬間走り出し勢いよく私に抱き着いてきた。

「おかえり、桜花お姉ちゃん！」

「ただいま、リン」

涙目になっているリンの頭を撫でてあげると、幽香に顔を向ける。

「久しぶりね、幽香…元気だった？」

「たった一年会わなかっただけで久しぶりと言われてもね…まぁ、元気にやってるわ」

私はリンを肩車した状態で幽香の隣に立った。幽香は相変わらず日傘をさしたままにっこりと微笑んでいる。

「この一年間、貴女の代わりにここの花達を世話していたのだけれど…花達も寂しそうにしていたわ」

「そう…ありがとう、幽香」

「ふふふ…どういたしまして」

私はリンを墓石へと降ろすとチルノ達について聞いてみることにした。

「ねぇ、チルノ達を知らないかしら？湖にいなかったのよねぇ…」

幽香とリンは顔を見合わせるとクスクスと笑い出した。はて…何かおかしな事でも言ったかしら？

「チルノ達なら…たぶん新しくできた神社でも見に行ったんじゃないかな」

「…神社？」

リンが言った事に首を傾げていると幽香が横から続きを話してくれた。

「貴女がいない間に人間達が新しい神社を建てたのよ。場所は人間の里から見て東の方角よ」

へぇ…私がいない間に神社なんか建ててたんだ。一体誰を祭ってあるのやら…

「ちなみに祭ってあるのはリンと貴女よ」

「…は？」

突然の言葉に私は呆然とその場で固まってしまった。

私とリンを祭った神社……ですって？

「いやいや…何でよ。私とリンはそこの祠にも祭られてるのに？」

私は花畑の奥にある祠を指差した。

「なんか、そこだけじゃ申し訳ないって言われてね？人間の里を見守れる場所にちゃんと祭りたいって言い出したの」

そんな事までしなくてもいいのに…。というか、最近妙に信仰が集まってると思ったら…これが原因だったのか。

私の妖力や神力は能力を使う事以外では減らないからどんどん溜まっていくけど、それでも最近は特に力が増えてきたように感じていた。今なら神力だけでも神奈子や諏訪子に勝てるかもしれない。

「神社ねぇ…私はこの場所気に入ってるからあんまり移動したくはないんだけど…」

「私だってこの花畑からは移動したくないよ。私の墓だってあるし…」

まぁ、神社に祭られるといっても毎日必ずいなければならないような場所じゃないはずだから……たまに様子を見に行くくらいにしておこう。さすがに神のいない神社というのも微妙な所だし…。

…あれ？

神のいない神社ってどこかで聞いたような……何だったっけ？

「……とにかく、私も行ってみるわね」

「うん、いってらっしゃい！」

「私はリンと花の手入れを続けるわ」

リンと幽香に手を振って別れると、私は人間の里の東を目指した。

人間の里を過ぎ、よく手入れされた参道にそって東へ向かう。すると、長い階段を上った先に赤い鳥居が見えた。あそこが例の神社らしい。

私は鳥居の上に降り立つと境内を眺めてみる。そこまで広くない境内に新築の神社が建っている。

ここで私は再び考える。やはりどこかで見覚えがあるのだ。この鳥居も、境内の様子も……

私が考えに浸っている時、突然私に向かって何かが飛んできた。

「…っ！？」

咄嗟に体を捻って回避する。慌てて飛来物を見ると、白い紙に赤い紋様が書いてある…つまり御札である。

境内をみれば巫女服を着た少女が何かを投げた体勢でこちらを睨んでいた。

「そこの妖怪、ここは神を祭る神聖な場所です。直ちに立ち去りなさい！」

ちなみに私は現在神力を隠している。理由は、そうしなければ道行く人に毎回拝まれてしまうからだ。空を飛んでいる時はいいが道を歩いている時だと……何だかむず痒い気持ちになるし……

私がどう説明しようか考えていると、それを否定だと思ったのか巫女さんは再び御札を構えた。

「どうしても立ち去らないなら、この神社の巫女である私――博麗霊樺がお相手しましょう！」

「なっ…博麗！？」

思い出した！この辺りが幻想郷になるのならそこにある神社は二つ。妖怪の山ではない場所にある神社ならばそこは『博麗神社』しかない。

よく見れば原作と同じ様な形をしている。此処に将来、博麗霊夢が住むことになるわけだ。

…と、いうことは私とリンは博麗神社の神になったということですか！？

そうか…博麗神社の神の姿を誰も見たことがないのは普段は花畑にいるからなのか…。

「おい妖怪、聞いているのか！！」

そこまで考えた途端に下から怒声が聞こえたので私は考えを中断すると再び初代博麗の巫女へと目を向けた。

服装はちゃんとした巫女服で霊夢のように腋を見せるような格好ではない。雰囲気も凛々しい感じでまさに『戦う巫女さん』という雰囲気である。

「何の目的で此処にきたのかは知りませんが、素直に去らないのならば痛い目をみてもらいます！」

霊樺は大きくジャンプすると左手に持っている御札を私に投げつけてきた。私は霊樺を飛び越えるようにジャンプして回避すると、境内に着地して振り返る。霊樺は先程まで私がいた場所に浮かんで

いる。博麗の巫女は初代から空が飛べたのか…。

霊樺は模様の違う御札を取り出すと狙いも定めずに投げた。すると、投げられた御札は空中で向きを変えると一直線に私へと向かってくる。横へ移動して回避するが再び向きを変えて追いかけてくる。ホーミングタイプの御札のようだ。

私は振り返りながら飛んでくる御札を一つ一つ妖力を込めた爪で引き裂いた。

「やりますね、ですが……これで終わりです！」

霊樺は空中で両手を広げると目を閉じる。すると、彼女の霊力が一気に高まり赤や青、緑などの入り混じった虹色の光の玉が現れた。

「あれは…」

そう、霊夢の代表的な技にしてあまたの妖怪を退治してきた技…

霊樺が目を開き、広げていた両腕を前に突き出す。

「いきます……奥義・夢想封印！！」

次の瞬間、無数の光の玉が一斉に撃ち出され、私の視界は発生した光により真っ白になった。

―霊樺Ｓｉｄｅ―

「はぁ…はぁ…」

私は肩で息をしながらも警戒は解かずに着弾地点を注意深く見続ける。

先程放ったのは私が最近編み出した奥義『夢想封印』……あらゆる法則を無視して相手を封印する技である。まだ数回しか使ったことはないが、今のところ破られたことはない。

「ちょっと、何の騒ぎよ！？」

「大丈夫ですか！？」

私が乱れた息を整えていると神社の中からチルノと大妖精が現れた。彼女達はたまたま神社に遊びにきていたのだ。

「二人とも、出てきてはいけません！！中に入ってなさい！！」

夢想封印はたしかに直撃はしたが相手の気配がまだ消えていない。つまり相手はまだ戦える状態であるということだ。あの二人を危険な目に会わせないためにも早く避難させなければ…

「霊樺、誰かきたの？」

「青い服を着た妖怪ですよ。なかなか強い奴ですから巻き込まれないように下がってください」

チルノは私の言葉を聞いた瞬間、驚愕の表情を浮かべた。

「れ、霊樺……桜花に手を出したの！？」

「…は？」

あまりにもチルノが焦っているので私は首を傾げた。チルノの知り合いなのだろうか？

「あちゃ～……霊樺、やっちゃったね～…」

「…何が……っ！？」

チルノにどういうことか聞こうとした瞬間、砂煙の中からとてつもない妖力を感じ取り、私は振り返りながら御札を構えた。最初と比べると数倍…いや、数十倍になった妖気が辺りを包む。

「これは……一体何が！？」

私が辺りを見回しながら警戒していると、私の隣にチルノと大妖精がやってきた。

「あらら……桜花ったらちょっと怒っちゃったかなぁ…いざという時はあたいが止めるしかないかも…」

「チルノちゃん…大丈夫？」

「うん、大丈夫だよ大ちゃん」

私は少々混乱してきた頭を整理するようにチルノに事情を聞くことにした。

「チルノ、あの妖怪を知っているの？」

「…ん？ああ、まぁね…あたいの最初の友達さ。そしてあたいが知る限り世界最古の妖怪で、妖怪でありながら神になった奴なんだ」

「……なっ！？」

最古の妖怪にして神様ですって！？

私が驚愕の事実に呆然していると、突然周りの空気が変わった。ピンッと張り詰た今まで感じたことがないくらいの緊張感が私を包む。

「ふふ…ふふふ……いいわ、やるじゃないの…貴女。でも、相手の意見を聞かないのはいただけないわ……ちょっとお仕置きをしてあげましょう」

砂煙が晴れていき、九本の尻尾を広げ、満面の笑みをしている彼女が現れた。

妙に迫力がある……というか目が笑っていない。隣のチルノと大妖精も震えているのがわかった。

「霊樺……お祈りは済ませたかしら？遺言は？部屋の隅でガタガタ震える準備はＯＫ？」

「…え？あ、あの……その…？」

ヤバい……妖怪ならまだよかったけどまさか神様に攻撃するなんて……私ったらなんてことを…

「自分の神社の神を攻撃するなんて言語道断！少し反省なさい！」

「あ…ああ……いやあああぁぁぁぁぁ！！」

…訂正、自分の神社の神に手をあげるとは…今度からちゃんと話を聞くことにしよう。あれ？でも、今回は彼女がちゃんと質問に答えなかったのが悪いんじゃ…

そんな事を考えていると、突然妖力の塊が飛んできて私にぶつかった。軽く吹き飛ばされ、意識が遠くなる中で私は思った。

「あれ？…結局、私あんまり悪くないんじゃない…？」

―桜花Ｓｉｄｅ―

少しやり過ぎたかしら…

霊樺を吹っ飛ばした後、私は彼女を抱えて神社に入るとチルノに

布団を敷いてもらい霊樺を寝かせる。

「まったく…大人げないよ、桜花？」

「うっ……返す言葉もございません」

先程の戦いは考え事をしていて話を聞かなかった私が全面的に悪い。それなのに逆ギレで霊樺を気絶させてしまった。起きたら謝っておこう…

「まぁ、いいや……とりあえずお帰り……桜花」

「お帰りなさい、桜花さん」

チルノと大ちゃんが微笑みながら、しかも不意打ちのようにそう言われて思わず泣きそうになるのを必死に堪えた。たった一年離れていただけなのに……こういうところが私はまだ人間らしいのかもしれない。

私はそんな顔を悟られないように二人を一緒に抱きしめた。小柄な二人は簡単に私の腕の中に収まる。

「ちょっ…桜花！？」

「ど、どうしたんですか！？」

二人が驚いてあたふたしているが離さない。今離したら私の泣き顔を見られてしまうから。だから代わりに私も二人にこう言った。

「…ただいま」

二人は少しの間キョトンとしていたがすぐに笑顔になってくれた。

その後、目を覚ました霊樺と話をつけて、私は正式にこの神社の神となったのだった。これからやることがいっぱいあって忙しくもなるけどリンの分まで頑張らないとね。

◆神社と巫女と私と…（後書き）

キャラクタープロフィール（改定版２）

博麗リン

種族・神霊（元人間）
性別・女
年齢・？（死んでいたので詳しくわからない）
能力・言霊（ことだま）を操る程度の能力

博麗神社に祭られている神の一柱。苗字も神社の名前から取った。桜花を本当の姉の様に慕っている。見た目は１０歳くらいの少女で幽香に似ている。

リンの能力である『言霊を操る程度の能力』は言葉に宿る力を引き出し、操る能力である。発した言葉通りの結果を現す力があるが、生物に影響を与える言葉（「動くな」や「眠れ」など）は対象の人物をちゃんと理解し、なおかつ本名を知っておく必要がある。

◆死別と決意（前書き）

ちょっと暗い話です。

◆死別と決意

私がこの神社の神として祭られてから数年の月日が流れた。霊樺は身長が少し伸びて大人っぽくなり、妖怪退治の腕前も一級になった。修行も欠かさず行う真面目な子である。現在２５歳、そろそろ結婚も考えていいのではないか、と話を持ち掛けたが断られた。

「私はこの神社と、里を悪い妖怪から守ることだけを生業にしています。桜花様の御心は嬉しいですが…結婚は考えてません」

…だ、そうだ。

ちなみに最近ルーミアを見かけないと思ったら旅に出たらしい。理由はもっと世界を見て回りたいから、らしい。

旅に出たのは私が帰ってくる一週間前…入れ違いになったわけだ。まぁ、ルーミアもなんだかんだで強いから心配はしていないが。

さて、現在私は博麗神社にて霊樺と陰陽玉の開発に奮闘している。霊樺単体でも十分強いのだが彼女のように強い巫女が今後も続くかどうかはわからないため補助の為に開発しているのだ。

「相手を自動で狙って攻撃してくれるものがいいですね。あ、あと直接投げつけるとか……」

霊樺からの要求を踏まえて私が陰陽玉に神力を注いで効果を決めていく。ついでに能力を使って壊れないようにしておいた。

「…っと、こんな感じかな？」

「はい、助かりました。まさか桜花様自ら作ってくださるとは…」

「…ん、気にしないでよ。これから沢山世話になるんだしね」

博麗神社の評判はとても良く、妖怪退治の他にも御札の販売も行っている為か生活費は普通に稼げている。幻想郷ができてからは妖怪退治も御札もあまり必要なくなるから今のうちに稼がなければ後で酷い目に合うだろう。原作の霊夢なんかがいい見本だ。あの腋巫女は万年金欠なのだから……

「桜花様、一休みしましょう。今お茶を入れてきます」

「ああ、お茶は三つ用意してちょうだい」

「え？三つですか？」

「そう、三つ…よろしくね」

「…わかりました」

首を傾げて神社の奥に消えて行く霊樺を見送ると私は縁側に座り空を見上げる。ついでにさっきから覗いている奴にも声をかけるとしよう。

「いるんでしょ、紫？」

「あら、バレてたのね」

目の前の空間がパックリと割れて大量の目玉が見える紫色の空間が見える。そこからいつもの紫色のドレスの様な服を着た女性が現れた。スキマの妖怪、八雲紫である

「久しぶりね、最後に会ったのは五年前だったかしら?」

「七年前よ…まったく、相変わらず突然現れるのね」

紫は私の隣に座ると私と同じ様に空を見上げた。

「本当にこの辺りはいいわね…妖怪も人間も共存できてる」

「まぁ、まだ悪さする妖怪が多いし、人間も妖怪を完全に信用してないけどね」

「でも貴女は人間も妖怪も関係なく接しているのでしょう?」

「…まぁね」

紫は扇子で口元を隠す。おそらく笑っているのだろう。目を細めて肩が小さく動いているから間違いない。

「…本当に貴女は興味深いわ。式にできないのが凄く残念よ」

「私は貴女の式になれなくて安心してるわ。貴女のことだもの面倒な事は全部式にやらせるのでしょう?」

「……そんなことないわよ?」

じゃあ今の間はなんなのよ。明かに目を逸らしながら言っても全然説得力がない。

「桜花様、お茶を……っ妖怪！？」

お茶を入れてきた霊樺が紫を見て懐から御札を取り出すのを手で制する。

「大丈夫よ、彼女は八雲紫…私の友人だから」

「はじめまして、博麗の巫女さん」

私の友人と聞いて安心した様に御札を仕舞った霊樺を見てはじめて出会った頃を思い出す。あの時は突然御札を投げられたんだったか…そして私が考え事をしていて彼女に返事をしなかったのが原因で戦闘になったのだった。懐かしいな。

その後、霊樺と紫は自己紹介をして今は三人でお茶を飲んでいる。

「人間と妖怪が共存する理想郷…ですか」

霊樺がお茶を啜りながら紫の方を向く。

「ええ、桜花や貴女が見守るこの地域は正にそうだと思うのよ。だから私の夢である理想郷をここに作らせてくれない？」

紫はいつもの胡散臭い顔ではなく真剣な顔でこちらを見ている。

「私は構わない。霊樺はどうする？」

「私は桜花様がそう言われるのでしたら何も文句はありません」

「ありがとう、二人とも…」

私達を見ながら紫は嬉しそうに微笑んだ。紫の本当の笑顔はとても綺麗で思わず見とれてしまう。

「それで、名前はどうするのですか？」

霊樺の言葉に紫は視線を空に向ける。そよ風が彼女の金髪を揺らして、その光景がまるで一枚の絵のようになっていた。

「名前は…幻想が集う場所、どんな存在でも受け入れる理想郷だから…『幻想郷』にしようと思うの。どうかしら？」

紫は微笑みながら私の方を向いて微笑んだ。

「ええ、いいと思うわ」

今日からこの場所は幻想郷と呼ばれるようになった。この日は冬が終わり、春の訪れを感じる…そんな温かい日だった。

それから六十年、私と紫と霊樺は幻想郷の地盤を固めていった。妖怪には昼間や里では人間を襲わないことを呼びかけ、人間には夜は里から出ないように注意した。それを破る者がいれば博麗の巫女や紫が退治に来る、となかば脅しともとれる内容だがなんとか形はできてきた感じである。

――そして

今、私と紫は博麗神社の一室にいる。目の前には布団に入って横になっている霊樺がいる。

彼女も85歳…随分と歳を取った。白くなった彼女の髪を触る。

「すいません…桜花様、紫様。もう少し…お二人と幻想郷を見ていたかったのですが…」

私は彼女の皺の増えた手を握った。私の手は全く変わっていない…それが何だかもどかしくて仕方がない。霊樺はリンと同じくらい大切な人間だったからだ。

「お二人とも……私は…お先…に、失礼させて…いただきます。どうか…お元気で…」

「こちらこそ…長い間ありがとう。ゆっくり休んでちょうだい」

「ええ、後は私達が…何とか…するわ」

紫はまるで自分の娘でも撫でるかのように霊樺を撫でて、私は涙を堪えながら霊樺の手をぎゅっと握った。

「…はい」

霊樺はそう言うとゆっくりと目を閉じ、永眠した。その瞬間私は泣き崩れた。私が泣いている間、紫がそっと抱きしめてくれた。紫は悲しそうだったが涙は流していなかった。

「彼女は…きっと幸せだったわ。そうでしょ、桜花？」

「…ぐすっ……うん」

その後、紫に抱き着いたまま眠ってしまった私は朝まで紫を離さなかったらしく、紫も朝まで私と一緒にいてくれた。

それから二日経って霊樺の葬儀が行われた。里の人が全員集まり彼女の死を悲しんだ。

その次の日、神社に一人の少女がやって来た。

「あの、霊樺さんに言われて…私が二代目になるように、と」

霊樺は生きているうちに二代目の博麗の巫女を探していたのだ。私は霊樺と同じ修行方法を教えて少女もそれを素直にそれに従った。

そしてその少女も同じように三代目を探し出してこの世を去った。

次も、その次も…

私と紫は博麗の巫女達と共に幻想郷の形を整えていった。

そんなある日のことである。紫が私を見ながら心配そうにしていた事に気がついた。

「…紫？どうかした？」

「いえ…貴女が最近疲れているように見えたから」

疲れている…そうかもしれない。私は縁側に座ったまま空を眺める。

「そんなに疲れて見える？」

紫は困ったような顔をすると私の隣に座った。

「最近、妖精達とも遊んでいないじゃないの。それに雰囲気も暗いわ…貴女らしくないもの」

私は湯呑みを持ったまま目を閉じて俯いた。妖怪になって一万年と少し…こんなに時が過ぎても私の心は人間らしさを今以上には失わない。妖怪らしく振る舞えたらどんなに楽だろうか…。これは元の世界を拒絶した私への呪いではないか、と最近は思うようになってきた。

自分だけ世界から逃げ出した代償の様なものだと…長い年月を生きて様々な生死を見て、経験すること…親しい者の死を経験し続けること。その苦しみが、私が拒絶した世界への償いになるのではないかと思えてならない。

紫は私の頭に手を乗せると軽く撫でた。

「貴女はどの妖怪よりも長生きで強い…でも、どんな妖怪よりも人間らしくて脆いわ」

紫は諭すように私に語りかけてくる。私はそれを黙って聞いていた。

「桜花、完全に妖怪の心になれとは言わないわ。貴女には貴女の生き方があるのだから……こう言ったらおかしいけれど貴女は妖怪らしくないもの」

「妖怪らしくない妖怪……かぁ」

私はぽつりとそう呟いて紫の方を見た。紫は優しく微笑んで私の頭から手を離した。

「貴女は自分のやりたい事をすればいいのよ。無理に私や人間達に合わせる必要はないわ。もっと自由になりなさいよ」

私は今まで皆の為になればと考えて行動してきたけど…自分のことなんてあんまり考えてなかった。そもそも自由に生きる権利なんてないと考え始めていたから。

「紫…私自由にやっていいのかな…」

「何を言ってるの。貴女の妖生でしょ?貴女の自由に決まってるじゃないの」

私は妖怪だ…人間と違って長い時を生きる。なら、私は忘れないでいよう。今まで出会った人も妖怪も全て覚えていてあげよう。

そして次の世代に伝えていく役割を担おう。それが私のやりたいこと…私の生き方というものだ。

「ふふふ…どうやら元気が出たみたいね」

「うん、今までたくさんの人間や妖怪の生死を見てきてちょっと鬱になってたけど…もう大丈夫。やりたいこと、見つかったから」

「そう…なら私の出番は終りね？」

私は頷くと立ち上がり大きく背伸びをした。

さぁ、今からチルノやリン達に顔を見せてやらなくては…心配もかけたからまずは謝らないとね。

その後は旅にでも出よう。気分転換には丁度いい。

折角自由にしていいと言われたのだ。しばらくは幻想郷の管理は紫に押し付けてやるとしよう。

能力で調べたら今は西暦７０９年らしい…結構な時間が経ったものだ。霊樺と出会って、博麗の巫女達を見守る様になって数百年が経っていた…。

「紫、私ね…旅がしたいんだ…」

私がそう言うと紫は優しく微笑んで私の背中を軽く叩いた。

「そう……なら、行ってきなさい。幻想郷は私と博麗の巫女達でどうにかするわ。いい気分転換にもなるでしょう」

「…ありがとう」

最後に笑ったのはいつだったか…随分と笑う事を忘れていたように感じる。紫は私の顔を見ると扇子で口元を隠して目を逸らした。

「べ、別に礼を言われる程たいした事はしていないわ…いいからさっさといきなさい！」

紫はそう言うとスキマを開いてどこかへ行ってしまった。私は紫のいなくなった縁側で一人微笑みながら茶を啜った。

「私の自由に…かぁ」

もう一度自分に言い聞かせるように呟いてから私は立ち上がった。

「霊那、ちょっといいかしら？」

私は今の代の博麗の巫女を呼ぶとしばらく神社を離れるとだけ伝え、準備を整えるとすぐに出発した。

神社は紫が管理してくれるだろう。チルノや幽香あたりにも頼んでおけば大丈夫だろうし。

…おっと、忘れていた。私はこれから全ての事を記憶して後世に伝えるんだ。なら記憶が消えないように能力で補わないと…

「私はこれから『記憶が消える』ことを拒絶する」

…これで私の記憶は消えない。霊樺との思い出も、今まで経験し

た事も全て忘れない。あえて言葉にしたのは自分なりのケジメだ。
もう迷わないように、前を向いて歩けるように…

「いってきます」

神社へ振り返りながら私はそう呟いた。

『いってらっしゃいませ、桜花様』

何故か私には霊樺をはじめとした歴代の博麗の巫女達が声を揃えてそう言ってくれた気がした。

◆死別と決意（後書き）

霊樺を気に入っていた人はごめんなさい（汗）

次回から旅の話になります。

◆紫、桜花を想う…（前書き）

今回は紫のちょっとした話。

◆紫、桜花を想う…

―紫Ｓｉｄｅ―

私は八雲紫、境界を操る力を持ち、幻想郷を管理している。大妖怪である私に刃向かう妖怪は殆どおらず、私の理想である『人間と妖怪が共に暮らす理想郷』を作るために何百…いや、何千年という時を費やしていた。

そんな私に協力してくれる妖獣がいた。名前は鈴音桜花……太古の昔に生まれ私より長生きをしている大妖怪だ。

真っ青な髪、空の様に透き通った色をした瞳、触り心地の良さそうな尻尾……彼女をはじめて見た瞬間から私は彼女に勝てない事を悟って恐怖した。しかし、同時に何か惹かれるものもあった。

彼女は私と同じ考えを持っていた。人間と妖怪が共存できる様にしたい、と彼女も思っていたという。実際に彼女は自分が妖怪であるにも関わらず人間の住む里に出入りしているし、昔は里の中に住んでいた事もあったらしい。

今でこそ何とか形になってきた幻想郷だが正直に言えば私一人で作れたかどうかはわからない。桜花と霊樺が協力してくれなかったら地盤すら固められなかったかもしれない。

三人で意見を出し合って、協力したからこそ今の幻想郷があるんだと思う。

まぁ、度々問題は発生しているが……それらの問題はこれから解決していけばいい。

「紫様、お茶が入りましたよ」

「あら、ありがとう」

私は現在、博麗神社の縁側でお茶を飲んでいる。桜花がここの神となった日から私もよく遊びにきているのだ。

私は最近、今代の博麗の巫女である博麗霊那と共にいる事が多い。というのも桜花が現在、旅に出ているから留守をまかされたのである。出発したのは昨日……お土産を持って来るから、と笑いながら旅だったのを覚えている。

彼女がいないのは寂しいが私の力を使えばすぐに会いに行けるのだからあまり心配等はしていないが……

桜花は変わった妖怪である。妙に人間らしいというか妖怪らしくないというか……。

妖怪は仲間の死に対してあまり感情を抱かない。無論怒ったり悲しんだりすることはあるが長くは引きずらないのである。ほんの数日…長くても数週間で普通の状態に戻る。

しかし、桜花は違う。初代博麗の巫女である霊樺が死んだ時は私に抱き着きながら大声で泣いた。それから何代も巫女が代替わりする度に彼女は泣き、徐々に笑顔になることがなくなっていった。

私はこのままではいつか桜花の心が壊れてしまうのではないかと心配だった。そして、何とかして元気になってほしかった。彼女は私の最初の友達なのだから……

結局いい考えが浮かばなかった私は思った事をそのまま彼女に話した。お礼を言われた時とても恥ずかしかったけど、彼女は少し元気が出たようだった。

その次の日、彼女は私に幻想郷の管理を全て任せると旅に出た。気分転換にもなるだろうし、彼女がそれで何かを得る事ができれば私としても満足なのだが……

「紫様、どうしました？」

私が我に返って隣を見ると霊那が心配そうに私を見ていた。ずっと俯いていたから心配したようだ。

「何でもないわ。ちょっと…考え事をね……」

私は霊那から視線を外すとお茶を啜った。

お茶はもうすっかり冷えてしまっていた。

それから数日経ったある日。幻想郷に異常がないかを確認しながら私は溜息をついた。

元々この仕事は桜花がやっていた。彼女がいないから代わりに私

がやっているのだが……

「正直…面倒だわ」

ちなみに今の季節は冬……私にとっては拷問のような環境である。この寒さのせいで眠気が半端じゃないのだ。

「寒い～、帰りたい～」

等と呟いてみるが勿論誰も聞いていない。……逆に虚しくなってきてしまった。

ああ……桜花の尻尾で温まりたい。私もそろそろ本格的に頭のいい式になりそうな妖怪を探してみようかしら？

そんな事を思いながら私は能力を使いながら見回りを再開した。

そもそも、こうして毎日見回りをするのはものすごく大変である。いっそのこと人間が妖怪に勝てなくとも身を守れるくらいまで成長してくれれば楽なのだが……それは逆に妖怪を刺激して危ないと桜花が言っていたっけ。

私が溜息をついた時、丁度目の前に花畑が見えた。桜花がいつも遊んでいる『四季の花畑』である。ちなみに桜花だけは『リンの花畑』と呼んでいる。

私は花畑に降り立つと祠へと向かった。祠は花畑の中心にあるリンの墓石の裏に作られている。ここが桜花の神としての始まりの場所……

「あれ、紫さん？」

背後から声がしたので振り返ると小さい少女が立っていた。

博麗リン……博麗神社に桜花と共に祭られている神の一柱である。

「久しぶりね、元気にしていたかしら？」

私が微笑んで返事を返すと彼女も笑って頷いた。

「ああ…そうだ、紫さんにお礼を言わなくちゃ！」

「……お礼？」

私は彼女に何かしてあげただろうか？記憶を探ってみるが思い当たるような事がない。

「お姉ちゃんを励ましてくれたの紫さんでしょ？だからありがとう！」

私は一瞬何の事か解らずに固まってしまったが、すぐに理解すると恥ずかしくなり視線をそらした。

「べ、別にお礼を言われるようなことはしていませんわ。ただ…桜花には笑った顔が似合うというか……その／／／／」

あぁ～もう！！なんてこと言ったのよ私は！？こんなの私らしくないじゃないの！！

「ふふ、紫さん顔赤いよ？」

「…なっ！？」

私は急いで扇で顔を隠すと振り返って顔を見られないようにした。

「紫さんって照れ屋さんなんだね♪」

私はその言葉で限界だった。すぐにスキマを開くと逃げるように中に入った。

何故かスキマの向こうからリンが小さく笑ったような気がした。

私は暑くなった顔に手を当てて暫く悶えていたが、何とか立ち直ると自分の家の前へと降り立った。

「はぁ…疲れてるのかしら。私としたことが取り乱すなんて……」

仕方がない……今日は早めに寝てしまおう。

私は桜花が早く帰ってこないかなと思いながら布団に潜り込むのだった。

◆紫、桜花を想う…（後書き）

次回、原作キャラが二人登場します。

◆妹紅と輝夜（前書き）

タイトルからわかる通りあの二人が登場です。

◆妹紅と輝夜

私がやってきたのはかなり大きな都。日本の歴史に疎かった私はこれが平城京なのか平安京なのかわからないが……たぶん奈良時代初期あたり……つまり藤原京か平城京ではないかと思う。

まぁ、そんなわけでとにかく日本を見て回ろうと旅に出て一発目についたのがこの都だったのだ。

うん、人間がいっぱいいる場所にきたのは久しぶりだ。暫くこの都の中で人間に紛れてみようと思う。

「では早速……これでよしっと」

耳と尻尾を隠して博麗神社から持ってきた霊力が篭ったお札をポケットの中に入れておく。これで私からは霊力以外は感じないはず。以前諏訪子に気配がなさすぎてばれた経験を生かして完全に気配が消えないようにする。

都ができているくらいだ、妖怪退治を仕事にしている輩も多いだろうから用心しなければ…

私は都の中に入ると何処に行くわけでもなく適当にぶらぶらと歩き回った。

あ、あの店のお団子美味しそう…

歩き回ること一時間……私はとある屋敷の前にたどり着いた。普段なら「へぇ〜、大きいなぁ…」くらいの感想しか抱かないが、屋敷の入口に何故か大勢の人だかりができていて私は気になって近くの人に何かあったのか、と尋ねた。

「ああ、何でも絶世の美女があの屋敷には住んでいてな。今日は五人の貴族の方々が求婚をしたんだとさ」

五人の貴族に絶世の美女…はて、どこかで聞いたことがあるような。

「すいません、その美女の名前はなんというのですか?」

「おや、知らなかったのかい?かぐや姫だよ」

かぐや姫…竹取物語に出てくる姫である。と、いうことは本名は蓬莱山輝夜…ここにきて新たな原作キャラの登場である。

私はその人にお礼を言ってからその場を離れると姿を消してこっそりと塀を飛び越えて中へと侵入した。

屋敷の戸は全て閉まっているため中の様子はわからない。開けて入ろうにも誰もいないのに襖があいたら不自然だろうし……夜に来たほうがいいかなぁ。

私が踵を返して帰ろうとした時、庭の隅に一人の少女がいることに気がついた。

背中まであるサラリとした黒髪。貴族なのだろう、質の良い着物を着ている。十代半ば程の年齢だろう、綺麗というよりは可愛らし

い姿をしていた。庭の隅にある池の中を覗きながら退屈そうにしている。

おそらく今来ている貴族の娘なのだろう。私は少女の近くまで歩いて行った。

少女は池の中で泳ぐ鯉を眺めながら溜息をついた。よほど暇なのだろうか？

私は屋敷の裏に回ると狼の姿になった。遊び相手になろうと思ったのだが……いかんせん、体の大きさが人間一人乗せれる程大きい。

う～ん、もう少し小さくならないだろうか……このままでは怖がられてしまう。

試行錯誤してみたが結局姿は変わらず、駄目元で少女の元へと歩いて行った。

少女はまだ池の中を覗きながらぼーっとしている。私が少女に近づくと少女は気配を感じたのかこちらに顔を向けた。

「…えっ！？」

少女は目を見開いて驚いていた。それはそうだろう。屋敷の庭に突然青い毛並みの狼が現れたら誰でも驚く。

「あ、あわわわ…」

少女は震えながらゆっくりと後ずさる。襲われると思ったのだろう。叫ばないのは恐怖で頭がいっぱいだからなのか……

私はそんな少女に近づく。少女はビクリと体を震わせて固まってしまった。

う～ん…やっぱり駄目かなぁ、この姿……

私は少女の足元までくると体を擦りつけた。

「ひゃあ!?」

少女は小さく悲鳴をあげると腰をぬかしたのかその場に尻餅をついた。

怖がらせないように「ク～ン」と甘えるように鳴いてみる。少女はまだ震えているが恐る恐る手を出してきて私の頭を撫でた。

私は目を細めて大人しく撫でられていた。少女はもう震えも止まり僅かだが微笑んでいるように見えた。

「あなた、何処から入りこんだの?」

少女が私の頭を撫でながらそう言ってきたので私は首を傾げてみせる。

「ふふふ…何でかな、不思議と怖くなくなっちゃったわ」

それから日が暮れるまで私はその少女に撫でられていた。少女は

ずっと「もふもふする～」と言っていたけど…

その後、襖が開いて貴族の人間達が中から出てきた。中心にいる五人は何やら考え込んでいるようだったからたぶん五つの難題を出された人達だろう。その中の一人がこちらを向いた。

「妹紅、帰るぞ！」

「あ、父上達がきたから帰らないと…」

…はい？妹紅？まさかこの少女、あの妹紅ですか！？髪も黒いし原作より短いからわからなかった！

私は妹紅がむこうを向いている隙に姿を消した。

「あれ！？」

こちらに振り返った妹紅は突然姿を消した私を探してキョロキョロと辺りを見回した。

「妹紅、どうしたのだ？」

いつまでもやってこない妹紅を心配したのか父親らしき人物がやってきた。たぶん彼が藤原不比等なのだろう。

「父上…今ここに青い毛並みの狼がいたのです」

「青い毛並みの狼だと？それは本当か？何故すぐに人を呼ばないのだ！襲われたら危ないではないか！」

心配そうに妹紅を見る不比等は妹紅の手を握ると歩き出した。

私は二人を見送ると屋敷の屋根に飛び乗ると暗くなりつつある空を見上げた。

「いやはや、何が起きるかわからないものね……」

私の呟きは誰にも聞かれることはなかった。

―妹紅Ｓｉｄｅ―

自分の家に帰ってからというもの、私はあの狼のことばかりを考えていた。

最初はただ襲われると思って怖かった。人間を乗せることができるくらい大きかったからだ。しかし、その狼は私に甘えるように擦り寄ってきた。まるで必死に「私は何もしない」と訴えかけるように。

だから、私は少し戸惑ったけど狼の頭を撫でてみた。すると気持ち良さそうに目を細めてさらに甘えてきた。ふわふわとした柔らかい毛並みが気持ちよくて思わず「もふもふする～」と言ってしまったけど……

私の隣で寝転んだ時に確認したが雌だった。彼女（？）は私の話を聞いては頷いたり首を傾げたりしていた。もしかしたら人間の言葉がわかっていたのかもしれない。

夕方までずっと私のそばにいた彼女は父上が私を呼んで返事をするために振り向いた間にいなくなっていた。

私が振り向いた時間はほんの僅かな時間だった。その間に走り去るのなら走る姿が見えるはずなのに……あの狼は一体何だったのか。私は縁側に立ち、星が輝く夜空を見上げた。

月は……綺麗な満月だった。

―桜花Ｓｉｄｅ―

満月を眺めながら私は屋敷の屋根に寝そべっていた。

「う～ん……原作では妹紅と輝夜は仲が悪いんだけど…できれば仲良くしてほしいなぁ」

私はそんなことを思いながら体を起こした。

この世界、実はいろいろと原作とは矛盾している部分が結構ある。

チルノがまともだったり、幽香がいきなりマスパを撃ってきたり。永琳だってたしか本当の年齢は億を越えていたはずなのにこちらではまだ私と同じ万の桁である。月では時間の流れが違うのかもしれないから一途にどうかとは言えないからわからないけどね……

そんなことを思っていると下の方から人の気配がした。こっそり覗いてみると、長い黒髪の美少女が縁側に座り月を見上げていた。

間違いない、輝夜である。実際に見てみると本当に美人だとわかる。

睨むように月を見ていなければ、だが……

「まったく……何で私があんなオヤジ達と結婚しなきゃいけないのよ…」

うわぁ…イメージが凄い勢いで崩れていく。これをあの五人や帝が聞いたら揃って唖然とするに違いない。仕方がない、止めるとしよう。

「月の姫よ……愚痴はそのあたりにしておきなさい」

「…だ、誰!?」

私は屋根から飛び降りて輝夜の目の前に着地した。ちなみに尻尾や耳は隠していない。

「はじめまして、月の姫様。私は鈴音桜花、妖怪よ」

自己紹介した私は輝夜の顔を見ながら微笑む。

「妖怪が私に何の用かしら？」

輝夜は私を睨みながら何時でも動けるように身構えている。どうでもいいけどその着物じゃ動きにくいだろうに……

「まあまあ、そう睨まないでよ。私、永琳の友達なのよ」

「…永琳の？」

輝夜は知り合いの名前が出てきたのが意外だったのか驚いた顔をした。

「彼女とは今からだいぶ昔に知り合ってね……」

それから永琳に出会った時の事を話すと輝夜はやっと警戒を解いてくれた。

「へぇ～、永琳が言っていた凄い妖怪って貴女だったのね……もっと厳つい姿を想像してたわ」

「……永琳、どんなふうに話したのよ」

私は輝夜の隣に座ると同じように月を見上げた。綺麗な満月だ。

…でも満月を見ていると何だか胸の奥がざわざわするのよね……

「貴女、妖怪なんでしょ？だったら満月を見続けるのはやめなさい。自分を抑えられなくなるわよ？」

「おっと…」

私は慌てて視線を月からそらした。

「う～ん、せっかくの満月なのに…」

「月は心を惑わす……時には狂気に支配される場合もあるわ。気をつけなさい」

「そーなのかー」

「……真面目に聞いてるの？」

「勿論よ」

「…はぁ」

そんな感じで一時間程話をしてから私は帰ることにした。

「じゃあ、私はそろそろ帰るわ」

「あら、もう帰るの？もう少しいればいいのに…」

「子供は寝る時間よ」

「…誰が子供よ」

「私からしたら子供よ。私、永琳より年上なんだから」

私は輝夜とまた会う約束をしてから夜の都へと向かった。

……あ、そういえば何処で寝るか考えてなかった

◆妹紅と輝夜（後書き）

永夜抄で今だに妹紅が倒せません…

いいところまではいくんですけどね（泣）

◆妹紅をつれて…（前書き）

長く間を開けてすいませんでした！

◆妹紅をつれて…

―桜花Ｓｉｄｅ―

私がいるのは藤原家の前。妹紅の家でもある。

私がここに来たのは妹紅の様子を見る為だ。妹紅が輝夜を憎む理由がなんなのか、それが知りたい。

今のところわかっていることは妹紅の父である藤原不比等が最近蓬莱の玉の枝の贋作を作るために至る所を奔走し、ほとんど妹紅に構ってやっていないということだ。

妹紅はそんな父に文句の一つも言わず、ただ毎日庭で一人寂しく鞠を弄っている。たまに輝夜の屋敷の方角を見つめては険しい顔をしている時もあるが、すぐに視線をそらす。

おそらく妹紅は父が輝夜にばかり構って自分をほったらかしにしているのが気に入らないのだ。妹紅だってまだ子供だ、親が恋しくもあるだろう。

しかし、輝夜はそろそろ月に帰ってしまうし、不比等は竹取物語によれば集まった者達の前で贋作がばれて恥をかくことになっている。

その後の不比等の様子はわからないが、おそらく妹紅はそのことが原因で輝夜を恨んでいたに違いない。

結婚したいが為に贋作まで作る不比等の執念には感服するが嫌がる女性に無理強いするのもあまり良いものではない。さらに自分の娘をほったらかすなど言語道断だ。

「…はぁ」

不比等が毎日のように家から出ていくのを屋根の上から見ながら私は溜息をついていた。

「まったく…どうして娘を放っておけるんだか……」

私は呆れながら屋根を伝い庭の方へと歩いて行った。

相変わらず妹紅は鞠を手で弄りながら浮かない顔で縁側に座っていた。その姿はさしずめ捨てられた子猫のように見える。

それを見ながら私はある決心をした。

「ちょっと荒療治になるけど…これしかないか」

私はある作戦を胸に輝夜のもとに向かった。

「はぁ…なるほどね、それで私に協力してほしいってわけね」

「そういうこと、お願いできるかしら、姫様？」

輝夜の屋敷に着いた私は早速輝夜に作戦を伝えて協力を頼んでいた。

「ふ～ん…まぁ、いいわよ。私にとっても悪い話じゃないしね」

輝夜はニヤリと笑い了承してくれた。

「ありがとう！じゃあ……」

「待った！条件があるわ」

「…条件？」

喜ぶ私に輝夜は待ったをかけて条件があると言った。先程と違って真剣な顔をしている。

「私は月に帰りたくないの。だから私が月に帰らないように手伝ってくれないかしら？」

「それはいいけど……具体的には何をすればいいの？」

「まぁ、それは今度話すわ。まずはその妹紅って子のことが先でしょ？」

むぅ、何だか勝手に話ができて釈然としないが……とりあえず輝夜の協力は仰げたから良しとしよう。

私は輝夜の屋敷から再び妹紅の屋敷へと戻った。

最早定位置と言ってもいい堀の上から妹紅の姿を探す。すると、目の前の部屋から妹紅と不比等の声が聞こえた。

「父上は私のことなど、どうでもいいのでしょう！？」

「違うのだ、妹紅！私は…」

うん？どうやら喧嘩をしているようだ。私は気配を消しながら部屋の前まで忍び寄る。

「いつもいつも…かぐや姫の為に色々と忙しそうで……どうせ私のことは二の次なのでしょう！？」

「私はお前のために…」

「父上なんて大嫌いです！もう、しりません！！」

私が妹紅の気配に慌てて襖から離れると、中から妹紅が出てきて泣きながら走り去って行った。

「妹紅！！」

そして妹紅を追いかけるように不比等も現れる。

私はとりあえず不比等を追い越して妹紅を追いかける。途中で狼の姿に変わりながら先程の会話を思い出す。

おそらく輝夜ばかりを気にする不比等についに妹紅が我慢できなくなったのだろう。その結果が先程の口喧嘩というわけだ。まぁ、娘をほうっておいた不比等が悪いのだが…

しかし、これは逆にチャンスではないか？妹紅や不比等の気持ちを聞く良い機会だ。当初の作戦を実行しよう。

私は屋敷から飛び出した妹紅を追いかけた。外はもう夕方で、あと数分すれば辺りは暗闇に包まれる。

夜は妖怪の時間、人々は夜になると妖怪を畏れて家から出ない。つまり、妹紅は現在大変危険な状態である。

しばらく走った後、疲れて立ち止まった妹紅に私は歩み寄る。

「はぁ…はぁ……え？」

私の存在に気がついたのか俯いていた妹紅が顔を上げる。

「あなた、この前の…」

私は妹紅の襟元を軽く噛むと、ひょいと背中に放り投げる。彼女は「ひゃあ！？」と小さく叫んだが今は無視。

そして、私が妹紅を背中に乗せたのと、不比等が角を曲がって来たのは同時だった。

「も、妹紅！？貴様、妹紅をどうするつもりだ！！」

私は不比等を無視して近くの建物の屋根に跳び上がると不比等に

だけ聞こえるように念話をした。

『かぐや姫の屋敷で待ちます』

「な、何？どういうつもりだ！！」

私は返事をせずに、訳がわからず固まっている妹紅を乗せたまま、輝夜の屋敷に向かって跳躍した。

生まれてはじめての人攫いである。

―妹紅Ｓｉｄｅ―

――寂しかった。

母は私を産んですぐ亡くなった。内気な性格のせいで友達もおらず、屋敷の中でただ空を眺めて過ごす毎日……

塀の向こうから時折聞こえる楽しそうな子供の声。行ってみたい、でも踏み出せない。

そんな私に父は優しかった。毎日私の話を聞いてくれた。遊び相

手にもなってくれた。泣いたら優しく抱きしめてくれた。
私が頼れる存在であり、私の心の支え……。父上は私になくてはならない存在だった。

ある時、私はとある名前を聞いた。

――かぐや姫

彼女はとても美しく、求婚を求める声は止むことがないらしい。
最初は興味がなさそうだった父上だったけど、ある日かぐや姫に結婚を申し込むと言い出した。

私は多少驚きはしたが父上がそう言うなら…と、応援することにした。

それから数週間、父上は私に殆ど構ってくれない。毎日かぐや姫から出された難題に頭を悩ませていた。

最初は素直に応援していたのだが、次第に私に構わなくなった父に不安を覚えるようになった。
もしかしたら、父上はもう私ではなく、かぐや姫しか見ていないのではないだろうか…。

父上はもう私に振り向いてくれないのだろうか…

――憎い

私から父上を奪ったかぐや姫が…

私の心の支えを奪ったあいつ（かぐや）が…

――憎い、憎い、憎い憎い憎い憎い…！！

そして今日、私は父上と喧嘩をした。

かぐやに会いに行き始めた頃から父上は体に違和感を感じているらしい。父上はただの風邪だと言ってごまかしているが…。ただの風邪が何週間も続くわけがない。

私は父上に体を休めることを進めた。しかし、父上は「かぐや姫が待っているから」と聞き入れてくれなかった。

そんなにあいつが大切なの？

私は？

こんなに心配しているのに…

何で私の言うことを聞いてくれないの？

――憎い…あいつが憎い

父上が無理をしているのはすぐにわかった。もしかしたら体を壊してしまうかもしれない。

私は元気な父上がいてくれればいい。ただそれだけなのに……

だから私はつい父上に怒鳴ってしまった。

「私のことはどうせ二の次なのでしょう!?」

私を見て驚く父上。そして怒鳴ったことを後悔しながら私はその場から逃げ出していた。

屋敷を飛び出してただ走り続けた。

ああ、私はなんて醜いのだろう。

滲む視界の中をひたすら走り、ついに走れなくなって膝に手を付き俯いた。

あいつさえ…あいつさえいなければ父上は昔のように私に笑いかけてくれていたのに!

そう思って顔を上げた時、私は目を疑った。

そこにはいつか見た青い狼がいたのだから。

私が驚きのあまり固まっていると、彼女は私に歩み寄り、襟元をくわえると背中に放り投げられた。

「ひゃあ!?」

思わず変な声を出した私に少し微笑むような視線を向けてきた。

「も、妹紅!?貴様、妹紅をどうするつもりだ!!」

突然の声に前を向くと、驚いた顔をした父上がいた。狼は私を背中に乗せたまま近くの家の屋根に飛び乗ると、父上を少し睨んだ。

「な、何?どういうつもりだ!!」

最近悪かった顔色をさらに悪くしながら突然父上が叫んだ。彼女は父上の言葉を無視すると、屋根を伝って走り始めた。

状況が上手く飲み込めなかった私はこの時、やっと理解した。

――ああ、私攫われたんだ…

何故かすんなりと状況を受け入れることができた自分に驚きつつも、私は抵抗しようとは思わなかった。

それからしばらく走った後、私達はとある屋敷の庭に着いた。

「ここは…」

忘れもしない…。

あの女の屋敷だった。

「いらっしゃい」

ふと、声がかけられた方を見れば縁側に座る少女が一人。

「……っ、かぐや…姫」

私は今、きっと物凄く嫌そうな顔をしているんだろうなと、どこか客観的に思う。

「ご苦労様、桜花」

彼女の言葉に私の隣にいた狼が一鳴きして答える。ああ、彼女は桜花というのか…

「さて、妹紅とやら……少しお話をしましょう?」

かぐやは自分の隣を軽く叩く。どうやら座れと言っているようだ。

私はかぐやを一度睨んだ後、警戒心を向きだしにしたまま隣に座った。

一体目的はなんなのだろう……

そうして、私とかぐやの話し合いが幕を開けた。

◆友達（前書き）

輝夜がまだ腹黒くない（笑）

◆友達

―妹紅Ｓｉｄｅ―

突然の出来事で、私の頭の中は混乱していた。

突然あの青い狼に再会したと思えば、背中に乗せられてあの女の屋敷に連れてこられた。

――そして

私の目の前には私の憎む相手であるかぐや姫が立っている。

「……さて、お話しましょう？」

微笑みながら私を見て、彼女は部屋の奥へと入っていった。

……私と話す？冗談じゃない。私はあいつと話すことなんてない。

私が無視して去ろうとすると、私の隣にいた彼女…、桜花が着物の袖をくわえていた。

「…離して」

「……」

私の言葉に何の反応せずに桜花はじっと私を見ている。

「……はぁ、わかったわよ。行けばいいんでしょ？」

先に折れたのは私だった。

私の返事を聞いて満足したのか、桜花はくるりと尻尾を回すと、私に背を向けて少し歩き、塀を飛び越えてどこかへ行ってしまった。

本当は帰りたいけど……ここで帰ったら何だか見下されたような気分になる、と感じた私はすぐにかぐやと同じ部屋へと入った。

かぐやは座って目を閉じて静かに待っていた。

「……では姫、話とは何ですか？」

一応、形だけの敬語でかぐやに話かけた。

「ああ、そんなに畏まらなくていいわよ？私のことは姫じゃなくて『輝夜』って呼びなさい。私も『妹紅』って呼ぶから」

目を開けたと思ったら、輝夜は先程までとは全然違う態度で、けらけらと笑い始めた。

……え、誰これ？さっきまでは猫を被っていたのか？

「えっと…」

「ああ、これが私の素よ？

と言っても妹紅以外には桜花しか知らないけど」

輝夜は姿勢を崩してだらりと畳に寝転ぶ。さっきまでの凛々しい姿とは掛け離れており、私は驚きを通り越して呆れてしまった。

「……何だか騙された気分だわ」

「あら、私は別に騙してるつもりはないわよ？皆が勝手に勘違いしてるだけだもの」

私は額に手を当てて溜息をついた。どうやら私は輝夜という人物に対して思い違いをしていたようだ。それでも、私は…

「私、やっぱりあんたのこと――嫌いだわ」

私の言葉を聞いた輝夜はでしょうね、と言いながら苦笑いをした。

「それで、結局私を呼び出した理由は何なの？」

輝夜はあぁ、と言うと体を起こして再び綺麗な姿勢で座った。こうやってしっかり座っているだけなら人形のように美しいのに……

「妹紅には私のことを話しておこうかな、と思ったの」

真剣な顔をした輝夜が話し出した内容は私からすれば信じられない話だった。月の都と月の民、蓬莱の薬、月から迎えが来ること、そしてそれから逃げること、それら全てを話し終えてから輝夜はふぅ、と息を吐いた。

「わかった？だから私は誰とも結婚するわけにはいかない。私と結婚しても…皆私を置いて死んでいく。それに、どのみち次の満月の夜には月からの迎えが来る……まぁ、逃げるけどね」

私は輝夜の顔を見ながら何も言えなくて黙っていた。輝夜は苦笑いを浮かべると私の肩に手を置いた。

「藤原様のことで別に私を恨むのならそれでも構わないわ。たぶん…二度と出会わないでしょうしね」

先程の話から輝夜が不老不死であるとは聞いている。永琳という仲間がいることも…

「……あんたはそれでいいの？」

永遠の時間を生きていく苦しみなんて私にはわからないけれど……

「私には永琳っていう仲間がいるからね。あ、最近は桜花もそれに入るわね。彼女も妖怪だから長生きでしょうし…」

「そうじゃなくて！」

思わず声を荒げてしまった。輝夜は少し驚いたように私を見てい

る。でも、今はどうでもいい。

「その永琳って人と月からの追っ手から逃げつつ、たった二人で引きこもって生活するって…寂しくないの!?」

私の言葉に輝夜は少し考えるような仕種をすると…

「まぁ…死ぬ程暇であるのは確かね」

と、言った。

「だからぁ!あんたはそれでいいの!?」

「仕方ないじゃないの。これ以上迷惑はかけられないじゃないし…」

「そんなの…」

なんて、寂しい人生…

「妹紅は優しいのね」

輝夜が微笑みながら私の頭を撫でる。

「私の罪は私が背負わなきゃ……誰かに押し付けるほど私は我が儘じゃないわ」

私は数十分前の自分を殴り飛ばしたかった。自分のことしか考えていなかった自分が許せなくて……

「…決めた」

私の呟きに輝夜は首を傾げた。私は顔を上げて輝夜をしっかり見据える。

「私も手伝う。輝夜一人にだけ辛い思いなんてさせない！」

輝夜は一瞬固まったかと思うと頬を少し赤らめて慌てだした。

「な、何言ってるの!?妹紅は関係ないでしょ!?だいたい、手伝うって何をするのよ!!」

輝夜がそう言っても私は止めるつもりはない。

「そんな話を聞かされたら手伝いたくなっちゃうよ。でも、私には戦う力なんてない。だから友達になりましょう?」

「……友達?」

私は輝夜の手を握って頷く。

「そう、友達。輝夜が何処かに隠れても私が会いに行く。輝夜の代わりに私がいろんなものを見て、そして話して聞かせてあげる。そしたら少しでも暇潰しになるでしょ?」

私がそう言って笑うと、輝夜は顔を真っ赤にした。輝夜は私よりだいぶ年上なはずなのに、この反応からは私と同年代の少女にしか見えなかった。

「あ、あなたがそうしたいなら…好きにしなさい。……あぁもう！私がかっこいい言葉で締めようとしたのに！」

いつの間にか私は笑っていた。輝夜もはじめは拗ねていたがすぐに笑顔になった。

そして丁度その時、父上が屋敷に武器を持ってやってきた。私と輝夜が仲良く話している姿を見て呆然としていたことが可笑しくて、そして私を心配してくれたことが嬉しくて、輝夜と顔を見合わせてもう一度笑った。

あぁ、私は今初めて心から笑った気がする。

―桜花Ｓｉｄｅ―

私と輝夜の作戦は成功…いや、大成功と言ってもいい。

まさか妹紅の方から輝夜と友達になりたいなんて言い出したのだから。

私は屋敷の屋根から輝夜と妹紅と不比等の三人を見ている。

「あら、藤原様。いらっしゃいませ。どうしたのですか？武器などお持ちになって」

輝夜が笑顔で不比等に話しかける。その後ろで妹紅が必死に笑いを堪えている。まぁ、輝夜の素を見た後だと違和感がハンパないからなぁ…。

「かぐや姫！此処に妖怪が来ませんでしたか！？妹紅をさらって行ったので慌てて追い掛けてきたのです！」

ぜぇぜぇと息を切らしながら話す不比等に輝夜は後ろにいる妹紅を見ながら笑った。

「大丈夫です。実はあの妖怪は私の友達なのです。安心してください、人を襲ったりはしません」

そうですか、とようやく安心したように緊張を解いた不比等は妹紅を見ると突然頭を下げた。

「すまん、妹紅。私が悪かった」

突然彼の言葉を聞いた妹紅は唖然としていたが、慌てて不比等の元へと走り寄った。

「そんな、父上…私こそ怒鳴ってしまってごめんなさい」

不比等は妹紅を抱きしめると何度もすまない、と呟いた。

輝夜はそれを暖かい眼差しで見守っている。

その後、輝夜と妹紅がこれまでの経緯を話した。

「……と、いうわけです」

「そうでしたか…何とも壮大な話ですな」

「はい、ですが事実なのです」

輝夜がそう言うと私に視線を向ける。

現在私を入れた四人は輝夜の部屋で話をしている。私の姿を見た不比等の顔が一瞬険しくなったのは悲しかったけど…

ちなみに人の姿になった時に妹紅と不比等が凄く驚いた。そして輝夜は私の尻尾をずっと抱きしめている。

「はい、私は輝夜姫の話であげられた永琳という人物を知っています」

私の言葉に不比等は頷くと輝夜へと視線を向けた。

「いやはや、私は深く考え過ぎていたようですな」

「どういうことでしょう？」

「私は妹紅の将来を心配していたのです」

不比等の言葉に三人の視線が彼に集まる。

「実は、私は病を患っていましてな…」

「えっ！？」

不比等の突然の告白に妹紅は声をあげる。見れば輝夜も険しい顔をしている。

「医者に見てもらいましたが……どうにも治せないと言われました」

この時代ではまだ治せない病はたくさんある。医療が発達している月の都ならどうにかなるかもしれないが…

「父上、どうして黙っていたのですか！？」

妹紅が泣きそうな顔で不比等に詰め寄る。不比等は妹紅の頭を撫でながら諭すように話だした。

「私は医者に不治の病だと聞かされてからずっと考えてきた。私が死んだ後、妹紅をどうしようかとな…」

妹紅は涙を流しながらも不比等の言葉を聞いていた。

「妹紅に心配をかけたくなかった私は病の事は黙っておくことにした。そして、丁度その頃だ、輝夜姫の話を聞いたのは…」

輝夜は少し目を細めながらもしっかりと聞いている。

「初めてお会いした時に、この方なら妹紅を頼めそうだと感じた。だが、素直に話しても相手にされるかわからなかった臆病な私は妻として迎え入れるならばいいのでは、と考えたのだ」

私は小さく溜息をついた。まったく、この親子は考え込んだら誰の手も借りないで抱え込むところがそっくりである。

「そのような誘いでしたら私は構わなかったのですが…」

「いやはや、情けない限りですな…」

不比等は自嘲気味に笑うと今だにないている妹紅へと向き直る。

「そういうわけだ、妹紅。明日からはまた以前のように暮らそう。私にあとどのくらいの時間があるのかわからないが……」

「…うん」

それから妹紅はしばらく不比等に抱き着いたまま離れなかった。

次の日、輝夜の屋敷にやってきた妹紅は長かった髪をバッサリと切っていた。肩より少し上で切り揃えられた黒髪が風で靡いている。

輝夜は驚いた様子で妹紅へと駆け寄る。

「妹紅、どうしたのよその髪!?」

「ん?……あぁ、ちょっとした気持ちの切り替えよ。今までの卑屈な自分とはさよならってね」

そう言って笑う妹紅の顔は今までで一番輝いて見えた。

私と輝夜と妹紅の三人は満月の夜がやってくるまで毎日のように

会っては話をした。三人とも笑顔で、楽しかった…

――そして、ついにその日はやってきた。

◆友達（後書き）

最近読むばかりで執筆が進まない（汗）

ちゃんとやらなきゃなぁ…

外伝　彼女がいない幻想郷で…（前書き）

やっちゃったぜ！

ついにあのチルノが現れる！

外伝　彼女がいない幻想郷で…

～博麗神社～

「……ふぅ、平和ねぇ」

「そうですね～」

幻想郷の端にある博麗神社。そこに二つの人影があった。

一人は紅白の巫女服を着た少女。今代の博麗の巫女である博麗霊那。

もう一人は金髪に紫色のドレスを着た女性。スキマ妖怪の八雲紫である。

二人は縁側に腰掛けてお茶を啜っていた。美女二人が微笑みながらお茶を飲む姿はなかなかに美しい。

「あら、嬉しいわね」

「…？　紫様、誰に話し掛けているんですか？」

「あら、誰だったかしらね？」

そんな二人の元にやってくる影が一つ。

緑の髪をサイドテールにした少女、大妖精である。

「紫さ～ん！霊那さ～ん！大変です～！」

大妖精は息を切らせながら境内に降り立つ。必死に飛んできたのだろう、額に汗が滲んでいる。

「どうかしたの？」

「人里が妖怪に襲われてます！」

「「！？」」

大妖精の言葉を聞いてからの二人の行動は速かった。

紫はスキマを開くとすぐにその中に飛び込む。そして、霊那は大妖精から詳しい事情を聞きはじめる。

「妖怪の数は？」

「たぶん…３０はいました」

「被害状況は？」

「怪我人が１０人程…。でも、今チルノちゃんが妖怪を食い止めてるから死者は出てません！」

「わかったわ。すぐに私も出るから大ちゃんも来て」

「はい！」

霊那はお祓い棒と御札を確認するとすぐに人里へと飛び立った。

～人間の里～

人間の里は大混乱だった。突然、昼間にも関わらず妖怪が攻めてきたのだ。

里の出入口の警備をしていた十人が怪我をしたが死者は出ていない。

現在は氷の壁が里の出入口を塞いでいて妖怪の侵入を妨げている。

「まったく、紫や桜花の恐ろしさを知らないみたいだから新参者かな？…まったく、厄介なことだね」

溜息とともにそんなことを呟いたのは氷の妖精チルノ。肩まである青い髪を風になびかせながら前方の氷の壁を睨んでいる。

彼女の作り出した壁はとても分厚く、ちょっとやそっとじゃ壊せない。しかし、それも時間の問題である。チルノ自身は大妖怪と互角に戦えるほど強くなっているが、ここは人間の里。つまり周りに常に気を配りながら戦わなければならない。しかも敵は３０匹はいると思われる。さすがのチルノも多勢に無勢。数で押し切られる可能性がある。

「大ちゃん、まだかなぁ…」

大妖怪がちらほら混じっていたのに気がついてたチルノは博麗の巫女と八雲紫に知らせるために大妖精を神社に向かわせた。おそらくそろそろ到着する頃だろう。

「まったく…桜花がいなくて大変なのはわかるけど、これだけの妖怪が人間の里に近付いたら気がつくと思うんだけど……。あの紫ババア、また管理さぼってお茶でも飲んでたわね、きっと」

再び溜息をつきながら両手を頭の後ろに回して組む。ところが……

――あら、随分と好き勝手言ってくれるわね……

ピタリとチルノの動きが止まる。顔は引き攣り、冷や汗がたらりと流れる。そのまま“ギギギ”と音が聞こえそうなほどゆっくりと後ろを振り返る。

そこには満面の笑みを浮かべた八雲紫という名の修羅が立っていた。

「あ、ああ…い、何時からそこに？」

チルノはあはは、と引き攣り笑いをしながら尋ねた。

「「これだけの妖怪が…」からよ。……でも、誰をババアだって言

ったのかしら?私よく聞こえませんでしたの」

笑ってはいるが顔には影がさしており、細められた瞳からは鋭い眼光がチルノに突き刺さる。

「あ、あの…そう!知り合いの人間がもうババアだなって言ったのよ!うん!」

慌てて言い訳を始めるチルノを見下ろしながら、紫は日傘を畳むとチルノの頭の上に振り下ろした。ガツンという音が響く。

「ひゃう!?」

「……次は無いわよ?」

頭を押さえてうずくまるチルノにそう言うと、チルノは涙目になりながらも頷いた。

「まぁ、いいわ。確かにサボってた私も悪いのだから」

じゃあ最初からそう言えばいいのに、と言う思いをチルノは口に出さずに飲み下した。

「そうだ、チルノ。頼まれていた物、できたわよ?」

そう言うと紫はスキマの中から六本の剣を取り出した。アイスの当たり棒のような形の剣やスイカ模様の剣など、個性的な形をしている。

「おお~!完成したんだ!ありがと!」

チルノはすぐに剣を握ると振り回して感覚を確かめる。

「それにしても、貴女が武器を使うなんてどういう風のふきまわし？」

不思議そうに見る紫の顔を見ながらチルノは剣を次々と合体させる。

「桜花から言われたんだよ。接近戦にも慣れてた方がいいって」

全てを組み合わせた剣を肩に乗せながらチルノは再び壁の方を見る。

「そんなの、自分で作り出せばいいじゃないの」

「あたいの力で作った氷剣だとすぐに割れちゃうんだよ。結構強度を上げるのが難しくてさ。だから桜花に破損することを拒絶した材料を用意してもらったの」

「そして更に私の能力で形を変えたり、ちょっと境界を弄って出来上がりってわけね…」

「そういうこと」

チルノは紫から黒いベルトを受け取ると背中と腰にまわしてしっかりと装着したのを確かめると剣を背中の鞘に挿して固定した。

「あら、結構似合うじゃない」

「ありがと」

チルノと紫がお互いに笑い合うと、丁度霊那と大妖精がやってきた。

「お待たせ、状況は？」

「あんまり変わってないよ。大ちゃん、大丈夫？」

「うん、大丈夫だよ。チルノちゃんの頼みだもん」

「よし、じゃあ作戦を立てるわよ」

紫が出した作戦は三方向からの同時攻撃だった。チルノが正面から敵の中心に突撃して混乱を誘い、その隙に紫と霊那がサイドから大妖怪を中心に確実に敵を仕留める。大妖精はチルノの援護だ。

「じゃあ、いまから五分後に作戦開始ね」

「「「了解」」」

―チルノＳｉｄｅ―

さて、ここからが正念場だ。人里に妖怪を入れないように注意し

ながら敵を全滅、または降参させる。

あたいは大妖怪相手はまだ流石にきついので紫と霊那に任せよう。あたいの仕事は正面から突撃して雑魚を一掃すること。大ちゃんの援護もあるし、何より幻想郷最強の妖怪二人に作られた剣がある。負ける気はしない。

「チルノちゃん、頑張って！私も頑張るから！」

「うん、さっさと終わらせるよ。あたいは最強なんだからね」

大ちゃんに笑いかると、目の前の壁に向き直る。

「5…4…3…2…1…0！！」

カウントの終了と同時にあたいは壁に全力疾走すると、目の前の壁だけを消して穴を空ける。

「戦闘かぁぁいしぃぃぃぃ！！」

穴に入ると同時に目の前にいた妖怪の顔面にドロップキックを繰り出した。

「ぎゃあああ！？」

「何だ！？」

「どうした！？」

突然の奇襲に驚いた妖怪達へと氷塊を打ち出す。それだけで妖怪

達を次々と薙ぎ倒していく。

「ありゃ、これは作戦立てる必要なかったかもしれない」

あたいを捕まえようとした妖怪に踵落としをお見舞いして地面ごと氷付けにする。

既に１０匹は倒したけどあきらかに最初よりも数が増えてるからいつの間にか仲間を呼んだみたいだ。

「まぁ、いいさ。どっちにしろ倒すだけだから」

あたいの呟きと同時に飛び掛かってきた妖怪三匹に氷柱を発射する。しかし、避けずにそのまま氷柱に突っ込んできた。氷柱は妖怪の体に当たると砕けていく。

「うわ、硬そう…」

バックステップで攻撃を回避してすぐに今度はこちらから間合いを詰める。

そのまま背中に挿した剣を抜くと体を捻って遠心力をつけ、そのまま相手に振り抜く。

「ぐぎゃあ！」

攻撃が直撃した妖怪は体が硬いおかげか真っ二つにはならなかったが傷を負って吹き飛んだ。

この剣、紫にたのんで重量の境界を弄ってもらっているので重さ

はほとんど無いに等しい。しかし質量はそのままなので破壊力は抜群だ。

そういえば名前を考えていなかった。よし、バスタードチルノソードと名付けよう。

「てめぇ！やりやがったな！？」

残りの二匹が挟み込むように襲い掛かってきたので剣を二本に分解して攻撃を受け止める。

「この、妖精だと思ってたら調子にのりやがって！」

「ガキのくせに！」

まったく、妖精だからって油断してると酷い目にあうとわからないのかな？

その場で一回転しながら剣を振り回して敵を振り払うと前にいた妖怪の懐に入り込み、そのまま両腕をクロスさせるように剣を振り降ろす。すると呆気なく目の前の妖怪は地面に倒れ込んだ。

「後ろががら空きだぞ！！」

すると後ろから最後の一匹が腕を振り上げて迫っているのが見えた。

「馬鹿だな、不意をつくなら声をあげちゃ駄目じゃん」

呆れるあたいに腕が振り下ろされるがあたいは避けない。なぜな

ら避ける必要がないからだ。

「そこまでです」

次の瞬間、妖怪の背後に瞬間移動してきた大ちゃんがそのままクナイで妖怪の喉を切り裂いた。

「がっ……あが…」

突然背後から喉を切られたショックで動きが止まった妖怪をバスタードチルノソードで吹き飛ばす。

そのまま木にぶつかった妖怪に向けて大ちゃんがクナイ型の弾幕を放ち両手両足を木に縫い付けた。

大ちゃんの射撃能力は凄い。霧の湖の端から反対側にある直径約一尺（約３０ｃｍ）の的のど真ん中に命中させることができる。

周りにはもう妖怪の姿はない。たぶん逃げたんだろう。気配を確認してからバスタードチルノソードを腰の鞘に戻す。

「ふぅ…終わったね」

「うん」

大ちゃんの細められていた瞳が元に戻る。大ちゃんは戦闘の時と怒った時に瞳が鋭くなって恐い。普段の可愛らしい姿を見ているから余計にそう感じてしまう。

「あら、どうやら終わったみたいね」

上空から声が聞こえたので見上げると紫と霊那がいた。

「そっちは？」

「もちろん、全滅させてきたわ」

「紫は幻想郷を脅かす奴らには容赦しないからね」

「当然じゃない」

その後、妖怪達の死体は紫がスキマを使って何処かに送った。

そして現在、博麗神社の縁側にてくつろいでいる真っ最中。

「はい、お茶よ」

「ありがと。んあ～疲れた」

霊那に渡されたお茶をそのままぐいっと飲んで……ん？

「ぶふぅえ！？」

「きゃああ！？チルノちゃん大丈夫！？」

「熱っ！？熱い！！ぎゃあああ！喉がぁぁぁ！？」

「あ、冷ますの忘れてたわ」

あまりの熱さに咳込むあたいを心配してくれる大ちゃん。苦笑い

しながら謝る霊那。そして腹を抱えて爆笑している紫。

今日も幻想郷の平和は護られている。ただ、この中に桜花がいないのが残念だ。桜花、早く帰ってこないかな…

「ちょっ、冷たい！？」

…とりあえず笑った仕返しに紫のお茶はキンキンに冷やしてやった。ふっ、ざまぁ。

「……チルノ、死後の世界について考えたことは？」

「……興味ないね」

ピチューン

「アッーーーー！！」

外伝　彼女がいない幻想郷で…（後書き）

いかがでしたか？アドベントチルノの活躍は？

私個人としてはＤｉｅ妖精…失礼、大妖精も好きなのでこれから活躍させたいですね。

◆蓬莱人（前書き）

輝夜と妹紅は仲良しの関係が一番良いと思う。

◆蓬莱人

―桜花Ｓｉｄｅ―

今日は満月。輝夜が月に連れて帰られる日である。

私と妹紅は夕方頃から輝夜の部屋で談笑しながら過ごしていた。

「妹紅、あなた不比等様についてなくていいの？　最近あまり容態が良くないんでしょ？」

輝夜が心配そうに妹紅の顔を覗き込む。

「大丈夫よ。父上もしっかり見届けてきなさいって言ってたから…」

妹紅は輝夜の方に視線を向けると優しく微笑んだ。

「……？」

そんな二人を見ながら私は妹紅に妙な違和感を感じていた。どこかいつもと違う……緊張している様な雰囲気がある。

だが、妹紅から話さないのならば深く聞くのも無神経というものだ。もしかしたら単にこれから起こる事が心配なだけなのかもしれない。

屋敷の周りには既に大勢の兵士達が警備にあたっている。……と

言っても、その殆どが無駄に終わってしまうのだが……。

そわそわと落ち着かない妹紅を心配しつつも私は決して気を緩めない。

――そして

「…っ！？」

上空から迫る強い気配を感じて私は立ち上がった。

「…来たわね」

輝夜が閉じられた障子の向こう側を睨みつけ、妹紅が私の後ろに移動して服の袖を掴んだ。

障子の向こう側が明るくなり、さらにがやがやと騒がしくなり始めた。

「輝夜、本当に大丈夫？」

「勿論よ。永琳なら間違いなくやってくれるわ」

私が事前に話したのは、永琳の手を借りて都から離れた草原に月人を移動させてから私が記憶を能力で弄ってから二人を逃がすという手筈だ。

騒がしかった外が徐々に静かになっていく。

そして、突然障子が開き外の様子が見えるようになった。

周りの兵士は皆力無く地面に倒れている。よく見ると小さな針が刺さっているので、どうやら神経を麻痺させる薬でも投与したのだろう。

私は狼の姿になると妹紅と一緒に奥に下がる。

空から降りてきたのは一見ただの牛車だが隙間から機械的な部分が見えるので月の進んだ化学技術によって作られたのがわかる。

その中から一人の女性が降りてくる。赤と暗い青を半分ずつに分けた服、長い銀髪は後ろで括られている。最後に見た一万年前よりも背は高くなって雰囲気も大人っぽくなっている。

「桜花、あの人が…」

妹紅が見惚れながら私に尋ねた。

「そう、八意永琳……私の…はじめての“人間の友達”」

私が妖怪になってから人間ではじめて仲良くなった友達。一万年ぶりの再会だ。ただ、今はまだ話しかけない。まずは二人を逃がす為にもおとなしくしておく。

「永琳！！」

「姫様！！」

輝夜と永琳が抱き合って再会を喜び合っている。

「永琳、実は…」

「はい、わかっていますよ。姫様」

輝夜の顔を見た永琳は輝夜の言いたいことを理解したのか真剣な顔で頷く。

二人は少し話しをすると、翁に蓬莱の薬を渡してから牛車に乗り込んだ。

私も後を追うために追跡の用意をする。

しかし、妹紅が私を掴んだまま離さない。

「…妹紅？」

「……」

妹紅の視線の先には翁が持っている蓬莱の薬があった。

輝夜と永琳の乗った牛車が飛び立った後、翁がこちらに歩いてきた。

「妹紅様…私達はこのような大層な薬はいりません。これは輝夜姫と友達になっていただいた貴女様に渡すべきだと思います。どうかもらってはくださいませんか？」

妹紅は一瞬驚いた顔をしたが頷いて蓬莱の薬を受け取ると、しっ

かりと胸に抱きしめた。

そして私に跨がる……って、

「妹紅、何で私に跨がってるのかしら？」

「何を言ってるの。勿論、輝夜を追いかけるのよ。まだ言いたいことがあるし…ね」

「でも…」

「いいから！」

仕方がないので妹紅を乗せたまま外へと飛び出した。背後から「どうか、輝夜姫をよろしくお願いします」という翁の声が聞こえた気がした。

もしかして、あのお爺さん…輝夜の正体や私達の作戦に気づいてる？

……まさか、ね

そんなことを考えながら私はだいぶ離れてしまった牛車を追いかけ始めた。

しばらくして都の外にある草原に牛車は降り立った。中から輝夜と永琳が降りてくる。永琳は月人の一人の首にナイフを当てて人質にしていた。

すぐに永琳達は武装した月人達に囲まれる。

「桜花…あれ、結構危なくない？」

「一応二人は死なないけど…気絶させられたら厄介ね」

上空から地上の様子を見ていた私と妹紅は二人を助ける為に下へと降りていく。

すると周りの武装した月人が永琳達に銃を向けはじめた。…まずい、もしかしたら人質もろとも撃つつもりかもしれない。

私は能力を発動させる。

「輝夜達に攻撃が当たることを拒絶する！」

人型に戻りながら両手を前に突き出して輝夜と永琳の周囲に結界を張るように膜を作り出した。

この中にいる限り攻撃が当たることはない。別に膜のようなものを作る必要はない。だが、目に見えるような壁があれば安心感が得られていいと思ったのだ。

私の能力のおかげで月人の銃弾は膜に触れた瞬間に軌道が逸れていった。

妹紅をお姫様抱っこの状態で抱き寄せると、そのまま輝夜達の前に降り立った。

「永琳、久しぶり…」

「桜花!?」

永琳は私を見て驚いた。輝夜は私達よりも結界の方に興味がいっている。

「一万年ぶり…かしら?」

「一万五百九年、五時間二十分三十秒ぶりよ」

「相変わらず細かいわね～（笑）」

私と永琳はお互いに笑いあった。懐かしくて思わず泣きそうになったのは秘密だ。

「あの…桜花、そろそろ降ろしてくれない?／／／／」

「え?…あ、ごめんね」

永琳と話していたら妹紅を抱えたままだった。妹紅を降ろすと永琳に紹介する。

「永琳、この子は藤原妹紅。輝夜と私の友達よ」

「よろしくね、妹紅さん」

「あ、はい！」

何とも平和で和むような会話をしているが、結界の外では今だに銃弾や光線が飛び交っている。

「さぁ、先ずはあいつらを始末しなきゃね。そういえば永琳、人質は？」

「…あそこよ」

永琳が背後を指差すと、輝夜が気絶した月人を椅子にして星空を見上げていた。

…うん、見なかったことにしよう。星空を見上げる輝夜は中々に可愛いが、座っているモノがシュール過ぎる。

「…さ、さぁて、さっさと終わらせますかね～（汗）」

私が向き直ると、永琳も妹紅も苦笑いしていた。

私は結界の境界線の目の前まで移動すると集中する。ここから一歩でも出れば銃弾の雨が待っている。

息を吸い込んで止めると同時に私は走り出した。

銃弾はともかく光線は厄介だ。いくら私でも光の速さには反応できない。だから、それを使う人間に分からない程のスピードで私は走り出した。

目の前で銃の標準を合わせようとしている月人の頭を掴んでそのまま地面に打ち付ける。ヘルメットの様な物を被っていたので、たぶん死なないだろう。

周りの月人達は突然仲間がやられたので驚いて固まってしまっている。

その隙に月人の丁度中心辺りに潜り込む。おそらく、これで同士討ちを恐れて銃は使えない。

離れようとする月人達には結界の中から永琳が弓で矢の雨を降らせている。

月人達は銃を使うのを諦めたのか、剣を手に走り込んできた。

一人目は突きを放ってきたので、体を半身にして受け流しながら膝蹴りを腹に放ち撃沈。

そのまま振り向き様に回し蹴りを放って背後にいた月人を吹き飛ばす。二人目。

次に、真正面から切り掛かってきた月人に脚払いをかけてバランスを崩してから腹を殴って気絶させた。三人目。

それからはもう数えていない。とにかく向かってきた月人は片っ端から気絶させた。

その後、幻術を使って輝夜と永琳は死んだと思い込ませてからその場を離れた。

「ふう、終わったわね」

先程の草原からだいぶ離れた場所にある森の中に私達はいた。

「改めて…久しぶりだね、永琳。すっかり大人になっちゃって…」

「久しぶりね、桜花。貴女こそ尻尾が増えてるじゃないの。また寝る時に抱きまくらにさせてちょうだいよ」

「あはは…いいわよ？ただ、しばらくは我慢して頂戴ね？」

「わかってるわ。姫様のこともあるもの。何処かに身を隠すわ」

「なら幻想郷という所に行きましょう。そこなら丁度良い場所があるわ」

私達が今後の予定を話していると、妹紅が近づいて来た。

「あの…私もついて行っていいですか？」

「…え？」

「な、何言ってるのよ妹紅！？あなた、不比等様はどうするのよ！？」

「…大丈夫です。ちゃんと父上との別れは済ませてきました。「お前のやりたい事をやりなさい」と言ってくれた父上の為にも…私は輝夜と一緒に行きたい」

私と永琳は顔を見合わせて頷いた。妹紅の決意は固い。そしてそれだけ輝夜のことを思っている。後は輝夜しだいだ

「で、でも…やっぱりダメよ。私と一緒にいても……妹紅は普通の人間。私達みたいな蓬莱人とは生きる次元が違う…」

「じゃあ、普通じゃなければいいのね？」

「…え？それはどういう……」

輝夜が言葉を言い終わる前に、妹紅は懐から蓬莱の薬を取り出すと、蓋を開けて一気に中身を飲み干した。

輝夜は目の前の光景に唖然として固まっている。

「…うわ、苦いわねこれ」

「はっ！？ち、ちょっと妹紅！？な、何してるのよ！！」

妹紅の呟きで我に返った輝夜が妹紅に詰め寄る。

「何って……ぐっ！？」

「妹紅！！」

突然妹紅が胸を押さえて何かに耐える様に苦しみだした。輝夜は妹紅を支えて心配そうにしている。

すると、妹紅の黒髪が段々と白くなりはじめた。肩までだった髪も腰辺りまで伸びている。

「っ…はぁ…はぁ」

「妹紅、大丈夫?」

輝夜の言葉に頷いて答えると、しっかりと立ち上がって閉じていた瞳を開く。瞳は赤くなっていた。

「ほら…これで、私も輝夜と同じ蓬莱人だよ。これなら文句ないでしょ?」

「…ばか……何で…私の……為に…そこまで……」

妹紅は泣きはじめた輝夜を抱きしめると頭を撫で始めた。

「私達、友達じゃないの…。それに、約束したでしょ?私が輝夜の分まで世界を見てきてあげるって」

「…う…妹紅ぉ…」

「ほらほら、泣かないでよ。お姫様なんでしょ?」

「…うん」

二人が抱き合っている間、私と永琳は少し離れた場所でその様子

を見ていた。

「…姫様にも良い友達ができてよかったわ」

「そうね…」

満月を背に笑い合う二人の姿はとても神秘的で…そして、とても美しかった。

◆蓬莱人（後書き）

輝夜達の話は今回で終わりです。次回からはいくつかちょっとした小話を…

あと、桜花達のイラストをピクシブにて何枚か描いています。

タグ検索で「二次小説」で検索すればすぐに見つかると思います。よかったら覗いてみてください。ユーザー名は同じく「白夜」です。

閑話・昔話の真実（前書き）

今回はちょっとした小話です。

感想等の中に「狼姿の桜花が見たい」という意見がありましたのでピクシブに載せました。見たい方は「二次小説」のタグで検索してみてください。

閑話・昔話の真実

―桜花Ｓｉｄｅ―

突然だが皆さんは「笠地蔵」の話は知っているだろうか。

昔話の中でも有名な部類に入る話で、あるお爺さんが、作った“笠”を雪の降る日町に売りに行った。

笠は全ては売れず、五つ残ってしまう。お爺さんは仕方なく家に帰ることにした。

すると、道端に雪を被った六体の地蔵が立っていた。お爺さんは売れ残った五つの笠を地蔵に被せ、足りない最後の一体の地蔵には自分の手ぬぐいを被せてあげた。

その後、家に帰ったお爺さんは、お婆さんにその話を聞かせた。

そして夜中、寝ていたお爺さんは戸を叩く音で目が覚める。不思議に思ったお爺さんが戸を開けると、家の前には沢山の食料や酒が置いてあった。

これは笠を被せてもらった地蔵達のお礼だったのだった。

地方によって話の内容は違うが大まかな内容はこうだったはずである。

さて…私は現在、幻想郷へと輝夜、永琳、妹紅の三人と共に向かっている最中である。

場所はとある山の中、歩いて移動中なのだが……

ザク、ザク、ザク…

今日の天気は雪。季節も冬真っ只中で、肌を刺すように寒い日が続いている。

そんな中、私と永琳の雪を踏む足音が聞こえる。

もう一度言う……“私と永琳”の足音だけである。

大切なことなので二回言いました！

「あ～…温かい…」

「もふもふ～…」

現在、輝夜と妹紅は私の尻尾に埋もれて、ふにゃっと緩んだ顔をしている。

この二人、寒さにかなり弱い。輝夜も妹紅もそれなりに厚着なのだがそれでも私の尻尾から出ようとしない。

「永琳は大丈夫？寒くない？」

「私は平気よ。これくらいで根をあげてたら月じゃやっていけないわ」

「月ってそんなに大変なの？」

「生活は楽よ？　ただ私は仕事が他の人より数倍多かったから…」

「大変だったんだね…」

こんな感じで永琳と会話をしながら道を歩く。飛んでもいいのだが「空は寒いからだめ！」と、輝夜に飛行禁止を告げられてしまい、仕方なく歩いているのだ。

しばらく歩いて、小さな広場らしき場所に出た。私達からすれば小さいが、小さな子供からすれば丁度いい広さだ。

広場にもやはり雪が積もり真っ白で地面なんて見えない。そんな中、広場の隅に何やら立っているのが見えた。

「あ、お地蔵様だ」

そこにあったのは五体の地蔵だった。

そして五体共頭の上に真新しい笠が被せてあった。

もしや昔話の「笠地蔵」ではないか…私はふとそんな懐かしい話を思い出していた。

「あれ…？でも五体しかない。たしか六体あるはずじゃなかったかな…？」

ふと、そんなことを思った時……五体の地蔵の隣に何やら雪が盛り上がっている部分があるのを見つけた。

「……まさか、ね」

私は半分冗談のつもりで盛り上がっている雪を掻き分けてみる。

すると……幼女が埋まってました。

「え…」

幼女だ…、緑の髪で着物を着た幼女が雪の中に埋まっていたのだ。

死んでいるかのように動かない。

私が恐る恐る触ろうとした瞬間――

ガバッと幼女が起き上がった。

「きゃあああぁぁぁぁぁぁぁ!?」

「うわっ!?」

「きゃあ!?」

思わず輝夜と妹紅を振り落として永琳に抱き着いた。

「え、えええ永琳!!助けて!死んでた女の子が…女の子が起き上がった!女の子がぁ!!」

「なっ!?ち、ちょっと桜花、いきなりどうしたの!?／／／／」

私が急に抱き着いたからか顔を赤くしながら永琳が驚いてる。でも、今の私にそんな余裕はない。純粋に恐かった。まさにホラー。

視界がぼやけているから多分私は泣いているのだろう。しかし、そんなことはお構いなしに私は永琳に更に強く抱き着いた。

「うぅ～…助けて、永琳～…」

「お、桜花…落ち着きなさい。…普段の姿と全然違うじゃない／／／／」

永琳は顔を背けたが、しっかり頭は撫でてくれていた。

あぁ…安心する。

「ねぇ、妹紅…私達の扱い酷くない？」

「……うん」

私達の後ろで輝夜と妹紅は雪に埋もれた状態でそう呟いた。

更にその後ろでは先程の幼女が服についていた雪をはらっていた。

「ふぅ…誰かは存じませんが助けていただきありがとうございます」

そう言って緑髪の幼女は頭を下げた。

「私はここに並んでいる地蔵の一つで、四季映姫といいます」

「えっ！？」

私は彼女の名前に真っ先に反応した。

四季映姫・ヤマザナドゥ……原作キャラの一人で閻魔様である。説教癖があり、部下の小町に何度も説教している姿が脳裏に浮かぶ。

今の彼女はまだ地蔵のころであり、名前に「ヤマザナドゥ」がついていない。しかも記憶の中にある姿と違うので誰かわからなかった。

「雪に埋もれてしまって……。人型になって抜け出そうとしたのですが…結局動けなくて途方に暮れておりました」

映姫様は苦笑いをしながらいきさつを話してくれた。

「なるほど、だからお爺さんも気づかずにスルーしちゃったんだ……」

「……？。なんの事ですか？」

私は他の五体の地蔵を指差す。映姫様はだいたいの事情を察したのか再び苦笑いをした。

「ああ、そういうことですか。私は気にしませんよ。お気遣いありがとうございます」

私達も苦笑いしながら自己紹介をした。

「私は鈴音桜花、妖獣兼、神よ」

「私は八意永琳、人間です」

「私は蓬莱山輝夜、同じく人間よ」

「私は藤原妹紅、私も人間よ」

映姫様はほぅ、と険しい顔をして私達の顔を一人ずつ見ていく。

「人間と妖怪が一緒に旅ですか…」

「私は一応神でもあるけどね」

「いえ、それでも人間と共に旅をする時点でおかしいのですが…。桜花さん、貴女は自分の神社等を持っていますか？」

映姫様の話の内容が上手く理解できないがここは素直に答えよう。

「えっと、一応神社があるけど…」

「貴女は自分の神社をほったらかして何をしているんですか！？」

「…え？い、いや…その……」

…あれ、おかしな雰囲気になってきた。

「いいですか？そもそも神というものはですね……」

「え、えっと…映姫さん？」

「いいから黙って聞きなさい！」

「は、はいぃ！！？」

思わず敬語で答えてしまうほど、この時の映姫様は怖かった。

～一時間後～

「……と、いうわけです。わかっていただけましたか？」

「は、はぃ…」

「はい、わかって頂けたなら結構です！」

最古の妖獣兼、神が地蔵の幼女の前で正座をしながら説教される……何ともシュールだ。

「桜花、大丈夫？」

妹紅が水の入った水筒を渡してくれながら心配そうにしていた。

「うん、大丈夫。お説教なんて久しぶりに受けたから何だか懐かしい感じがしたわ…」

「神様に説教するなんて……あの子、将来は閻魔にでもなるのかしらね？」

永琳、それ間違いなく現実になるよ。そんでもって幻想郷で会えるよ。

「え、えええ閻魔だなんて、とんでもない！わ、私はただの地蔵ですよ！？」

「いやいや、神様に説教できる地蔵なんか他にいないわよ…」

うん、それは私も思った。将来はまた色々と言われるのだろうか……。うん、悪い事はしないでおこう。今日は一時間で済んだけど、次はどうなるかわからない。

「あ、すいませんでした！私としたことが長々と説教なんてしてしまって！どうしても白黒つけないと落ち着かない性分でして……」

「「「貴女、絶対閻魔になれるわ」」」

「ええ！？」

その後、笠をくれたお爺さんへの恩返しをする、と言った地蔵達と共に野菜や果物等を集めた。

酒や米は何処から持ってきたんだろう…。うん、深く考えないようにしよう。

私達は映姫様に別れを告げると、幻想郷に向けて再び歩き出した。

「何となくオマケ」

～楽屋にて～

桜花「お疲れ様でした～」

映姫「お疲れ様でした。桜花さん」

桜花「あ、映姫ちゃん！今日はいい演技だったね～！」

映姫「え…そ、そんなこと……ないですよ」

輝夜「あらあら、映ちゃんったら照れ屋さんね」

妹紅「ふふ、いいじゃないの。まだ若い証拠よ」

桜花「貴女はまだ十代半ばなんだからいいわよね～。私なんか万よ？万！」

輝夜「私も千は越えてるし、永琳も万いってるし……」

ヒュッ！！

ドスッ！

輝夜「あぅ！」

永琳「まったく…姫様、年のことは言わないでくださいよ」

輝夜「あれ？…ズドンは霊夢の役目でしょ？」

桜花「こらこら…まだ霊夢は出てないわよ？」

永琳「それに私は「ズドン」じゃなくて「ドスッ」でしたよ？」

映姫「……輝夜さん、矢を撃たれたことに対するツッコミは無いんですね（汗）」

妹紅「気にしたら負けよ…映姫ちゃん」

紫「皆さ～ん、次の収録の準備できましたよ～」

桜花「お、了解よ、ゆかりん！」

紫「そんな…ゆかりんだなんて／／／／」

輝夜「ハッ、見た目若いだけのＢＢＡが、何を言い出すかと思えばｗｗｗ」

パカッ

輝夜「あ～れ～！？」

紫「あら？丁度いい実験体が手にはいったわ」

永琳「あら、何をするのかしら？」

紫「いつか桜花に試そうと思って製作中の媚薬」

永琳「あら、じゃあ私も手伝うわ」

紫「わかったわ、報酬は桜花の■■■を■■するってことでどうかしら？」

永琳「あら、気前がいいわね（笑）」

桜花「ちょ、ちょっと、何の話をしてるのよ！？」

紫「桜花を愛でる為の相談よ（笑）」

永琳「ええ（笑）」

桜花「い、いやあああぁぁぁ！！聞きたくない！聞きたくない！（泣）」

妹紅「二人とも、そういうのは本人がいない場面でしなさいよ…」

映姫「はぁ……（ダメだこの人達、早く何とかしないと…）」

今日も皆さんは元気でカオスにやっておりますｗｗｗ

～終～

閑話・昔話の真実（後書き）

今回はちょっとした息抜きに書いた小話でした。次回からは元に戻ります。

感想、御意見、お待ちしております。

◆里帰り（前書き）

舞台は再び幻想郷へ…

◆里帰り

―桜花Ｓｉｄｅ―

輝夜達と共にあちこちを周りながら歩くこと一年。ようやく幻想郷に帰ってくることができた。

直線的に進めば一ヶ月かからずに着いたはずだったのだが、輝夜が珍しいモノを見つける度にふらふらとつられてしまうので余計な時間がかかってしまった。一応逃亡生活である事を意識してほしかったわね。

途中の村で服を買ったりした時にあの妹紅のモンペも見つけたので買っておいた。本人も気に入ったようだったのでよかった。

ちなみに、妹紅は既に炎を操れる様になっている。

これは、私が妖術を使っているのを見て興味を示したので、使い方を教えてあげたら一発で成功させてしまったのだ。ただし、炎以外はからっきしだったのだが…。

そこはよかった。ただ、自信がついたからか…それとも過去をふっ切るためか…少々口調が変わった。先日は、

「ああ～！？輝夜、私の残しておいた団子食ったな！？」

「あらら、妹紅のだったのね。ごめんなさい、お腹が空いていたも

のだから～♪」

「確信犯だろ、てめぇ！！返せ、私の団子ぉ！！」

…こんな感じである。ああ、あの可愛い妹紅は何処に……

閑話休題

さて、幻想郷について早速だが迷いの竹林に来ている。目指す場所は勿論、永遠亭だ。

ここの竹林は、一応全てを把握している。迷うことを拒絶しているのだから間違いない。

だいぶ進んだ頃、一軒の屋敷が見えてきた。

「ついたわ、ここが永遠亭よ」

「はぁ～、歩き疲れたぁ～。桜花、おんぶして～」

「こら、輝夜。目的地はもう目の前にあるんだから自分で歩けよ」

「中々立派なお屋敷ね」

私が先頭で中に入る。永遠亭の中は普通に綺麗だった。誰かが掃除をしたんだということがすぐにわかる。

「あら、誰もいないはずじゃなかったの？」

永琳が不思議そうに視線をあちこちに向けている。

「うん、そのはずだったけど……先客がいるみたいね」

すぐにわかった。なぜなら玄関から入ってすぐの場所にトラップが仕掛けてあるのだ。しかも、一つや二つではない。壁、天井、床、至る所に仕掛けられている。

「トラップといえば……彼女しかいないか」

迷いの竹林で、悪戯をする人物は一人しかいない。

――因幡てゐ

健康に気をつけて生活するうちに力を蓄え、妖怪化した兎である。その生活や気性の荒さから、妖怪よりは妖精の様にも見える。ただ、根っからの詐欺師であり、他人を騙してはその反応を見て楽しんでいる。

その反面、彼女は幸運をもたらす力がある。彼女の姿を見たら高確率で迷いの竹林から抜け出すことができる。

さて、てゐの姿が見えないことから奥にいるのか、それとも外出中なのか……まぁ、とにかく罠を外しながら奥の部屋へと進んで行くことにした。

「おっと、またトラップだわ。輝夜、頭さげなさい」

「…え？わかったわ……って、危な！？」

さっきまで輝夜の頭があった場所を巨大な杭が通り過ぎた。

「ちょ、ちょっと！これ完全に殺す気できてるわよね！？」

「それはそうでしょ。侵入者対策なんだから…あ、妹紅、その床の出っ張り踏んじゃだめよ？」

「うわっ！？危なかった……ありがとう、桜花」

「ふふふ、どういたしまして」

既に攻略した罠は５０は越えている。てゐの奴、どれだけ仕掛けたら気が済むんだろう…。

「あ、あれ！？何でここまで来て平気なの！？」

長い廊下を抜けた先の縁側で、てゐは兎達と日なたぼっこをしていた。

てゐは私達を見て凄く驚いていた。赤い瞳は大きく見開かれ、焦っているのかウェーブのかかった黒髪を弄りながらひたすらに「どうしよう、どうしよう…」と呟いている。

「あんたね？廊下の罠を仕掛けたのは！」

「わひゃあ！？」

輝夜が、どすどすと音が鳴る勢いでてゐを捕まえると頬を掴んで伸ばしたり縮めたりを繰り返している。

「いひゃいいひゃい（痛い痛い）！」

「輝夜、そのくらいにしなさいよ。元々、私達の方が侵入者なんだから」

「…ちっ、わかったわよ」

「……痛ぅ～。舌打ちするなんて、見た目の割に黒いねあんた…」

「黙りなさい、あんな鬼畜な罠を仕掛ける様な兎に言われたくないわ」

「うぅ…今日は厄日だわ…」

何とか話がつきそうなので、私はそろそろ家に帰ろうかな…

「永琳、後は任せていい？」

「ええ、色々とありがとう。助かったわ」

「気にしないで、じゃあ、またね！」

私は縁側から外に出ると、霧の湖に向かって飛び立った。チルノ達、元気かなぁ…

「到着っと…」

霧の湖は相変わらず静かだった。遠くに微かに妖精達の姿が見える。

「あれ、そういえば私の家って博麗神社じゃない。何で個々に来たんだろう？」

たしかに私の最初の家は此処だが、博麗神社の神として神社に住み始めてからはほとんど来ていなかった。

湖の辺にある一本の巨大な木、その根本に作られた一軒の家。自然と足がそこへと向かい、そして目の前まで来た。

「…久しぶりだなぁ、この家も」

昔はチルノとルーミアと大ちゃんの三人と一緒に寝たり、遊んだりしていた。

ゆっくりと戸に手をかけて開く。中は小物が増えただけでほとんど変わっていない。誰かが掃除しているのか綺麗なままだった。

ゆっくりと部屋の中に入る。懐かしい部屋の空気に思わず口元が緩む。

「…ただいま」

それは誰に言った言葉なのか…此処には今、私しかいないのに。

「――おかえり、桜花」

背後から聞こえた声に驚いて振り返る。

そこにいたのは腰に大剣をさして、いつもの青に加えて左腕に黒いカバーのついた服、水色の少しウェーブのかかった髪をした少女。

「……チルノ」

氷の妖精チルノ。私の初めての友達で、親友がそこにいた。

チルノは剣を壁に立てかけると私の目の前に立った。顔は俯いていて表情はわからない。

「…あの、チルノ？どうし…」

「桜花の馬鹿ぁ！！」

「…っ！？」

私が声をかけた瞬間、チルノは顔を上げた。青い瞳からポロポロと涙が流れている。

「何で、何であたいに何も言わずに行っちゃうんだよ！あたいがどれだけ心配したか！ここ数年、桜花の様子が暗くてどうにかしてあ

げないと、って思った矢先に紫から旅に出たなんて聞かされて、どれだけ不安だったかわかる!?」

実は、チルノには黙って旅に出ていた。余計な心配をかけないつもりだったのに……。泣きながら私を見上げているチルノを見て、私は本当にダメな奴だなぁ…と再認識した。

「…ごめんね、チルノ。私はもう大丈夫。もう、勝手にいなくなったりしないって約束する。だから泣かないで?」

チルノをゆっくりと抱きしめて背中をさすってあげる。普段なら子供扱いするな、と突っぱねるチルノだが、今回は何も言わずに大人しく抱きしめ返してきた。

「……約束破ったら、許さないからね」

「うん、約束の大切さは誰よりもわかってるつもりだから…」

「…もう、これじゃ怒れないじゃない。あたいの心の広さに感謝しなよ?」

「ふふ、ありがとう。さすが、チルノは最強だもんね」

「当たり前じゃん、今更それを言うの?」

「それもそうね」

お互いの顔を見て笑い会う。いつの間にか、チルノの涙は止まっていた。

「桜花、そろそろ離してくれない？」

チルノが顔を赤くしながら反らす。

「ええ～、いいじゃないの。久しぶりのチルノなんだから」

「……あたいが我慢できないのよ（ボソッ）」

「え？何か言った？」

「な、何でもない！」

結局、その日はそのまま湖の家に泊まって、次の日に神社に向かうことにした。

～翌日～

「い、行ってきます」

「いってらっしゃい！」

次の日、チルノに見送りをしてもらいながら博麗神社へと飛び立

った。

チルノ…凄く生き生きとしてたなぁ。まぁ、私としても嬉しいけどね。

そ、それに…昨日の夜は…その…ああもう！これは違う時に話す！言いたくない！／／／／

一つだけ言えるのはチルノが親友以上になったということ。

「あら桜花、久しぶり。昨夜はお楽しみだったわね♪」

神社に到着して早々、紫にそう言われた私は、割と本気で紫の頭を叩いた。

◆里帰り（後書き）

気がついたらＰＶが１０万を越えていました。皆さん、本当にありがとうございます。

次回は１０万ＰＶ突破記念の話を書きますのでお楽しみに。

ご意見、感想、リクエスト、お待ちしております。

１０万ＰＶ突破特別話（前書き）

今回は１０万ＰＶ突破記念として、ずっとチルノのターン（視点）からお送りします。

ゆっくりしていってね！

１０万ＰＶ突破特別話

―チルノＳｉｄｅ―

桜花が旅に出てから、あたいの日常はつまらなくなった。

今の幻想郷には桜花がいない。それだけで一部の妖怪達が騒ぎ出したり、人間が襲われる回数が増えたり……。その度にあたいや紫が始末している。

こうしていると、桜花がどれだけ幻想郷で大きな存在かがわかる。

桜花はいつも優しくて、強くて、頼りになって……。

でも、あたいが一番惹かれたものは……あの綺麗な空色の瞳だった。雲一つない青空みたいな…でも、どこか寂しそうで儚い「蒼」。

時々、寂しそうに空を見上げていたり、本人は気づいてないけど、寝ていると時々涙を流したり…

桜花と一番長い時間を過ごしてきたあたいでさえ何故、桜花がそんな顔をするのかわからない。

リンも、紫も、霊那も…誰もその原因を知らなかった。

ある時、紫から桜花が旅に出たと聞いた。あたいには何も言わずに旅立って行った桜花にあたいは困惑していた。

どうして?何で、あたいに何も言ってくれなかったの?

俯くあたいの頭に、紫は手を置いて撫でてくれた。

「きっと、チルノに今の自分を見られたくなかったのよ」

「……なんで？」

「桜花は、チルノのことを一番の親友だって言っていたわ。だから、貴女には笑顔だけを見せてあげたいのよ……きっと」

「……そんなの」

そんなの、勝手すぎるよ……

親友なら相談くらいしてよ…

あたいは、そんなに頼りないの？

「正直、私は貴女が羨ましいわ」

「……ふぇ？」

紫の言葉に思わず間抜けな声が出てしまった。紫は口元を扇子で隠しながらクスクス笑うと、日傘をくるくると回す。

「だって、心配をかけないように貴女にだけ何も言わないってことは、貴女のことを特別な意味で見ている、ということだと思わない？」

紫の言葉を何度も頭の中で繰り返す。

……あたいが桜花にとって特別？

「そうなのかな…」

本当にあたいは桜花にとって特別なのだろうか…。考えれば考えるだけわからなくなる。…胸が締め付けられるように苦しくなる。

「貴女らしくないわね、しゃきっとなさい。貴女は元気が取り柄みたいなものでしょう？」

「…うん」

紫はあたいの頭をもう一度撫でると、スキマを使って何処かに行ってしまった。

一人きりになった家の中で、あたいは椅子に腰掛けたまま目を閉じる。

こんな時、桜花だったらどうするのだろう…

……いや、駄目だ。いつまでも桜花の背中ばかりを見ていたらいけない。

あたいはあたいができる事をやるだけだ。

桜花が護ってきた幻想郷…。桜花がいない今、あたいがかわりに護るんだ！

そして、桜花が帰ってきた時にありったけ文句を言ってやる！な

んで、あたいに何も言わずに行っちゃうんだ、って。

壁に立てかけてあるバスタードチルノソードを手に取ると、腰のベルトに挿す。そして、両手で頬を叩いて気合いを入れる。

「よし、見回りに行くとしますか！」

ちょっと強く叩き過ぎて涙目になったけど、気にしない！だって、あたいは最強なんだから！

桜花が帰ってきたのは、それから丁度一年後だった。

いつものように、悪さを働く妖怪を退治して家に帰ると、入口が少し開いていた。

ゆっくりと、音がならないように戸を開ける。

そして、見慣れた後ろ姿があった。

青い髪に青いコート、ふさふさの尻尾。そして、赤い紐で髪結ばれた黄色い鈴。

あたいの親友であり、姉の様な存在。そして、誰にも負けない最

強の妖獣。

「…ただいま」

彼女がぽつりとそう呟いた。それにあたいは返事をする。

「――おかえり」

桜花が帰ってきた日の夜。あたいは久しぶりに腕によりをかけて料理を作った。

桜花は狼の妖獣なのに、肉よりも野菜が好きだ。だから夕飯は野菜中心のスープや炒め物が中心だった。

「チルノ、腕あがったんじゃない？」

料理を食べながら、桜花は笑顔であたいの料理を褒めてくれた。

「そうかな…まぁ、桜花がいない間はあたいが一人で作ってたからね」

妖精であるあたいは基本、食事を必要としない。最近は妖精らし

いことをしていないから、どちらかと言えば妖怪な近づいている気がする。

「……」

あたいが腕を組んで天井を見上げていると、桜花があたいをずっと見ていることに気がついた。

「…どうしたの？」

「…ん？いや…チルノ、ちょっと大人っぽくなったなって…」

あたいはそうかな、と言って再び天井に視線を向ける。

「なんだか、独り立ちする妹を見てる気分だわ。まぁ、私に妹はいないからよくわからないけど…」

桜花はあたいを見ながら微笑みを浮かべる。

「桜花…あたい、桜花を護れるくらい強くなりたいんだ」

「…へぇ、私を護ってくれるの？」

「うん、桜花はあたいの大切な人だからね」

視線を桜花に向けると、桜花は困った様に笑った。

「まいったなぁ…そんな風に言われたら、すっごく期待しちゃうよ？」

「うん、期待していてよ」

桜花は少し顔を赤くすると、視線を逸らす。

「今のチルノって…なんだか私の恋人みたいだね」

あたいは、立ち上がって身を乗り出す形になると、桜花をじっと見つめる。

「桜花、あたいは桜花にとって…どういう存在？」

「…え？」

桜花は一瞬驚いた顔をすると、恥ずかしいのか再び視線を逸らす。

「チルノは…私の初めての友達で…親友で…妹みたいに大切な…存在…」

「…うん、そう言うと思った」

あたいは両手で桜花の顔を掴むと、正面を向かせる。桜花が少し驚いた顔をするが、あたいはもう…決めたんだ。

「桜花、あたいは桜花が大好きだよ。だから、ずっと一緒にいよう？」

あたいは桜花の隣で一緒に同じ道を歩いて行きたい。

「…それって、告白？」

桜花の顔は真っ赤だった。たぶん、あたいも同じくらい赤いんだと思う。

「もちろん、あたいは本気だよ」

「…そう」

桜花の強張っていた体の力が抜けるのを感じた。

「それなら…その……よろしく…お願いします／／／／／」

そう言うと、桜花は目を閉じる。

あたいは躊躇せずに、桜花の唇に自分の唇を重ねた。

「…はぁ……あっ……チルノ…」

今、あたいの目の前にいる桜花は、今まで見てきたどんな姿よりも可愛い。

コートの前は開けられており、髪も解いてある。頭の上の耳はペ

たりと垂れ下がっていて、青い瞳は潤んでいる。

ぎゅっと抱きしめてくる桜花は、見た目よりもだいぶ幼く見えてしまう

抱きしめ返すと同時に、先程よりも深いキスをする。

「…ん…くちゅ……ちゅく……はぁ…」

「桜花…くちゅ……あ…ん……」

桜花の抱き着く力が強くなる。桜花の方が大きいから、ちょっと苦しいけど…それが丁度良い。

片手をそっと服の中に入れる。そのまま桜花の胸まで進むと優しく揉む。

「…っあ！！」

桜花の体がビクンッと反応する。

「チルノ…ま、待って…だめぇ…」

桜花が涙目で言ってくるが構わずに続ける。

それにしても、桜花って着痩せするタイプだったんだ…。

「あっ……や、やらぁ……チルノ…だめぇ…ひゃん！！」

胸の先を摘むと、再び桜花の体がビクンと跳ねる。

「あ…はぁ……や…あぅ…ちる…のぉ……」

呂律が回らなくなってきた桜花にキスをしながらも、手は休めない。もっと、もっと…可愛い桜花を見てみたい。

「…んんっ！…ふぁ、だめぇ！あ、あああああぁぁぁぁぁぁ！！」

桜花の体が先程よりも大きく跳ねる。おそらく達したんだろう。

息も荒くなり、瞳も少し虚ろになっている。

けど、そんな桜花を見ていると…まだまだ足りない、もっと桜花を感じたい、という感情が溢れてくる。

「桜花…あたい、もう我慢できないかも……」

「はぁ…はぁ……チルノ？」

右手をゆっくりと下へもっていく。

そして――――

～自主規制～

ふと、気がついたら朝になっていた。どうやら、いつの間にか寝ていたようだ。

「…ぅん……チルノ…」

隣には桜花が寝ている。

ふと、昨夜のことを思い出して顔が赤くなる。……でも、嫌じゃない。

ベッドから降りていつもの服に着替えると、朝食の準備をする。

「……う～ん…あれ？いつの間に朝になってたの？」

朝食を運んでいると、桜花が目を覚ました。

「おはよう、桜花」

「あ…お、おはよう…チルノ／／／／」

桜花はあたいの顔を見た瞬間、顔を赤くしながら目を逸らす。

「桜花、とにかく朝ご飯食べよ？ほら、早く服着て、急がないと冷めちゃうよ？」

桜花は服を着ていないことに気がつくと、慌ててシーツで体を隠した。今さら何を恥ずかしがるのやら…。

「チルノのばかぁ…」

桜花がシーツに包まったまま、顔を赤らめて上目遣いで睨んできた。まぁ、今の格好だと逆に可愛いだけなんだけど…。

朝食の後、桜花は博麗神社に行くから、と言って飛び立った。あたいも見回りをしつつ追いかけようかな。

そういえば、桜花は余裕が無くて気づいてなかったみたいだけど…紫が覗き見をしていたんだよね…。たぶん昨夜の事でからかわれるはずだから、あたいも急いで追いかけるとしよう。

やれやれ…護るとは言ったけど、どうやら最初は紫が相手になりそうだ。

それでも、あたいは負けない。桜花を護ると約束したんだから。今のあたいにできないことなんてない。

だって、あたいは――……

……――桜花の恋人なんだから。

１０万ＰＶ突破特別話（後書き）

やってしまったぜ…。反省はしている。しかし、後悔はしていない！

ご意見、感想お待ちしております。

あと、ピクシブにて新しい絵を投稿いたしました。いつも通り「二次小説」のタグで検索してみてください。

◆死に誘う妖怪桜（前書き）

『――昔々、一人の歌人が満開の桜の木の下で眠りについた……。』

これは、とある妖怪桜と一人の少女と青い妖獣の出会いの話…。

◆死に誘う妖怪桜

―桜花Ｓｉｄｅ―

幻想郷に帰ってきてから既に一ヶ月が過ぎた。

見回りのついでに永遠亭に住み着いた永琳達の様子を見に行ったり…。一人暮らしを始めた妹紅に差し入れを持って行ったり…。何故かついて来たチルノと妹紅が私の主導権を賭けて喧嘩を始めたり……。

まぁ、なんにせよ楽しい毎日だった。

――これは、そんなある日のこと。

いつものようにチルノと一緒に見回りを終えて博麗神社に帰ってくると、縁側に紫が座っていた。

「あれ？紫じゃん、何してるの？」

私の声に反応した紫がこちらに振り向いた。心なしか顔が微笑んでおり、嬉しそうだ。

「桜花、待っていたわ。今日はいつもより遅かったじゃない。私、

結構待っていたのよ？」

「ごめんごめん、人里の稗田家に行ってたのよ。阿一との約束だったからね」

阿一に会ったのは一週間程前で、時間がある時に「幻想郷縁起」に私のことを載せたいと言われていたのだ。

紫は納得したのか「あぁ、なるほどね」と呟くと、日傘を取り出して立ち上がる。

「桜花、今から時間はあるかしら？」

その顔は珍しく真剣で、大事な話があるのだとすぐにわかった。

「…チルノ」

「わかってる。あたいは湖に帰るから、ゆっくりと用事を済ませてきなよ」

チルノに視線を向けるとわかってる、と言わんばかりに頷いてその場から飛び立って行った。

「あの子、随分と明るくなったわね。……これも貴女のおかげかしら？」

「茶化さないで、何か用事があるんでしょ？」

紫はあらあら、と口元を隠していた扇子をスキマにほうり込む。

「そんなに真剣に身構えなくていいわ。貴女に会ってほしい人がいるの」

「私に会ってほしい人？」

「ええ、私の友人よ。ちなみに、人間の…ね」

私はすぐに紫の額に手を当てる。

「紫、何があったの？貴女が友達を作るなんて信じられないわ」

「……貴女、私に喧嘩売ってるの？」

私はすぐに手を離すと、苦笑いをしながら「冗談よ」と言った。

でも、驚いたのは本当だ。あまり目立つ事を好まない紫は、基本的に私や霊那達以外で人前に姿を表さない。

そんな彼女に人間の友達ができた、と聞けば驚かずにはいられまい。

「それで？何故私をその友達に紹介したいの？…まぁ、紫を妖怪だと知っているのに友達になるくらいだから普通の人間じゃない、とか？」

私が目を細めてそう言うと、紫は少し悲しげな顔をした。

「ええ…たしかに、普通とは言えないわね。彼女は……私達みたいな妖怪…しかも強い力を持っている者としか触れ合えないのよ」

私はすぐにそれが誰だかわかった。でも、あえて名前を聞く。

「その友達の名前は？」

紫はスキマを開き、背を向けながら呟いた。

「――西行寺　幽々子。それが、彼女の名前よ」

スキマを抜けた先には辺り一面の桜の木があった。

「うわぁ…凄いわね～」

私は紫の後をついていきながら周りをキョロキョロと見回していた。

「こんな広いお屋敷、初めて見たわ」

「あら、貴女ならこれくら見慣れているんじゃないの？私よりも長生きしてるくせに」

「…紫、それはさっきの仕返しかしら？」

「さぁ、どうかしらね？」

「……」

「……」

互いに沈黙してしまい、気まずくなった。マズイわね…、と思っていたそんな時――

「……おや？紫様ではありませんか」

「…あら、妖忌じゃないの」

屋敷の中から一人の青年が現れた。

背丈は私より少し高いくらい。見た目は若いが白髪なためか少し大人びた雰囲気がある。

そして、何より気になるのが腰に挿している二つの刀と、彼の隣に浮いている白い饅頭…。

「紹介するわ。彼がこの白玉楼の庭師兼、幽々子の護衛等をしている魂魄妖忌よ」

「紫様のご友人でしたか…。お初にお目にかかります。魂魄妖忌と申します」

「あ、どうもご丁寧に…。私は紫の友人をやらせてもらってる鈴音桜花といいます。よろしくお願いしますね？」

お互いの自己紹介が終わった後、いつも紫が幽々子と談話するという縁側へと移動した。

「あら？幽々子がいないわ…いつもここにいるはずなのに…」

縁側にはお茶と団子が置いてあるだけで人の姿はなかった。

「幽々子～？何処にいるの～？」

紫は幽々子を探して屋敷の中へと入って行った。……勝手に入っていいのか？

置いていかれた私は仕方がないので、近くを歩き回ることにした。

白玉楼にはとても沢山の桜がある。今の季節も丁度春なので、桜は満開だった。

「う～ん、これは絶好のお花見日和だわ…あれがなければ、だけどね」

私は桜並木の奥に視線を向ける。

これだけ離れていても伝わってくる強い妖気…。並大抵の妖怪なんかよりもずっと強い。

私は桜並木の奥を目指して歩き出した。

――昔、一人の歌人が一本の満開の桜の下で眠りについた。

それからというもの、その歌人と同じようにその満開の桜の下で死ぬ人間が例年後を絶たなかった。

死に逝く人々の血を吸いつづけたその桜の木は、いつしか人を死に誘う妖怪桜となった。そして――

「これは……想像以上にヤバいわね」

目の前にある桜の木を見上げながらぽつりと、私は呟いていた。

それはまさに『死』そのものを見ているようだった。

ほんのりと赤く染まった花びら、脈を打つように溢れ出している妖気……どれを取っても大妖怪に匹敵するほどだ。

「これが……西行妖（さいぎょうあやかし）」

――人を死に誘う桜の木はいつしか『西行妖』と、呼ばれるようになっていた。

私の頬にはいつの間にか冷や汗が流れていた。

本能が警告している。“アレ”は危険なものだと。

「…でも」

それでも、同じくらいに感じてしまう。この桜は、なんて――

「…“美しい”でしょう？」

「…っ！？」

背後から聞こえた声に慌てて振り返る。

そこにいたのは一人の少女だった。

歳は十代半ば～後半くらい。白い肌に桜色の髪、青い着物を着ていた。身長も紫と同じくらいだ。ただ、少女の顔色は驚くほど悪い。今にも倒れてしまいそうだ。

「…はじめまして、空色の綺麗な妖怪さん。その桜には近づいてはダメよ。死にたくなければ、ね」

彼女は私から離れた場所で西行妖を見上げた。

「貴女、名前は？」

私が尋ねると、彼女は西行妖を見上げたまま答えた。

「…私は西行寺幽々子。貴女は？」

「鈴音桜花、妖怪よ」

「鈴音桜花……貴女が紫が話してくれた妖怪さんなのね」

「…紫が？」

私が首を傾げるのと、私の隣にスキマが開くのは同時だった。

「あ、いたいた！桜花ったら突然いなくなるんだから、心配したじゃないの！」

紫は不機嫌そうにスキマから出てくると、私にジト目で文句を言ってきた。

「ごめんなさい、ちょっとこの桜が気になってね」

「はぁ…、この桜は危険だからいくら貴女でも一人で近づくのはやめなさい。幽々子に頼んで探してもらったからよかったけど、万が一ってこともあるのだから」

「うん、そうする」

今回は勝手にいなくなった私が悪いので素直に謝っておいた。

「じゃあ、三人とも揃ったことだし、屋敷に戻りましょう？幽々子もそれでいいわよね？」

「そうね…桜花、何かお話を聞かせてくださらない？」

「…あ、うん！」

紫を先頭にして屋敷へ歩き出す。一度だけ振り返ってみたが、西行妖は先程とは違い、ただの桜の木と同じように静かに佇んでいるだけだった。

夕方になり、帰る頃にはすっかり私と幽々子は仲良くなっていた。

「じゃあ…幽々子、また明日来るわね！」

「…ええ、待ってるわ。桜花もまた来てちょうだいね？」

「…うん　、わかったわ！」

幽々子は帰る私達が見えなくなるまで、ずっと見送ってくれた。

～博麗神社～

神社に帰った私と紫は縁側に座ると暗くなる空を見上げた。

「…ねぇ、紫」

「なにかしら？」

私の問い掛けに紫はすぐに返事をしてきた。

「彼女は…幽々子は一体どうなってるの？」

私がした質問は幽々子についてだった。

彼女は、西行妖と同じ『死』の気配に満ちていた。妖怪ならまだ納得がいく。しかし、彼女は人間だ。人間があんなに強い『死』の気配を出せるはずがない。

「…幽々子はね、西行妖と繋がりがあるの」

「…繋がり？」

「西行妖があんな妖怪桜になった原因は、彼女の父親があの桜の下で死んだからなのよ…」

「うん、それはさっき妖忌が教えてくれたわ」

そして、多くの人が同じ様にあの桜の下で死んだ。

「彼女の力はその頃から発現したらしいの。おそらく、西行妖と幽々子には何らかの繋がりがあると見て間違いないわ」

「…成る程ね」

たぶん、あの桜の一番近くに居たからだろう。我が家の敷地内にあれば少なからず影響が出るのは当たり前だ。

「そこで私は考えたのよ。西行妖を封印できたら、もしかしたら幽々子の能力も一緒に封印できるんじゃないかって」

「…そんなことできるの？」

紫は苦笑いをすると頬をかいた。

「実は術式の大半は完成してるんだけど……どうしても残りの式が上手くいかなくて困ってるのよ」

紫は溜息をつくと立ち上がる。

「でも、私は諦めないわよ。幽々子を絶対に助けたいから…」

幽々子は私と紫の二人といる時、楽しそうに笑ってはいたものの、どこか悲しげな雰囲気が消えなかった。目を離した隙に何処かにいなくなってしまいそうなほどに、彼女の精神は不安定だ。

紫は顔には出さないけれど、たぶんかなり焦っているんだと思う。妖忌によると、彼女は以前、自殺をしようとしたことがあるらしい。紫は年々強くなる西行妖の力が、いつか幽々子を死に追いやるので

はないか、ということを心配しているのだ。

「…私は封印の術式なんかの知識に疎いから、あまり手伝えないかもしれないけれど……協力はするわ」

「ええ…ありがとう、桜花」

紫は今から再び術式の構築をするらしく、すぐにスキマを使って帰っていった。

「…私にできること、か」

博麗神社にも咲いている桜を見つめながら、私はしばらくの間、儚げに笑う幽々子の姿を思い出していた。

――この日は、西行妖が満開にある一週間前のことだった。

◆幽雅に咲かせ、墨染の桜（前書き）

とある大樹の下で少女は願う――

いつか、満開の桜の下での再会を――

また、あの二人と一緒に――

あの暖かい春の庭の先で――

再び三人で笑うことを――

◆幽雅に咲かせ、墨染の桜

―桜花Ｓｉｄｅ―

幽々子と出会ってから三日が過ぎた。

毎日のように白玉楼に行っては幽々子の話し相手をしたり、紫と一緒に西行妖を見ながら術式の構築を手伝っていた。

今日もまた、白玉楼の縁側で桜を見ながら幽々子に話を聞かせる。

「……それで、紫ったら私が大丈夫だって言ってるのに見回りに無理矢理ついてきたのよ」

「…あぁ、そんな事もあったわね」

「それで？」

今話しているのは私が旅に出る前の話……まだ霊樺がいた時の話だ。

「うん、それでね？紫は最初は真面目にしてたのに、途中から飽きたのか私に悪戯してたのよ」

「ふむふむ…」

「だから、紫の視界を拒絶して前を見えなくしてあげたの……そしたら――」

一瞬の間をあけてから呟く様に言う。

「――目の前の木に顔面からぶつかったのよ」

「…なっ！あ、あれはただ突然で反応が遅れただけよ！！」

「ぷっ…あはは！紫が木にぶつかるところなんて想像できないわね」

「もう、幽々子も笑わないでよ！」

まるで幼なじみの会話の様に三人で笑い合う。

春の陽射しが暖かくて、眠くなってくるのを小さな欠伸一つで押さえ込む。

「…春眠暁を覚えず、ね」

幽々子がクスリと笑いながら私に微笑みかける。その顔はいつもより明るくて、私は少しでも幽々子の雰囲気が明るくなったのを心の中で喜んでいた。

思えばこの時、幽々子は既に覚悟していたのかもしれない――

「さてと…桜花、そろそろ帰りましょう」

気がついたら辺りはもう夕日で茜色に染まっていた。

「あら、もうこんな時間だったのね…」

「幽々子、私達しばらく忙しいから三日くらいの間、ここに来られないかもしれないわ」

「あら、そう…」

たぶん封印の術式を一気に仕上げるつもりなんだろう。幽々子の顔が暗くなるのを見て心が痛む。

紫が立ち上がるのを見て私も立ち上がろうとする。

すると、幽々子が私の服の裾を掴んでいるのに気がついた。そして、手招きをしているのがわかり、顔を近づける。

「…三日後、日が昇る前にここに来て。紫には内緒でね」

「…え？」

聞こえるか聞こえないか、という小さい声で幽々子は私にそう言った。

私がどういうことかを聞く前に、幽々子は私の隣を通り抜けて紫の方へと歩き出していた。

「…幽々子？」

幽々子の背中は「今は何も聞かないで…」と、言っている様で…

…。私は彼女の背中を黙って見つめることしかできなかった。

～三日後・早朝～

まだ暗く、静かな空を私は飛んでいた。

三日前に言われた幽々子の言葉通りに、私は白玉楼を目指していた。紫は疲れて寝ている。

春になってもまだ早朝は肌寒い。空を飛んでいることも関係しているのだろうけど、私は頬を撫でる冷たい風に思わず小さく身震いをした。

幽々子が一体何故こんな早朝に私だけを呼んだのかはわからない。しかし、私の胸の内は不安で一杯だった。

三日前、幽々子と最後に交わした言葉がどうしても頭から離れない。

私は少しでも早く幽々子に会う為にスピードを上げた。

「到着っと……ん？」

白玉楼に到着した私が最初に感じたのは奇妙な違和感だった。これまでの道とは空気が違った。

「何かしら……まるで空気が死んでいるような……」

――空気が…“死んで”いる？

「――っ！？まさか！？」

私は急いで白玉楼の奥を目指した。

目指すのは満開の桜並木の一番奥……西行妖。

夜明け前の暗い桜並木を駆け抜けていく。嫌な予感ばかりが大きくなる。

不安と緊張で激しく暴れる心臓に右手を当てながらただひたすら走った。

妖怪の私にとって、この桜並木はほんの数秒で走り抜ける距離だ。

しかし、今の私はその数秒がとても長くて、まるで数時間かけて走り抜けた様に感じられた。

西行妖の所にたどり着いた時、私は思わず固まってしまった。

西行妖は開花直前の状態であり、その根本で幽々子が幹に手を当て、何かを呟いていた。

「幽々子、一体何が…」

私が幽々子に話しかけた瞬間…突然、衝撃と共に見えない何かが私を通り抜けて行く感覚がした。

例えるなら風だ。まるで突風の様に衝撃が私を襲ったのだ。それと同時に体に染み込む様にして入り込む“ナニ”か。

――『死』

「…っあ！！」

私は反射的に能力を使い、入り込んだ『死』を拒絶した。

「くっ…はぁ…はぁ…」

冷や汗が頬を伝うのを感じながら、私は荒くなった呼吸を落ち着けようとする。

今のは『死』そのものだった。直接頭の中に『死』の概念をたたき付けるようにして精神に干渉してくる。普通の人間や精神の弱い妖怪ならば先程の衝撃だけで死ぬか、発狂して自殺するか…。それ程に強い精神攻撃だった。

ふと…何気なく辺りを見渡して、私は絶句した。

先程走り抜けた満開の桜達は全ての花びらを散らしていたのだ。

しばらく唖然としてその光景を見ていた私は幽々子のことを思い出して西行妖へと振り返る。

幽々子は悲しげな表情で西行妖を見上げていた。

「もう…ダメだわ」

幽々子はぽつりと呟くと私の方を振り向いた。

「西行妖は強くなりすぎた……。このままだと、いずれこの地方全てを死にいたらしめる程に大きくなる……」

幽々子は懐から一本の短刀を取り出した。

「だから……封印しなくちゃいけない」

鞘から抜いた刃がうっすらと光る。

「私も……この力から解放される」

背中を預ける形で幽々子は西行妖に寄り掛かる。

幽々子がやろうとしていることに気がついた私は幽々子を止めようとしていた。

「ダメよ幽々子！！紫が今封印の術式を作ってる！だから……」

「…こないで！」

「…っ！！」

幽々子の言葉に思わず足を止める。

幽々子は短刀を持ったまま俯いていた。

「ダメよ…ダメなの。私が残ってもきっと解決にはならない…」

私はまるで地面に縫い付けられたように動けなくなっていた。幽々子はほんの数メートル先にいるのに。

「私と西行妖は繋がっている…。私が生きている限り、この力はきっと無くならない。…私にはわかるのよ」

「…幽々子」

「それに…」

幽々子は俯いていた顔を上げる。その顔は儚く、悲しげに、でも…とても美しい笑顔だった。

「――この子はずっとひとりぼっちだったの。最期くらい、誰かが一緒にいてあげなきゃ可哀相だもの」

幽々子は自分の胸に刃を向けて最期の言葉を呟いた。

「桜花、紫に…ごめんなさい、そして…ありがとう…って伝えて」

――朝日が昇るのと同時に、まるで満開の西行妖に抱かれる様にして、西行寺幽々子はその人生を終えた

「……」

どれくらい呆然としていただろうか…。

私はその場に力無く座り込んだまま、真っ赤な血で染まった幽々子を見つめていた。

西行妖も、妖力こそ安定しているものの、満開のままである。まだ封印は終わっていない。封印に関して素人の私にとって、紫がいなければこれからどうしたらいいのかわからない。

だから私は笛を取り出した。神奈子特製の御柱から作ったあの笛である。

少しでも彼女とこの桜が救われるように…

私の記憶にある彼女のテーマ曲を…

テンポはゆっくりと、まるで子守唄のように、私は紫が来るまで吹き続けた。

紫は数分後にやってきた。西行妖の気配を感じたんだろう。

幽々子と私を見つけると、しばらく呆然としていたが、次の瞬間には泣き出してしまい、私は冷たくなった幽々子の体にしがみつく紫を宥めるのに苦労した。

そういえば、私は悲しかったけれど涙は流さなかった。…どうしてだろう？

泣き止んだ紫は、すぐに術式の組み替えを始めた。

幽々子の体を元にして西行妖を封印することになり、それに合わせて術式を変化させる。すると、あんなに苦労していた紫の術式はあっさりと完成した。まるでパズルのピースがはまっていく様に、たったの数分で術式は完成した。

「…後はこの術式を起動すれば幽々子の体を元に西行妖は封印されるわ」

紫は術式を起動させながら私に説明をしてくれた。

「…紫、幽々子の魂はこれからどうなるの？」

「…わからない。供養できないから、転生もしない。もしかしたら、永久にこの世をさ迷うのかもしれないわ」

紫が最後の術式を組み立てた瞬間、光と共に突然、西行妖の花び

らが散りはじめた。

幽々子の体が地面に沈む様に消えていく。この瞬間から、人間を死に誘う妖怪桜は満開に咲くことはなくなったのだ。

私と紫はヒラヒラと舞い散る花びらを見つめていた。

「綺麗ね…」

「…ええ」

私は再び笛を吹く。紫は再び涙を流しながら、西行妖を見上げていた。

「さぁ…もう行きましょう?」

あれからずっと笛を吹き続けていた私は、紫の声でいつの間にか閉じていた瞼を開いた。もう、花びらは全て地面に落ちてしまっていた。

私は笛を懐に入れると、背後にいる紫へと振り返る。紫は泣いて赤く腫れた目を隠すように私に背を向けた。

私が紫の背中を追いかけようと、一本踏み出した瞬間…

――あら、もう止めてしまうの?

「…え？」

私は誰もいないはずの背後から聞こえた声に振り返る。

そこには一つの丸い光の玉が浮いていた。

光の玉は徐々に形を変える。手足ができて、以前より少し薄い桜色の髪ができる。青い着物ができて、頭には同じく青い帽子がちょこんと被さる。

肌の色や髪の色は薄くなれど、顔色は悪くない。以前は見ることのできなかった満面の笑顔を浮かべながら…

――西行寺幽々子がそこにいた。

私と紫は唖然としながら幽々子を見ていた。間違いない。たった今、ここで消えた幽々子が再び現れたのだ。

「……幽々子なの？」

紫が信じられないといった表情をしながら彼女に尋ねた。

だが、彼女から返ってきたのは悲しい言葉だった。

「確かに私は西行寺幽々子よ？……でも、貴女は誰？私を知っているの？」

「……え？」

幽々子は、自分の名前以外の生前の記憶を全て失っていた。

「私、長い長い夢を見ていた気がするわ…。もう思い出せないけれど、私以外にあと誰か二人…。そう、その知らない二人と三人一緒に楽しく過ごしていた…そんな夢を見ていたの」

幽々子は目を細めて懐かしむ様に言うと、私達と視線を合わせる。

「貴女達は、私のことを知っているの？」

私は顔を俯かせたままの紫を見る。

しばらくして、紫は顔を上げると、幽々子の目の前まで歩いて行く。

「…残念だけれど、私達も貴女の名前しか知らないわ」

紫はハッキリと幽々子にそう告げると、右手を差し出した。

「私は八雲紫、妖怪よ。幽々子、よければ私と…友達になってくれないかしら？」

幽々子は「妖怪さん？」と可愛らしく首を傾げると、笑顔で紫の手を握り返した。

「勿論いいわよ。私は西行寺幽々子、えっと…亡霊よ」

自分の体を見た後、首を傾げながら言う幽々子に紫はクスリと笑う。私はそんな二人を見ながら、妖忌になんて説明しようかな…なんてことを考えていたりする。

「貴女も…お友達になってくれる？」

ハッと、我に返った私の方へと手を差し出しながら幽々子は笑顔を向けてきた。その笑顔は、雰囲気や抱く感情が違えど、私の記憶に残る幽々子と同じだった。

ああ、彼女はやっぱり幽々子なんだな…

私は幽々子の手を握り返す。ひんやりとした冷たい手だったけれど、間違いなく幽々子が今此処にいることがわかった。

「私は鈴音桜花、妖獣よ。よろしくね、幽々子」

幽々子は満足げに頷くと、私にキラキラした視線を向けてきた。

「ねぇ、さっきの曲…もう一度聞かせてくれないかしら？」

幽々子に期待を込めた視線を送られた私は、再びあの曲を吹く。ただし、さっきよりも少し明るい目に、テンポを上げて…

「ねぇ、この曲の曲名は何なの？」

そう尋ねてきた幽々子に、私は笑顔で答えた。きっと、彼女にしか似合わない曲の名前だ。

「この曲の名前はね―」

私達はこの時、再び三人で笑い合った。

その後、紫はこの日の事を忘れないように、と一冊の書物に記録を残した。

『富士見の娘、西行妖満開の時、幽名境を分かつ、その魂、白玉楼中で安らむ様、西行妖の花を封印しこれを持って結界とする。願うなら、二度と苦しみを味わうことの無い様、永久に転生することを忘れ…』

この記録は妖忌が白玉楼の蔵の中へと持って行き、この事は私と紫と妖忌の三人だけの秘密とした。

できるなら、幽々子が生前の苦しみを二度と味わうことが無いことを、私も願って…。

◆幽雅に咲かせ、墨染の桜（後書き）

先ずは、この作品を読んで下さる皆様方に、心からの感謝を…

さて、東方神霊廟のボスとして幽々子が再登場しましたね！

今回はそのお祝い的なノリで書きましたが、ちゃんとした話になっているのか不安です（汗）

何か気づいた点がありましたら、どんどんお知らせください。

※イラストの方には幽々子を新しく追加いたしました。

◆私と“私”（前書き）

それは死の奔流――。

あぁ、懐かしい――。

かつて西行妖が放った死の衝撃、それが……

彼女の中の闇に眠る、もう一人の彼女を目覚めさせた――。

◆私と“私”

夢を見た――

誰の夢で、いつの時代かはわからない――

その夢に出てくるのは、何の変哲もない一軒家と町並み……そして――

一人の少女だった――

幽々子の一件から一年経ったとある夜。

——私は夢を見た。

目を開けた私が見たのはいつもの我が家ではなく、現代にあるようなコンクリートの地面と、たくさんのビルだった。

はて、これは一体何が起こったのか？

私がそう考えていると、突然私の体を数人の子供がすり抜けて行った。

突然の事で驚いたが、どうやら子供達には私が見えていないようだ。そのまま何もなかったかの様に走り去って行く。

……あぁ、そうか。これは夢なんだな。

私はこれが夢なんだと理解した。よく見たら私の体は地面から少し浮いていて、若干透けている。

しかし、また随分と懐かしい夢を見たものだ。

この街は永琳のいた街ではなく、私の前世の記憶にある街だった。

前世の記憶なんて、ほとんど忘却の彼方だったのに……。まぁ、能力のせいで忘れたくても忘れられないんだけど…。

絶えず車が走る道路、高いビル、行き交う人々。

自然を破壊して、醜くも成長した世界…。ゴミで埋めつくされた世界…。

私はきっと無関心な目をしているんだろうな、と自分でわかる。人間だけが我が物顔で生活する世界なんて、幻想郷なんかと比べものにもならない。

此処には妖怪も、妖精もいない。ただ人間がいるだけだ。

そんなことを考えていると、私の隣を一人の少女が歩いて行く。

背中まである黒髪を揺らしながら歩く少女は私の胸元より少し小さいくらいの身長で、青いセーラー服を着ていた。手には黒い鞄を持っている。中学生のようだから、年齢からすると15歳くらいかな？

その少女は何を思ったのか、立ち止まると私と同じ様にゆっくりと街を見渡す。

少女の顔は前髪で隠れてわからないが、きっと私と同じ様な顔をしているんだろうな、と私はそう思った。

少女はしばらくすると歩き始めた。私の体も少女を追いかける様にして動き出す。私はただ、少女の後ろ姿を見つめることしかできなかった。

少女の家は街から少し離れた場所にあった。目の前に小さな公園があり、周りには少ないけど自然が残っていた。

無言で玄関を開けて中に入る。

少女は「ただいま」も何も言わずに階段をのぼる。

そのまま部屋に入ると、着替えを済ませてすぐに机に向かう。

勉強を終えると、今度はパソコンをつけてネットサーフィン。

無言のまま、静かな部屋にカタカタとキーボードを打つ音だけが響く。

しばらくすると、下の階からガタガタと物音が聞こえだした。

それと…、大きな怒鳴り声も同時に聞こえる。男性と女性の声だった。

この部屋は防音に優れているのか、何と言っているかは聞こえない。

少女は一瞬だけ手を止めたが、再び画面に視線を向けた。

少女は食事もとらず、風呂に入るためだけに部屋を出ただけで一日を終えた。

突然、目の前の景色が変わった。

場所は何処かのマンションの一室だった。質素な家具と先程見たパソコンが一台。そんな狭い空間の真ん中に私は立っていた。

ガチャリ、と背後から聞こえた音に振り返る。

そこにいたのは先程の少女だった。

ただ、身長はだいぶ伸びていて、耳を入れなければ私と同じくらいだ。

相変わらず背中までの黒髪を揺らし、前髪で目元を隠した髪型だ。顔の形がいいからきっと美人なんだろうと思うのだが…。

少女は一人暮らしを始めていた。両親は……どちらも行方不明になっていた。

少女はベッドに腰掛けると、救急箱を取り出して袖を捲り上げる。

彼女の手足は傷だらけだった。しかも意図的につけられた様な傷ばかりで、私は思わず顔をしかめる。

消毒を済ませてから救急箱をしまうと、机の上に鞄を置く。

鞄から出したノートや書類にも虐めと思われる書き込みがいくつもあった。

少女は無言のまま机に向かうと、勉強を始めた。その手は、まるで機械の様に一定のスピードで動く。

最後の文字を書き終えると、少女は立ち上がり、玄関で靴を履く。すると、何かを思い出したのか再び部屋の中に戻ると、クローゼットを開けてコートを一着取り出した。

首元と手首にモコモコとした毛がついた黒いコートだった。

そのコートは…私のコートとそっくりだった。

夕日の中、少女は公園に向かって歩いていた。風に靡く黒髪は暗くなってきた空に溶けてしまいそうだった。

公園には誰もいなかった。人通りも少ない小さな公園。その中央に少女は立つ。

街灯も何もない公園は既に真っ暗だった。しかし、少女の輪郭はハッキリと見える。まるで世界から切り取られている様に……。

『…ねぇ』

一瞬聞こえた声に私はハッとした。

『…ねぇ、貴女は今……幸せ?』

暗闇の中、私の方を向きながら話す少女に私は思わず息を呑んだ。

『…貴女は今、幸せ?』

全く同じ問いに、私は頷いた。

『…そう、幸せなんだ……羨ましいな』

少女が俯くと小さな嗚咽が聞こえた。

「貴女は…誰?」

私はいつの間にか問いかけていた。

少女はゆっくりと顔を上げると、両手を広げた。

『…ここは夢。今は無い景色…過去の虚像…貴女が見ているのは自らの罪』

「自らの……罪?」

少女は頷く。

『思い出して、貴女の罪を……貴女は多くの人の未来を奪った』

「私が…?」

私は記憶を辿ってみる。しかし、私は人の命を奪ったり、誰かの人生を目茶苦茶にした事はない。

大昔の人妖大戦の時の護れなかった人間達の事だろうか…？

『違うよ……もっともっと大きな罪』

少女は広げた両手をゆっくりと胸の前にもっていく。

『両親は喧嘩ばかりしていて嫌いだった…。学校も、友達なんかいなかった。親が離婚して、行方不明になって、更に無口になってから私は誰からも必要とされなくなった。誰にも受け入れてもらえなくなった…』

ゾクリと背中に寒気がした。

『皆、私を拒絶した。親も、友達も、そして……自分自身さえも…』

いけない……“彼女”は目覚めさせるべきではない。

『ねぇ、桜花…貴女は人殺しなんだよ。それも大量殺戮に等しい事をした…』

ダメだ…彼女にこれ以上喋らせたら……私の中の何かが壊れる。

足を動かそうとするが動かない。そのことに私は驚いた。まるで自分の足ではないかの様にピクリとも動かない。

『桜花、貴女の前世の記憶……結構曖昧じゃない？』

彼女の言葉にドキリとした。彼女はどうして私の名前や前世の事を知っている？

いや、そもそもどうして“私の記憶に穴がある”事を知っているのか…？

私の前世の記憶は曖昧だ。町並みやプレイしたゲーム等はハッキリと覚えている。しかし、自分の名前……いや、それどころかどのような姿で、どんな生活をしていたのか…自分の情報だけがスッポリと抜け落ちていた。

『自分の事がわからない……どうしてだかわかる？』

――ビシッ

「……あっ」

彼女が何かを包む様に手を動かすと、それに連動するかのように空間に皹が入る。

バキバキ、と徐々に皹が広がっていく皹をただ呆然と眺める。

知っている……私は、この光景を知っている。

『懐かしい？世界が消える瞬間だよ？貴女は世界中の生物を消したの』

そうだ…これは前世で私が世界を拒絶した時に……

『私は、貴女が世界を拒絶した時に一緒に拒絶して消そうとした過去の私…』

二人の間を一瞬だけ強い風が吹く。その時見えた彼女の顔は……私と全く同じ。

ただ、彼女の黒い瞳には私には無い狂気の色があった。

『酷いよ……私も…私も一緒にそっちの世界に行きたかった！！私だけが拒絶されるなんて間違ってる！！』

辛くて、忘れたくて、拒絶した昔の“私”……そうか、消えていなかったのか…

彼女は両手で顔を覆うと、うずくまってまた嗚咽を漏らし始める。

「私は……」

私が声をかけようとした瞬間――。

『もう……いいや』

今まで泣いていた彼女が立ち上がる。

『――ふ、ふふふ』

彼女の顔は――笑っていた。

真っ赤な涙を流しながら――。

『くっ…はは、ははは……あはははははははは!!』

自分と同じ顔が狂った様に笑う光景に、私は声が出なかった。

『いいわ……私を拒絶するなら……私が貴女を同じ目に合わせてあげる!!私が貴女の世界を壊してあげる!!何も無い、独りぼっちでいる事が…どれだけ辛いかを教えてあげる!!』

彼女は再び泣いていた。血の涙を流しながら。まるで母を求める子供の様だった。

「あぁ、私は……」

私は“私”をおいてきちゃったんだ。私は“私”なのに……消える筈がないのに…。

分かれてしまった私の分身。ずっと独りぼっちで眠り続けていたもう一人の私。

「私は、なんて…馬鹿なんだろう」

『さぁ、私が“私”に絶望を与えてあげる!!貴女はそこで見てなさい!!』

突然、何処からか現れた鎖が私の四肢に巻き付く。

「…あ」

私は抵抗しなかった。

いや、できなかった。きっと……これは私への罰。

一つの世界を消して、過去の自分さえも消そうとした…我が儘な私への罰だ。

『さぁ…眠りなさい。そうしたら余計な事なんて気にしなくて済むわ』

“私”の言葉を聞きながら、私の意識は深い闇に沈んで行った。

『…おやすみ』

真っ暗な空間に彼女の声だけが響いた。

『そして…おはよう』

◆私と“私”（後書き）

次回はもう一人の桜花が暴れ回る！

ピクシブにて『表裏』を投稿しました。シンプルです。なんの捻りもありません（汗）

いつものように『二次小説』のタグで検索をｍ（＿＿）ｍ

◆集う者達（前書き）

目覚めた“彼女”は全てを拒絶しようと動き出す――

そんな彼女を止めようとするのは桜花が出会った友人達だった――

◆集う者達

草木も眠る丑三つ時…。

博麗神社から一つの人影が空へと舞い上がった。

星空の下を飛んで行く人影は、まるで楽しむように両手を広げる。

『凄い、凄い！空を飛ぶってこんな感じなんだ～！』

暗い夜空でも透き通るような少女の凛々しい声は、まるで小さな子供の様に弾んでいた。

『これが幻想郷…』

霧の湖を、妖怪の山を、人間の里を、ぐるりと一周見て回る。

『…実際に見ると、本当にいい所よねぇ』

少女は目を閉じて深呼吸をする。

そしてゆっくりと目を開ける。その時、彼女の目には狂気の色があった。

『まぁ、今から消えて無くなるんだけどね。……ふふふ…あははははぁ！！』

桜花の姿をした少女は、狂気に身を任せてただ笑う。

『さぁ…今日は世界最後の日よ！！存分に足掻きなさい！！』

彼女が両手をぐっと握る。

たったそれだけで…空間が割れた。

バギリ、と鈍い音がして彼女を中心に空間に皹が入っていく。

『ふふふ…桜花、貴女に…私と同じ絶望を…』

～紫の家～

「…っ！？な、何よこれ！？」

幻想郷のとある場所に存在する家。そこでこの家の主、八雲紫は混乱していた。

突然現れた巨大な力。妖力、神力、霊力、全てが混ざった巨大な力が空間に皹を入れている。

「こんな出鱈目な事をするなんて……一体誰が！？」

紫が知る中でこんな事ができる人物は一人しかいない。

しかし、彼女はそんな事をするような妖怪ではない。あの青空の様な…優しさの塊の様な彼女では絶対にやらない事だ。

「でも、だとしたら誰が…？」

スキマを開こうとするが、何故か原因の近くにはスキマが繋がらない。

紫は舌打ちをすると、家を飛び出して空へと舞い上がる。そして、一直線に力の中心へと向かって飛んで行った。

～白玉楼～

白玉楼の一室で、西行寺幽々子は夜空を睨んでいた。

「この力は…一体？」

いつもの穏やかな顔はそこには無く、真剣な目をしたまま夜空の一点を見つめていた。

とてつもなく巨大な力を感じて目を覚ましたのが数刻前…。徐々に強くなる力に彼女は危機感を覚えていた。

「…妖忌」

「…はっ、ここに」

幽々子の声に答えたのは白玉楼の庭師、魂魄妖忌。

彼は、幽々子の部屋のすぐ外で、何時でも行動できるように控えていた。

「…出かけるわよ」

「承知致しました」

力の中心に向かって、静かに亡霊と半人半霊は飛び立った。

～妖怪の山～

「…これは」

妖怪の山の頂上付近にある天狗の屋敷。その屋敷の屋根に一人の着物姿の女性がいた。

「…天魔様」

部下の天狗に天魔と呼ばれた女性は振り返る。

仲間の鴉天狗を連れてこの山を再び訪れてから数百年。懐かしい桜花の気配を感じながら暮らしているうちに、彼女は“天魔”と呼ばれるまでになっていた。

「…私は少々出かけます。私がいない間、ここの警備を怠らないように」

「はっ！！」

部下の返事に頷くと、天魔……射命丸真矢は夜空へと飛び立った。

～迷いの竹林・永遠亭～

迷いの竹林の中に存在する永遠亭。そこに住む住人、蓬莱山輝夜

と藤原妹紅は縁側で一緒に空を見上げていた。

「輝夜、これって…」

「わからないわ。永琳、調査するから準備して…」

「準備なら…もう終わっていますよ、姫様」

部屋の中から出てきたのは八意永琳。月の頭脳と言われた女性。

「輝夜…」

心配そうに見つめる妹紅の頭を輝夜は撫でる。

「大丈夫よ、妹紅。すぐに帰ってくるわ」

月の頭脳と月の姫は、親友に見送られながら夜の空へと舞い上がる。

～博麗神社～

「これは……異変？」

博麗の巫女…博麗霊那は、お札とお祓い棒を準備すると奥の部屋へと足を運ぶ。

「桜花様、大変です！！幻想郷が……」

霊那が部屋に入った時、そこには綺麗に畳まれた布団だけがあった。

「……桜花様？」

霊那は首を傾げるが、先に行ったのだろうと思い、神社を飛び出した。

～四季の花畑～

花畑の中心にある墓石。その上で、博麗リンは静かに目を閉じていた。

「リン…」

目を開いた先にいたのは小柄な少女だった。

青い服に青い髪、黒いリボンに左腕に着けた黒いカバー。そして、腰に挿した大剣。

「……待ってたよ、チルノちゃん」

チルノは腰に挿したバスタードチルノソードを地面に突き刺す。ズンッ、という音と共に、剣は三分の一程度地面に埋まる。

「あんたがわざわざ博麗の巫女や紫を呼ばず、あたいを呼んだってことは……桜花に何かあったの？」

チルノの真剣な眼差しを真っ直ぐ見据えながら、リンは頷いた。

「お姉ちゃんの……いや、世界の一大事だよ！」

「世界の一大事、か…」

ふと、辺りが明るくなったことに気づいた氷精と博麗の神の一人は夜空を見上げる。

「あれは…」

「……」

そこにあったのは、白い満月だった。

本来の月にあるはずの模様は一切無い。ただ白いだけの月があった。

そして…その中心に、月を背後に一つの人影がある。

背中まである髪の先を紐で束ね、頭の上には獣耳。腰の辺りからは柔らかそうな尻尾。

「…桜花」

チルノが名前を呼んだ時、複数の光が別々の方向から飛来する。

チルノは地面に刺さった剣を握ると、リンへと顔だけで振り返る。

「…チルノちゃん、お姉ちゃんをお願い」

「…うん、わかってる」

チルノはバスタードチルノソードを腰に挿して地面を蹴る。

「私が呼ぶまでもなかったかな…」

リンは目を閉じると光を残してその場から消えた。

チルノは舞い上がる途中で、湖から緑色の髪をした少女がやって来るのが見えた。

「…大ちゃん」

「私を置いていくつもりだったの？水臭いよ、チルノちゃん！」

大妖精はいつもの様にチルノに笑いかける。

「チルノちゃん、私だって役に立つよ。桜花さんの…いや、あの人の所に行くんでしょ？」

「うん…ありがとう、大ちゃん」

チルノは再び視線を桜花へと向ける。

いや…桜花の姿をした“何者”かに向ける。その目に静かな怒りを宿して。おそらく隣の大妖精も、今集まって来ている者達も気づいている。

「（…あれは桜花なんかじゃない）」

チルノと大妖精は飛ぶスピードを上げた。

～幻想郷上空～

『…ふふふ、来た来た。いっぱい獲物が来たわぁ』

桜花の姿をした少女は笑いながら白い月を見上げる。

空間の輝は徐々に広がり、カケラとなって舞い上がる。キラキラと輝くそれは、まるでダイヤモンドダストの様に綺麗だった。

「そこまでよ！！」

突然の声に彼女はゆっくりと振り返る。

『いらっしゃい、八雲紫』

笑いかける彼女とは裏腹に、紫は険しい顔をしていた。

「桜花、一体何故こんな事を！？」

紫のを聞いた彼女はニヤリと笑う。

紫はゾクリと背中に寒気を感じて思わず少しだけ後退した。桜花は絶対にあんな笑い方をしないはずだからだ。

『何故って…、この世界を壊したいからよ』

笑いながらそう答えた彼女に紫は言葉を失ってしまった。

そんな時、新たな姿がその場に現れる。

「嘘ね、桜花はそんな事を望むはずがないわ」

紫横に並ぶ様に、西行寺幽々子が現れた。すぐ後ろに妖忌もいる。

「そうです、彼女はいつも優しく全てを見守っていました」

幽々子とは反対側に黒い翼を広げた着物姿の女性…射命丸真矢が現れる。

「そんなあいつが、こんな事するわけないじゃない」

紫の後ろに輝夜と永琳が現れる。

「貴女は…桜花様ではありませんね？」

紫のすぐ隣に霊那がやって来た。

『あら、私が桜花じゃないなら誰だというの？私は正真正銘、鈴音桜花よ？』

両手を広げた彼女は見下すような視線を全員に向けている。

「違うね、あんたは桜花じゃない」

紫達よりもっと高い所からの声に全員が見上げる。

そこにいたのはチルノと大妖精だった。

『あら…酷いわチルノ、貴女も私のことを偽物だって言うの？』

「気安くあたいの名前を呼ぶな。あんたにそんな資格はない。桜花を帰せ！！」

チルノの目には怒りの色がある。今まで、ここまで怒ったチルノを見た者はいなかった。

『ふ…ふふふ…ふふふふふ』

桜花の姿をした彼女は、笑いながら両手で顔を隠すと笑い始めた。

『いいなぁ、桜花は皆に愛されていて…羨ましくて、憧れるわ……

…そう、憎らしいくらいにねぇ！！！』

ざわり、と空気が変わった。まるで絡み付く様な空気が辺り一面を包み込む。

顔を上げた彼女の色が変わる。夜よりも黒い“漆黒”へと…。

獣耳や尻尾は消え、髪も服も黒くなる。その姿は正に人間だった。

しかし、濃密な力が彼女が普通の人間ではないと理解させる。

『ふ、ふふふ……可愛らしい命達……私が粉々にしてあげる！！』

両手を広げた彼女の両目からは血の涙が流れていた。

『さぁ…終わりを始めましょう』

彼女の言葉を合図に、全員が動き出す。

ここに、幻想郷最強の者達による戦いが幕を開けた。

◆集う者達（後書き）

今回の戦いは幻想郷だけでなく世界をかけた戦いです。

さぁ、この世界はどうなるのか！？

◆幻想郷大戦（前書き）

最強の力を持つ者達の戦いが今、始まろうとしていた…。

◆幻想郷大戦

幻想郷の夜空を、ひらひらと光で出来た蝶が飛び回る。普通に見ればそれは幻想的で、美しいとも思えるだろう。

しかし、目の前に広がる光景は美しさよりも恐怖を感じさせる。

辺り一面を飛ぶ色とりどりの蝶は強力な『死』の呪いがかかっている。

そう、周りにある蝶は全て幽々子が作り出した『黒死蝶』なのである。

幽々子の手の平から飛び立った蝶は桜花を囲むように飛び回る。時には妖怪でさえ死にいたらしめる幽々子の黒死蝶。それを、あろうことか桜花は微笑んで手の平に乗せた。

幽々子の顔が険しくなる。それを見た桜花は笑みを深くした。

『無駄よ。私の能力を忘れたの？』

――ありとあらゆるものを拒絶する程度の能力

桜花はこの能力で幽々子の呪いを弾いていた。しかし、幽々子も彼女に能力が効かないのは承知の上だ。

幽々子が顔を険しくしている理由、それは桜花に全く“負担が掛かっていない”事に対してだった。

周りの空間の崩壊は続いている。つまり、桜花は世界の崩壊に力を使いつつ、幽々子の力を弾いている事になる。

更に驚くべきはその彼女の状態だ。

幽々子の「死を操る程度の能力」は強力だが、強い力を持った相手には効かない。それでも、多少動きが鈍る程の負担が掛かるはずなのだ。

しかし、桜花にはそれらが全くと言っていい程効いていない。隣を見れば、紫も険しい表情をしている。

幽々子だけではない。紫、真矢、輝夜……彼女達も能力を使っていた。彼女達の能力は目に見えない力だ。それを一度に受けて、桜花は尚も余裕の表情だった。

『小細工は通用しないわ。正面から全力でかかってきなさい！！』

血で濡れた狂気の笑みを浮かべながら、桜花は両手を広げて誘いをかける。

幽々子が広げていた扇をパチンッ、と閉じる。

すると、先程まで辺りを飛び回っていた蝶が一匹残らず全て消えた。

「紫、ここは正面からぶつかるしかないわ」

幽々子が再び扇を開くと口元を隠す。

「…ええ、能力が通じない以上、力押しでいくしかない」

紫も座っていた姿勢から立ち上がる。同時に腰掛けていた背後のスキマも消えた。

「…勝算はあると思いますか？」

紫にそう尋ねたのは真矢だった。

「射命丸真矢…だったわね？」

紫と真矢は数百年前に会ったことがある。紫に取材を申し込みに行った時だ。

「はい、今は妖怪の山で天狗達をまとめています」

昔の様な活発な印象はなく、大人の女性らしい物静かな印象を受ける。

「そう……昔話に浸りたいところだけれど、今はそんな場合ではないわね」

紫も幽々子と同じ様に扇を取り出して、口元を隠す様に広げる。

「勝算は…一割もないわ」

紫の言葉にそれぞれが息を呑む。

――ただ、一人を除いて。

「…関係ないよ」

「…チルノちゃん？」

それはチルノだった。剣を腰のホルダーから抜くと、しっかりと構える。

「勝算なんて関係ない。あたいは、ただ桜花を助けるだけだ」

チルノの瞳には強い意思が宿っていた。それを見た紫が微笑む。

「…そうね、勝算があっても無くても関係ない。私達は私達にしかできない事をするだけよ」

紫が扇を振ると彼女を中心に弾幕が現れる。

「ふふ…まさか、妖精にそんなことを言われるなんて…私もまだまだだよね」

そう呟いたのは輝夜だった。彼女の周りにも弾幕が浮いている。永琳も何も言わずに弓を構えていた。

「…桜花様、一時の無礼をお許し下さい」

霊那はお札とお祓い棒を構える。

幽々子の手の平には新たな蝶がいる。これは能力ではなく、攻撃

の為のものだ。

この場にいる全員の目が桜花を見る。

『……ふ～ん』

桜花はつまらなそうに彼女達を見渡すと、広げていた両腕をだらりと下げた。

『もうちょっと追い詰められた顔が見たかったけど…まぁ、いいか』

桜花は半身の状態になる。全員が桜花が戦闘態勢に入ったことを感じて身構える。

「…行け！」

先手を取ったのは紫だった。待機させていた弾幕を一斉に発射する。

『甘いよ』

桜花はするりと弾幕の隙間をかい潜る。

『こんな隙間だらけの弾幕で私を仕留めることは…』

…できない、そう言おうとした桜花の目の前に鮮やかな色の蝶が飛来した。

『…っ！！』

咄嗟に体を捻って回避する。あと少し判断が遅かったら被弾していた。

『今のは…幽々子か』

バツの悪そうな顔をする桜花に、幽々子がニヤリと笑う。

「はあああぁぁぁ！！」

その幽々子の隣を抜けて、一陣の風が桜花に迫る。真矢が作り出した風である。

天狗である彼女にとって、風を操ることはたやすい。風は目に見えない空気の流れだ。それは時として、獲物を切り裂く鋭い刃と化す。

紫と幽々子の攻撃を避けてバランスを崩していた桜花に、この風は避けれない。

『…ふっ！』

短く息を吐きながら、桜花が右手を前に突き出す。同時に、彼女の周りに薄い膜の様な結界が張られる。

風は一瞬、結界を震わせたが、破ることができずに霧散した。

しかし、それで終わりではなかった。

新たに複数の攻撃が結界にぶつかる。それは弾幕、矢、クナイ、札…。あまりの数の攻撃に、即興で作り上げた結界に『バキッ』と、

輝が入る。

『くっ！』

一瞬、表情を歪めた桜花だったが、なんとか耐えた結界に安堵した。

それ故に、桜花は突進してくる彼女の存在に気がつくのが遅れた。

「うりゃあああぁぁぁ！！」

叫び声で気がついた桜花が見たのは、大剣を構えて突っ込んでくるチルノの姿だった。

すぐに結界に力を込め直す。それとチルノの大剣が激突するのは同時だった。

拮抗したのは一瞬だけ。桜花の結界はあっさりと砕け散る。

『ちっ…』

桜花は舌打ちをしながら大きく後ろに下がる。

しかし、それは間違いだった。

「二重結界・縛！！」

霊那の声が聞こえ、次の瞬間には桜花の周りには二重の結界ができていた。

「捕まえた！！」

霊那は陰陽玉と札を構えて笑みを見せる。

桜花はすぐに結界を破ろうとする。しかし、それを許す彼女達ではない。

「私達を忘れているわよ？」

突然、桜花を囲む様にスキマが開く。そして、その中からは先程回避した紫と幽々子の弾幕が次々と飛んできた。

『…くっ、この！』

桜花は弾幕を回避するが、避けた弾幕は後ろのスキマに入ると、別のスキマから再び遅いかかる。

桜花は完全に囲まれていた。

「準備できました。いきます！！」

桜花が回避に専念している間に力を溜めていた霊那が、一枚の札を取り出し、桜花に向かって投げつける。

「神技・八方龍殺陣！！」

札が桜花の目の前で発光する。そして次の瞬間、轟音と共に巨大な光の柱が空高く立ち上る。

しかし、その光を見る彼女達は、苦い顔をしていた。

「……当たりはしました。でも、手応えが小さい。咄嗟に回避したようです」

霊那が息を吐きながら言うと、紫が新しい弾幕を作り出す。

全く打ち合わせもしていない彼女達だが、先程の連携はまるで長年の仲間の様に息が合っていた。

それでも、即興の連携攻撃では桜花には大したダメージは与えられない。それは全員がわかっている。

そのため、それぞれ新しい攻撃の準備に入る。

『…ああ～、びっくりしたぁ』

そんな軽い言葉と同時に光が消えて無傷の桜花が現れる。

『まあまあだったわ、霊那』

と、肩に付いた埃を掃う様な仕種をする。

『さて、やられてばかりじゃ情けないから…私からも反撃させてもらうわね』

桜花の笑みを見た紫はハッとした。さっきまで広がっていた空間の輝が止まっていたのだ。

これはつまり、桜花が能力に使っていた力を戦力に加えたことになる。

桜花が構えたのを見て弾幕を放つと同時に結界の準備をする。

「全員、気をつけなさい！さっきみたいにはいかないわよ！！」

紫が全員に呼び掛ける。しかし、その時には桜花は既に動いていた。

「っ！？　幽々子さん、危ない！！」

真矢の声が聞こえた時にはもう遅かった。

「…え？」

誰にも見えないスピードで、桜花は幽々子の懐まで入りこんでいた。

『…まず一人』

桜花は笑顔を見せながら爪を振るう。幽々子は全く反応できていなかった。

「そうはさせん！」

『…ん？』

しかし、桜花の爪は弾かれる。

幽々子の前には両手に刀を持った白髪の青年…妖忌がいた。

「ありがとう、妖忌」

「いえ、これが私の役目ですから…」

何とか防いだ妖忌だが、実際は冷や汗が止まらない程緊張していた。

接近戦を主に戦う妖忌は、そのスタイル故に動態視力が非常に高い。

その妖忌でさえ、今の桜花の姿は見えなかった。同じ様にスピード重視で動態視力が良い真矢が教えてくれなければ反応できなかっただろう。

『ちぇ、仕留め損なったわ……おっと』

舌打ちをした桜花は、背後からきた紫の弾幕を避ける。

「幽々子、大丈夫!?」

「ええ、妖忌が守ってくれたから」

桜花は体勢を立て直すと、次は輝夜へと向かっていた。

「姫様、下がってください!」

すぐに永琳が迎撃に出る。器用にフェイントを混ぜた矢を連続で放つ。

しかし、桜花は余裕の表情で全て避けると、永琳に向かって妖力

弾を放つ。

永琳も力を込めた矢を放ち相殺させる。ところが、さっきまで数十メートル離れていた桜花は、もう目の前まで接近していた。

「くっ、速い！！」

『とりゃ！』

繰り出された拳を、永琳は両腕を交際させて防ぐ。しかし、勢いを殺すことができず、永琳の体はあっさりと数メートル吹き飛ぶ。

「くっ…姫様！！」

永琳が矢を構えるが、桜花は既に輝夜に手が届く距離にいる。

「（くっ…間に合わない）」

永琳がそう思った瞬間、突然別の影が桜花と輝夜の間に入る。

「桜花さん、やめてください！！」

それは大妖精だった。瞬間移動で二人の間に割り込んだのだ。

大妖精はクナイを両手に持った状態で桜花の爪を受け止めている。

『どきなさい！』

桜花は両手を振り上げて大妖精のクナイを弾くと、彼女の腹に蹴

りを入れる。

「うっ…がはっ……チルノちゃん！！」

大妖精は吹き飛びながらも輝夜の手を掴み、吹き飛ぶ力を利用して一緒にその場を離脱する。

「はあああぁぁぁぁ！！」

そこに、青い光が流星の様に一直線に突撃して行く。

それは、冷気を纏ったチルノだった。

「パーフェクトフリーズ！！」

チルノは、バスタードチルノソードからスイカソードを取り外すと、桜花に向かって投げつける。

『…ふん』

桜花はあっさりとそれを回避する。しかし、これがチルノの狙いだった。

冷気を纏ったスイカソードは、円を描く様にチルノへと戻る。

「凍れ！」

チルノの掛け声で、スイカソードが飛んだ場所の空気中の水分が凍る。

細かい氷の粒となった水分は桜花を囲む様に集まると、まるで縄の様に彼女の体に巻き付く。

『こんなもの…』

桜花は氷を壊そうとするが、圧縮された氷の縄は頑丈でなかなか壊れない。

「でやぁぁああ！！」

動けない桜花へとチルノは剣を振り抜く。

ザンッ、という音と共に桜花の腹部に赤い筋が入る。

『…うっ』

この戦いが始まって初めて、桜花に傷がついた。

桜花は吹き飛ばされながらも氷を砕いて脱出すると、腹部に手をあてる。傷からは血が流れているが、それほど深い傷ではない。おそらく、チルノが手加減をしたからだ。

『血…私の……血…ワタシノ…チ…』

手の平についた血を見た瞬間、桜花の気配が変わった。

『嗚呼、ワタシノ血ガ流レテ行ク、ワタシノ…血ガ……ハ、ハハハハ！！』

突然笑い出した桜花に全員が驚く。桜花の目から流れる血の量が

一気に増えた。

『嗚呼、何故私ヲ拒絶スル？世界ニ拒絶サレ、自ラニ拒絶サレ、我ガ身ニ渦巻クハ絶望ノミ！！私ガ何ヲシタ！？何故私ガ拒絶サレル！？何故何故何故！？』

まるで壊れた人形の様に、棒読みで叫ぶ桜花の姿は正に狂っているとしか言えなかった。

全員が唖然とする中、やはりチルノが前に出る。

「あんた、何をそんなに必死に求めてるんだ？」

チルノの言葉にピタリと桜花の動きが止まる。

『…何ダト？』

チルノは剣を肩に担ぐ様に乗せると、呆れた顔をする。

「あんたは何故拒絶されるんだ、と言ってるけど、自分から手を差し出したの？」

チルノの言葉に桜花が息を呑む。

「桜花は皆に手を差し延べてたよ。だから桜花の周りにはたくさんの人が集まるんだ」

『……』

「あんたは、自分から前に進もうとしてない。拒絶されるのを怖が

って、誰かが助けてくれるのを待つだけの臆病者だ！」

チルノの剣幕に桜花は一瞬気圧されたかの様に怯む。

『私ハ…私は…ち、違う…』

「だから、あんたは桜花であって桜花じゃない。ただ名前と姿が同じだけの…別人だ！！」

『違う！私は桜花だ！同じ存在だ！！私だけが消えていいなんて…間違ってる！！』

桜花はチルノに向けて妖力を放つ。まるで巨大なレーザーの様な妖力に、チルノは怯むことなく迎撃しようと剣を構える。

「…どきなさい」

「…え？…うわっ！？」

しかし、チルノは何者かに突然肩を引かれて思わず後退する。

チルノが見たのは、緑色の髪とチェック柄のベストに日傘…。

「ゆ、幽香！？」

チルノの前にいたのは、風見幽香だった。

幽香は迫る妖力波を見ると、日傘を構える。

「――マスタースパーク！！」

日傘から打ち出されたのはマススパークだった。妖力同士がぶつかり合い、そして相殺する。

「…ハッ、この程度？」

幽香は鼻で笑いながら、つまらなそうに桜花を見た。

「チルノの言う通りよ。あなたじゃ、桜花の足元にも及ばない」

幽香はチルノを指差すと、桜花を睨む。

「私は桜花に会いに来たの、桜花を出しなさい」

『だから、私が…』

「あなたじゃない。そこで寝てる桜花を出せと言ったのよ」

幽香は真っ直ぐに桜花の胸を指差した。

「そこにいるんでしょ？早く起きなさい！」

桜花の胸の奥で、何かが反応する。焦る桜花を見て、幽香は笑みを浮かべる。

「さぁ、こんな戦いは終わりにするわよ！」

幽香の言葉に全員が頷き、構える。

――幻想郷に夜明けが近づいていた。

◆幻想郷大戦（後書き）

次回、戦いの完結と、その後に起こった思わぬ出来事が…。

お楽しみに！

◆幻想郷の夜明け…そして、長い眠りへと…（前書き）

決着、そして…

◆幻想郷の夜明け…そして、長い眠りへと…

新たに幽香が加わった幻想郷チームは、少しずつ桜花を押し始めていた。

桜花が接近戦をすればチルノと幽香が迎撃…。遠距離では、紫と幽々子を中心として、それぞれが弾幕を放つ。

余裕だった桜花の顔も、少しずつ焦りが見えてきた。いくら膨大な力を持っていても多勢に無勢…。

完全に全員へと手が回らないのである。

『くっ…ちょこまかと…この！！』

その中でも、彼女にとっての一番厄介な相手はチルノだった。

小柄な体を生かした素早い動き…。そして、そこから繰り出される大剣による強力な攻撃。強力な割に素早い攻撃のせいで桜花は苦戦を強いられていた。

『…この、離れろ！』

大剣の腹を蹴り飛ばしてチルノから距離をとる。

途端に弾幕の雨が迫るが、しっかりと弾道を見切り、回避していく。

これならばチルノとの接近戦の方がまだ大変だ、と桜花は心の中で安堵する。

しかし、彼女はそこで驚愕する。

「ふふ…甘いわよ？」

『…っ！？』

弾幕の雨の中を突っ切って、幽香が迫ってきていたのだ。

『なっ…何て無茶苦茶な…！？』

「あら、貴女には言われたく無いわね」

幽香は、距離をとろうとする桜花の腕を掴むと、そのままチルノの方へと投げ飛ばす。

『くっ…！』

慌てて体勢を立て直そうとするが、既にチルノは目の前だった。

「うりゃあああぁぁぁ！！」

チルノが振り回した大剣を、咄嗟に結界を張って防ぐ。しかし、強い衝撃を受けた結界は徐々に皹が入っていく。

『うっ…くぅ…』

桜花は結界に過剰に力を込める。すると、供給される力に耐え切

れず、結界が内側から破裂するかの様に砕けた。

「うわわっ！？」

突然の衝撃に、チルノは慌てて離れる。

結界の中にいた桜花は、爆風をもろに食らったせいで至る所に傷があった。

『ぐっ…』

しかし、能力を使っているのか傷は一瞬で治る。

「幽香、これじゃキリがないよ。何とかして能力を封じないと」

チルノが隣にやって来た幽香にそう呟く。しかし、幽香はニヤリと笑ってチルノを見た。

「大丈夫、そろそろ桜花は能力が使えなくなる筈よ」

「…え？」

幽香の言葉にチルノはキョトンとした顔で首を傾げた。

～桜花（青）Ｓｉｄｅ～

暗い――。

何処までも真っ暗で……何も見えない――。

音は無く、ただ自分の手足を縛る鎖の感覚だけがハッキリとわかる。

もう一人の私がやっている事はわかる。

いや、感じる…と言うべきか…。

私の愛した幻想郷が危ない。でも…私には何もできない。

ただこの場所から外の様子を感じるだけだ。

「私は…」

ぽつりと声が出た。

「私は…一体どうしたら…いいんだろう？」

私は…どこかで間違えたのだろうか？

――過去の私を拒絶したこと…？

「…違う」

――前世の世界に絶望したこと…？

「違う……私は」

そう…私は――。

もう一人の“自分”をずっと独りにさせていた“私”自身が許せないんだ――。

頬を涙が伝うのを感じる。

あぁ…私に泣く資格なんてある筈が無いのに。

「……謝りたいな」

謝って、許してもらえなくたって…それでも謝って…そして、受け入れてあげたい。

だって…“彼女”は“私”なんだから――。

『…じゃあ、行こうよ』

「……え？」

突然聞こえた声に顔を上げる。

そこにはリンが立っていた。

「リン……どうやって？」

よく見ればリンの体は透けていた。

『私の能力、「言霊（ことだま）を操る程度の能力」で、直接桜花に話し掛けてるの』

言霊…元来、言葉には不思議な力が宿ると聞いたことがある。

リンは言うなれば、言葉を操る力を持っているのだ。

『桜花、「彼女」に謝りたいんでしょ？』

リンの言葉に、頷くことで肯定を示す。

『じゃあ、こんな所に閉じこもってないで、会いに行かなきゃ！』

「でも……どうやって？」

手足に巻き付く鎖は力を封じる力でもあるのかびくともしない。

『大丈夫、私達が助けてあげる』

「私…達？」

リン一人なのにどうして“達”なのだろう？

そう思った瞬間、たくさんの人影がリンの後ろに現れた。

どうやら全員が女性らしい。しかも…あの服は……まさか…！？

たくさんの人影の中から一人の女性が前に出る。

その女性が着ていたのは巫女服…博麗の巫女が着る、紅白の巫女服だった。

『お久しぶりです…桜花様』

数百…いや、もう千年は経っただろうか？

生前と変わらぬ姿で、初代博麗の巫女…博麗霊樺が立っていた。

「霊樺…なの？」

目の前の光景が信じられなくて、私はただ呆然としながらそう呟いた。

『はい…と言っても、私は既に死んだ人間。今、ここにいる私は、リン様があの世から一時的に呼び出した魂のカケラでしかありません』

「じゃあ、後ろにいる彼女達も…」

後ろにいた女性達は皆、優しい笑顔を浮かべて頷いた。

『はい…皆、リン様のお声を聞き、桜花様のお力になろうとあの世からやって来た、歴代全ての巫女達です』

私はもう一度、彼女達を見る。

皆、力強い目をして私の視線に頷いてくれる。

私と共に幻想郷を飛び回り…そして、最期を見送った歴代の巫女達…。

「こんな…こんな私の為に…」

嬉しくて涙が溢れてくる。

私は…私はなんて幸せ者なんだろう。私の為に、死して尚力を貸してくれるなんて…。

突然、手足に巻き付いていた鎖が切れる。

いきなり自由になった体がふらりと倒れそうになるが、霊樺が支えてくれた。

『さぁ、行って下さい桜花様。私達にできるのはここまでです』

「皆…ありがとう」

彼女達は、全員頭を下げて私を見送ってくれた。

『『『いってらっしゃいませ、桜花様』』』

彼女達の声を背中で聞きながら上へと飛んで行く。

「…お……か…」

上から小さな声がした。

「おう……か」

次第にハッキリとしてくる声…。これは紫かな？

「桜花～」

「桜花殿…」

これは幽々子と妖忌だ。

「桜花さん！」

これは真矢…

「桜花」

「…桜花」

輝夜に永琳…

「桜花様…」
「桜花…」
「桜花さ～ん！」
霊那と幽香と大ちゃん…
――そして
「桜花、こっちだよ～！」
最後の声はチルノ…。
あぁ、皆が待ってる。今、行くからね――。

～幻想郷上空～

「…来た」
チルノの言葉に全員が彼女に注目する。
「間違いない。桜花が来る！」

チルノは剣を腰のホルスターに戻すと、両手を広げて何かを抱きしめる様な動きをした。

「…おかえり」

チルノの頬を一筋の涙が伝う。全員が、そこに“彼女”がいるんだとわかった。

『…ただいま』

皆に帰還を伝えるかの様に、いつもの優しい声がした。

『そんな…どうして？』

目の前の光景に、桜花（黒）は混乱していた。

彼女は間違いなく心の底にいた筈だったのに…どうやって出てきたのだろう？

原因を考えるが全く解らない。

しかし、彼女はまだ万全ではない。どうやって出てきたかは知らないが、肉体の主導権はまだ自分にあるのだから…。

と、自分なりに気持ちを安定させた桜花（黒）は再び構えをとる。

チルノもそれに気づき、バスタードチルノソードを構える。

『チルノ、私の力を貸してあげる。だから…思いっきりやっちゃいなさい！』

すぐ側から聞こえる桜花の声と気配に、チルノは思わず笑顔を浮かべる。

頭上で剣を数回回転させると、右足を半歩引いて半身になる。剣は剣先を下ろした腋構えに構える。

「いくよ、これが…最後の攻撃だ！」

今までで一番速いスピードでチルノは飛び出した。

青いオーラの様にチルノと桜花の力が混ざり合い、そして体を包む。

桜花（黒）は迎撃の姿勢をとると、能力を発動させようとする。

『…え？』

しかし、彼女の能力は発動しなかった。それどころか、今まで回復に使っていた能力まで解除されている。

『まさか…』

表に出た本来の桜花によって、彼女の力は完全に無力化されていた。

焦っているうちにチルノが迫る。

能力に頼った戦いはもうできない。彼女はありったけの力を込め

て結界を作る。

しかし、その結界もチルノの一振りであっさりと砕けちった。

チルノが振り抜いた剣を持ち直すと、「ガチャリ」という音が剣から発せられた。

「…ブレイク！！」

『…っ！？』

次の瞬間、一本だった剣がバラバラに分解され、六本となる。

それらは桜花（黒）を囲む様に宙に浮いたまま静止する。

チルノから出るオーラが強くなる。その衝撃で頭の黒いリボンがハラリと解け、風に流されていく。

「くらえ…あたいの最強の奥義！」

チルノは近くにあった一本を手に取ると、正に閃光と言っても間違いではない程のスピードで彼女を切る。

『ぐっ！』

彼女は防御しようとするが、チルノが速過ぎて完全に無駄に終わっている。

チルノは新しい剣を手に取ると、再び切る。手に取る、切る、手に取る、切る……。

まるで嵐と呼べる怒涛の連続攻撃。チルノの姿は青い光の筋にしか見えず、誰にもその姿を捕えることはできない。

そして、数十にも及ぶ斬撃の後、チルノは上空に待機していたメインの剣…あたり剣を手に取る。

「これがあたいの奥義…」

チルノは全身に力を込めて急降下する。周りにいた者全員が、チルノの背中を桜花が優しく押してあげた様に見えた。

「超?武神覇斬!!」

あたり剣による必中のトドメの斬撃が桜花（黒）に直撃し、青い光の衝撃波が周り吹き荒れる。

そのまま地面に着地したチルノの周りに、空中に留めていた剣達が役目を終えたとばかりに、次々と落下して地面に刺さる。

そして、掲げた右手にあたり剣が納まる。ふぅ、と小さく息を吐く。

ゆっくりとチルノが顔を上げると、そこには二人の桜花が浮いていた。

「ねぇ…」

桜花は自分に語りかける。黒髪は乱れ、服は所々が破れており、傷だらけだった。

『なによ…』

俯いて荒い呼吸をしていたもう一人の桜花が答える。

「貴女に言いたいことがあったの…」

『……』

何も言わない自分に構わず桜花は続ける。

「今まで、寂しい思いをさせて…ごめんなさい」

『……っ』

ピクリと、彼女の肩が震えた。

「私はもう、貴女を独りにしない。私は貴女を受け入れて、これから生きていくよ」

しばしの沈黙、それを破ったのは彼女だった。

『名前…』

「…え？」

『私の新しい名前を決めてくれたら……許してあげる。同じ名前は……その…ややこしい…』

桜花は笑顔で頷くともう一人の自分の手を握りしめる。

「うん…貴女の新しい名前…決まったよ」

彼女が俯いていた顔をあげる。

「貴女は…彩花（さいか）。これから、色鮮やかに生きれるように…。自分自身を彩れる様に…」

『彩花……私の新しい…名前…』

彼女…彩花の目から涙が溢れる。血の様に赤い涙ではなく、普通の涙が流れていた。

『私……私、皆にたくさん迷惑かけちゃった…』

俯く彩花を、桜花は抱きしめた。

「大丈夫…きっと、皆許してくれる。…もし許してくれなくても、私はこれからずっと、貴女の味方だから…」

『…うん、あり…がとう』

彩花は満面の笑みを浮かべると、光の粒になり、桜花の体へと吸い込まれる様に消えていった。

「私は…もう、一人じゃない」

胸に手を置いてそう呟いた桜花は、その場でくるりと振り返る。

「皆、ただいま」

桜花の言葉に、集まった紫や幽々子達は全員笑顔を見せた。

「「「おかえりなさい」」」

微笑む彼女達を、幻想郷の夜明けの光が優しく包んでいた。

三日後、博麗神社の縁側で桜花と霊那はお茶を飲んでいた。

暖かい日差しが気持ちよく、先日死闘があったとは思えないほど長閑（のどか）であった。

「はぁ…平和ね」

「そうですね…」

お茶を飲みながら青空を眺める。いつもの日常である。

「桜花様、彩花様はどうなされていますか？」

「ん～？…あぁ、まだ寝てるよ。力を使い過ぎたからね」

苦笑いする桜花を霊那は心配そうに見つめる。

「桜花様…」

「ん？どうしたの？」

霊那は桜花の服をギュッと掴む。それは、まるで母親にしがみつく子供の様だった。

たしかに、桜花は霊那が小さい時から一緒に暮らしてきた“家族”だ。母親だと思われてもしかたがない。

「…いえ、何でもありません。…何だか桜花様が何処か遠くに行ってしまいそうな気がして…」

「…霊那、大丈夫よ。私はもう何処にも行かないわ」

「…はい、そうですね。変なことを聞いてしまいました。…私、掃除をしてきますね！」

霊那は立ち上がると、箒を手に境内へと駆けて行った。

「まったく……本当に家の巫女は勘が鋭いんだから…そう思わない？…紫」

桜花の隣にスキマが開いて紫が顔を出した。

「そうね、貴女も相変わらず何も相談してくれないけれど……」

「…ごめんなさいね。心配はかけたくないから」

桜花は目を細めて空を見上げる。

思えば、こうして空を見上げるのは一体何回目だっただろうか…、と桜花は考える。

「この空も…しばらく見れなくなるわね…」

桜花の言葉に紫は拳を強く握りしめる。

「…何年かかるのかしら？」

紫の問いに桜花は首を横に振った。

「わからない…少なくとも五百年から千年くらいは掛かるかな…」

どんな夢をみるのかなぁ、と言う彼女の隣で、紫は俯いていた。

先日の戦いで桜花は一度、自分にかかる能力を完全に解除した。

その結果、彼女は現在、力があまり残っておらず、とても危険な状態なのだ。

妖力も神力も霊力も、自らを存在させる程度しかない。このままでは桜花は消滅する。

そこで、桜花が取った選択は“休眠”だった。

力が元に戻るまで、桜花は休眠状態となり、力の無駄遣いを抑えることにしたのだ。

ただ、どの程度休眠すればいいのか検討がつかない。

元々膨大な力を持っていたが故に、どのくらい眠ればいいのかわからないのだ。

「…桜花」

紫の泣きそうな顔を見て、桜花は思わず苦笑いをする。

「私が寝てる間、幻想郷を頼むわよ?…そうね、そろそろ優秀な式でも探しなさい」

「…ええ」

それから二人は色々なことを話した。幻想郷を囲む結界を作る話や、月の様子を見るついでにちょっと戦ってみようか、といった話等…。

桜花も紫も、笑いながら話し合った。

「ふぅ…こんなにたくさんお喋りしたのは久しぶりだったわ」

「ええ、そうね」

桜花は柱に背中を預けて微笑んだ。瞼が少しずつ、閉じられていく。

「チルノ、怒るかな…」

「そうね、怒るでしょうね…」

桜花は苦笑いをすると空を見上げた。

「起きたらて…ちゃんと…謝ら…なくちゃ…」

紫はまた泣きそうな顔をしていた。桜花の目は、もうほとんど閉じている。

「紫…そんな…顔……しないで……また…会えるでしょ？」

紫は背を向けて涙を拭う。

「ば、馬鹿ね…私がそんな事を心配する筈がないでしょう？幻想郷は私に任せて、貴女は……桜花？」

ふと、何かに気がついた様に振り返った紫は優しい笑みを浮かべた。

「……おやすみなさい、桜花」

柱に背中を預けた状態で、桜花はすやすやと寝息を立てていた。
ただの昼寝ではないかと思う様に自然な姿だった。

紫は桜花を抱き上げると、神社の中へと入って行く。

「安心して眠りなさい…。貴女が起きた時、幻想郷はきっと素晴らしい所になっているわ…」

この日より千数百年、幻想郷で青い妖獣の姿を見た者はいない。

彼女が目覚めるのは、とある夏…幻想郷が紅い霧に包まれる前になる。

◆幻想郷の夜明け…そして、長い眠りへと…（後書き）

実はもう少し色々な原作キャラ達に会いに行く話を書きたかったんですが、そうすると原作がなかなか始まらないので、思い切ってカットしました（汗）

ピクシブにて、チルノの「超?武神覇斬」発動の瞬間をイメージしたイラストを載せておきました。

それでは、また次回でお会いしましょう！

◆閑話・原作開始直前（前書き）

彼女が眠って千年以上…

幻想郷はやはり、いつも通りの日常をおくっている。

主人公二人もいつもの通り…。

◆閑話・原作開始直前

～霊夢Ｓｉｄｅ～

幻想郷の端に存在する博麗神社。

そこで私は、博麗の巫女として生活している。

季節は夏…。蝉の鳴き声を聞きながら毎日の日課である境内の掃除を始める。

この博麗神社は幻想郷と外の世界の境目に建っている。そのため、外から迷い込んだ外来人を送り返す場所としての機能も有している。

博麗の巫女である私は、この神社で博麗大結界の管理と、幻想郷で時折起きる異変の解決を生業としている。

と、言っても普段はこうして人気のない神社の境内を掃除して、縁側でお茶を飲みながらのんびりするのが日課となっている。

ん？修行？…何それ、美味しいの？

しかし、毎日毎日こうして掃除ばかりをしているが、この神社には人が全くと言っていいほど来ない。

唯一来るとしたら、友人の白黒魔法使いだけである。…まぁ、彼女も大抵私とお茶を飲んで、茶菓子を食べるだけ食べて、賽銭も入れずに帰って行く。

まったく…、たまには賽銭を入れて行ってほしいものだ。こちとら異変の解決以外に殆ど収入源がない。そのため、食事はかなり軽いものしか作らない。私は少食だからいいものを、歴代の巫女達は一体どうやって過ごしていたのか…。

境内の掃除を終えた私は、神社の中へと入ると、汗を拭いながら部屋の掃除を開始する。

「あぁもう、面倒臭いわね…」

使わない部屋や道具の整理に、札やお祓い棒の手入れ…。普段から小まめな整頓をしない私は、こうして整理の時になる度に一人で愚痴をこぼしていた。

「あ～あ…勝手に整理整頓してくれる式でもいたらなぁ…」

なんてことを言いながら続きを始める。…ん？じゃあなんで式を探さないか？だって面倒じゃない。……あ、今「この巫女ダメだな」とか思った奴、前に出なさい。もれなく夢想封印で“ズドン”してあげるから。

そんなことをしている間に神社の一番奥にある部屋の前へとやって来た。

少し装飾の施された大きめの扉には桜と狼の絵が描いてある。私は、博麗の巫女となった日から今まで、この扉が開いた所を見たこ

とがない。

先代の巫女から、『ここには博麗の神が眠っている…』と聞いたことがある。

その神は幻想郷を作り出した賢者の一人とされており、千年ほど前にあった大きな戦いで力を消耗し、ここで眠っているという…。

正直、本当かどうかはわからない。この扉はどうやっても開かないのだ。

少し前、興味本位でこの扉を開けようとしたがびくともしない。どんな術式を使っても開かないし、解析もできない。

結局、一日中頑張っても開かなかったので、そのままスッパリと諦めたのだ。

私はその扉の前に立つと手を当てる。こうして触るだけなら普通の扉の感触がするのに…。

「まぁ…いっか」

私はくるりと踵を返すと、お茶を飲むために縁側へと歩いて行った。

―魔理沙Ｓｉｄｅ―

「よし、これで完成だ」

掻き混ぜていた鍋の火を消して小さな瓶を並べると、その中に慎重に鍋の中にある液体を流し込む。

薄い緑色の液体は一見美味しそうに見えるが、こんなものを飲み込んだ日にはもれなく三途の川へと招待されること間違いなしだ。

「さて、効果を試すとするか！」

しっかりと詮をした瓶の一つを持つと外に出る。

「ん～っと……お、あれがいいな」

近くにある木の中から手頃な太さの木を見つけると、手に持っていた瓶を投げつける。

次の瞬間、木にぶつかった瓶は強烈な光を放ち、星型の弾幕を撒き散らす。

「おぉ、流石は私だ。完璧だな！」

私が作っていたのは弾幕ごっこで、マスタースパークを撃つまでの時間を稼ぐ為の携帯型のボムだ。

私のマスタースパークは強力だが隙も大きい。だからそれを補う

ものが必要になるのだ。

「おやおや、相変わらず随分と試行錯誤しているようだな」

上空からの声に顔をあげると、一つの人影があった。…いや、あの人の場合は幽影か？

月と太陽の模様が入った青を基準とした服と帽子。少し暗い緑色の髪。そして手に持つ三日月型の杖。

「魅魔様！！」

彼女は私の隣に降りてくると大きく伸びをした。

「魅魔様、最近見かけませんでしたが、何処にいたんですか？」

「いやなに、博麗神社にいたのさ」

「霊夢の所ですか？」

「ああ、ちょいと自分の限界に挑戦してきたのさ」

魅魔様は自称「博麗神社の祟り神」と自分のことを言っているが、本人に誰かを祟るような気は無く、毎日のんびり生活を送っている。

そんな魅魔様がこれ程の興味を示すのなら、博麗神社には今だに何かがあるのだろう。

「霊夢と勝負したんですか？」

「いや、霊夢には会ってないよ。まぁ、気づいてはいるんだろうけどね」

「あれ？じゃあ、何をしに行ってたんですか？」

博麗神社にある魅魔様が興味を示しそうなものを私は今のところ霊夢以外に知らないのだが…。

「魔理沙、神社の奥にある開かない部屋のことは知っているか？」

「開かない部屋ですか？」

「そうだ、千年以上前から開くことがないという扉…。その中には博麗の神…つまり、幻想郷を作った神がいるという話だ」

なるほど、それなら魅魔様が興味を示すには十分だ。

「それで、中を見たんですか？」

「いや、アタシの全力をもってしても一ミリも動かなかったよ」

魅魔様の言葉に私は驚いた。純粋な火力なら幻想郷で1、2を争う魅魔様の全力の力でも開かない扉があるなんて…激しく興味をそそられる。

「気になるならお前も見てみるといい。アタシもそろそろ行くとしよう」

そう言い残して魅魔様は空へと舞い上がる。

「こうしてちゃいられないぜ！」

私は急いで準備をすると箒に跨がり、博麗神社を目指して飛び立った。

―ＳｉｄｅＯｕｔ―

～博麗神社～

「よっと、霊夢～、いるか～？」

華麗に舞い降りた魔理沙は神社の縁側へと歩いて行く。

「何よ、こんな暑い日にそんな暑苦しい格好して…」

霊夢は縁側でお茶を飲みながら、僅かな風で涼もうとしているところだった。

魔理沙は帽子を取ると霊夢の隣に座る。

「いやなに、ちょっと面白い話をきいたんだ」

「どうせ魅魔から聞いたんでしょ？なんか最近神社に入り込んでは

色々やってたけど」

「流石霊夢だな。魅魔様からこの神社に開かない扉があるって聞いたんだ」

その後、霊夢は魔理沙にしつこく案内するように言われたので、渋々奥の扉まで連れていった。

「ほら、これよ」

「ほう、ただの扉にしか見えないが…」

魔理沙は扉をじろじろと観察すると、懐からミニ八卦炉を取り出した。

「マスター…「こらっ」いてっ！？」

マスタースパークを撃とうとしたところを霊夢に叩かれた。

「あんた、この狭い廊下であんな砲撃を撃つ気なの？」

「仕方ないだろ、私の一番の威力を誇る攻撃だぞ？これがないなら何をしろと言うんだ？」

呆れ顔の霊夢に胸を張ってそう言った魔理沙は、再び扉を眺める。

「う～ん…見た感じではただの扉なんだがなぁ…やっぱり壁ごとマスパで撃ち抜くか…？」

「あんたね、少しは考えなさいよ。魅魔だって魔法を一点集中で放

って周りに被害が出ないようにしてたわよ？」

「私はまだ魅魔様並の魔法は使えないからな。仕方がない、今回は諦めるが、絶対にこの扉の謎を説き明かしてみせるぜ」

「はぁ…好きにしなさい」

霊夢と魔理沙は再び縁側に歩いて行った。

「ふふふ、元気だこと」

扉を挟んだ反対側…つまり、部屋の中では紫がスキマに腰掛けて笑っていた。

「あと少し…」

紫の視線の先には真っ白なベッドがあり、桜花が眠っていた。

紫は立ち上がると、静かな寝息をたてる桜花の髪を撫でる。

「千年以上も寝るなんて…余程寝るのが好きなのかしら？…私も人のことは言えないけれど…」

紫はスキマを開くと、その中に入る。スキマが閉じる瞬間、

「ほら、起きなさい」

そう言い残して。

ここ数年で幻想郷は随分と賑やかになっていた。

湖の辺には紅い館が現れ…

迷いの竹林には月の兎が住み着き…

鬼がやって来たかと思えば他の一部の妖怪達と地下に送られ…

小さな闇魔とサボリ癖のある死神が配属された。

博麗大結界も張られて外の世界からは完全に隠された場所となった。

そして…今、ついに彼女が目を覚まそうとしていた。

◆閑話・原作開始直前（後書き）

次回より紅魔郷スタートです！

◆紅魔郷・プロローグ（前書き）

湖の辺にひっそりと建つ、窓の少ない紅い館。

その中に『彼女』はいた――。

◆紅魔郷・プロローグ

今年の幻想郷の夏は騒がしかった。

突然紅い妖霧が幻想郷を包み込んだのである。それは、まるで幻想郷が太陽を嫌っているかのように…

博麗神社にて、博麗霊夢は考え込んでいた。

「困ったわ、霧が晴れないと洗濯物が乾かないじゃない…」

自分のことしか考えていない様に見えるが、これでも彼女なりに幻想郷の平和を大切に思っているのだ……たぶん。

「ふむ、仕方がない。なんか湖の向こうが怪しいから調べてみましょう」

霊夢はお札とお祓い棒を準備する為に神社に入る。

そんな時、ふと誰かの声が響いた。

『そこの巫女さん…。開かない扉に行きなさい。彼女が起きるわ』

「…っ！…だ、誰！？」

霊夢は気配を探ってみるが、自分以外の気配を感じなかった。

「開かない扉…」

霊夢は胡散臭いと思いながらも神社の奥を目指した。

奥の扉はいつも通り、何をしても動かなかった。

「何なのよ、あの声…開かないじゃないの」

霊夢が溜め息をついて振り返ろうとした時だった。

バチッ、と何かが弾ける音がした。

「…ん？」

霊夢が再び扉に向き直り…そして絶句した。

扉には無数の術式が浮かんでいたのだ。普通の術式なら問題はない。ただ、その数が半端じゃないのだ。何十、何百という術式がまるでパズルの様に複雑に絡み合っている。

「な、何よ…これ」

呆然としていた霊夢は、術式が少しずつ消えていくことに気がついた。

まるで絡んだ鎖を解いていく様に、次々と術式が消えていく。

そして数分後、ついに最後の一つが消えた。

霊夢の目の前には、もはやただの木の板となった扉が佇んでいた。

「……」

霊夢は無言で扉を開ける。

中は至って普通の部屋だった。畳ではなく少し洋風な感じがする部屋には、たくさんの書物が並んでいた。

ふと、霊夢は壁にある大きな板に目が向いた。

「これは…名簿？」

壁には大きな木で縁取られた部分があり、そこに名前が書かれた小さな板がいくつも並べてあった。

「これ…全部歴代の博麗の巫女の名前？」

一番古い「博麗霊樺」から一番新しい「博麗霊夢」…つまり、自分までの歴代の巫女の名前が全て書かれていた。

霊夢は改めて部屋を見渡す。すると、奥にベッドがあることに気がついた。

そこまでゆっくりと歩く。どうやら誰かが寝ているらしい。

「…人？」

ベッドに寝ていたのは、霊夢より少し年上くらいの少女だった。
青い髪に白い肌。およそ美少女と呼んでもいい顔をしている。

「…ぅん」

少女が身じろぎをしたので、霊夢は少し後ろに下がると、何があってもいいように身構える。

「…ふぁ～」

少女は欠伸をしながら体を起こし…

「……ん、誰？」

眠たそうに目を擦りながらそう問い掛けた。

「聞きたいのはこっちよ。あんた誰？ここは私の家兼、神社なんだけど？」

少女はぱちぱちと瞬きをすると首を傾げた。

「…んん？…ここは博麗神社でしょ？」

「…そうよ」

少女は数回辺りを見回すと再び首を傾げた。

「じゃあ、問題ないじゃない。私の家でもあるんだから」

「…はぁ？」

少女はベッドから出ると体を伸ばす。身長は霊夢よりも頭一つ分ほど高い。

「さて…おはよう、今代の博麗の巫女さん。私は鈴音桜花、博麗神社の神だよ」

少女…桜花が笑顔でそう言うと、隠れていた耳や尻尾と共に力を少し解放する。

「…っ！？…妖怪？…いや、神力もある」

霊夢は札とお祓い棒を構えて警戒する。

「ふぇ？何で攻撃しようとするの？」

「あんたが本物だって証拠がない」

「証拠ねぇ…紫から何も聞いてないの？」

「…紫？誰のことよ」

桜花は額を押さえてガクリと俯く。

「紫…話してないのね」

おそらく、今の桜花の様子を見てニヤニヤしているのだろう。今度会ったらただじゃおかない、と桜花は密かに決意する。

「まぁいいや、貴女の名前をまだ聞いてなかったわね」

「…博麗霊夢よ」

ぴくりと桜花の耳が揺れる。

「そう…よろしく、霊夢。…じゃあ、私は千年は寝ていた計算になるわね…」

チルノに怒られるな、と呟いた桜花を見た霊夢はすっかり毒気を抜かれてしまい、お札を懐に仕舞った。

「はぁ、もういいわ。なんか悪い奴じゃないみたいだし…。今は異変の解決が最優先だもの」

「…異変？」

霊夢の言葉を聞いた桜花が目を細める。

「そう、異変よ。紅い霧が幻想郷に広まり始めてるの」

紅霧異変…。

桜花の頭の中にその単語が浮かんできた。

「（ということは…今は紅魔郷が始まったばかりみたいね…）」

桜花が考え込んでいるうちに、霊夢は準備を終えていた。

「じゃあ、私は行くけど…神社を荒らさないでよ？」

「わかってるわ。誰が好き好んで自分の家を荒らすのよ」
「私はまだあんたを信用してないもの」
「…さいですか」
そう言うだけ言うと霊夢は暗くなった空へと飛び立った。
「あ、スペルカード貰うの忘れてた！」
自分も寝起きの運動がてら出発しよう、と考えていた桜花は、自分がスペルカードをもっていないことを思い出した。
「どうしよう……あれ？」
ポケットに何かが入っている感触があったので、中のものを取り出してみると…。
真っ白なスペルカードが数枚。それからメモが入っていた。
『おはよう、桜花。私はわけあって貴女の所に行く時間がないの。だからこの手紙と一緒に空のスペルカードを入れておくわね。スペルカードルールについては別のメモに書いてあるから、それを読んでちょうだい。
じゃあ、できるだけ早目に会いに行くから、それまで頑張って。
―紫より―』

桜花は手紙とメモを綺麗に畳むと、再びポケットに入れる。

「まったく…なんだかんだで世話好きなんだから…」

口ではそう言いながらも顔は笑っており、紫へのお仕置きを軽目にしようかな、と思う桜花であった。

東方紅魔郷～ｔｈｅ　Ｅｍｂｏｄｉｍｅｎｔ　ｏｆ　Ｓｃａｒｌｅｔ　Ｄｅｖｉｌ～

・プレイヤーを選択して下さい。

～博麗の神～
鈴音桜花

移動速度・★★★★
攻撃範囲・★★★★★
攻撃力・★★★★★

・使用するお札を選択して下さい。

青符「桜花専用ホーミングアミュレット」
「夢想封印・青」

少女祈祷中…

◆紅魔郷・プロローグ（後書き）

いよいよ原作開始！

紅魔郷Ｓｔａｇｅ１（前書き）

夜の幻想郷は神秘的な雰囲気を醸し出していた。

神社を飛び立った彼女は、懐かしい顔と再会する。

この夜、幻想郷に伝説の存在が蘇る――。

紅魔郷Ｓｔａｇｅ１

Ｓｔａｇｅ１

夢幻夜行絵巻～Ｍｉｓｔｉｃ　Ｆｌｉｅｒ～

ＢＧＭ「ほおずきみたいに紅い魂」

夜の幻想郷は静かだった。

眼下には紅い霧が立ち込めているが、空は星が瞬き、月が全てを照らす様に浮かんでいる。

もっとも…その月は血のような紅い満月なのだが…。

紅い月と、紅霧の妖気にあてられて興奮した妖精が弾幕を放ってきた。

それを避けながら桜花も弾幕を放つ。

桜花が使うのは自身の妖力から作った弾幕と、以前作っておいた自分専用の陰陽玉だ。

陰陽玉には霊夢と同じように、敵をホーミングする機能がある。

桜花は、千年以上経っても不具合が生じていないことに満足しつつ、向かってくる妖精を撃墜していく。

桜花の目指す場所は紅魔館…敵のボスはレミリア・スカーレット。

だが、桜花には異変の解決よりも優先しようと考えていることがあった。

…そう、フランのことである。

フランドール・スカーレット…レミリアの妹で、少々気がふれており、４９５年の間地下に幽閉されている少女。

彼女の狂気をなんとかすること、それが桜花の目的だった。

「やれやれ、寝起きの運動にしてはハードよね…」

そんな呟きをした後、桜花は周りの風景がおかしいことに気がついた。

先程まで頭上に輝いていた月や星が見えない。それどころか周りの様子もわからない。

完全な『闇』が広がっていた。

「あぁ…懐かしい。そういえば、あの戦いの時には旅に出ていたんだっけ？」

懐かしい妖気を感じた桜花は目を細める。

「貴女は…」

闇の中から声が聞こえた。よく見れば紅い二つの瞳がこちらを見ている。

「千数百年ぶり…か。久しぶり、ルーミア」

闇の中から徐々に輪郭を現したのは小柄な少女。黒い服を纏い、肩まである金髪には赤いリボンが結んである。

宵闇の妖怪・ルーミアがそこにいた。

「久しぶりも何も…何処にいたのよ。散々探したんだから…」

少し怒った様に言うルーミアは、記憶にある姿よりも子供らしくて可愛かった。

「ごめんなさい…わけあってずっと眠っていたの」

「……そーなのかー」

ルーミアは両手を広げたお馴染みのポーズをとる。

「じゃあ…私達に心配かけたんだから、覚悟はできてるよね？」

「物騒ね…私はまた仲良くお茶でも飲みながらお喋りしたいわ」

そう言いながらもお互い弾幕を作り出していく。

「まぁ…本当は、なかなか出番が無くて苛々してただけ…なんだけ

どね」

「今までの雰囲気だいなしだよ！それは言っちゃだめでしょ！？」

「そーなのか？」

桜花は痛くなってきた頭を無理矢理動かす様にして、なんとか平常心に戻る。

「なんか…雰囲気変わったわね、ルーミア」

「う～ん…これのせいかな？」

そう言ってリボンの様に結んである赤い御札を指差す。

「これ、私じゃ外せないんだよね」

ルーミアが触ろうとするが、するりとすり抜けてしまう。

「結構強力な封印ね。私が外そうか？」

桜花の提案を、ルーミアは首を振って断った。

「いや、いいよ…今のままでも十分楽しいし、これのおかげで随分と私も変わったわ。あ、勿論良い方向にね」

「そう、ならよかった」

桜花の言葉を最後に、二人とも距離を取る。

BGM『妖魔夜行』

緑と青の弾幕を回避しながら、桜花も反撃をする。力を封印されているからか、ルーミアの弾幕はそれほど激しくない。

「ん～…桜花って弾幕ごっこは初めてだよね？随分慣れてるみたいだけど…」

桜花は苦笑いしながら弾幕を避けていく。

桜花は前世で紅魔郷をプレイしたことがある。三次元になっても攻撃の内容や弾幕のパターンは大体同じなので、回避しやすいだけなのである。

「むう…このままじゃ拉致があかないね…それじゃあ！」

ルーミアは懐から一枚のスペルカードを取り出した。

―月符「ムーンライトレイ」

ルーミアの両手からレーザーが放たれ、桜花を挟む様に迫る。更に、間を埋めるように弾幕も放ってくる。

「…よっと」

向かってくる弾幕をグレイズしながら桜花も反撃をする。陰陽玉からもルーミアを追尾する弾幕が放たれているので、ルーミアは全てを避けられない様だった。

スペルブレイクになったルーミアは、新しいスペルカードを取り出す。

―夜符「ナイトバード」

ルーミアが両手を薙ぎ払う様に動かすと、それに合わせて緑と青の弾幕が放たれる。

桜花はグレイズしながらも、当たること無く全てを回避し続けた。

「むぅ～…当たらない。さっきの腋巫女も強かったけど、桜花も強いよね」

「…腋巫女って、霊夢のこと？戦ったの？」

「うん、こてんぱんにされた。ちょっと服装のことを指摘しただけなのに…」

「あははは…たしかに指摘したくなるよね」

そんな緊張感のない会話をしながらも二人は攻撃を止めていない。

二枚目のスペルもブレイクされたルーミアは最後の一枚を取り出す。

―闇符「ディマーケイション」

左右から交際する弾幕と、その間から桜花を直接狙う弾幕が放たれる。

「ふふ…楽しいね、ルーミア！」

「うわぁ…桜花ってもしかして戦闘狂？」

笑いながら攻撃してくる桜花に、ルーミアが若干引き攣った笑いをする。

「違うよ…。この勝負ならお互いの命は保障されるし、危険も少ないから、思いっきり楽しめるじゃない」

「ああ、そういうことか…。やっぱり桜花は桜花だね…変わってない…」

最後のスペルが破られる直前、ルーミアはとても嬉しそうに笑った。

「私の初勝利～！」

嬉しそうに笑う桜花を見ながら、ルーミアは苦笑いをした。

実際、封印されているルーミアは中妖怪程度の力しかない。初勝負でルールも覚えたばかりの桜花に負けたのは少し悔しいものがあった。

それでも、ルーミアは楽しかったのだと感じていた。

「はいはい…私の負けよ。あと、巫女なら湖に向かったわよ？追い掛けてるなら急ぎなさい。湖には“アイツ”がいるんだから」

桜花はその言葉を聞いて固まった。ルーミアが言う人物が間違いなく“彼女”のことだからだ。

「…怒られるかな」

「…でしょうね」

桜花はガックリと俯くと、霊夢を追い掛けて湖に向かう。

―Ｓｔａｇｅ１　Ｃｌｅａｒ！

少女祈祷中…

紅魔郷Ｓｔａｇｅ１（後書き）

やっとルーミアが登場した！！

長かった…出せなくてごめんよ～（泣）

次回、ＤＩＥちゃん＆チルノ登場！

紅魔郷Ｓｔａｇｅ２（前書き）

いつもと違い、紅い霧に包まれている湖――。

伝説は、自らの最愛の妖精の姿を探す――。

紅魔郷Ｓｔａｇｅ２

Ｓｔａｇｅ２

湖上の魔精～Ｗａｔｅｒ　Ｍａｇｕｓ～

ＢＧＭ「ルーネイトエルフ」

霧の湖…幻想郷に存在する湖で、妖怪の山の麓にあるその湖は、昼間はいつも霧に包まれており、視界は悪い。

この湖は妖怪や妖精が集まりやすく、特に夏には水場を求めて多くの妖怪が集まる。

そんな湖も、現在は紅い霧に包まれており、夜であることもあってかなり不気味な雰囲気を醸し出している。

そんな湖の上に一人の人間がいた。

白黒のエプロンドレスを着て、黒い三角帽子を被った金髪の少女…霧雨魔理沙である。

魔理沙は少々混乱していた。原因は目の前にいる妖精だ。

緑色の髪を左側に纏めて黄色いリボンで結んだサイドテール。青を基準にした服に、背中にある虫に似た羽…。

その姿は間違いなく妖精だ。しかし、魔理沙が混乱している理由は、彼女の目だった。

目の前にいる妖精は細められ、鋭い鷹の様だった。まるでいくつもの戦場を経験してきた者を彷彿とさせるように…。

出会ってからまだ弾幕はおろか、言葉も交わしていない。ただこちらをじっと見詰めたままである。

しかし、魔理沙はこの妖精は自分を観察しているのだ、と感じていた。

それから更に数分経った頃、やっと妖精が口を動かした。

「…ダメ、貴女はここから先に行くべきじゃない…帰りなさい」

妖精は簡潔にそう言った。

魔理沙は目を見開いて驚いた。突然現れて無言でじろじろと見られた挙げ句に「帰れ」と言われた。これに「はいそうですか」と従う程、魔理沙は素直ではない。

「なんだ、いきなり現れた挙げ句に帰れとは…。私はこの先に用があるんだ、通してもらうぜ」

少々怒った様に言う魔理沙に対して、大妖精は全く表情を変えない。

「もう一度言うわ。帰りなさい。貴女なら…たしかにあいつらにも勝てるけど、危険よ」

それは忠告だった。この先に行くのであれば危険であると…。

だが、魔理沙は元より危険なのは承知の上でここまで来ている。今更引き返すわけにはいかない。彼女をそこまで動かすのは、純粋な好奇心と、彼女なりの意地だった。

「危険なのは承知の上だ。でも、私は行く。この先にあるものが何なのかを知りたいんだ」

「…忠告はしましたよ？」

両手にクナイを持って戦闘態勢に移った大妖精に対して、魔理沙もミニ八卦炉を構える。

「邪魔するなら撃ち落とすぜ！」

二人は同時に動くと、弾幕を放った。

桜花は霧の湖の近くへと到着した。

かつて自分の家があり、チルノと出会った思い出の場所である。

「さてさて、チルノはどこかな～？」

桜花はチルノを探していた。目覚めの報告と、黙って姿を消したことの謝罪をするためだ。

「おかしいな…いつもならこうやって妖力を出してれば向こうからやって来るのに…」

弾幕を放ってくる妖精を撃ち落としながら湖の上を進む。湖は紅い霧のせいで視界が悪く、数メートル先も見えない状態だった。

「う～ん…いないのかなぁ……ん？」

そろそろ諦めて目的地へと向かおうか、と考えていた桜花は、前方が何やら光っていることに気がついた。

「…誰かが戦ってる？」

もしかしたらチルノかもしれない、と桜花はその場所へと急いだ。

そこで見たものは……弾幕を撃ち合う大妖精と魔理沙の姿だった。

交際する星型とクナイの弾幕――。

魔理沙と大妖精の戦いは激化していた。

弾幕同士がぶつかり合い、相殺しあう。真正面は相殺され、かといって隙間を狙って放てば回避される。

まさに完璧な膠着状態であった。

「こりゃ意外だな。まさか、妖精でこんなにも力が強いやつがいたなんて正直驚いたぜ」

魔理沙の言葉に微かに顔をしかめる大妖精。

「妖精が皆弱いと思ったら大間違いよ。私よりもチルノちゃんの方が強い」

「ほぅ、お前より強い奴がいるのか？ちなみに、そいつは何処だ？」

「この異変の原因を調査しに行ったわ」

大妖精がそう言った瞬間、二人の間に桜花が割り込んだ。

「はい、ストーップ！」

魔理沙は、突然現れた人物に勝負を邪魔されたので顔をしかめる。

大妖精は目の前に現れた桜花に驚いた。

「…え？あ、桜花さん！？」

「久しぶり、大ちゃん」

突然現れた桜花を見て、大妖精は思わず桜花の顔を撫で回した。

「ひゃっ！？だ、大ちゃん…いきなり何を…！？／／／」

「ほ、本物だ！」

大妖精は手の平と桜花を交互に見た後、泣きながら桜花に抱き着いた。

「桜花さん、会いたかったです！一体何処にいたんですか！？」

桜花は大妖精の頭を撫でると、優しく抱きしめる。

「ごめんね、急にいなくなったりして。さっき帰ってきたんだ。…ただいま」

「はい…お帰りなさい。チルノちゃんもきっと喜びます！」

そんな二人の様子を、魔理沙はポカンとした顔をして見ていた。

「な、何なんだ…一体…」

桜花と呼ばれた見知らぬ女性が現れたと思えば、さっきまで強敵らしい雰囲気を出していた妖精は突然泣き出して彼女に抱き着いた…。

正直、魔理沙は額を押さえて溜め息をつくしかなかった。

「結局、お前は何者なんだ？」

魔理沙の声に桜花が振り向く。

「ああ、私の事は気にしないでいいよ。私はこの子の昔からの友人よ」

「さっき行方不明になっていた的な発言があったが？」

「えっと…ちょっと事情があって眠ってたのよ…千三百年くらい」

「はあ！？千年以上も寝ていたとか、一体何をすればそんなに寝られるんだ！？」

「あ～…、秘密♪」

この時、魔理沙は先程からの苛立ちもあり、本気でマスパを撃ちかけた。

「さて、話を戻すよ？」

魔理沙に一度深呼吸をさせた桜花は大妖精に向き直る。

「チルノは異変の解決に向かったのね？」

「はい、危ないから誰も通すなって言われて…」

「だから私を止めたんだな？」

「はい…。ただ…一人だけ私を倒して行っちゃった人がいましたけど…」

「へぇ～、誰なんだ？」

「えっと…、腋の部分がない巫女服を着た人が…」

「「……」」

魔理沙と桜花は同時に溜め息をついた。

たしかに、霊夢程の腕前なら大妖精にも勝てるだろう。

「ただ、霊夢とチルノが出会うのはまずいわね…。相打ちになる可能性がある」

桜花の言葉に、魔理沙が驚いた顔をする。

「そんなに強いのか？…そのチルノっていう妖精は？」

「うん、昔、世界の危機を救った事もあるよ」

彩花と戦うチルノの姿を思い出しながら、桜花は魔理沙にそう答えた。

「…たぶん、それはもう妖精とはいわないぜ？」

もっともな意見に、桜花も大妖精も苦笑いするしかなかった。

「とにかく、急いでチルノを追いかけないと…」

「あ、じゃあ私が送ります！」

大妖精の言葉に魔理沙は首を傾げた。

「お前が？どうやるんだ？」

大妖精は二人に手を差し出した。

「私の瞬間移動する力を使って、一気にチルノちゃんの所まで飛びます」

魔理沙と桜花は驚いた。まさか自分だけでなく、他人も一緒に瞬間移動させるなどということは二人にはできないからである。

「大ちゃん…、私がいない間に強くなったね」

「い、いえ…私なんてチルノちゃんや桜花さんに比べたらまだまだですよ…」

照れながらもそう答える大妖精に桜花は笑顔を浮かべる。

「じゃあ…大ちゃん、よろしく！」

「はい！」

そして、桜花と魔理沙と大妖精の三人は一気に紅魔館の近くへと

移動した。

「…ふぅ」

紅い館を見ながらチルノは溜め息をついた。

今回の異変の原因の住む館…紅魔館。

その館は外壁まで真っ赤な色をした建物で、見ているだけで邪悪な気配のする…そう、正に「悪魔の館」と言うに相応しい建物だった。

そんな館の正面には門番らしき女性が立っているのが見える。

見えると言っても、チルノがいるのは紅魔館から数百メートル離れた場所なのだが…。

チルノは氷の板を歪ませてレンズ代わりにして遠くを見ているのだ。

そのチルノの視線の先で、門番の女性と巫女服を着た少女が戦いだした。

巫女服を着ている方は間違いなく博麗の巫女だ。少々服が個性的になってきたが、幻想郷に巫女は一人しかいないので間違うことはない。

巫女は門番を倒すと、そのまま館の中に入って行った。

「ふむ、今代の博麗の巫女は中々強いね…」

チルノは彼女なら大丈夫だろうと考えたが、万が一の可能性もあるので後を追いかけようと思っていた。

「チルノちゃん!!」

そんな時、背後から声がかかる。

「ん?大ちゃん、湖で見張りを頼んだのにどうし……て…」

振り返ったチルノが見たのは…満面の笑みを浮かべた大妖精と、その隣にいる白黒の服を着た人間。

そして、微笑みながらこちらを見る桜花の姿だった。

「……え?……あ…嘘…」

目の前の光景が信じられないのか、チルノは桜花の服や顔や頭の獣耳を触る。

「むぅ…大ちゃんと同じ反応…／／／」

チルノは、目の前にいる桜花が本物だと理解すると泣き出した。

「ばか…ばかぁ！……あたいが…どれだけ心配したか！！」

「ごめんね、チルノ…黙っていなくなったのは悪かったって思ってる」

「本当に心配したんだからぁ！！」

「…うん」

チルノの頭を撫でる桜花を見ながら、魔理沙は大妖精と話をしていた。

「なぁ、あいつら…お前よりも親密に見えるんだが？」

「それはそうだよ。二人はお互いの最初の友達で、恋人なんだから」

「恋人！？…あいつら女同士だよな？」

「うん、でも愛に性別は関係ないよ」

「…そ、そうか」

魔理沙は抱きしめ合う二人を、何とも言えない気持ちを抱きながら見ていた。

「さて、チルノと楽しくお喋りしたいけど…今は異変を解決しなきゃね」

桜花は遠くに見える紅魔館を見ながらアミュレットを展開する。

「ちょっと待った！」

突然のチルノの制止に桜花は首を傾げる。

「どうしたの？」

「桜花はまだスペルカードルールに慣れてないでしょ？大丈夫なの？」

「大丈夫よ。さっきルーミアと戦ったばかりだし」

「う～ん…でも」

桜花は苦笑いすると、懐からスペルカードを取り出す。

「そこまで言うなら試してみる？私がちゃんと戦えるかどうか…！！」

チルノはちょっと驚いた顔をするが、すぐに笑顔になった。

「うん、じゃあ桜花がどこまで戦えるか…あたいが確かめる！」

BGM「おてんば恋娘」

先手を打ったのは桜花だった。

自分の周りに浮かばせた弾幕を一斉にチルノへと飛ばす。

「それっ！」

―氷符「アイシクルフォール～ＡＤＶＥＮＴ～」

スペルを発動させたチルノは、弾幕を回避せず、氷の壁を目の前に作ることで防ぐ。

回避ではなく壁による防御…そこから考えられる行動を予測した桜花は、すぐに動けるように身構える。

すると、桜花の予想した通り、突然氷の壁は砕け散り、小さな弾幕となって襲い掛かる。弾幕の隙間から両手に剣を持つチルノが見えた。おそらく、バスタードチルノソードを使って氷を砕いたのだろう。

チルノが使うバスタードチルノソードは、大剣であるが故に『斬る』ことよりも『砕く』ことに特化している。

氷の壁を作りながら身を守り、それを攻撃に使うことで守りと攻めを両立させる。非常に厄介な戦法を使う相手だ。

ならばどう戦うか…。簡単なことだ。相手の防御より強い攻撃を

当てればいい。

しかし、それがわからないチルノではない。力を溜めさせないように、次々と弾幕を放ってくる。

「…それなら」

桜花は腕を薙ぎ払うように動かす。そこには一列に並べられた弾幕があった。

「行け！」

弾は一つずつ正確にチルノへと向かう。

チルノは先程からやっている様に氷の壁を作りだして防ぐ。桜花はその間も新しい弾幕を作っては撃ち続ける。

一発の威力は弱くとも、連続で一点に弾幕集中させられた氷の壁に徐々に皹が入る。

「げっ…やばっ！！」

チルノがそれに気づいた瞬間、目の前にある氷の壁はあっさりと砕け散り、次々と弾幕が飛んでくる。

スペルブレイクしたチルノは、一旦距離を開けると二枚目のスペルカードを取り出す。

―凍符「パーフェクトフリーズ～ＡＤＶＥＮＴ～」

腰に挿した剣のうち、二本を弾幕と共に桜花へと投げつける。

桜花は難無く剣を避ける。すると、目の前まで迫っていた弾幕が全て凍りつき、その場に静止する。

そこまではよかった。ふと、桜花が背後から迫る風切り音に気づいて振り向けば、そこには先程避けた剣が二本とも戻ってきている。

慌てて剣を回避した桜花は、次の瞬間驚愕した。

チルノへと戻っていく剣が、凍って静止していた弾幕をビリヤードの玉の様に弾き飛ばしたのだ。

弾幕同士がぶつかり合い、軌道を変えながら襲ってくる。

驚きながらもなんとか回避に成功した桜花へと、チルノは再び剣を投げる。

剣を撃ち落とすことはできないか、と桜花は弾幕を放つが、剣に触れた瞬間に凍らされてしまい、余計に避ける弾幕が増えてしまった。

敵の攻撃を利用するとは恐れ入る。仕方ないので、桜花は攻撃よりも回避に専念して時間切れを待った。

遠くで二人の戦いを見ていた魔理沙は感嘆していた。攻撃と防御を組み合わせた弾幕を撃つチルノは油断できない相手だ。

反対に、隙あらば器用に隙間をぬって弾幕を放つという正確な射撃を行う桜花も凄い。

「もしかしたら…私はとんでもない奴らと知り合いになっちまったのか？」

そう呟いた魔理沙の声は、近くにいた大妖精にしか聞こえなかった。

時間切れとなり、スペルが消えたチルノは苦い顔をしていた。

「まさか、こんなに戦えるなんて予想外…」

桜花は軽く息を吐くと微笑んだ。

「いくら寝起きでも、神様が簡単に負けちゃ不甲斐ないでしょ？」

「そうだね…じゃあ、次がラストだよ。これを破れば桜花の勝ち…」

チルノは剣を全て仕舞うと、最後のスペルを取り出した。

―雪符「ダイヤモンドブリザード」

最後のスペルは全くと言っていいほどに真っ直ぐだった。

一切の守りを考えない氷柱の嵐。

とてもチルノらしい、と桜花は思った。だから、桜花も全力を出すことに決めた。

懐から一枚のスペルカードを取り出すと宣言する。

―青符「夢想封印・青」

桜花の周りを五つの青い光の玉が回る。

桜花に向かってきていた弾幕を全て打ち消すと、一直線にチルノへと向かって行く。

チルノは回避しようとはしなかった。ただ真っ直ぐに向かってくる光弾を見ている。

「あぁ…やっぱり桜花は強いや…」

そう呟いた瞬間、チルノは光に呑まれた。

――Ｓｔａｇｅ２　Ｃｌｅａｒ！

少女祈祷中…

紅魔郷Ｓｔａｇｅ２（後書き）

―スペルカード解説―

青符「夢想封印・青」

基本的には紅魔郷時の霊夢の「夢想封印」と同じ。

五つの光弾が桜花の周囲を回転した後、敵を追尾しながら飛んで行き、破裂してダメージを与える。

桜花の周りを回転している時も、追尾中も、僅かにダメージを与える。

※ピクシブにて、イラスト「紅魔郷」を載せました。

急いで何気なく描いたので少々雑になりましたが…気にしないでいただけたら幸いです（汗）

紅魔郷Ｓｔａｇｅ３（前書き）

紅魔館――。

それは悪魔の住む館。

しかし、その館に住む者は悪魔だけではない。

人間や妖精、妖怪さえいる。

そして、図書館にいる彼女もその一人……。

紅魔郷Ｓｔａｇｅ３

Ｓｔａｇｅ３

暗闇の館～Ｓａｖｅ　ｔｈｅ　ｍｉｎｄ～

ＢＧＭ「ヴアル魔法図書館」

―桜花Ｓｉｄｅ―

チルノと戦い終わった私は、気絶したチルノに自分のコートをかけてあげると、大ちゃんに任せて魔理沙と共に紅魔館の中に入った。

外から見るよりも中は広く、まるで迷路のようだった。

霊夢の様な鋭い勘を持たない私と魔理沙はいきあたりばったりで、妖精メイドを撃ち落としながら適当に館内を散策していた。

そんな時に見つけたのが図書館の入口だった。

ヴアル魔法図書館…。

おそらく幻想郷の中で最も本がたくさんある場所だろう。視界の九割を占める本棚に感嘆しながらも、はしゃぐ魔理沙　と共に中を散策する。

慌ててメイド妖精達がやって来て弾幕を放ってくる。

「さてさて、さっさと異変を解決してここの本を借りていくとするか！」

「…盗む、の間違いじゃないの？」

隣ではしゃぐ魔理沙を見て溜め息をつきながら先を急ぐ。

「失礼だな、ちゃんと返すぞ？……私が死んだらな」

「…だと思った」

もう魔理沙には何も言うまい。彼女の泥棒癖は一度死ななきゃ治らないようだ。

ちなみに…門番だった美鈴は、おそらく霊夢にやられたのか、気絶していたので放置してきた。

まぁ、異変の解決が優先なので、わざわざ起こすまでもないと思って放置したのだが…少し可哀相だったかな？

私は本ばかりを気にして全く迎撃をしない魔理沙を注意しながら奥に進んで行く。

紅魔館も広いが、この図書館の広さも半端ではない。薄暗いから

かもしれないが、向こう側が見えないのである。

よくもまぁこんなに本が集まったものだ。私自身、読書は好きだが、これだけ本が並んでいると気が滅入ってしまう。

同じ様な風景しか見えないので、本当に先に進んでいるのかわからなくなってしまいそうになるのを何とか堪える。

「止まってくださ～い！！」

ふと、前方から声が聞こえたので、私達は一旦停止する。

すると、本棚の間から一人の少女が現れた。

少しくすんだ赤い長髪、頭の左右と背中には小さな悪魔の羽があり、黒いベストを羽織ったその姿は正に司書であった。

ヴアル図書館の司書であり、パチュリーの使い魔でもある小悪魔だ。

「か、勝手に図書館で暴れられたら…その…困りましゅっ……あぅ…噛んじゃった／／／」

「「……」」

えっと…何ですか、この可愛い生物は？

小悪魔は、緊張したうえに噛んでしまったのが余程恥ずかしかったのか、顔が真っ赤になっている。

魔理沙もそんな小悪魔を見て苦笑いをしていた。

「と、とにかく、ここから先には行かせません！」

気を取り直した小悪魔がそう言うと、いくつもの魔法陣が現れ、大弾とクナイ弾幕を放ってきた。

しかし、どちらも大ちゃんやチルノに比べたらかなり隙間が多い。魔理沙も私も軽々と避けていく。

「さっきは出番が無かったからな、ここは私に任せな！」

そう言った魔理沙は器用に箒の上に立つと、両手を前に突き出す。すると、魔理沙の目の前に魔法陣が二つ現れる。私は魔法には詳しくないが、あれが攻撃する為のものであることはわかった。

「…くらえ、イリュージョンレーザー！！」

魔法陣から放たれた二つのレーザーは、小悪魔の弾幕を突き抜け、真っ直ぐに彼女へと向かっていく。

「…ふぇ！？…あ…きゃん！？」

魔理沙の攻撃に驚いた小悪魔は、回避が間に合わずに直撃…。そのまま近くの本棚の上に落ちると、目を回して気絶した。

「おお…一撃かぁ。やるね、魔理沙！」

「へへ…このくらい当然だぜ。さぁ、先に進むか！」

満面の笑みを浮かべた魔理沙の後に続く形で先に進む。

そのまま妖精メイドや白い毛玉のような敵を蹴散らしながら進んでいると、魔理沙が突然振り返った。

「なぁ、聞きたい事があるんだ」

魔理沙は興味津々といった顔を私に向けている。

「何かしら？」

私は魔理沙の方を見ながら首を傾げる。

「…お前は、何者なんだ？」

魔理沙は、先程とは違って真剣な顔で尋ねてきた。

「お前が敵じゃないのはわかってる。だけど、お前の正体を私はまだ聞いてない」

「正体も何も…ただの妖獣よ」

「違うな」

魔理沙は目を細めてニヤリと笑う。

「ただの妖獣が千年以上も眠るなんてことがあるわけがない。お前はもっと凄いやつなんだろ？」

私は溜め息をつくと、降参の意味を込めて両手を上げた。別に隠しているわけではなかったので、尋ねられたら答えるつもりだった。

「う～ん…なんて言えばいいのかな…。幻想郷の始まり…母親みたいなものかな？」

言ってからちょっと恥ずかしくなった私は、頬をかきながら苦笑いをする。

ふと魔理沙を見ると、驚愕した顔で私を見ていた。

「お、お前……まさか、伝説の…？」

「…伝説？」

魔理沙の言葉の中に気になる単語があった。…伝説？なんだそれは？

「あ、ああ…人里に伝わる伝説があるんだ。たしか――」

魔理沙がそこまで言った時だった。

――昔々、幻想郷には守り神がいた。

「…っ！？」

どこからか聞こえてきた少女の声に、話をしようとしていた魔理沙が固まる。

――その神は人と妖怪を束ね、楽園を守っていた。

小さいけど確かに聞こえる不思議な声…。

――ある時、幻想郷は災厄にみまわれ、滅びそうになった。

――神は自らを盾として、数名の仲間と共に楽園を守った。

図書館の奥から人影が見える。どうやら本の内容を読んでいるらしい。

手には一冊の本…。どうやらこの声の主らしい。

ている為か表情がよくわからない。

「――そして、力を使い切った神は眠りについた。今も、神はこの楽園のどこかで眠っている……おしまい」

手に持っていた本をパタリと閉じて、声の主は顔を上げた。

「…はじめまして……守り神さん。私はパチュリー・ノーレッジ…魔女よ」

明かりに照らされて浮かび上がったのは、十代初めくらいに見える少女だった。

パジャマの様な服に紫色の長髪…。こちらを見る無表情な顔からは感情は一切読み取ることはできない。

動かない大図書館ことパチュリー・ノーレッジは、手にしていた本を腋に挟むと、観察する様に私を見る。

「あらあら、御丁寧にありがとう。私は鈴音桜花…この幻想郷の守り神なんかをやってるわ」

にこにこと笑う私に対して、パチュリーは僅かに険しい表情をする。

「…本当はゆっくりと話でもしてみたいのだけれど……友人の頼みで、侵入者は追い返せと言われているわ」

「だから帰れって？
冗談いわないで。私は守り神よ？異変が起きたのなら……その原因を潰すのが私の役目」

残念そうな顔をするパチュリーに、笑顔で返事を返す。

「仕方ないわ…今日は喘息の調子が悪いからあまり戦いたくないのだけれど…」

小さく咳をするパチュリーは、腋に挟んでいた本を本棚に戻すと、別の本を手に取る。きっと魔導書か何かなのだろう。

「レミィの為に少しは時間を稼がなきゃ…」

彼女の周りに無数の魔法陣が展開される。

「私は上にいるお嬢様よりも……下にいるお嬢様に会いに行くつもりなのだけど？」

パチュリーは少し驚いた顔をしたが、すぐに険しい顔に変わる。

「…行かせないわ。私の魔法で貴女を止めてみせる！」

―ＳｉｄｅＯｕｔ―

ＢＧＭ「ラクトガール～少女密室～」

パチュリーが指を鳴らすと、魔法陣から青いレーザーが四方向に放たれる。

レーザーの一つがゆっくりと桜花に迫る。桜花は、右から向かってくるレーザーを同じ方向へと移動することで回避する。

直後、反対側からも同じ様にレーザーが挟み撃ちにするかの様に放たれる。

桜花は体を捻って回避すると、パチュリーから放たれる通常の赤い弾幕を回避していく。

それを見たパチュリーがスペルカードを取り出す。

「火符『アグニシャイン　上級』」

次の瞬間、パチュリーが開いた魔導書から大量の炎弾が噴き出して桜花へと向かう。

チルノに上着を貸して半袖になっている桜花は、炎の熱を肌で感じながら回避する。

時には自分の弾幕で相殺しながら、次々と迫る炎を回避する。

「よっと…！」

隙間を抜ける様に放った桜花の弾幕が、パチュリーの持つ魔導書へて当たる。

「きゃっ！？」

パチュリーの持っていた本は弾幕が当たった衝撃で閉じられ、同時にスペルもブレイクされた。

「そんな…たったの一撃で…」

パチュリーは表情を更に険しくして再び本を開く。

「流石は幻想郷を守る神ね。こんなに強い貴女が力を使い果たすなんて、千年前に戦った災厄っていうのはとんでもなかったのでしょ

うね…」

パチュリーは新しいスペルカードを取り出しながらそう呟いた。

「たしかに……千年前にあった戦いは、ある意味“私にとって”大きな戦いだったよ」

ただ、と桜花は腕組みをしながら苦笑いする。

「あの戦いで、最後のトドメを刺したのは私じゃなかった」

「……？」

パチュリーはスペルカードを握ったまま桜花の話に耳を傾ける。

いつの間にか本棚から取り出した本を読んでいた魔理沙も桜花を見る。

「さっきパチュリーが読んでいた本は幻想郷の歴史書か何かでしょう？」

「ええ、千年前に人里で書かれたものよ」

桜花は、書いたのはきっと阿一なんだろうなぁ…、と思うと僅かに笑みが浮かぶ。

「そう…確かに本を読むことでわかる知識もある。…でもね、“真の歴史”と“本に載っている歴史”が必ずしも同じだとは限らない…」

「…どういうこと？」

パチュリーは目を細めて少し怒気をはらんだ声で尋ねる。

本を読み続けてきた彼女にとって、本から得られる知識に間違いがあると指摘されたことが少々気にいらないのだ。

「千年前の戦いで、神は仲間と共に災厄を倒した、と書いてあるみたいだけれど、それは間違いよ。

そもそも、その戦いで“私は”戦ってさえいないのだから」

「…！？」

「おいおい、マジかよ…」

パチュリーだけでなく魔理沙まで驚いているようだった。

「…じゃあ、一体誰が？」

パチュリーはスペルカードを懐にしまって構えを解く。もう戦うつもりはないようだ。

「戦いに参加したのは…妖怪の賢者、冥界の亡霊姫とその護衛の剣士、天狗のリーダー、永遠の姫とその従者、その代の博麗の巫女…

…そして、二人の妖精だったわ」

「…妖精？」

妖精という言葉にパチュリーは首を傾げる。

本来、妖精は人間に悪戯をする程度の知力と力しか持たない。つまり、弱い存在であるということだ。その代わりに“死”という概念が無く、自然が存在する限り決して滅びることはない。

「妖精なんかが戦って勝負になったの？」

「そこが外に出ない者の弱点ね。一歩でいいからこの館から出てみなさい。目の前にある湖に、今もその二人の妖精は住んでいるわ」

チルノと大妖精を思い浮かべて桜花は笑う。

「妖精は決して弱い者ばかりじゃないわ。実際、あの戦いに一番貢献したのはその妖精の一人だったしね。災厄にトドメを刺したのもその妖精よ」

パチュリーは驚愕した。人間と同じかそれよりも下だと思っていた妖精が強者の戦いに参加して、尚且つトドメを刺したというのだから。

「…待って、災厄にトドメを刺したということは、その災厄は自然現象や任意で起こされた異変の事ではないの？」

桜花の言葉から、パチュリーは現象ではなく、あきらかに敵と呼べる“何者”かがいたことに思い至る。

「そう、災厄は一人の人間が起こしたものだったの。そしてその人間は私と深く関わっていたの…。私は力を封じられて動けず、その戦いを眺めるしかなかったのよ」

パチュリーは更に驚愕した。幻想郷を滅ぼしかけた異変を起こし

たのが、たった一人の人間だったというのだ。

これまで、そこそこ長い年月を生きてきたパチュリーだが、これほど強い存在には会ったことがない。

「私が話せるのはここまでよ。後は自分で調べなさい」

「……はぁ、いろんな意味で私の負けよ。貴女には勝てそうにないわ」

パチュリーは溜め息をつくと近くの本棚に腰掛けた。

「…そうね、次からは外にも出てみることにするわ」

「ふふ…そうしなさい、新しいものが見えてくるわ」

桜花は振り返ると、こっそり本を持ち出そうとしていた魔理沙を引っ張って先へと進むのだった。

――Ｓｔａｇｅ　Ｃｌｅａｒ！

少女祈祷中……

―オマケ―

～霧の湖・チルノの家～

「…う……ん？」

霧の湖にあるチルノの家。その家のベッドでチルノは目が覚めた。

「あ…あれ？あたい、どうして…」

若干混乱した記憶を整理していく。

「紅い霧が出る異変が起きて、紅い館の前まで行って…それから…
…」

その瞬間、浮かんだのは青い髪をした愛しい女性の姿。

「そうだ！桜花は！？桜花はどこ！？」

「チルノちゃん、どうしたの！？」

慌てて外に出ようとベッドから降りようとしたチルノだが、いきなり部屋のドアが開いて大妖精が現れたので思わず転がり落ちてしまった。

「いたた…あ、大ちゃん、桜花は!?」

「…え?あ、桜花さんならあの館に入って行ったよ?」

チルノはしばらく呆然としていたが、安心した様にその場に座り込んだ。

「…よかった……夢じゃない……桜花が帰ってきたんだ」

嬉しそうに笑うチルノを見て、大妖精も微笑む。

「チルノちゃん、これ…」

大妖精が差し出したのは、桜花が気絶したチルノにかけたコートだった。

「これ……」

「さっさと異変を解決して戻ってくるから預かってて、だって」

チルノはコートを受け取ると袖を通してみる。

「ぶかぶかだね…」

「…うん」

桜花よりも小柄なチルノにはそのコートは大き過ぎた。袖は長すぎるし、裾は床についている。

それでも、チルノは長すぎる袖に隠れた両手を重ねると、小さく呟いた。

「…温かい」

その時の笑顔は、ここ数百年見ることができなかった、とても温かみのある笑みだった。

紅魔郷Ｓｔａｇｅ３（後書き）

パチュリーとはスペル一枚での決着となりました。

パチュリーが好きな皆さんごめんなさい！

次回はメイド長の出番だぜ！

※ピクシブにて、オマケで書いたチルノの様子を絵にして載せました。

では、また次回でお会いしましょう！

紅魔郷Ｓｔａｇｅ４（前書き）

吸血鬼の館に住む人間にしてメイドの少女――。

彼女が何故、紅魔館で働いているのか――。

それを知るのは本人と、彼女の主のみ――。

紅魔郷Ｓｔａｇｅ４

Ｓｔａｇｅ４

紅い月に瀟洒な従者を

ＢＧＭ「メイドと血の懐中時計」

図書館を後にした桜花は、一人で長い廊下を進んでいた。

ちなみに、魔理沙は図書館で本を読むと言って図書館に残った。

パチュリーが嫌そうな顔をしながらスペカを取り出していたので、おそらく今頃は勝負の真っ最中であろう。

桜花はひたすら長い廊下を進みながらも、強い力同士がぶつかるのを感じた。

おそらく霊夢とレミリアの戦いが始まったのだろう。ちらりと、窓から外を見れば紅い月が妖しい輝きを見せている。

桜花は、窓から見える景色を横目にひたすら進む。

妖精メイド達は霊夢が殆ど倒してしまったのか姿を見せない。

「…つまんない……でも、余計な戦闘がなくて助かるわ」

長い廊下の終わりが見えた。目の前の扉は屋上に出る扉だ。丁度、この扉から出た場所に大時計があり、その上空で霊夢とレミリアが戦っている。

屋上に出た桜花は、大時計の横で心配そうに空を見上げるメイドを見つけた。

「あらあら、貴女もあの二人の観戦かしら？」

桜花の言葉にびくりと肩を震わせた少女は、すぐにナイフを両手に構える。

「…何者！？」

「私？…ただの妖怪ですわ」

紫を真似して胡散臭い表情をする桜花を、紅魔館のメイド長――十六夜咲夜は睨みつける。

「家の巫女、強いでしょ？」

桜花は構えることもせず、ニコニコと笑ったまま上空の二人を見上げる。

「…何故、巫女と妖怪が一緒に暮らしているのかしら？」

「あら、それを言うなら…何故、吸血鬼と貴女みたいな人間が一緒に暮らしているの？」

「……」

苦い顔をする咲夜を見て、桜花はクスクスと笑った。

「きっと意味なんてないわよ」

「…意味がない？」

笑いながら語る桜花に、ペースを乱された咲夜は少しだけ怒気を含んだ声で返す。

「そう…誰と暮らそうとも、相手を思いやれるなら“家族”にだってなれるわ」

私がそうだったしね、と呟く桜花を睨みながら、咲夜は少しだけ混乱していた頭を整理していた。

「…結局、貴女は何が言いたいの？」

咲夜の問いに、桜花は自然な動作で返事を返した。

「…私はただ、なかなか一歩を踏み出せない吸血鬼姉妹を後押ししてあげようと思っただけよ」

――次の瞬間、桜花の目の前には無数のナイフが迫っていた。

「…意外に感情的なのね」

迫るナイフを爪で弾くと、桜花はいつの間にか背後に移動していた咲夜へと振り返る。

「お嬢様や妹様に手を出すのならば……貴女をこのままにしておくわけにはいきません」

姿勢を低くしてナイフを構える咲夜は、正に獲物を仕留めるハンターの様に見えた。

「…失礼、言い直すわ。素直じゃないお嬢さんへ、私からのプレゼントを渡したいだけよ」

「行かせない。それこそ、時間を止めてでも！」

ＢＧＭ「月時計～ルナ・ダイアル～」

咲夜の両手から次々と放たれるナイフを、桜花は横に飛びながら

回避していく。

まるで手品の様に何処からか現れるナイフは決して尽きること無く、時にはフェイントをかけながら桜花へと向かって行く。

これまでの敵とは違う正確な攻撃は、回避するだけではなく迎撃する必要もあるため、桜花は時々爪を使ってナイフを弾く。

「凄いわね。貴女、本当に人間かしら？」

「…このくらいできないと、お嬢様をお守りできませんから」

「まぁ…そうでしょうね」

お互いに軽口を言い合うが、そこには微塵も油断がない。それこそ、少しでも油断したなら攻撃が直撃するのが目に見えているからだ。

桜花は、咲夜がナイフを投げた直後を狙って弾幕を放つ。

しかし、軽々と避けられてしまうため、まだ一発も彼女には当たっていない。

「…仕方ない。時間も少ないし、ここは少々卑怯な手を使わせて貰うわ」

そう言って桜花が取り出したのは、青と白の色をした陰陽玉。それに力を込めて弾幕を放つ。

咲夜は同じ様に弾幕を避けるが、通り過ぎようとした弾幕は直ぐ

に向きを変えて再び襲い掛かる。

「…っ、追尾ですって！？」

咲夜は険しい顔をしながら再び弾幕を回避する。しかし、避けても避けても弾幕は戻ってくる。

次第に追い詰められた咲夜は、ついにポケットからスペルカードを取り出した。

―幻幽「ジャック・ザ・ルドビレ」

咲夜がスペルを唱えた瞬間、桜花の放った追尾弾幕は全て撃ち落とされた。

「…ん？……うわっ！」

一瞬、世界がズレた様な感覚を覚えた桜花だが、いつの間にか目の前に大量のナイフが浮かんでいることに驚いた。

一斉に動き出したナイフを回避しながら咲夜を探すが、攻撃しようとしてもすぐに姿が消えて、代わりに大量のナイフが現れる。

その時の世界がズレた様な感覚…。おそらく、あの時に時間を止めているのだろう。と、桜花は判断した。

「…そらっ！！」

妖力を纏った爪で目の前のナイフを叩き落とす。しかし、目の前に迫るナイフの数は一向に減らない。

さっきから時間が頻繁に止まっているから、おそらくナイフを回収して再び投げているのだろう。

桜花には時間停止を拒絶することもできる。しかし、あえてそれをしないのは桜花が単純に面白くないと判断したからだ。簡単に勝負がついたらつまらないという彼女のこだわりでもある。

「むぅ…このままじゃ同じことの繰り返しね」

先程から防御一点張りで攻撃できていないので、桜花は険しい顔をしていた。

「…うん、ちょっとだけ本気を見せてあげる」

桜花は大きく距離を離すと右手を前に突き出す。

「魔理沙、ちょっとだけ貴女の技を借りるわよ！」

突き出した右手に魔力を集めて思いっ切り発射する。

「見様見真似、マスタースパーク！！」

撃ち出すのは極太のレーザー。圧倒的な威力の妖力は、ナイフを全て飲み込んで咲夜に迫る。

「…っ！」

スペルブレイクした咲夜は急いで新しいスペルカードを取り出す。

―幻世「ザ・ワールド」

再び時間を止めた咲夜は急いでその場を離れ、ナイフを配置して時間を元に戻す。

咲夜が現れたのは桜花の真後ろ。マススパークを撃った体勢の桜花は動けないと判断したからだ。

「甘い！」

しかし、咲夜は油断していた。相手は幻想郷の母の一人、常識が最も通用しない相手だと言ってもいい。

桜花は無理矢理体を捻ると、マススパークを放ちながらその場で独楽の様に一回転した。

「な、なんて無茶苦茶な！？」

咲夜は慌てて時間を止めると空へと舞い上がる。

時間を戻した咲夜は更に驚愕する。いつの間にか自分の周りに大量の弾幕が配置されていたからだ。

「…なっ！？い、いつの間に！？」

そこで咲夜は気がついた。桜花はマススパークを撃つのに右手しか使っていない。そして、空いている左手にはいつの間にか陰陽玉が握られていた。

「行け！」

桜花の掛け声で一斉に３６０度から弾幕が襲い掛かる。

「くっ、私が空に逃げると予想していたのか！」

複数の弾幕を回避しているうちにスペルブレイクした咲夜は、懐から最後のスペルカードを取り出す。

―メイド秘技「殺人ドール」

咲夜が３６０度全包囲にナイフをばらまくと、それらは周りの弾幕を打ち消し、一斉に桜花へと迫る。

「青符『夢想封印・青』！！」

桜花はスペルを唱えると、両手を広げてその場で一回転する。

すると、桜花の周りに青い光弾が現れ、ナイフを次々と弾く。

「これで…終わりよ！」

そして、その光弾を躊躇なく咲夜へと撃ち出した。

「なっ…し、しまっ…」

しまった、と思う前に咲夜は光に呑まれ、撃ち落とされた。

「う…も、申し訳ありません…お嬢様」

桜花が咲夜との勝負に勝ったすぐ後、上空で戦っていた霊夢とレミリアが降りてきた。どうやらあちらの戦いも終わったらしい。

「ふぅ…疲れた。……って、なんであんたが此処にいるのよ!?」

上空から降りてきた霊夢は、不機嫌そうに顔をしかめたまま桜花を見た。

「あら、私は幻想郷の守り神よ?
異変が起きたら解決しに来るのが普通じゃない?」

桜花の返答に霊夢は溜め息をつきながら額に手を当てる。

「…私はまだあんたを信用してないわよ?」

「別に信用してもらう必要はないわ。これは私が自分の意思でやっているのだから。
それに、先代の巫女達の世話も結構気に入ってたしね…」

「だったら私もどうにかしてよ。実際、家の家計簿は火の車よ…」

霊夢の溜め息混じりの呟きに、桜花は笑いながら頷いた。

「勿論、そのつもりよ。毎日豪華なご飯作ってあげるわ。私、結構お金持ちなのよ？」

「一生貴女についていくわ！」

「うわぁ…変わり身速いわね…」

桜花が苦笑いすると、霊夢の後にレミリアが降り立つ。

「ん？…なんだ、また見慣れない奴がいるわね」

「あ、おぜう様だ」

「…お、おぜう？」

冗談のつもりで言ったのだが、レミリアは口元をひくつかせている。

「ほほぅ…誰だか知らないが…どうやら死にたいらしいわね」

青筋を浮かべたレミリアが弾幕を放とうとするが、霊夢がその頭をポカリと叩く。

「こら、あんたはもう大人しくしなさい」

「う～…」

レミリアはジト目で桜花を睨むが、桜花が謝ると素直に引き下が

った。

「じゃあ、私は帰るけど…」

「ああ…霊夢、先に帰ってて。私はまだやることがあるから」

帰ると言う霊夢にそう言うと、桜花はレミリアの方に向き直る。

「ふ～ん…まぁ、いいわ。さっさとやること済ませて帰ってきなさいよ？」

「了解」

背を向けたままひらひらと手を振って返事をする。

霊夢が遠ざかるのを感じながら目の前のレミリアを見る。

「…それで、私にまだ何か用があるのか？」

レミリアの隣には咲夜が既に待機しており、殺気を込めた視線を桜花に向けている。

「まぁまぁ、そう警戒しなくてもいいわよ。
まずは自己紹介ね。私は鈴音桜花、幻想郷の守り神で、霊夢の神社の神様よ」

「…ふん、そうかい」

レミリアは上から目線の態度を崩さないまま桜花に返事を返した。

「まぁ、平たく言えば異変の解決が仕事になるんだけど…今代の巫女である霊夢は優秀だから私の出番はあまりないかな……ただ」

「…っ！！」

最後だけ声を低くして桜花はレミリアを睨む。

その視線には明らかな殺気があり、威圧感も半端ではない程強い。

流石のレミリアも頬を冷汗が伝う。

「私は幻想郷を愛してる。異変を起こすことはつまり、私と妖怪の賢者を敵に回すことだと覚えておきなさい」

それだけ言うと桜花は殺気を消した。同時に威圧感も消える。

「まぁ、今回の異変はあまり大した事じゃなかったからいいけどね」

「そ、そう…」

レミリアは安心感から胸を撫で下ろす気分だった。…勿論顔には出していないが…

「…ただし、今から一つだけ私の言うことを聞いてもらうわよ？」

「…何かしら？」

次の瞬間、桜花の口から出た言葉は、レミリアの意表をつくには

十分すぎた。

「…貴女の妹に会わせなさい」

Ｓｔａｇｅ　Ｃｌｅａｒ！！

少女祈祷中…

紅魔郷Ｓｔａｇｅ４（後書き）

忙しくてなかなか執筆が進まなかったけど、なんとか書き上げました。

次がラストにして一番の見せ場ですね！！

紅魔郷Ｆｉｎａｌ Ｓｔａｇｅ前編（前書き）

――４９５年。
それが少女が地下で過ごした時間。
今日も彼女は自分の部屋でぬいぐるみを抱きしめる。
ふと、雨が降る気配がした。
その時、彼女はふと思った。
青空が見てみたい、と――。

紅魔郷Ｆｉｎａｌ Ｓｔａｇｅ前編

Ｆｉｎａｌ　Ｓｔａｇｅ――

東方紅魔狂～Ｓｉｓｔｅｒ　ｏｆ　Ｓｃａｒｌｅｔ～

ＢＧＭ「Ｓｗｅｅｔｓ　Ｔｉｍｅ　Ｍｉｄｎｉｇｈｔ（東方Ｖｏｃａｌ　１０６）」

レミリアと一通り話した桜花は、紅い館の中を進む。
目的地は紅魔館の地下にいるフランドール・スカーレットに会うことだ。

当然というか、レミリアには凄く反対された。しかし、霊夢との戦闘で力を消耗したレミリアと、連戦で既に体力の限界を迎えつつある咲夜では、桜花を止めることはできなかった。

紅魔館の廊下はとても静かだった。
妖精メイド達も大人しくしており、まるで嵐が過ぎ去った後のようだ。

または、嵐の前の静けさの様にも感じられた。

窓の外にはもう紅い霧は無く、暗い闇だけがあった。
その窓に、小さな水滴がポツポツと付き始める。
それは量を増やし、次第に大雨となった。
雨の音が聞こえる様になっても、廊下は相変わらず静かさを失わない。
まるでこの館の中だけ、違う世界になってしまったかの様に……。

「……」

無言で歩いていた桜花は、ふと足を止める。

「…止まってください」

目の前にはチャイナドレスの様な服を着た、赤毛の女性が道を塞ぐ様に立っていた。

「…たしか、紅美鈴さんでしたか？」

桜花の問いに、彼女…紅美鈴は頷いて答える。
彼女は紅魔館の門番であり、今回の異変中に霊夢にやられて気絶していたので、紅魔館メンバーの中で桜花と戦っていない唯一の人物である。

「…妹様に会いに行くのですか？」

美鈴は険しい表情で桜花に尋ねる。

「ええ、そうよ」

それに対して、桜花は笑顔でそう返事をした。

「妹様は、まだスペルカードルールを完璧に守るとは断言できません。正直に言えば危険です。…今からでも、諦めては頂きませんか？」

「いやいや、そもそも私は妹さんに会いにこの館に来たの。だから、彼女に会うまで帰れないわ」

「そうですか…」

美鈴は半身になり、左手を腰辺りに構え右手をやや低めに構える。どうしても桜花を止めたいようだ。

「…紅美鈴、そこをどいてちょうだい。
それとも、レミリアか誰かに頼まれたの？」

「お断りします。そして、これは私の独断です。妹様はお嬢様の唯一の肉親…、あのお二人の邪魔をするならば…」

ギリッ、と拳を握る音が静かな廊下に響く。
桜花はやれやれと首を振ると、右手で顔を覆って天井を見上げた。

「別に私は邪魔をしに行くわけじゃないし、逆に良くしようとしてるんだけど？」

再び美鈴を見る桜花の顔は真剣だった。

「それでも…私はお嬢様方を守ると決めたのです」

「覚悟の上…か」

「はい、これは弾幕ごっこなどではない、正真正銘の殺し合いです。死ぬ覚悟で挑む…。そうでもしなければお嬢様に顔向けができませんから」

それほどの忠誠心を持った彼女を見て、桜花は美鈴への評価を変えた。

「そう…、貴女の気持ちは理解できるわ。なら、私もそれに答えましょう」

桜花も半身になって構える。

「私は妹さんに会って話がしたい。場合によっては戦うかもしれない」

「私は妹様をお守りします。それが私の役目ですから」

美鈴と桜花は同時に走り出した。

一瞬でトップスピードに達した二人の拳がぶつかり合う。

二人の戦いが始まった。

「さぁ、私に力を見せてみなさい！中国！！」

「ちょっ…私は美鈴です！！」

ただ、始まり方はとんでもなくマヌケな台詞からだった。

結局、戦いはぐだくだのまま、桜花が美鈴へと渾身のアッパーをくらわせて終了だった。

最初の雰囲気は全く無く、脱力感だけがその場にあった。

「わ、私、かなり真剣なつもりだったんですが…裏切られた」

涙目で桜花を案内する中国…美鈴は軽く拗ねていた。

桜花はその後ろで苦笑いである。

「まあまあ、ただ妹さんに会いに行くだけなんだってば。

なのに、ちょっと真剣に言っただけでまさか殺し合いにまで発展するとは思わなくてね…」

「貴女の場合は冗談に聞こえないんですよ！！

私のあの時の真剣な気持ちを返してください！！」

振り返りながら叫ぶ美鈴に軽く謝りながら、桜花は廊下を歩く。

怒りながらも道案内を止めない美鈴の素直な性格に好感を覚えながらも、桜花はフランと対面した時の様子を想像していた。

「（う～ん…駄目だ、どう考えても戦闘にしかならない）」

ぶっちゃけ桜花は悩んでいた。

フランの所に行く理由は、能力で彼女の『狂気』を消してあげる為だ。

そうすればレミリアともちゃんと接することもできるし、外にだって出られるからだ。

前を歩いていた美鈴が立ち止まっことに気づいた桜花の目の前には、地下に下りる階段があった。

「妹様はこの先です。ここからは一本道ですから、迷うことはないでしょう」

「うん、ありがとう美鈴」

―桜花Ｓｉｄｅ―

美鈴にお礼を言って地下へと下りると、螺旋階段を下りて一直線の長い廊下を進む。

「～♪林檎とハ～チミツ～♪赤色と金色混ぜなら～♪」

廊下を歩く間、何となく前世で好きだった歌を唄う。
廊下はとても静かだったから、私の声は山彦の様に反射して、廊下の先の扉まで響いていく。

「黒くなるのかしら?♪お空と同じ色~♪」

扉までゆっくりと歌を唄いながら歩く。

扉にかかっていた術式を解除してからゆっくりと深呼吸をする。

「…よし」

ガチャリ、と両開きの扉を開ける。
部屋の中はこれまでの部屋や廊下と同じく赤一色だ。違うのは、人形やぬいぐるみや絵本等がたくさんあることぐらいだろう。

ただ、目の前にある人形やぬいぐるみは、全てが引き裂かれた様にボロボロだった。
無事なものは無く、ぬいぐるみの中身だったであろう綿がそこらじゅうに散らばっている。

部屋の中に入ると扉を閉める。
一人部屋にしては広すぎる部屋を見回す。
すると、ベッドに一人の少女が腰掛けているのがわかった。

「……だぁれ?」

まるで無邪気な子供の様な声が聞こえた。
でも私には解る。この声の主はきっと――

――狂っている。

薄暗い部屋に明かりがつく。
立ち上がった少女を見て、私は思わず目を細めた。

感情のない紅い瞳、小柄な体に不釣り合いな宝石の様なものが付いた歪な羽。
レミリアに似ている白い赤いリボンが付いた帽子。髪は金髪をサイドテールに纏めている。

「…はじめまして、フランちゃん。私はレミリアの友達よ」

「……お姉様の？」

フランはどこかボーッとした感じでこちらを見ていた。

「そうよ…それでね、貴女と遊ぼうかと思ってね」

フランの瞳が微かに揺らいだ。

「私と遊んでくれるの…？」

フランの言葉に笑顔で頷いた。

フランは私に向かって握手する様に右手を向ける。

「嬉しい…じゃあ――

――死んじゃえ」

「…え？」

突然、右手の突き出す様に構え直すと、髑髏の様なものがフランの手の平に現れた。

「キューっとして…」

「…っ！！能力を拒絶する！！」

「ドカーン！」

次の瞬間、私の目の前の空間が爆発した。
私の胸の高さだったから、おそらく心臓を狙ったんだろう。能力を使わなければ危なかったかもしれない。

いくら能力で不死身になった私でも心臓を潰されたらたまったものじゃない。
……主に痛みが。

フランは自分の手と私を交互に見て不思議そうに首を傾げている。
きっと、私に能力が通じないことが理解できないのだろう。
何度かそれを繰り返すと、フランはまるで新しい玩具を貰った子供の様に瞳をキラキラさせながら跳びはねた。

「凄い凄い！！私の力が通じないなんて初めてだよ～！！」

フランは先程までの無表情が嘘の様に喜びを全身で表している。
私はフランに近づくと頭を撫でた。

「フランちゃんは元気ね～！でも、そんなことしたら直ぐに遊びが終わっちゃうよ？」

「だって、私が力を使うとみんな壊れちゃうんだもん！
私の力でも壊れない“玩具”が欲しかったの！」

フランは私から離れると空中に飛び上がった。

「ねぇねぇ、外にはこの屋敷みたいな“紅”じゃなくて、青空が広がってるんでしょう？」

「ええ、そうよ」

「青空って見たことないのよね～。貴女の髪みたいな色なの？」

フランが私の髪を指差す。寝ている間に伸びて、床すれすれまでなった髪に触れるとフランに向き直る。

「どうかな、よく青空みたいだねって言われることはあったけれど…」

「ふ～ん……じゃあさ…」

今まで普通に笑っていたフランの顔が歪む。
それは狂気の笑みだった。

「…青空って紅く染まるのかしら」

フランがそう呟いた瞬間、大量の弾幕が現れた。
咲夜のナイフ弾幕が可愛く見える程の量に一瞬驚く。

「キャハハ、いっけー！！」

フランが腕を振ると、弾幕が一斉に撃ち出された。

「よっと…」

横っ跳びで弾幕を回避すると、私がいた場所の床は弾幕の直撃を受けて砕けた。

間違いない、フランは殺す気で攻撃してきている。
弾幕ごっこを知らないわけではなさそうだが、弾幕一発一発の威力がとんでもない。たぶん、相手を殺さない様な力加減をしていないんだ。

「え～～い！」

弾幕を避けた私にフランが黒い歪な棒状の武器で殴りかかってきた。

「うわっ！？」

慌ててしゃがむことで攻撃を避けた私は、大きく距離を取った。

「ねぇ…さっき廊下で唄ってた歌をまた聞かせてよ。私、すっごく気に入ったわ」

歪んだ笑顔のフランは、そう言って私との距離を詰める。

「あの歌は昔、私が好きだった歌なんだ…今はもう、あまり歌わないけれどね…」

フランの一撃をいなしながら私は苦笑いした。

「ふぅん…何で？」

「さぁ…何でかな？」

もう、私は昔の様に狂気に捕われていない。
思えば昔（前世）の私とフランは少し似ている。だからあの歌が

気に入ったのかもしれない。

「ふ～ん…まぁいいや――――……！」

フランが蹴りを放ってきたので腕を交際して防ぐ。

腕を蹴りつけた反動で大きく距離を取った時、フランは小声で何かを呟いていた。

「さぁ、本番はここからだよ…お姉さん♪」

フランが指を“パチン”と鳴らす。

次の瞬間、私は赤と青の弾幕に囲まれていた――

―ＳｉｄｅＯｕｔ―

「咲夜……」

「何でしょう、お嬢様？」

桜花が地下でフランと戦っている頃、レミリアの部屋ではレミリアと咲夜が窓から外を眺めていた。

「フランは…大丈夫かしら」

「きっと大丈夫ですよ…」

レミリアの呟きに咲夜が答える。

「“フランは私が助けてあげる…。”…か。言われた瞬間は冗談かと思ったけど…」

「はい…」

二人が思い出すのは桜花との会話。

弱っていたレミリアは桜花との戦いにあっさりと負けてしまった。しかも、一発の弾幕で、だ。『瞬殺』とは正にこのことだろう。

レミリアは最初、目を疑った。

巫女と戦って多少弱っていたとはいえ、吸血鬼たる自分が妖獣一匹に負けるなど考えていなかったからだ。

そして、驚くレミリアに桜花はこう言った。

「フランは私が助けてあげる…。だから、貴女は待ってなさい」

その時の桜花の顔は、娘を心配する様な母親の顔だった。

夜でも映える青い髪、全てを包む独特の雰囲気。

レミリアは何故か、彼女ならフランを“狂気”から救ってくれると確信した。

「これも運命、かしらね……」

「……」

レミリアの呟きに、咲夜は何も答えなかった。

――雨はまだ、止みそうにない。

紅魔郷Ｆｉｎａｌ Ｓｔａｇｅ前編（後書き）

今回は原作とは違うので、道中のＢＧＭを変えてみました。
美鈴とのほのぼの会話には合わないかもしれませんが…（汗）

※桜花の唄った歌詞に間違いがあったので書き直しました。

紅魔郷Ｆｉｎａｌ Ｓｔａｇｅ後編（前書き）

いつだったか…図書館にいる魔法使いに読んでもらった本があった。

世界を救った神の話。

ありきたりだったけど、その時の私にはとても興味深い内容だった。

そこ頃だっただろうか……私が外に出たいと思い始めたのは――。

紅魔郷Ｆｉｎａｌ Ｓｔａｇｅ後編

ＢＧＭ「Ｕ．Ｎ．オーエンは彼女なのか？」

「これは…！」

桜花の周りに浮いている赤と青の弾幕は、まるでフランの指示を待っているかの様に、その場に停止したままだ。

「ここからが本番だよ…お姉さん。
簡単に…壊れないでね？」

――禁忌「クランベリートラップ」

フランの手から二つの魔法陣が現れると、それに合わせて周りの弾幕も動き出す。

「（あれは…魔法陣？……そうか、フランは吸血鬼であり、魔法少女でもあるんだ）」

追い込む様に迫る弾幕を避けながら、桜花もフランへと弾幕を放

つ。

「アハッ！アハハハ！楽しい～♪」

フランは手に持った武器で弾幕を弾くと、再び魔法陣を作り出す。
桜花は隙間を見つけては回避と反撃を繰り返す。

「ぶ～！当たらない～！」

フランは頬を膨らませながら怒る。
それだけならまだ可愛いのだが、この状況でそんなことが言える者がいたら間違いなくどうかしている。

「うりゃ！！」

桜花は両手を広げてその場で回転。妖力を纏わせた爪を使い、周りの弾幕を掻き消す。
更に、お返しとばかりにフランへと弾幕を放つ。

「そんな弾幕じゃあ、私を落とせないよ？」

クスクスと笑いながらヒラリと弾幕を回避するフランを見て、桜花は先回りする様に走り出す

そのままフランへと飛び掛かると、驚くフランの左腕を掴み、壁へと投げる。

フランは空中で体勢を立て直すが、桜花は次々と接近戦を仕掛けてフランの集中を乱す。

「くっ…集中できない」

そして、完全に集中が切れたのか、フランの周りの魔法陣が消える。

フランは桜花の腕を蹴る反動で大きくジャンプすると、そのまま重力に任せて落下する。

その手には黒い歪んだ棒状の武器が握られている。

――禁忌「レーヴァテイン」

フランの武器から炎が立ち上り、巨大な剣となる。

フランは上段に構えた剣を力任せに振り下ろす。

桜花はすぐさま横へと回避する。

レーヴァテインはそのまま床をえぐり、巨大な爪痕の様な跡ができていた。

よく見れば天井から壁を伝い、床までが綺麗にえぐられており、火の粉から弾幕が作られている。

レーヴァテインは強大な威力を持つが、なにぶんフランには巨大過ぎるためどうしても大振りとなる。

しかし、桜花は別の意味で警戒することがある。

このレーヴァテイン…振った後に火の粉が弾幕となって襲ってくるのだ。

桜花は、再び振るわれたレーヴァテインを屈んで避けると、後からくる火の粉を転がって回避する。

「暑いわね…フランはそんな物持って熱くないの？」

「私は平気だよ？」

「うわ、羨ましい」

フランは横に振り抜いたレーヴァテインをそのままの一回転しながら勢いをつけて振り上げる。

床をえぐりながら迫るレーヴァテインを前に、桜花はあろうことかフランへと走り込んだ。

「ふえっ！？」

驚きながらも、レーヴァテインを振るのを止めないのはさすがというべきか…。

桜花はフランの懐に入り込むと、そのま腕を掴み、背負い投げの様に床へと投げ飛ばす。

「…がっ！？」

床にたたき付けられたフランは、背中からくる衝撃に思わず呻く。

思わず閉じていた目を開くと、目の前には拳を振りかぶる桜花の姿があった。

「くっ…！」

軋む体を無理矢理動かして回避すると、先程までフランがいた場所に桜花の拳が打ち込まれた。

ズドンッ、と鈍い音が響き、小さなクレーターができた床を見て、

フランは生まれて初めて背中がゾクリとする感触を味わう。
もしあのまま動けなければ、今頃フランの頭は粉砕されていただろう。
吸血鬼であるフランはその程度ならばまだ再生できるだろう。
しかし、敵の前で一瞬でも意識を失えば後に待つのは確実な“死”だ。
フランも日光や流水に弱い。外は今雨が降っているから、気絶した後に外に放り投げられでもしたら堪ったものではない。
フランは本能で桜花が危険な存在であると認識した。
――禁忌「フォーオブアカインド」
フランは自らの分身を作りだす。
それぞれがレーヴァテインを持ち、桜花を囲む様に向かっていく。
「……シッ！！」
桜花は一番近くにいたフランの腕を掴むと、頭上を飛び越える様に体を浮かせて落下する勢いで別のフランへと投げ飛ばした。
それを受け止めたフランへと接近すると、足払いをして体勢を崩す。
投げ飛ばされたフランがすぐに倒れそうなフランの援護にまわり、背後から殴りかかるが、桜花は身体を捻りながら器用に足払いをしたフランを背後へと蹴り飛ばす。

背後にいたフランは慌てて攻撃を止め、蹴り飛ばされた自分を避ける。
その瞬間、一気に間合いを詰めた桜花が体勢を崩したフランを殴り飛ばした。

残りのフラン達は慌てて一カ所に固まると、一斉にレーヴァテインを振りかぶる。

「夢想封印・青！」

桜花が両手を前に突き出し、五つの光弾が発射される。
レーヴァテインを振り下ろそうとしていたフラン達は反応できずに弾き飛ばされる。衝撃により残りの分身が消え去り、フランは一人に戻った。

「…っ！？」

吹き飛ばしたフランへと追撃しようと走り出した桜花は突然足を止める。

次の瞬間、桜花の目の前に網の様に緑色の弾幕が現れた。

――禁忌「カゴメカゴメ」

まるで網で捕らえる様に放たれる弾幕を桜花は体を捻って回避する。

「フッ…フフフ……凄い…凄いよ、お姉さん！

私、楽しい！こんなにゾクゾクした遊びは初めてだよ！
もっと……モットアソビマショウ？」

真っ赤な瞳を爛々と輝かせたフランが弾幕を放つ。

「封魔陣！！」

桜花は迫る弾幕を懐から出した札で小さな結界を作ることで防ぐ。
そのまま網の目を潜る様に一直線にフランに近づくと、振るわれたレーヴァテインを妖力で作った障壁で受け止める。

「アハハ、アハハハハハ！！まだまだいっくよー！！」

――禁忌「恋の迷路」

フランを中心に迷路の様に放たれる弾幕。
一歩間違えたらもう逃げ場はない死の迷路に、桜花は迷わず飛び込んだ。

「お姉さん強いね！なんでそんなに強いの？」

弾幕を放ちながらフランが尋ねる。

「う～ん…長年の経験かな？」

「羨ましいな…私は一度も外に出たことないけど、外に出たらいろんな事を経験できるんでしょ？」

迷路を抜けた桜花と、弾幕を止めたフランが組み合う形で動きを止める。

「そうだね、世界は広いよ。この館なんか、世界から見たら一粒の砂みたいなものだもの。それに…」

「それに…？」

フランがワクワクした顔で桜花の言葉を待つ。

「それに…世界は、どこまでも“自由”なのよ。この地下室みたいな限られた空間なんて存在しない…どこまでも青い空が広がってる」

フランの体がプルプルと震えだす。しかし、恐怖や身体の疲労の類ではない。

フランは笑っていた。

期待に瞳を輝かせ、それはもう年相応の満面の笑顔で彼女は笑った。

フランにとって、外に出ることは“世界”が変わることに等しいからだ。

４９５年もの間、限られた空間で過ごしてきた彼女が欲かったもの…

一つ目は家族…レミリアとの関係を良くすることである。

これは素直になれないレミリアと、狂気のせいで自分の気持ちを上手く表せないフランの些細なすれ違いからなのだが…。

これはフランの狂気をどうにかしたら、後は時間が解決してくれるだろう。

二つ目…ある意味、これが重要なのかもしれないが…。

フラン自身が“自由”を手にすることだ。

紅魔館という籠から、自由な空へと飛び立つこと…そして、本当の世界を知ること、この一種の探究心がフランの理性を保っている要因であると桜花は考えていた。

「私は貴女を自由にしてあげたい。だから…！！」

桜花は力を込めてフランを押し返す。

体格差から、フランの身体はあっさりと後方へと押し返される。

「さっさとこの遊びを終わらせるよ！？」

フランはニヤリ笑って頷く。

「絶対に勝つんだから！！」

フランは両手を広げて魔力を一気に集める。

集まった様々な力は渦を巻き、虹色に輝き始める。

次の瞬間、桜花の目の前に爆発したかの様に様々な色の弾幕が飛び散る。

――禁弾「スターボウブレイク」

凄まじい勢いで放たれた弾幕は、まるで雪崩の様だった。
隙間はほんの少ししかなく、常に動きまわらなければならない。

「うわっ、危なっ！？」

肩を掠った弾幕に桜花は思わず声をあげた。
フランは弾幕の量を更に増やし、隙間も段々と無くなってくる。

「仕方ない…ちょっと力を解放するよ！」

桜花の隠れていた尻尾が三本まで現れる。
同時に、周りにある弾幕も全て妖力で吹き飛ばした。

「あれ…尻尾が増えた！凄～い！触らせてよ！」

「私に勝てたら触ってもいいよ」

再びお互いの腕を掴んで組み合った体勢のまま、ぎりぎりと力比べが始まる。

ただ、今の私は先程より力が増しているので、フランが徐々に後退していく。

「…くっ、なんて力！」

フランは、力比べで勝てないのがわかったのか後方に大きくバックステップして距離をとった。

そして、青い大小様々な弾幕をあらゆる角度に放つ。
桜花は慌てずに弾幕を回避する。

「…っ！？」

しかし、次の瞬間、壁や床に当たった弾幕が跳ね返り、再び桜花を襲った。

――禁弾「カタティオプトリック」

壁を反射しながら迫る弾幕に、桜花は一瞬顔をしかめる。

しかし、次の瞬間には元の顔に戻り、少し身体を右に移動させると、そのまま腕組みをしたまま動かなくなった。

フランは桜花の行動が理解できなかった。弾幕が跳ね回るこの室内で動きを止めるなど自殺行為だからだ。

ところが、先程から桜花には一発も弾幕が当たっていない。精々掠る程度だ。

「まさか…弾幕の軌道を全て読んだの！？」

「大正解、ここは唯一弾幕が通らない場所。急いで計算したからちょっと頭痛いけど…」

フランは絶句した。

あの顔をしかめた数秒間でこの部屋の構造や、弾幕の向きから安全地帯を見つけ出すなど、最早高速思考どころの考え方ではない。

フランは桜花を直接狙おうと弾幕を展開する。

しかし、その瞬間に桜花は一気に距離を詰めてきた。

しまった、と思う隙もなく、フランは投げ飛ばされていた。

「（強い…たぶん、私よりも強いんだ。……でも、負けたくない。勝ちたい！）」

弾幕を撃ち合い、戦い続ける中で、いつしか…フランからは狂気よりも、憧れや尊敬の念が強くなっていた。

――禁弾「過去を刻む時計」

フランから、弾幕と共に過去を刻む様に反時計回りに回転するレーザーが放たれる。

桜花はスルリとレーザーや弾幕の間を抜けてフランへと近づく。

フランもすぐにレーヴァテインを構えて迎撃する。

レーザーが迫れば距離を離して、隙を見て再び接近する。

これをしばらく繰り返すうちに、レーザーや弾幕は次第に消えていく。

しかし、フランは笑っていた。

狂気ではない、彼女の純粋な感情からくる笑みだった。

「楽しいね、お姉さん！！」

「ふふ…そうね」

弾幕が全て消え去り、フランは大きく距離をとる。

「Ｓｈｅ　ｄｉｅｄ　ｂｙ　ｔｈｅ　ｂｕｌｌｅｔ　ａｎｄ　ｔｈｅｎ　ｔｈｅｒｅ　ｗｅｒｅ　ｎｏｎｅ．（一人が弾幕を避けきれず、そして誰もいなくなった）」

――秘弾「そして誰もいなくなるか？」

フランの姿が消え、無数の弾幕が桜花に襲い掛かる。
桜花は部屋の中を縦横無尽に駆け回ることで回避していく。
次第に数が増えた弾幕は、桜花を囲む様に徐々にスペースを縮めていく。

「封魔陣！！」

弾幕があと少しで桜花に触れるという所で、桜花は札を一枚取り出して床にたたき付ける。
それと同時に発生した光の壁が弾幕を薙ぎ払う。

しばらくして姿を現したフランは肩で息をしている状態だった。

「はぁ…はぁ…ああ、楽しかった。次が私の最後のスペル…」

桜花は両手を広げると笑いかけた。

「いいよ、おいで。私は全てを受け止めてあげる」

「…うん、ありがとう」

――QED「４９５年の波紋」

フランを中心に波紋の様に放たれる弾幕。
桜花も目を閉じて両手を広げる。

「夢想封印・蒼」

桜花の周りを青い光弾が回る。
光弾はどんどん数を増やし、最早巨大な弾となった。
桜花とフランは、一瞬お互いを見た後、同時に相手に向けて放った。

～レミリアの部屋～

レミリアと咲夜は桜花を待ちながら紅茶を飲んでいた。

「お嬢様、妹様は大丈夫でしょうか…」

「咲夜、その質問はもう五回目よ？」

「はい、しかし…」

咲夜が言葉を言い終わる前に、館中に轟音が響き渡った。

「これは！？」

慌てて咲夜が廊下に出る。

廊下には音に驚いたメイド妖精達がワタワタと飛び回っていた。

「あの音は…地下から！？」

急いで地下に向かおうとする咲夜の腕をレミリアが掴んだ。

「落ち着きなさい、咲夜」

「お嬢様…」

レミリアは急ぐ様子もなく、ゆったりと地下へと歩いていく。

咲夜もレミリアの後ろについて地下へと向かった。

～地下廊下～

レミリアと咲夜が到着した時に目にした光景は凄まじかった。

フランの部屋の扉は粉々になり、廊下の壁や床には燁が入っている。

そんな廊下の先で、パチュリーと美鈴が部屋の中を眺めていた。

「二人とも何を…」

咲夜が声をかけようとした時、パチュリーが口元に人差し指を立て、静かにする様にジェスチャーで伝える。

口を閉じた咲夜とレミリアが部屋の中を見る。

そこには、困った顔の桜花と、彼女にしがみついて静かに寝息を立てているフランの姿があった。

その光景に咲夜は微笑み、レミリアは満足そうに頷く。

いつの間にか、雨はあがっていた――。

紅魔郷Ｆｉｎａｌ Ｓｔａｇｅ後編（後書き）

※誤字訂正しました。

紅魔郷エピローグ（前書き）

短いですが、お楽しみ下さい。

紅魔郷エピローグ

紅魔館――。

悪魔の住む館と呼ばれるその館は、その名の通り、外も中も真っ赤な色をしている。

窓が少なく、昼間であるにも関わらず室内は薄暗い。

そんな館の中を、全く正反対の青色の服を着た少女が歩いている。

言うまでもない。桜花である。

紅霧異変が終わってから三日が経った現在、様子を見るために彼女は再び紅魔館を訪れていた。

本来は次の日にでも来たかったのだが、チルノに捕まり、二日間ずっと家から出してもらえなかったのだ。

そのため、こうして三日目に訪れたのである。

―桜花Ｓｉｄｅ―

紅魔館の廊下を歩きながら、私はチルノの事を考えていた。

私が紅霧異変を解決して、チルノの家に帰った時、チルノは私のコートに包まって大ちゃんと寝ていた。

疲れていた私は二人に毛布をかけると、水浴びを済ませてから二人の隣に横になった。

次の日、目が覚めると、私を挟む様にチルノと大ちゃんが移動していた。

約千年ぶりに一緒に寝たこともあってか、私は安心感からか…二度寝をしたのだ。

それがいけなかった。

次に目が覚めると、何故か服が脱がされていた。

驚いて周りを見渡した私の目の前には……とても恍惚とした表情のチルノと大ちゃんがいた。

～音声のみでお楽しみください～

「ふふふ…千年ぶりの桜花…じゅるり」

「ちょっ…、チルノ!?待って!いきなりこれは…」

「千年も我慢したんだよ?……もう、我慢しなくてもいいよね?」

「い、いや…チルノ…あ…ちょっと…いきなり…そ…こは…あぅ…ま、待って／／／」

「桜花さん…チルノちゃんと私じゃ嫌なのかな?かな?」

「ひっ！？だ、大ちゃん…だよね！？あっ！し、尻尾は…だ、だめぇ…！／／／」

「ふふふ…何を言ってるんですか、私がＤＩＥちゃんじゃなかったら誰だと言うんですか？」

「あ、あれ？字が違っ……」

「桜花ぁぁぁ！！」

「桜花さぁぁぁん！！」

「いやぁぁぁぁ！！」

―――

―――

――

―

……あぅ。

あれから丸々二日間…私は散々二人から弄られ、最終的には不覚

にも気絶してしまった。

いや、嫌ではなかったのだけれど……

ああっ！！思い出すだけで赤面するのがわかる！！どうしよう！？

「…何をしてるんですか貴女は」

私が廊下の隅で悶えていると、迎えにきた咲夜が呆れた様子で声をかけてきた。

「…いや、自分の嫁の対応に困ってただけ」

「…嫁？」

「…ごめん、今のは忘れて」

「…はあ、何だかわかりませんが、貴女も苦労しているのですね…」

咲夜は溜め息をつきながら私を立たせると、レミリアの部屋へと案内してくれた。

正直、歩くのもだるいのだが……チルノとＤＩＥちゃ…大ちゃんは、できるだけ怒らせないようにしよう。

そんなことを考えながら歩いていた私と咲夜は、いつの間にかレミリアの部屋の前にたどり着いていた。

咲夜が扉をノックする。

「お嬢様、桜花様がお越しになりました」

咲夜はそう言うと同時に扉から離れ、廊下の隅に移動する。
私はその行動に首を傾げるが、その理由はすぐにやって来た。

「桜花ぁぁぁぁ！！♪」

扉が突然開き、物凄い勢いで金髪の少女が飛び出してきた。
言うまでもなくフランである。

私は驚くも、ちゃんとフランを受け止める。

「こんにちは、フラン…気分はどう？」

「うん！もう絶好調だよ！！」

戦いの後、私の能力でフランの狂気は抑えてある。
大丈夫だとは思うのだが、一応私がたまに様子を見に来ることになっている。

「いらっしゃい、桜花。歓迎するわ」

開かれた扉からレミリアが現れた。
彼女は紅魔館にいる間は特に問題無くカリスマを発揮しているが、異変解決の次の日から今日までの三日間…博麗神社に入り浸り、霊夢と共にゴロゴロしている。
その時のレミリアは見た目と同じくらいに無邪気なので、別の意味で他人を引き付ける。
こう…護ってあげたくなる様な気持ちになる。これも一種のカリスマなのだろう。

カリスマブレイクではない……と思う。

とにかく、レミリアとフランと一緒にテーブルに着き、咲夜の入れてくれた紅茶を飲む。…うん、美味しい。

「さてと…レミリア、フランとは仲良くしてるかしら？」

レミリアはビクッ、と一瞬動きを止めたが、顔を逸らしながらコホン、と咳ばらいをした。

「も、問題無いわ、いつもと同じよ…そもそも、私とフランは元から悪い関係では…」

「あのねあのね！！お姉様、昨日咲夜と一緒に私の為にお菓子を作ってくれたんだよ！！」

「なっ…ちょっとフラン！？」

レミリアの言葉に割り込む形で、フランが笑顔で昨日のレミリアの様子を教えてくれた。

どうやらレミリアは、今までフランに構ってあげられなかったことを後悔しているらしく、最近はその埋め合わせのつもりなのか、フランとはいつも一緒にいるらしい。

「なんだ、レミリアもちゃんとお姉さんらしくしてるみたいね。私も安心したわ。…貴女もでしょう、咲夜？」

「はい、そうですね」

「な、ななな……」

私と咲夜がレミリアへと微笑みを向けると、レミリアは顔を真っ赤にしていた。

「わ、私は吸血鬼なのよ！？妖怪達の上に君臨する者なのよ！？…って、そんな生暖かい目で見るなぁ！！」

真っ赤な顔で涙目のレミリアは、う～、唸りながら帽子を深く被り直して顔を隠した。

「アハッ、お姉様、顔真っ赤だよ？可愛いなぁ♪」

「うわぁぁぁん！！」

顔を覗き込んだフランの言葉がトドメとなったのか、レミリアは走って部屋を出ていってしまった。

「？…変なお姉様～？」

フランはレミリアが出ていった扉を見ながら首を傾げていた。

その隣で、私は咲夜と共に笑った。

Ｅｎｄｉｎｇ　Ｎｏ．ＳＰＥＣＩＡＬ

――東方紅魔郷～ｔｈｅ　Ｅｍｂｏｄｉｍｅｎｔ　ｏｆ　Ｓｃａｒ

let Devil～

～END～

―オマケ♪―

「…違う、違う、私は吸血鬼…夜の女王よ。あれはフランの為じゃなくて、あくまで自分の立場というものから……」

「お姉様♪」

「…っ!?……なんだ、フランじゃない…脅かさないでよ」

「ねぇ、お姉様…私のこと好き?」

「……何よ突然」

「いいから…私のことは好き?」

「……そうね、好きよ?私の大切な妹だもの」

「えへへ～♪ありがとう、お姉様！！」

「…ふぅ、まったく…フランは甘えん坊なんだから」

「ふふ♪…フランもお姉様のこと大好きだよ！だって、私のお姉様なんだから♪」

「あ、当たり前じゃない！」

「えへへ♪」

「……はぁ、悩んでる自分が馬鹿らしくなってきたわ」

「…お姉様？」

「ほら、行くわよフラン」

「あ…待ってよお姉様～！！」

吸血鬼姉妹の物語は始まったばかり――。

Ｅｎｄｉｎｇ　Ｎｏ．ＳＥＣＲＥＴ

閑話・ちょっとした昔話（前書き）

是非とも吸血鬼異変の話が読みたいというリクエストがあったので書いてみましたが……。

チルノ視点の短い話です。

あんまり面白くないかもしれませんが…（汗）

閑話・ちょっとした昔話

今から約十年前のこと…。

博麗大結界の完成の後、妖怪達はむやみに人間を襲ってはならないという決まりができたために、段々と士気が下がり、不満の多い毎日を送っていた。

そんな時、紅い館が霧の湖の近くに現れた。
その館には吸血鬼が住んでおり、その強力な力とカリスマによって、多くの妖怪がその吸血鬼の下に集まった。

吸血鬼は幻想郷を自分のものにしようと部下にした妖怪達を使い暴れ始めた。
当然、幻想郷を護る者達はそれを黙って見てはいなかった。

◆

～人間の里～

―チルノＳｉｄｅ―

異変が始まって真っ先に狙われたのは人間の里だった。博麗大結界ができてから、人間は妖怪に襲われることが少なくなり、完全に安全とは言えなくともそれなりの生活を送れるようになっていた。
それはつまり、人間が妖怪を畏れなくなるに等しい。妖怪にとって人間から畏れられなくなるということは死活問題だ。
なぜなら妖怪は人間の恐怖や噂、強い願望等から生まれた存在。それらが無くなれば当然、消えてしまうのも目に見えている。
だから妖怪達は人間に畏れを抱かせる為に里を襲ったのだ。

「よっと…」

目の前に迫る妖怪を薙ぎ倒す。
と、言っても殺してはいない。峯打ちである。

「これで５０匹目だよ。…まったく、懲りない奴らだ」

あたいは人間の里の入口で妖怪の侵入をくい止めている。
これでも正義の味方のつもりだから、助けるのは当たり前なんだけど。
もし、彼女（桜花）がいたら同じ事をしているだろう。

桜花は今だ行方不明のままだ。
あの戦いの後、桜花は行方不明となり、紫からもたいした情報はもらっていない。
あたいは桜花がいない生活を千年以上も続けている。それは寂しく、辛い年月だった。
そんなあたいを支えてくれたのが、あたいといつも一緒にいた大妖精…大ちゃんだった。

大ちゃんは落ち込んだあたいを慰めてくれたり、一緒に遊んでくれたりした。
おかげでこうして元気に過ごしていられるのだが…。
最近、大ちゃんが色々とおかしい。
今だって……、

「チルノちゃんに手を出すなんて…そう、死にたいのね貴方…ふふふ、安心しなさい…痛いのは一瞬だから。
誰もチルノを傷つけることは許さない。チルノは私と桜花さんだけのものなんだから…フフフ、アハハハハ！！」

……と、光のない目と感情のない無表情で妖怪達を次々と倒している。
まさにＤＩＥちゃん…といったところかな。

「チルノちゃん、こっちのゴミの処理、終わったよ」

こちらを振り返る大ちゃんは、血の付いたクナイを持ったままで、はっきり言うと怖い。
しかし、正に「褒めて褒めて」と言いたげな顔をされると何も言えないので、仕方なく褒めた。

＞ｉ２５５８６―２１３０＜

その後、大ちゃんを人間の里に待機させて霧の湖へと向かう。
そこは正に激戦区とも呼べる場所だった。
無数の妖怪が倒れており、湖の上では今正に紫と吸血鬼の二人が戦っているところだった。
あきらかに紫が優勢…それを見たあたいは剣を腰のホルダーに挿すと、木に寄り掛かる。

「やれやれ…何にしろ、これでやっとかたがつく…のかな？」

「いや、そうでもないんじゃない？」

声のした方を向けばそこにいたのはリンだった。
桜色の髪を揺らしながら、リンは近くの岩に腰掛ける。

「へぇ…まだ、この異変は終わらないっていうの？」

リンはクスクス笑って、どこからか取り出した扇子で口元を隠す。

「違うよ。今回の異変はこれで終わりだと思う。…ただ、このままじゃまた新しい異変が起こるよ」

「妖怪達の気力が戻らないと意味がない…ってこと？」

「正解」

ふむ、とあたいは腕を組んで考える。
結局、今回の異変の原因は妖怪達の不満が爆発したようなものだ。

たまたま吸血鬼という強い存在が現れたために一気に溢れただけにすぎない。
放っておけばまたいつか爆発する。

「それでね、私に考えがあるんだ。チルノちゃんも手伝ってくれないかな？」

リンはコロコロと鈴の音の様な声で笑うと、あたいに博麗の巫女の所に行けと言った。
丁度、湖の上では、紫が吸血鬼の少女の頭にゲンコツを落としたところだった。……痛そうだな。

次の日、まだしっかりしている何人かの妖怪を連れて博麗の巫女を訪ねる。
この時の巫女はそろそろ役目を終えて、新しい博麗の巫女を探す準備をしていた。
ただ、見つかるまで待つだけでは暇だったので、修行もせず、だらけながら新しい遊びを考えていたのだという。

その遊びこそ、後に幻想郷で唯一の決闘法となる『スペルカードルール』…つまり、弾幕ごっこだった。

それからというもの、弾幕ごっこは妖怪達には大人気で、今では幻想郷のほとんどの者達がスペルカードルールでの戦いを楽しんでいる。

◆◆

「……と、いうわけさ」

「なるほど…」

あたいは桜花がいない間に幻想郷で起こった出来事について話していた。

「いやはや…その吸血鬼って間違いなくレミリア達でしょうね。まったく、あのお嬢様には困ったものだわ…」

桜花は苦笑いしながらお茶を啜る。

「それに、霊夢に怠け癖がついたのは、先代の巫女がそんな性格だったからって可能性があるわね…いや、もとからかしら？」

「…ちょっと、どういう意味よそれ」

あたいと桜花を挟んだ反対側から霊夢が半目で桜花を睨む。

「あら、私はてっきり霊夢は自覚してるものだと…」

「…うるさい」

そんなやりとりを聞きながらあたいはお茶を啜る。
今は桜花がいて、霊夢もいて、なかなか楽しい毎日を送っている。
たまに小さい異変が起きたりするけれど、それはそれで弾幕ごっこが楽しめる。
こんな日が続けばいいな、と思いながら…あたいは今日も一日を終えるのだった。

閑話・ちょっとした昔話（後書き）

次回から妖々夢に入ります！

妖々夢プロローグ（前書き）

幻想郷は今日も賑やかだった。

ただ、異変はたしかに始まっていた。

始まりは、一人の亡霊が見つけた一冊の書物からだった…。

妖々夢プロローグ

白玉楼――。

そこは冥界に建てられた巨大な屋敷。
死んだ人間の魂が訪れる場所。

その冥界の主にして、死を操る女性がいた。

名を、西行寺　幽々子という――。

「う～ん、困ったわねぇ～」

幽々子は困っていた。冥界の主としての仕事に必要な道具を整理しついるところなのだが…如何せん、普段からのほほんとしている彼女は、蔵の中で道具が見つからずに右往左往していたのだ。
彼女の部下である庭師の少女は現在買い出しに出かけて此処にはいない。
よって、幽々子は一人で蔵の中を整理していたのだ。

「えっと……あれがあそこで…これが……あ～ん、妖夢～助けて～」

あまりの資料の量に幽々子は涙目になっていた。
ふぅ、と溜め息をつきながら近くの椅子に座る。

「まったく…いつの間にこんなに量が増えたのかしら…」

目の前に散らばる無数の資料や道具の数々。その全てのことを幽々子は覚えていない。千年以上の年月は彼女の記憶を蝕み、些細なことから忘れていく。

「さてと…もうひと頑張り……あら？」

幽々子が立ち上がろうとした時、一冊の本が目にとまった。その本は相当古い物だとわかる。しかし、不思議なことに一切の汚れや染みが無い。

幽々子は興味本位でその本のページをめくった。

これは、雪の降るある冬の日の出来事――。

～人里・稗田家～

「お邪魔しました」

「いえいえ…またいらしてくださいね、桜花さん」

この日、桜花は人間の里の稗田家を訪れていた。

桜花が幻想郷に再び姿を現して早くも数ヶ月が過ぎていた。

季節は変わり、寒い冬の季節は終わったはずだったが、幻想郷はまだ真っ白な雪で染まっていた。

「では、幻想郷縁起の編集が完成次第、お伝えしますね」

「うん、あっきゅんも体に気をつけるんだよ？」

「桜花さん、その…“あっきゅん”はちょっと……」

そう言うと、少女…稗田阿求は恥ずかしそうに俯いた。

「何言ってるのさ。あっきゅんはあっきゅんじゃない♪」

そう言うと、桜花は手を振りながら空に飛び立った。

「さてさて…そろそろ霊夢を解決に行かせるかな」

現在の幻想郷は異変の真っ只中である。暦の上では春になったが、幻想郷にはまだ雪が降り続けていた。

春雪異変と呼ばれるこの異変は冥界の主、西行寺　幽々子が幻想郷中の春度を集め、西行妖を咲かせようとした異変だ。

人里で買い物を済ませた桜花は、神社へと戻ると、早速居間に入る。

「霊夢、いるかしら？」

「ん～、いないわよ～」

そんな気の抜けた返事をする霊夢は、炬燵から頭だけを出して幸せそうな顔をしている。

ちなみにこの炬燵は桜花が作った物だ。電力ではなく、桜花の妖力を使って稼動している。霊夢が毎年寒い思いをしていると言うので桜花が作ったのだ。

「なんだ、いるじゃないの。そろそろこの異常気象の調査に出かけなさい」

「えぇ～やだぁ～」

霊夢は嫌そうに顔を背ける。余程炬燵から出たくないのだろう。

「そう…じゃあ私が解決に行くわ。炬燵の動力が無くなるけどいいのね？」

「ぐっ……わ、わかったわよ。行けばいいんでしょ！？」

「よろしい♪」

『…桜花、私はどうすれば？』

突然頭の中に声が響く。
しかし、桜花は驚くそぶりも見せずに微笑む。
『そうね、今回は貴女も手伝ってちょうだい……彩花』
『…ん、了解』
そして、霊夢にばれないようにこっそりと神社の裏で、一つだった姿が二つに分かれた。
こうして博麗主従コンビは博麗神社から飛び立った。
そして、しばらくしてその後ろを、桜花そっくりの顔をした人物が追いかけて行った。

東方妖々夢～Ｐｅｒｆｅｃｔ　Ｃｈｅｒｒｙ　Ｂｌｏｓｓｏｍ～

・主人公を選択すること

～青き伝説～
『鈴音桜花』

移動速度・速
低速時速度・中
ボム初期数・３
Ｃｈｅｒｒｙ減少率・小

『特殊能力』

・オートアイテム回収の位置が画面の中央から上。
・エクステンド時にボムが二つ増える。

『ショット』

「青符　追尾タイプ」
～高速時～
・桜花専用ホーミングアミュレット。
　一定間隔で敵を追尾する弾幕を放つ。

～低速時～
・集中型妖力弾。
　ある程度敵を追尾する妖力弾を集中して放つ。霊夢の様に全包囲は追尾しない。

『ボム』

～高速時～

青符「夢想封印・青」
・追尾する青色の光弾を五つ放つ。威力はさほど強くない。

～低速時～

蒼符「夢想封印・蒼」
・青色の光弾を十個、前方に集中して放つ。集中攻撃なので威力が高い。

・裏の主人公選択

～青き伝説の影～

『鈴音彩花』

移動速度・速
低速時高速・遅
ボム初期数・３
Ｃｈｅｒｒｙ減少率・大

『特殊能力』
・攻撃しないでいると、当たり判定が極端に小さくなる。

・喰らいボムの時にボムを二つ消費するかわりに威力が上がる（ボムが一つしかない場合は変化しない）

『ショット』

「黒符　威力重視タイプ」

～高速時～

・霊力弾

敵に当たると少し爆発する霊力弾を前方に放つ。攻撃範囲はあまり広くない。

～低速時～

・黒槍（くろやり）

霊力で作った黒い槍状の弾幕を放つ。攻撃範囲は彩花の真正面のみ。

『ボム』

～高速時～

黒符「夢想封印・黒」

黒い光弾を周りにばらまく。威力よりも周囲の弾幕を消すことを重視したもの。

～低速時～

拒絶「空間切断」

周囲の空間を切り裂き、敵にダメージを与える。弾幕も同時に消せるが、切り付ける場所が前方に集中しているので、流れ弾が残る可能性がある。

……少女祈祷中

妖々夢プロローグ（後書き）

妖々夢が終わったら幻想郷縁起で詳しく書きますが、桜花と彩花の分裂については能力です。

『分離する程度の能力』

好きな時にお互いを入れ替えたり、分かれたりする能力だと考えていただければいいです。

妖々夢Ｓｔａｇｅ１（前書き）

幻想郷は五月を迎えていた。

しかし、まだ冬は終わっていない。

一体何故、春は来ないのか…。

妖々夢Ｓｔａｇｅ１

Ｓｔａｇｅ１

『白銀の春』

ＢＧＭ「無阿有の郷～Ｄｅｅｐ　Ｍｏｕｎｔａｉｎ」

「…寒い」

何度呟いたかわからない言葉を再び呟く。

楽園の素敵な巫女…博麗霊夢は手の平を擦ると溜め息つく。

吐いた息は白く、すぐに消えて見えなくなる。

「そんな格好をしていたら寒いのは当たり前じゃないの」

そんな彼女の隣に並んで飛んでいるのは、彼女の神社の神であり、幻想郷を作るきっかけを作りあげた青い妖獣…鈴音桜花である。

「そんな腋を開けた巫女服なんか着てるから寒いのよ…」

「だって、これが博麗の巫女服なんでしょ？」

「少なくとも、私が眠る前は普通の服だったわ」

二人は雪の降る幻想郷を進んでいた。本来は、春の訪れと共に花が咲き始める筈の道は、どこまでも雪によって白く染まっている。

「寒い～、いい加減にしてほしいわ。本来ならもう寝る季節なのに」

霊夢が深々と溜め息をついた時だった。

『ふ～ん…春眠暁を覚えず…かしら？』

目の前に一人の少女が現れた。

白と青を基準にした服、肩まである薄い紫色の髪、そして、頭には白い帽子を被っている。

その見た目は、さながら雪の妖精の様だが、彼女は雪女の一種である。

「どちらかと言えば、あんたらの永眠かな？」

霊夢がそう言いながらも、札とお祓い棒を構える。彼女も周りの空気の流れを変えるのがわかった。

彼女の名前は『冬の忘れ物』ことレティ・ホワイトロック。

冬にしか見る事ができない妖怪である。

『寒気を操る程度の能力』を持ち、冬に暴れるだけ暴れた後に、春が来た途端に姿を見せなくなる。

「はじめまして、レティ。私は鈴音桜花、チルノが毎年お世話になってるわ」

突然親しげに話しだす桜花に驚いた顔をした霊夢だったが、レティはもっと驚いていた。

「貴女がチルノが言っていた“恋人”さん!?これはびっくりだわ!!」

「恋人さん、かぁ…まぁ、間違ってはいないんだけどね。チルノが嬉しそうにしてたわ。新しい友達ができたってね」

「あははは…私こそ友達ができて嬉しかったよ。ほら…このとうり、私の近くは常に寒いからさ…あんまり近寄る奴なんかいなくてね」

少し照れた様に頬をかいたレティは「コホン」と咳ばらいをすると、真剣な顔に戻る。

「さて、私は冬が過ぎたらここにはいられなくなる。だから冬を終わらせに行く貴女達を通すわけにはいかないわ」

周りの気温が更に下がる。気温の低下は身体の自由を奪い、普通の人間ならそのまま倒れてしまうだろう。

「霊夢、ここは下がってなさい。私が相手をするわ」

「あら、じゃあお願いね。あ～寒い…」

霊夢は桜花の後ろに下がると、札を使って結界を張る。

「よし…じゃあレティ、勝負といきましょうか」

「お手柔らかにね」
桜花とレティは同時に弾幕を撃ち出した。
BGM「クリスタライズシルバー」
最初に動いたのはレティだった。
彼女が手を広げると同時に白い霧の様に空気が変わっていく。
レティの『寒気を操る程度の能力』は、単純に『気温』や『冷気』を操るだけではない。
彼女は『冬』という季節の力を強める事ができる。冬を司る彼女にとって、今の状況は正に最良の環境なのだ。
よって、普通の妖怪には考えられない力を発揮する場合がある。
レティの周りの空気が更に冷える。冷えた空気は氷の結晶となり、次々と桜花へと放たれる。
桜花は慌てず、その場でくるりと回る様に弾幕を回避していく。
そして、お返しとばかりに青色の弾幕を放つ。
すると、レティは回避ではなく、目の前に氷の壁を作る事で防御した。

「…へぇ、やるじゃない」

その行動に桜花は薄く笑みを浮かべる。

レティのとった行動は普段の勝負からすれば珍しい。

なぜなら、弾幕ごっこは“当たらないこと”つまり、避ける事を前提に行動するからだ。

しかし、桜花や霊夢相手だとそうもいかない。なぜなら、この二人の攻撃は“追尾”するからである。下手に避けようとすれば、突然軌道を変えた弾幕に反応できない。それならば真っ正面から受け止めればいい。

幸いなのか、ホーミングアミュレットに籠めてある霊力はそこまで強くない。即席で作った氷で十分防げる程度なのである。

「チルノから貴女の事は少しは聞いてるよ。凄く強いらしいじゃない。

なら、事前に情報を貰うくらいのハンデは構わないでしょう？」

レティはニヤリと笑って広げた腕を前に向ける。そこには一枚のスペルカード。

――寒符「リンガリングコールド」

前に突き出したレティの手の平から、青色の弾幕が鳥の様な形になり羽ばたく様に広がる。同時に、周りから氷の結晶が回り込む様に迫ってくる。

『リンガリングコールド』は直訳すれば“長引く寒さ”や“名残

惜しい寒さ”という意味があるが、同時に“春”を表す意味もある。
春を表す様に羽ばたく鳥をイメージしてあるのか、弾幕は直線的で難しくない。
桜花は右手に妖力を溜めると、思いっ切り薙ぎ払う。

「せぇぇい！！」

そこから放たれたのは、圧倒的な数の弾幕。だが、見た目はまるで津波だった。レティの弾幕はあっさりと飲み込まれる。

「ちょっ…こんなのどうやって避ければいいのよ！？」

「あら、ちゃんと避ける場所はるわよ？……凄く小さいけど…」

「鬼ぃ！悪魔ぁ！」

「失礼ね、私は狼よ」

レティは急いで隙間を探す。そして見つけた瞬間、その隙間へと反射的に飛び込んだ。

「はぁ…はぁ…危なかった……」

安堵の息を吐くレティを見て、桜花はぱちぱちと手を叩く。

「凄い凄い、よく間に合ったね！」

レティは桜花にジト目で睨むと、深呼吸して再び構える。

「チルノもとんでもない恋人がいたものだわ…」

レティが再び両手を広げて周りの空気の温度を下げ、弾幕を作り出す。
しかし、今度は弾幕の中にレティの妖力で作ったレーザーらしきものもある。
「長期戦は不利みたいだから…すぐに決着をつけるわ！！」
ポケットの中から新しいスペルカードを取り出し、宣言する。
――怪符「テーブルターニング」
放たれるのは大量の弾幕と直線的な白いレーザー。
弾幕はあらゆる角度から襲い掛かり、隙をつく様にレーザーが飛んでくる。
しかし――。
「ふ…私にその程度の弾幕が通じるとでも？出直してきなさい！！」
――青符「夢想封印・青」
桜花の周りに現れた光弾は次々とレティの弾幕を飲み込んで消滅させる。

「発射ぁ！！」

そして、桜花の命令で一直線にレティへと飛んでいく。

「なっ！？…くっ、これは防げない！！」

レティは急いで回避行動をとろうとする、しかしこのスペカはホーミング性能があるので、レティは回避行動をとり続けなければならない。

「わっ！？…ちょっ…危なっ……ひゃあ！？」

次々と迫る光弾を避けているうちに、段々と余裕の無くなってきたレティは徐々に涙目になり始めた。しかも、このスペルはやたらと持続時間が長いので、レティは精神的にもだいぶ疲弊してきている。

「ふぇぇ…もうやだよぉ～！！」

ついに泣き出してしまったレティを見て、流石にやり過ぎたと思った桜花はスペルを止める。

「ごめんなさい…やり過ぎたわ」

「……ぐすっ」

涙目で睨むレティの頭を撫でながら桜花は謝った。

レティは顔を赤くして俯くと、プルプルと肩を震わせ始めた。

「あ、あれ？……まさか余計に怒った？」

桜花が急いで手を離すと、レティが勢いよく離れて俯いていた顔を上げる。
真っ赤な顔と潤んだ瞳のまま、“ビシッ”という音が聞こえるくらいの勢いで桜花を指差すと…、
「き、今日は調子が悪かっただけよ!!見てなさい、次に会ったら負けないんだから／／／!!」
そう言い残して、凄いスピードで何処かに飛んで行ってしまった。
「……ツンデレ？」
そんな桜花の言葉だけが、白銀の景色に溶けていった。
Ｓｔａｇｅ　Ｃｌｅａｒ!!
少女祈祷中……

妖々夢Ｓｔａｇｅ１（裏）（前書き）

かつて世界を滅ぼした少女…。

彼女はこうして新しい世界で生きている。

それが正しいのかはわからない。

しかし…彼女の中にも、確かにあった。

「この幻想郷（世界）を守りたい」と思う心が――。

妖々夢Ｓｔａｇｅ１（裏）

Ｓｔａｇｅ１（裏）

『迷う影』

ＢＧＭ「無阿有の郷～Ｄｅｅｐ　Ｍｏｕｎｔａｉｎ」

真っ白な雪が降る幻想郷の空を、真っ黒な少女が飛んでいた。
少女は、まるで闇を思わせる腰まである漆黒の髪と、夜を思わせる黒いコートを着ている。

彼女は鈴音彩花…桜花の半身にして姉にあたる存在。
桜花が現在の様な妖怪となる前…つまり、前世の姿。
千年以上昔に暴走して、後に『幻想郷大戦』と呼ばれる戦いを起こした人物である。

そんな彼女は感情のない無表情な顔で、視界の悪い空を飛んでいた。

実は彼女、無表情だが内心かなり焦っていた。なぜなら…

「……見失なった」

なんと、桜花と霊夢を見失なってしまったのだ。

霊夢達には余計な事を話したくないから、という理由で普段は桜花と一体化している彩花は、見つからない様に霊夢達から離れた位置を飛んでおり、何かあれば影から手伝うつもりであった。

ところが、それが裏目にでたのか突然の吹雪で視界が遮られた瞬間、彩花は二人を見失っていたのだった。

更に、彩花は桜花と違いほとんど眠って過ごしていた。そのため、幻想郷の地理を全く知らない。

そう、つまり…

「……迷った」

ぶっちゃけ、彩花は迷子になっていたのである。

「……困ったなぁ、ここはどの辺りなのかしら」

行き先がわからず、とにかくぶらぶらとさ迷っていた彩花だったが、ふと視界の端に人影が見えたので慌てて止まると、声をかけようとした。

「あの……」

だが、声をかけようとした相手は何やら俯いてぶつぶつと呟いている。

彩花が近づくと、その人物は少女であるとわかった。

肩までの薄い紫色の髪と、頭に被っている白い帽子、青と白を基準にした防寒着の様に見えるが動きやすくできているらしい服。

「レティ・ホワイトロック…？」

彼女の目の前にいたのは間違いなく、レティ・ホワイトロックであった。

ところが、そのレティは先程から俯いて何かを呟き続けている。

よく見れば、若干だが顔が赤い。

「何なのよあいつ…鬼畜な弾幕撃ってきたと思ったら急に頭撫でながら謝ってきたり……でも何でか嫌な感じはしないし……いやいや、何を言ってるのよ私は……あんな奴の事なんて全然気にしてなんかいないんだから……だいたい、彼女にはチルノっていう恋人がいるんだし、私の入る余地なんて…あれ？…だから違うんだって！」

何やら頭を抱えながら真っ赤になった顔を押さえているレティを見ながら、彩花は「これは桜花の仕業だな…」と確信した。

とりあえず、桜花の場所を聞きたいので、彩花はレティの肩を軽く叩く。

「ねぇ、ちょっと聞きたい事があるんだけど…」

「ん？…誰よ、私は今それどころじゃ…な……い……っ！？」

振り返ったレティは彩花の顔を見た瞬間、驚いた顔で固まった。さっきまで自分が考えていた相手とそっくりな顔が目の前にあるのだから無理もない。

「な…え？…お、桜花！？…あれ！？……なんで！？」

顔を赤くしながらあたふたするレティを見て、思わず可愛いと思った彩花だったが、無理矢理その気持ちを抑えると、レティへと視線を向ける。

「まずは落ち着きなさい。貴女、私とそっくりな顔をした少女を見なかった？」

彩花の問いにレティはキョトンとした顔になる。

「え？…貴女、桜花じゃないの？」

なんとか持ち直したレティに彩花は頷く。

「私は鈴音彩花、桜花の姉よ」

「姉？…なるほど、姉妹なのね。どうりで顔がそっくりなわけだわ」

レティは落ち着いたのか、普段どうりの態度に戻った。…顔がまだ若干赤いのは気にしない。

「実は桜花とはぐれてしまって…どこにいるか知らない？」

「それならこの道を真っ直ぐ進んだ先に行ったわよ」

「ありがとう、感謝するわ」

彩花がレティに微笑むと、レティは急に顔を逸らした。

「……なんで姉妹揃ってこんなにも魅力的なのよ」

「…何か言った？」

「い、いえ…何でもないわ！！」

レティはごまかそうと、両手を顔の前でぶんぶんと勢いよく振る。

それを可愛いと思いつつ、彩花が別れの挨拶をしようとした瞬間…。

「レティ、そいつから離れて！！」

正に神速と呼べるスピードで、小柄な影が二人の間に滑り込む。

「…チルノ！？」

レティが驚いて目を見開く。

そこにいたのは、彼女が最近友達になったチルノであった。

「チルノ、一体どうしたの？」

チルノは剣を構えたまま彩花を睨みつける。

「まさか、あんたとまた出会う事になるなんてね」

睨まれている彩花は溜め息をつく。

「私は桜花の影…彼女がいる限り、私もまた存在し続ける」

チルノの体から冷気が溢れ出し、周りの空間の気温が一気に下がる。

「今度は何をするつもり？」

「別に何もしないわ。私は桜花に言われて異変解決の手伝いをしてるだけ」

チルノはしばらく彩花を睨むが、突然「ふっ」と笑みを浮かべた。

「じゃあ、いいや」

さらっと態度が変わったチルノに、レティが唖然とする。

「え？あれ？ちょっとチルノ、彩花はあなたの敵じゃないの？」

チルノは首を傾げる。

「ん？いや、別に敵だとは思ってないよ？」

「じゃあ、さっきのやり取りは何だったのよ！？」

あはは、と笑うチルノにレティは「うがぁぁ！」と言いそうな勢いで掴み掛かる。

「ぶっちゃけ雰囲気作りかな？」

「はい、それ問題発言だね。敵じゃない相手に雰囲気作るためだけに剣をむけたのか！？明かに雰囲気だいなしにしたでしょ！？」

本当にぶっちゃけたチルノであった。

「まぁ、あたいは彩花は本当はいい奴だって知ってるからね。さっきの会話は忘れてよ」

「じゃあ、最初から普通にすればよかったのに…」

「レティを守るために颯爽と現れるあたい…うん、正義の味方っぽいじゃない。流石、あたいったら天才ね！」

「チルノ、その発言馬鹿っぽいわ」

彩花はさっきからチルノとレティの漫才の様な会話を聞いていたが、溜め息をつくと口を開いた。

「チルノ、私、異変解決の仕事があるから急いでるんだけど…」

チルノが「そうだった…」と苦笑いするしながら彩花へと向き直る。

「まぁ、あたいがここに来た本当の理由は彩花の実力を見るためだよ」

「私の実力？」

彩花が首を傾げ、チルノがうんうんと頷く。

「そう、彩花はまだ弾幕ごっこしたことないでしょ？だから、あたいがちょっと弾幕がどういうものかを教えてあげるよ」

「でも、私は桜花の中から見てたし、どういったものかは理解して…」

「甘い！見ただけじゃダメだよ。実際に体験してこそしっかりした経験になるんだから」

彩花は「ふむ…」と顎に手を当てて考える。

チルノの言っている事は間違いではない。見ただけの知識と、実際の体験は大きな違いがある。

「そういうことならお願いしようかな」

「任せなよ、じゃあ、あたいが宣言する三枚のスペルを避けきってね？」

「…ん、了解」

ＢＧＭ「おてんば恋娘」

チルノは少し距離を離すと、懐からスペルカードを取り出し、宣言する。

――霜符「フロストコラム」

放たれたのは無数の氷柱。一定の間隔で並んだ氷柱が様々な角度へと飛ばされる。
最初の一枚だからか避けるのは難しくはない。彩花は難無く避け続ける。

「ふむ、これくらいは大丈夫みたいだね…じゃあ、ちょっとレベルを上げるね？」

「わかった…」

チルノはスペルを中断して新しいスペルカードを取り出す。

――親友「ＤＩＥちゃん」

次の瞬間、チルノの隣にＤＩＥ妖精が現れた。
両手にはクナイを持ち、目には光がない。完全に『捕捉と抹殺（サーチ＆デストロイ）』状態である。

「やっちゃえ、ＤＩＥちゃん☆」

「…ＤＩＥ」

次の瞬間、正に神速と呼べるスピードでクナイが放たれる。
弾道は直線的だが、恐ろしい程に速い。

彩花は最低限、体を動かす事で全て回避する。
しかし、ＤＩＥちゃんもただでは終わらなかった。

なんと、一度投げたクナイに別のクナイをぶつけて反射させるという神業をやりはじめたのだ。
彩花も若干驚いたようだが、何とか全弾回避に成功する。

「…はい、大ちゃんストップ。時間切れだよ」

チルノの言葉に『ＤＩＥちゃん』こと大妖精はクナイを投げるのを止めた。

「…あれ？私、何でクナイなんか持ち出してるの？」

攻撃が止まった瞬間、『ＤＩＥちゃん』から『大ちゃん』に戻った大妖精は自分の両手を見て首を傾げる。
ちなみに…そんな大ちゃんを見て、レティは絶句していた。

「さて…彩花、次がラスト…つまりこれを逃げ切れば合格ね」

「…わかった」

チルノは最後のスペルカードを取り出すと宣言した。

――協力奥義「二人の妖精による二人の世界」

宣言と同時に、彩花の周りを囲む様に緑色の弾幕が現れる。
そして、目の前には青い大弾が一つ…。

「あたいが大ちゃんとの鬼ごっこで全く勝てない悔しさから生まれたこのスペル…避けれるものなら避けてみろ！！」

次の瞬間、青い弾が動き出す。彩花の隣を通り抜け、緑色の弾幕へと当たる。
すると、大弾はスピードを上げて跳ね返ってきた。慌てて彩花は回避する。
跳ね返った大弾は、別の弾幕に当たる度に速くなって彩花の周りを跳ね回る。

たしかに、逃げるチルノ（大弾）を先回りして迎える大妖精（弾幕）という図は、先程の説明通りだ。

そもそも、瞬間移動ができる大妖精に鬼ごっこで勝負する事自体が間違っている。

……閑話休題

ともあれ、この限られた空間で時間がくるまで弾幕を回避し続ける、という『移動型ストレスタイプ』の弾幕は大抵難しいものが多

い。

彩花は跳ね回る弾幕をしっかり見据えて対処していた。
確かに徐々にスピードが上がるのは脅威的だが、反射する弾幕はフランという前例がいたので、彩花はなんとか逃げ切れた。

「……うん、文句なしで合格だね」

「さすが桜花さんの半身ですね！」

チルノと大妖精に褒められた彩花は、少しだけ微笑んだ。

「じゃあ、私はそろそろ行くよ。だいぶ離されただろうしね…」

「ああ、そうだった。桜花を追い掛けてたんだよね。頑張ってね。あと、桜花をよろしく！」

「彩花さん、異変解決頑張ってくださいね！！」

二人の励ましをうけて、彩花はその場を後にした。

「……早く春にならないかなぁ…ぐすっ」

完全に空気と化していたレティは、虚しい気持ちを春眠で忘れるために、春の訪れを切に願っていた。

Ｓｔａｇｅ　Ｃｌｅａｒ！！

少女祈祷中……

妖々夢Ｓｔａｇｅ２（前書き）

最近になって幻想郷に引っ越してきた者がいた。

人形の様な姿をしたその少女は、魔法で人形を操る七色の魔法使いだった。

彼女は散歩のつもりで外に出た。外は雪と桜が降るという妙な天気だったが、彼女は気にしなかった。

しばらくして、ふと懐かしい気配を感じ、静かに彼女は微笑んだ。

脳裏に浮かぶのは紅白の巫女服を着た旧友の姿。

久しぶりに会ってみようか…

少女は暗い夜空へと飛び立った。

妖々夢Ｓｔａｇｅ２

「…ふむ」

雪原と化した道の途中で、二人の人物が立ち止まっていた。目の前には左右への別れ道がある。

「…ねぇ、桜花、私の勘だと左だと思うわ」

博麗の巫女…霊夢は、隣に立つ自分の神社の神を見上げる。

「…ふむ」

霊夢の言葉に考え込む様な仕種をしているのは“幻想郷の守り神”こと、桜花である。

「霊夢、たしかに貴女の勘は良く当たるけれど、もう少し周りを見るべきだわ…」

「…？」

桜花の言葉に首を傾げる霊夢。

桜花は、霊夢の顔の前に手の平を上にして差し出す。

すると、どこからともなく桜の花びらが一枚、はらり、と桜花の手の平に舞い降りてきた。

「桜の…花びら？」

霊夢が空を見上げると、僅かにだが桜の花びらが舞っていた。
風によって運ばれているのであろう花びらは、右の道の方からやって来ている。

「…ほらね？」

桜花が微笑むと、霊夢はバツが悪そうに目を逸らした。

「大丈夫よ、貴女の勘はたぶん外れていない。左に行けば…たぶん新しい友達との出会いでもあったでしょうね。でも、今は異変の解決を優先しましょ？」

「…ん、わかったわ」

二人は空に舞い上がると、右の道に沿って進んで行った。

「……あら？そういえば、彩花は何処に行ったのかしら？」

Ｓｔａｇｅ２

『人形祖界の夜』

ＢＧＭ「プクレシュティの人形師」

日が落ちて暗くなった街道を、桜花と霊夢は並んで進んでいた。
眼下の池に、雲の隙間から見える三日月が映っている。

「雪と桜が同時に舞うなんて珍しいわ」

「そうね…普通は見れないからね」

空を見上げながら呟く霊夢に桜花が答える。

ちなみに、先程から大勢の妖精達が弾幕を放ってきたのだが、桜花や霊夢は談笑をしつつ、片手で全て撃ち落としていた。

「ねぇ、桜花」

「ん？」

霊夢がお祓い棒で肩をとんとん叩きながら言う。

「あの別れ道、左の道の先には何があったのかしらね？」

霊夢の質問に「あぁ…」と、桜花は声を少し上げながら微笑む。

「マヨヒガよ」

「…マヨヒガ？」

「そう、道に迷った者がたどり着く小さな村。たどり着いた者は運が良いけど、同時に帰り道がわからなくなるから運が悪いとも言えるわ」

「へぇ、幻想郷にそんな場所があったなんて知らなかったわ」

桜花は溜め息をつくと、横目で霊夢を軽く睨む。

「貴女は見回りなんかしないしね。知らない場所があっても不思議じゃないわ」

「…うぐっ！」

桜花の若干棘を含んだ言い方に霊夢が怯んで少し後ろにさがる。

しかし、霊夢はすぐに立ち直ると、桜花の隣に戻ってきた。

「で、でも、マヨヒガは迷わなきゃ行けないんでしょ？帰れなくなったらどうするのよ？」

「その時の為の“勘”でしょう？貴女の勘は一種の未来予知に近い…有効に使えばこれほど便利なものはないわ。…まぁ、使い過ぎはいけないけれどね……」

霊夢は腕を組んで唸りだした。桜花はそれを微笑みながら見ている。

「あれ？じゃあ、桜花はどうやってマヨヒガから帰ってきたの？知っているのなら行った事があるんでしょ？」

「能力で帰れなくなる事を拒絶したのよ」

「…その力、反則よね」

そんな会話をしていると、前方に人影を見つけた。
暗くて見え辛いが、どうやら金髪の髪をした少女のようだ。

「夜は冷えるわね。視界も最悪だし…」

ふと呟いた霊夢に、金髪の少女はピクリと反応した。

「冷えるのは、あなたの春度が足りてないからじゃなくて？」

金髪の少女はニヤリ、と笑みを浮かべる。

「いや、足りないかもしれないけど…」

「あら、自覚はあるのね、霊夢？」

「うっさい、桜花は黙ってて」

僅かな月明かりでちらりと、金髪の少女の顔が見えた。まるで人形の様な美しい顔をした少女だった。

「しばらくぶりね」

「…はて？」

霊夢はわざとらしく首を傾げる。

「私のこと覚えてないの？まぁ、どうでもいいけど…」

そう言いつつも、少女は若干寂しそうだ。桜花は、霊夢の頭を軽く叩く。

ペシッ、という音がした。

「…何するのよ」

「お友達なんでしょ？ちゃんと挨拶なさい」

霊夢は、仕方ないといった様子で少女に向き合う。

「久しぶりね、アリス」

少女…アリス・マーガトロイドは驚いた顔をしていた。

「驚いたわ…まさか霊夢が挨拶を返してくるなんて。それに、妖怪と一緒にいるのも珍しい…」

桜花は一歩前に出て、微笑みながら軽く頭を下げる。

「はじめまして、アリス・マーガトロイドさん。私は鈴音桜花…博麗神社の神をしているわ」

「博麗神社の…神？」

アリスは目を細めて桜花を見る。それは、まるで桜花を観察している様だった。

「わけあって千年以上眠ってたの。半年くらい前にあった異変の時に目覚めたのよ」

「…ああ、あの紅い霧が出た異変ね」

霊夢が話の内容に顔を険しくした。

紅霧異変が解決した後、レミリアとフランがしょっちゅう神社に遊びに来るからである。

「さて…お喋りしてたいけど、私達は異変を解決しなくてはならないのよ。だから、そこをどいてくださる?」

桜花の質問に、アリスは口元をつり上げる。

「いいわよ…でも、私は貴女に興味があるわ」

桜花は、アリスの言葉を聞くと自分の体を隠す様に抱きしめる。

「あの…私にはもう恋人がいるから、そういうお誘いはちょっと…／／／」

「違うわよ!!／／／」

アリスの叫びは、雪と桜の舞う空へと消えていった。

ＢＧＭ「人形裁判～人の形弄ぶ少女」

「まずは小手調べよ！」

そういうと、アリスは何処からともなく人形を呼び出した。
可愛く作られた人形達は、まるで生きているかの様に動き回り、弾幕を次々と発射してくる。

「へぇ…凄いじゃない。ここまで正確に人形を動かすなんて」

「お褒めにあずかり光栄だわ」

桜花は人形の隙間を抜ける様に移動すると、直接アリスへと向かう。

「…っ！速い！？」

アリスは、人形を回収するのは間に合わないと判断したのか、新しい人形を投げつける様に桜花へと四体程飛ばした。
しかも、その人形は剣を持っている。

「シッ！！」

桜花は爪を伸ばして妖力を纏うと、人形の剣だけを切断する。
人形は慌てた様にアリスの下へと帰っていく。

「…優しいのね」

アリスは人形を回収しながら薄く微笑んだ。
桜花は人形ではなく剣を破壊した。これは、アリスが人形を大切にしている事を薄々ながら感じていたからだ。

「普通の弾幕じゃ貴女には通用しないわね…」

アリスは、懐からスペルカードを取り出す。

――蒼符「博愛のオルレアン人形」

スペル発動と同時に、アリスの周りを無数の人形が囲む。
人形達はそれぞれが一発ずつ弾幕を放つと、弾幕はバラバラの方角に飛ぶ。

「さあ、いくわよ！」

アリスがまるで舞踏会でダンスを踊るかの様に、くるりとその場で一回転する。
そして、それに合わせて弾幕も回転したかと思えば、一つの弾は五つに分裂した。

アリスは更にもう一度回転する。それに合わせて再び弾幕は分裂する。

「うわぁぉ…」

思わず呻いた桜花の目の前には、弾幕の壁ができていた。
隙間も少なく、さらには弾速も速い。桜花は目を細めて思考を速める。

「…フッ！」

一息で弾幕の中に飛び込んだ桜花は、次々と迫る弾幕を避け続けた。
アリスも、桜花の反応速度に驚いている。
しかも、桜花は弾幕を回避するだけではなく、徐々に前進しているのである。

「…な、なんて、こと」

アリスは驚愕していた。
避けられるとは思っていたが、まさか前進してくるとは思ってもみなかったからだ。

「そこだ！」

ついに、弾幕を突破した桜花が人形の隙間からアリスへと弾幕を放つ。
アリスは盾を持たせた人形で弾幕を防ぐと、すぐにその場を離れた。

「…く、まさかあの弾幕を抜けてくるなんて」

アリスは人形達を一度回収すると、新しいスペルカードを取り出した。

――白符「白亜の露西亜人形」

新しく呼び出した人形は露西亜人形。もこもことした防寒着を着た人形達が桜花の周りに現れ、次々と氷柱の弾幕を放つ。

桜花は爪を更に伸ばすと、その場で全身に力を込め、勢いよく両手を広げて一回転する。

長い爪に当たった弾幕は消え去り、人形達も吹き飛ばされた。

桜花は、その場から一歩も動かず、一回の攻撃でスペルを破ってみせた。

「…出鱈目にも程があるわね」

アリスは、冷汗が頬を伝うのを感じながらそう呟いた。

そんなアリスに、先程から黙って見ていた霊夢が声をかけた。

「アリス…本気でやらなきゃ桜花は倒せないわよ？」

霊夢の真剣な目を見て、アリスは顔を険しくする。

元々、アリスは霊夢と同じく、普段は本気を出さない。本気を出して負けると後がないからだ。

だが、目の前にいる青い妖獣は関係なく自分を捩じ伏せる…自分は勝てないという思いが沸き上がるのを、アリスは必死に押さえ込む。

――雅符「春の京人形」

新しく発動させたスペルの弾幕で桜花を足止めすると、アリスは最後の一枚に力を込め始めた。

「せいっ！！」

コートを翻しながら、桜花は花が咲く様に放たれる弾幕を次々と避けていく。

最初と同じ様に、隙間を見つけてはかい潜りながら前進する。

そして、ついに最後の弾幕を避け、アリスの目の前まで迫ったその時……

「…っ！？」

桜花はゾクリと背中に嫌な気配を感じて離れる。

「起きなさい…蓬莱」

――呪詛「首吊り蓬莱人形」

「ホラーイ！」

元気良くアリスの目の前に現れた一体の人形。
見た目こそ可愛いが…込められた魔力が半端ではない。
しかも、明らかに他の人形よりも人間に近い動きをしている。

「いくわよ蓬莱、準備はいい？」

「ホラーイ！！」

アリスの質問に蓬莱は大きく頷くと、両手を開き、首を吊った小さな蓬莱人形が次々と現れ弾幕を放つ。

桜花は一瞬、言葉を失った。

蓬莱人形達が放った弾幕は、他の人形の弾幕とはあまりにも違った。
まず、込められている魔力の質が違う。まるで“呪い”だった。
弾幕の色はくすんだ茶色。桜花を囲む様に動くその弾幕は、さながら首を絞めるための縄の様に見えた。

「成る程、蓬莱人形か…死を知らない蓬莱の人の形を模した人形。
呪詛による呪いを相手にぶつける技なのね…」

桜花は技に込められた力の意味を理解し、感嘆の意を示した。

しかし、桜花にはもう一つ気になる存在がいた。

アリスの隣で蓬莱人形達の操作をしている“蓬莱”だ。

あの人形はアリスからの魔力供給を受けていながらも自らの意思を持っている様に見える。

そして、人形でありながら他の蓬莱人形を操るという特異な存在。

アリスが持つ人形の中でも最高傑作と呼べる二体の人形。

一つは目の前にいる蓬莱…。

そして、今回は登場していない上海人形だ。

もしかしたら、アリスは人形を元にした新しい生命を作り出す可能性がある。

「アリス！」

突然桜花が声をかけたので、アリスはビクリと肩を震わせる。

「貴女には素晴らしい才能がある。それに敬意を証し、最高の一撃を送りましょう！」

―蒼符「夢想封印・蒼」

蓬莱人形の弾幕が桜花を飲み込む直前、桜花の周りに巨大な光弾がいくつも現れ、次々と打ち出される。

蓬莱は慌てて他の蓬莱人形達を回収すると、まるで盾になる様にアリスの前に両手を広げて立つ。
桜花の放った光弾は、蓬莱とアリスの二人をまとめて飲み込んだ。

◆◆◆

「う…ん……」

アリスは、顔に舞い落ちた桜の花びらの感触で目が覚めた。

「あれ…私は何を?」

寝ていた体を起こす。どうやら道端に寝かせられていたようだ。

「私は…桜花と戦って…蓬莱を使って…それから……っ!そうだ、蓬莱は!?」

アリスは自分の盾になってくれた蓬莱の姿を思い出し、慌てて周

りを見渡した。

「蓬莱っ…どこ！？」

しばらく辺りを探したアリスは、少し離れた場所に倒れている蓬莱を見つけ、慌てて駆け寄る。

「蓬莱、大丈夫！？」

「ホ、ホラ～イ…」

蓬莱には目立った傷も無く、目を回しているだけの様だ。

よかった、と安心して座り込んだアリスはふと、空を見上げた。

「…あ」

そして気がついた。

相変わらず桜は空から降ってきているが、もう…雪は降っていなかった。

「…鈴音桜花、か」

周りに視線を動かしても彼女達の姿は無い。おそらく先に進んだのだろう。

「……不思議な奴だったわね」

アリスは蓬莱の頭を撫でながら再び空を見上げる。

そこには、夜が明け、雲は薄くなり、眩しい程の朝日が顔を出していた――。

Ｓｔａｇｅ　Ｃｌｅａｒ！！

少女祈祷中……

妖々夢Ｓｔａｇｅ２（後書き）

はい…というわけでアリスとの邂逅でした。

橙の登場を待っていた皆さん、ごめんなさい！

橙はいつかちゃんと登場しますので、待っていてください！

妖々夢Ｓｔａｇｅ２（裏）（前書き）

マヨヒガ――

そこは道に迷った者しか辿り着けないと言われる隠れ家。

そんなマヨヒガには野生の動物がよくやって来る。

その中には黒猫の少女の姿もあった。

妖々夢Ｓｔａｇｅ２（裏）

Ｓｔａｇｅ２（裏）

『マヨヒガの黒猫』

ＢＧＭ「遠野幻想物語」

雪の降る幻想郷の空を黒い服の少女が飛んでいた。
言わずもがな…彩花である。

そんな彼女は今、盛大に困っていた。

「二人とも…どこ？」

レティとチルノから道を教えてもらったにもかかわらず、彩花は再び迷子になっていた。

「…やっぱり、さっきの分かれ道は右に行くべきだったのかな」

ぽつりと呟いた彼女は、くるりと身を翻してもときた道を帰ろうとする。

そんな時、彼女の目の前を一枚の桜の花びらが通り過ぎて行った。

「…今のは」

ごく僅かではあるが、空からひらひらと桜の花びらが舞い落ちてきている。

彩花は帰ろうとした足を止めると、再び進み始めた。

木々の間を抜けながら、興奮して攻撃してくる妖精達を弾幕で撃ち落としていく。

中には奇襲攻撃の如く瞬間移動の様に突然現れる妖精もいた。しかし、現れる直前、僅かに空間の歪みの様なものを認識できたので、現れた瞬間から彩花の弾幕の餌食である。

その時、知らないうちに木々の間を通り抜け、開けた空間に出た彩花は思わず空中に静止した。

そこは、小さな村だった。

夕焼けの空に照らされたその小さな村は閑散としており、人の気配はない。

しかし、小さな生き物の気配は無数に感じる事ができた。

「野生の動物か、それとも力の弱い妖怪か…」

彩花は村の中央に降り立つと、ぐるりと周りを見渡してみる。
まるで、ついさっきまで人が居たかの様に建物は全く老朽化していなかった。建物自体はかなり古いものだが、人が居ないのならばもっと荒れ果ててしまってもおかしくない。

その時、彩花の視界の端を小さな影が横切った。
すぐに戦闘体勢に移行した桜花だったが、影の正体を見た瞬間、すぐに構えを解く。

そこにいたのは一匹の猫だった。

「……猫だ」

そうぽつりと呟いた彩花の足元まで近づいてきた猫は、彩花をじっと見上げたままだ。
その猫は白黒の毛並みをした子猫で、ただ彩花をじっと見ている。

しばらくお互いに見つめ合っていたが、突然、子猫が踵を返して村の奥へと歩き出した。数歩歩いた後、振り返って「にゃ～」と、まるで彩花へ“ついて来て”と言っているかの様な仕種をする。

彩花は、迷わずその猫を追いかけて村の奥へと進んで行った。

「ここは…」

たどり着いたのは周りの家より少し大きな屋敷だった。

「……ん～♪」

そして、その屋敷の縁側で大勢の猫と……一人の少女がひなたぼっこをしていた。

赤い中国風の服を着たその少女の頭には緑色の帽子と、黒い猫耳があった。よく見れば腰のあたりから二本の尻尾が出ているのがわかる。

この少女の名前は橙（ちぇん）。化け猫である。

八雲藍が使役する式であり、様々な妖術を使う。しかし水に弱く、式が剥がれて素の化け猫に戻ってしまう。知能は人間の子供と同じか、やや賢い程度だが、なめてかかると痛い目を見る。

そんな情報を頭の中で思い出しながら、彩花は橙の隣に腰掛ける。

橙は丸まって気持ち良さそうに眠っている。はっきり言って凄く愛くるしい姿である。

彩花に何もする気がないのがわかっているのか、周りの猫達も少しこちらを見るだけで特に何も反応しない。

彩花はそっと橙の頭を撫でる。

「…ん…うにゃ…」

橙はくすぐったそうに身をよじると、彩花の腕を引き寄せて抱きしめる。

「…っ！／／／」

思わず一瞬固まった彩花だったが、すぐに頬を緩めるともう片方の手で再び頭を撫でる。

クールな雰囲気を出している彩花だが…実は可愛いものが大好きだったりする。

日が沈んできたので、さすがにこのままという訳にもいかず、このまま持ち帰りたい気持ちを抑え、彩花は橙の肩を揺する。

「…起きなさい、橙」

「ん～…藍さま…？」

目を擦りながら起き上がった橙は、まだ意識がはっきりしていないのかふらふらと頭が揺れていた。

「……ほら、涎の跡がついてる」

近くにあった布で口元を拭いてやると、橙はぼーっとしたまま素直に受け入れる。

「…ぁう…ありがとう…ごじゃいましゅ……」

思わず抱きしめそうになった手をなんとか堪えた彩花は、ぺちぺちと橙の頬を優しく叩く。

「…ほら、ちゃんと起きて」

段々と意識がはっきりしてきたのか、橙は目の前にいるのが自分の主人ではないとようやく気づいた。

「……あれ、誰？」

きょとんとした顔の橙を見て、彩花は思わず苦笑いした。

「…目は覚めた？」

彩花が頭を撫でると、ハッと我に返った橙がすぐに後方に飛びのく。

「だ、だだだ誰!?なんでここに!?っていうかいつの間に!?」

威嚇する様に背中を丸める体勢になった橙は、動揺しながらも彩花を真っ直ぐに睨む。

「…私は道に迷ってここに来ただけ」

彩花の言葉に橙は少し困惑した様に顔をしかめる。

「あなた…何者？…人間…じゃない？」

彩花の放つ気配を感じた橙は警戒のレベルをまた一つ上げる。

「私は鈴音　彩花。博麗神社の神の影…」

その言葉に橙の顔が驚愕に染まる。

「鈴音…彩花!?…紫様が話してくれた、あの幻想郷大戦の!?」

橙はガタガタと震え出すと、先程とは反対に怯えた様に後ずさる。

「幻想郷を壊しかけたっていう…最強の人間…!!」

「（紫、どんなこと話したんだろう……）」

あまりにも橙が怯えるので、彩花は居心地悪そうに両手を上げて何もしないとアピールする。

「…私は何もしない」

彩花の言葉に、橙は心の中で大きく安堵の息をはいていた。

紫から鈴音彩花は幻想郷を破壊しようとした化け物だと言われていた橙は、相手が彩花だと知った瞬間には戦意を喪失していた。

もっとも、紫は別に彩花を嫌っているわけではない。幻想郷を壊そうとした彩花に対するちょっとした仕返しのつもりなのだ。

「…紫に何を言われたのかは知らないけれど、私はもう幻想郷を壊そうだなんて考えてない」

彩花は橙の前で視線の高さを合わせると、頭を撫でる。

橙は一瞬だけビクリと震えたが、すぐに目を細めて気持ち良さそ

うに微笑んだ。
橙は、何故かわからないが彩花は優しい人なんだとすんなり受け入れることができた。

「（…あ、可愛い）」

彩花は橙を撫でながら心の中でそう呟いた。

「あの…彩花さん」

「…なに？」

数分後…すっかり仲良くなった二人は縁側でお茶を飲んでいた。

「彩花さんはなんでマヨヒガに来たんですか？」

「…あ」

彩花は橙の質問に一瞬フリーズする。

そもそも、彩花は桜花の異変解決のサポートをしていた。それがいつの間にか迷って、マヨヒガにたどり着き、そして橙とお茶を飲んでいる。今の姿ははたから見ればサボっている様にしか見えない。

「…いかなきゃ」

彩花は慌てて立ち上がると、ぽかんとしている橙の頭を撫でる。

「ごめんなさい…橙。私は異変の解決に行かなきゃいけないの」

「…異変って、まだ春が来ない事と関係があるんですか？」

橙の言葉に頷くことで肯定する彩花。

橙は少し考えた後、立ち上がり彩花を見上げた。

「たぶん…ですけど、異変の原因に心当たりがあります。たぶん、冥界に入ることになりますよ？」

「…ええ、わかっているわ」

「あ…じゃあ、私が道案内しましょうか？」

「…え！？」

彩花は珍しく驚いた顔をした。まだ出会って間もない相手のためにわざわざ道案内をしてくれるというのだ。

「そんな…私のためにそこまでしなくても」

「大丈夫です！私、冥界には紫様に連れられて行ったことがありますから」

それに…、と橙は半目で意地悪そうな顔をした。

「彩花さん…道、わかるんですか？」

「…うっ」

彩花は一瞬よろけると、目を逸らす。

マヨヒガに来ている時点でだいたいの検討がつくが、橙は彩花が方向音痴であると気づいていた。

このままでは冥界どころか神社に帰れるかどうかすら怪しい。

「…お願いするわ」

「はい！」

彩花は苦笑いをして橙に手を差し出す。

橙は彩花の手をしっかりと握り返すと、にっこりと微笑んだ。

「じゃあ、行きましょうか。早くしないと夜が明けてしまうわ」

「はい！」

こうして、マヨヒガから二つの影が空に向かって飛び立った。

Ｓｔａｇｅ　Ｃｌｅａｒ…？

・橙が同行します

少女祈祷中……

～オマケ～
タイトル「彩花のイメージ」

橙「それにしても…彩花さんって、意外と優しいんですね」

彩花「…そうかしら？」

橙「はい、最初に見た時は全身黒一色だったからびっくりしましたよ。ちょっと怖かったです」

彩花「……そう…私はそんなイメージなのね」

橙「あ…その……でも…話してみたら優しくて、頼りになるお姉ちゃんって感じで…とにかくいい人だってわかりました！」

彩花「……（ありがとう）／／／」

橙「え?今、何か言いました?」

彩花「…何でもないわ」

橙「?」

おわり

妖々夢Ｓｔａｇｅ２（裏）（後書き）

お待たせしました！

忙しかったのと、疲労感から少々文章が手抜きですが、なんとか投稿できました。

今回、まさかの橙が同行です。いいなぁ…きっと楽しい旅路となるでしょうねｗｗ

では、次回をお楽しみに！

妖々夢Ｓｔａｇｅ３（前書き）

とある洋館に家族と離れ離れになった一人の孤独な少女が住んでいた。

孤独だった少女は自分の三人の姉達の姿を模した存在を作り出した。

少女がこの世を去った後も…

三人の騒霊達は残り続けている。

その騒霊三姉妹の名前は…

妖々夢Ｓｔａｇｅ３

Ｓｔａｇｅ３

『雲の上の桜花結界』

ＢＧＭ「天空の花の都」

暗闇の中を二人の少女が飛行していた。

巫女服を着た少女…霊夢が、嫌そうにもう一人の少女…桜花に愚痴をこぼす。

「…何にも見えない」

「仕方ないわ。まだ夜が明けていないのだから」

アリスと別れてから、二人は一旦休憩ついでに仮眠をとり、夜明け前に出発した。

桜花の張った特殊な結界の中で一晩を過ごした霊夢だったが、桜

花の力のおかげなのか思いのほか寒くもなく、快適な環境であった事に感心していた。
いつかやり方を教えて貰おう、と心の中で呟いているのは秘密である。

…閑話休題

辺りにあるものは暗闇と、舞い散る花びらのみで他は何も見えない。
霊夢は時々現れる妖精を撃ち落としつつ、段々と温かくなる気温に少し気分が良くなっていた。

「あぁ…やっと温かくなってきたわ」

そう言いながらも周りへの警戒は怠っていないのはさすがと言うべきか…。
桜花は「やれやれ…」と首を振って溜め息をつく。

「霊夢は本当にマイペースね。あまり“浮き”過ぎるのもいけないと思うわ」

「その台詞、桜花にだけは言われたくないわね」

霊夢は新しい札を取り出しながらジト目で桜花を見る。

「あら酷い…私、泣いちゃうわよ？」

「寝言は寝て言いなさい」

「本当に容赦無くなってきたわね！？」

そんな軽口を言い合いながら二人は雲の中へと入る。

目指すは雲の上、冥界の入口である。

「……よ」

ふと、何かの声が聞こえた様な気がして霊夢が首を傾げる。

「ん？…桜花、何か言った？」

「いや、何も言ってないわよ？」

「はて？」と霊夢が「気のせいか？」と、思いかけた瞬間。

「は…で…よ～」

「やっぱり聞こえる…」

霊夢が周りを見渡しながらそう呟く。どうやら桜花にもはっきりと聞こえたらしく、彼女も周りを見渡している。

「一体何処に……」

「春ですよ～！！」

「きゃあっ！？」

突然目の前に現れた少女に、霊夢は珍しく驚いた声をあげた。

「あはは～！春ですよ～、春ですよ～！！」

突然現れた少女は霊夢と桜花に微笑むと、同じ言葉を繰り返し言い始めた。

あまりにも楽しそうな少女に、霊夢は呆気にとられていた。

少女は真っ白な服を着て、同じく白い帽子を株っており、背中には薄い羽が見える。

背中まである金髪を揺らしながら飛び回るその姿は正しく妖精だとわかる。

「桜花、何なのこいつ…」

霊夢は額に手を当てて迷惑そうな顔をしていた。

「霊夢は会ったこと無かったのかしら？　彼女はリリーホワイト。春を告げる妖精で、『春告精』とも呼ばれてるわ。　春が着たことを伝えるだけの妖精よ。あまり危険な存在ではないわ」

桜花の言葉にふむふむと頷く霊夢。再びリリーホワイトへと視線を向ける。

「春ですよ～♪春ですよ～！！」

リリーホワイトはニコニコと笑顔で霊夢の周りを飛び回っている。

何故か彼女は霊夢を気に入ったようで、霊夢の傍から離れようとしない。

「ちょっと、こいつ私から離れないんだけど…」

「えらく気に入られたわね。…何でかしら？」

桜花がリリーホワイトにそう質問すると、彼女は霊夢を指差し…

「私と同じ。春の気配がするのです」

と、笑顔で言った。

「春の気配って？」

「頭の中も、きっと春なのですよ～♪」

「…は？」

「ぷっ！！」

リリーホワイトの発言に霊夢は呆然として、桜花は思わず吹き出してしまった。

「ちょ…頭の中って…あはははは！！」

爆笑する桜花の隣で、霊夢の頭の中ではリリーホワイトの言葉が繰り返し再生されていた。

――頭の中が春なのですよ～♪

――春なのですよ～♪

―ですよ～♪…ですよ～♪…ですよ～♪……

「……」

すぅ…、と、霊夢の片手が持ち上がり、リリーホワイトへと向けられる。

次の瞬間…

「…キングクリムゾン」

――ズドンッ！！

リリーホワイトの姿は一瞬で掻き消えた。

「……なっ！？」

桜花は唖然とした顔でその様子を見ていた。

ゆっくりと霊夢が振り返る。

「…どうかした？」

瞳には光が無く、笑顔なのにどこか寒気を感じさせる霊夢がそこにいた。

「あ…いや、その……今のは…」

「何でもないわ」

「いや、でも…」

「何でもないわ」

霊夢は笑顔のまま桜花の肩を“ガシッ”と掴む。桜花はビクリと体を震わせた。

「桜花…此処には何もいなかった……そうよね？」

「は、はい！！」

霊夢は今、此処であった事を完全になかったことにした。

結局、あれから霊夢も元に戻り、二人で並んで雲の中を飛び続けている。

「そろそろ雲の上に出ましょうか」

桜花の言葉に霊夢も頷く。

二人は高度を上げて雲の上へと飛び出す。丁度、朝日が顔を出したところだったようで、辺りは明るくなり、眩しさから二人は目を細める。

「…これは」

目が光に慣れていくにつれて目の前にあるものが段々と鮮明に見えてくるようになった。

巨大な四本の四角い柱と、その奥に見える門の様な形をした巨大な結界。

その向こう側から膨大な量の春度を感じ、ここが目的地の入口である事を二人に告げていた。

「雲の上にこんな結界があったなんて…」

しげしげと結界を見ている霊夢は二、三度首を傾げる。

「…この結界、少しおかしいわね」

「…と、言うと？」

桜花の疑問に霊夢は考える様な仕種をしながら口を開いた。

「本来、結界は境界線の役割を果たしているわ。結界によって隔てられた空間は本当はお互いに干渉する事はないはずなのよ。

だけど、この結界は曖昧過ぎる…いや、薄過ぎるのかな？本来の結界の力を果たせてない。たぶん誰かが結界を弄ったんだと思うけ

ど…。これだけの結界を操る事ができるなんて…そいつ、かなり強いやつだと思うわ」

実際、この結界を弄ったのは紫であるのだが、桜花はあえて黙っていた。

「ああ、そういえば…」

霊夢は桜花の方を向いて首を傾げた。

「今更だけど…なんで空から桜の花びらが降ってくるの？」

「……はぁ」

桜花は小さく溜め息をついた。

「…霊夢、貴女まさかこれから行く場所を知らないの？」

「当たり前じゃない。私はあんたに言われてついて来ただけなんだから」

「…せめて道中で聞くとかしなさいよ」

「だから、今聞いてるじゃないの」

桜花はこめかみを押さえて再び溜め息をついた。

「…で？結局、どこに向かってるの？」
「たまには自分で考えてみなさい」
「う～ん…天国？」
「…惜しい！」
そんな会話をしていると、目の前に三人の少女達が現れた。
それぞれが楽器を持ち、仲良く並んで浮かんでいる。
騒霊の三姉妹…プリズムリバー三姉妹だ。
「あら？人間と妖獣が一緒にいるなんて珍しいわね」
銀髪のトランペットを持った少女…メルランが笑いながら二人をジロジロと眺める。
「あ、解った！この二人死んじゃったんだよ！だから冥界に行きたいんじゃないの？ねぇ、姉さん？」
キーボードを携えた赤い服の少女…リリカが黒い服を着てヴァイオリンを持つ長女…ルナサに話し掛ける。
「さぁ…どうでもいいんじゃない？」
ルナサはそう言うと黙ってしまった。

「桜花、こいつらは…」

「ええ、人間じゃないわ…騒霊ね」

桜花はそう言うと、一歩前に出る。

「はじめまして、プリズムリバー楽団の皆さん。幻想郷の守り神をしている鈴音桜花よ」

桜花の自己紹介に三姉妹はそれぞれ違った反応を見せた。

「…はじめまして」

「へぇ…凄い奴に出会ったわね」

「姉さん達、あの伝説の妖獣だって！凄い凄～い！」

上から順番にルナサ、メルラン、リリカである。

「私達、今から冥界に行くんだけど…」

桜花は懐から愛用の笛を取り出すと、三姉妹に向けて突き付ける様に構える。

「私と一曲…演奏しませんか？」

三姉妹はお互いに顔を見合わせると、笑顔でそれぞれの楽器を構えた。

「「「喜んで！！」」」

BGM『幽霊楽団～Ｐｈａｎｔｏｍ　Ｅｎｓｅｍｂｌｅ～』

最初に動いたのはリリカだった。
両手を鍵盤に乗せると、ゆっくりと弾きはじめる。

「一番手は私がもらうわよ、姉さん！」

鍵盤を弾くと同時に交差するような軌道の弾幕が放たれる。

「わかったわ。危なくなったら助けに入るから…」

「頑張りなさいよ、リリカ！」

ルナサとメルランはそれぞれ演奏しながら後ろに控える。

「では私も…」

桜花は笛を構えるとリリカの弾く音色に合わせる様に吹き始める。
こちらも同じように弾幕が放たれ、リリカの弾幕を次々と相殺していく。

「まだまだ！」

リリカはキーボードを頭上に放り投げる。リリカの手を離れても演奏は止まらない。

両手が空いた両手は先程よりも密度の濃い弾幕を放ち始めた。

「あら…」

流石の桜花も両手を離しながら楽器は演奏できないので、渋々と笛を懐にしまうと回避に専念する。

向かってくる弾幕を避ける、避ける、避ける…。
避けれないと判断したものは爪による斬撃で打ち消す。そして、隙をついて桜花も弾幕を放つ。

リリカは向かってくる桜花の弾幕に自らの弾幕を当てて相殺させる。

「はっ！！」

桜花の気合いの入った声と共に新しい弾幕がリリカへと向かう。
リリカは目の前にキーボードを移動させると、鍵盤の端から端までを強めに撫でる様に弾いた。

力強い弾幕を放つ桜花に対し、リリカは数で勝負を仕掛けていた。

お互いの弾幕が相殺したところで二人は一旦、攻撃の手を止める。

「はぁ…はぁ…、お姉さん凄いね！ここまで力強いテンポの弾幕は始めてだよ！」

リリカが肩で息をしながらも笑って桜花へと拍手を贈る。

「私も、貴女みたいなリズム良い弾幕を見たのは始めてよ」

リリカとは違い、桜花は息一つ乱れてはいない。それでも桜花は笑顔でリリカへと拍手を贈った。

「リリカ、無理しないで。相手が悪いわ…三人で力を合わせるわよ」

ルナサの声にリリカは頷くと、懐からスペルカードを取り出した。

――騒符「ライブポルターガイスト」

三人はルナサを中心に左にメルラン、右にリリカの順番に並ぶと、同時に弾幕を放った。

弾幕を壁のように縦に並べ、その間へと追い詰める様な撃ち方である。

しかし、桜花はそれらの弾幕が自分を囲むより速く動いていた。

持ち前のスピードを活かして動き回り、疲労により弾幕の薄いリリカへと攻撃する。

「…ちっ！！」

メルランは舌打ちすると、リリカと桜花の間に入り込み弾幕の壁を形成する。

桜花も一旦離れて様子を伺う。丁度スペルカードの時間も切れたところであった。

「リリカは少し休みなさい。メルランはスペルカードの準備を…」

妹二人に指示を出しながらルナサが前へと出る。

「私が時間を稼ぐから…」

ルナサはポケットからスペルカードを取り出して掲げる。

――神弦「ストラディヴァリウス」

ルナサを中心に音符の形をした弾幕が現れると、一気に爆発したかの様な勢いで分裂し、桜花へと迫る。

「せいっ！！」

桜花は姿勢を低くすると、拳を振り上げると同時に大量の弾幕を目の前に展開。それを壁としてルナサの弾幕を相殺させる。

「もう一発よ！」

ルナサが再び弾幕を放つが、桜花はルナサが弾幕を撃ち出すまえ

に懐に入ろうと飛び出していた。

「姉さん！」

その時、ルナサを守る様にメルランが魔力で障壁を張る。

「ありがとう、メルラン」

「どう致しまして。準備終わったわよ」

障壁を突破した桜花は三人から一斉に魔力が放たれるのを感じてその場で動きを止めた。

――騒葬「スティジャンリバーサイド」

ルナサが放った弾幕をメルランとリリカが魔力で作り出したレーザーを使って反射させる。

不規則な反射を見せる弾幕に桜花の動きが一瞬鈍る。

三姉妹はその隙を見逃さなかった。

「…っ！？」

桜花がしまった、と思った瞬間には３６０度全てが弾幕で埋まっていた。

「（くっ…隙間が小さい！！）」

急いで回避するための場所を探すが、複雑に入り組んだ弾幕のせ

いで非常に難しい事がわかった。

「やった…！」

メルランが勝利を確信してガッツポーズをとる。

今から桜花がスペルカードを発動させようとしても間に合わない。

爪で切り裂くには数が多すぎる。

桜花には退路が全くなっていた。

「桜花、貸し一つよ？」

――夢符「封魔陣」

突然、桜花を囲む様に二色の障壁が現れて弾幕を吹き飛ばした。

桜花は苦笑いして後ろを振り返る。

「ありがと、助かったよ…霊夢」

札を持った手をひらひらと振りながら霊夢は別に、と言った。

「今日の夕飯は親子丼でよろしく」

「はいはい、わかりましたよ」

霊夢は苦笑いする桜花の隣に並ぶと、お祓い棒を構える。

「さて、そっちの方が人数多いんだから今更卑怯だとか言わないでよね？」

騒霊の三姉妹は霊夢の存在を完全に失念していた。戦いに全く干渉してこなかったので最後まで関わらないと思っていたのだ。

「くっ…」

「姉さん、こうなったら一気にやっつけるしかないよ！」

「…わかったわ」

三人は再び陣形を整える。

三人で三角形を作る様にお互いを光で繋ぐと、スペルカードを掲げる。

――大合葬「コンチェルトグロッソ」

三人は弾幕を放ちつつ、その場で車輪の様に回転する。

先程と同じ様に光に触れた弾幕は軌道を変え、不規則に桜花と霊

夢に襲い掛かる。

「…霊夢、頼んだわ」

「…ん」

桜花が一歩下がった位置に移動して霊夢が前に出る。

「悪いけど、私達に出会ったのが運の尽きよ。恨まないでね」

霊夢はスペルカードを取り出して大きく両腕を広げる。

――霊符「夢想封印」

直後、霊夢から七色の光弾が放たれ、襲い掛かる弾幕を次々と相殺させる。

三姉妹は迫る光弾を避ける為に一旦陣形を崩す。

「今よ、桜花！」

霊夢の掛け声と共に桜花が動いた。

弓を射るかの様に半身になり、左手を前に、右手を後ろへと引く。

右手には小さな弾幕が握られていた。

「空を駆けろ、蒼き輝きよ！！」

次の瞬間、まるで放たれた矢の様に小さな弾幕が高速で撃ち出される。

狙いはメルランだった。

「えっ！？…きゃ！？」

メルランが桜花に気づいた瞬間には既に被弾していた。

何が起きたのか解らない様な顔をしたメルランはふらふらと四本の柱の一つに降り立つ。

「わ、私……」

メルランは自分の胸元を恐る恐る見下ろす。

そこには小さくではあるが、確かに被弾した跡がついていた。

メルランが脱落した事に気づいたルナサは両手を上げた。

「私達の負けよ…」

リリカも残念そうに構えを解く。

「あら、まだ続けるのかと思ったのに…」

そう呟いた霊夢にルナサは首を振る。

「私達三姉妹はいつでも一緒じゃなきゃいけないの。誰か一人でも欠けた時点で負けなのよ」

「あ、そう…」

霊夢は札をしまうと肩を竦めた。

「たまにはソロで活動してみたらどう?新しい発見でもあるかもしれないわよ?」

そう言って笑う桜花にルナサは少しだけ微笑んだ。

「…考えておくわ」

Ｓｔａｇｅ　Ｃｌｅａｒ!!

少女祈祷中……

妖々夢Ｓｔａｇｅ３（後書き）

だいぶ間が空いてしまい申し訳ありませんでした！

妖々夢Ｓｔａｇｅ３（裏）（前書き）

白玉楼に繋がる長い階段の頂上に少女はいた。

傍らに浮かぶ自分の半身を視界に入れながら舞い散る桜を眺める。

ふと、遥か下から誰かがやって来る気配があった。

少女は背中と腰に挿している二振りの刀に触れる。

僅かに息を吸い込んで呼吸を調えた少女は残り僅かな春度を求めて階段を下って行った。

妖々夢Ｓｔａｇｅ３（裏）

「あの…」

桜の花びらがひらひらと舞い踊る中、一匹の化猫の少女が遠慮気味に隣の背の高い少女に声をかける。

「…ん？」

隣にいる全身黒ずくめの少女は首を傾げて化猫の少女を見つめる。

「さっき彩花さんそっくりの人が戦ってましたけど…放っておいてよかったんですか？」

化猫の少女…橙は隣の少女…彩花へとそう問い掛ける。

現在、二人がいる場所は冥界の入口たる先が見えない程長い白玉楼の階段である。

先程、桜花に追いついた彩花だったが、桜花はプリズムリバー三姉妹と戦闘中であり、霊夢がいるならサポートも必要ないだろうと二人を気にせず一足先に結界をくぐり抜けて冥界入りしていた。

「…桜花なら大丈夫。私より強いから」

「はぁ…そうなんですか？」

まだ桜花とちゃんとした面識のない橙は首を傾げながら彩花の隣に並んで飛行するのだった――。

Ｓｔａｇｅ３（裏）

『白玉楼階段の幻闘』

ＢＧＭ「東方妖々夢～Ａｎｃｉｅｎｔ　Ｔｅｍｐｌｅ～」

冥界は薄暗く、何より肌に纏わり付く空気が違う。
冷たく、寂しい様な空気に橙が思わず身震いをする。紫に連れてこられた事があると言っても両手で数える事ができる程度……橙にとっては今だに慣れない空気である事に変わりはない。

そんな橙を彩花は片手でそっと抱き寄せる。
柔らかな温もりに橙はハッ、として目を見開くが、彩花が優しく微笑むと安心感からか自然と笑顔になっていた。

そんな橙の主人である九尾の狐が見ていたら血涙を流しながら殴り込む様な雰囲気の二人だが、先程から妖精や幽霊達による攻撃が次々と襲い掛かり、彩花は橙を抱いていない方の手でそれらを片っ

端から撃墜していくという、ある意味壮絶な光景が広がっていた。

橙を傷つけない様に、まるでダンスを踊るが如く立ち位置を変えながら弾幕を放ち、順調に先へと進む二人だったが、鋭い気配を感じた彩花が突然立ち止まる。

彩花と並んで飛んでいた橙は立ち止まると何事かと不思議そうに彩花を見上げた。

そんな二人の前に、一人の少女が現れた。

純白の髪に映える黒いリボン付きのカチューシャ。白いシャツの上に深い緑のベストを羽織り、同色のスカートを揺らしながら静かに佇む少女からはまるで抜き身の刀の様な印象を受ける。

何よりも目を引き付けるのは腰と背中にある二振りの刀と、彼女の傍を漂う巨大な白い饅頭の様な魂。

彼女の名は魂魄妖夢（こんぱくようむ）、白玉楼の二代目庭師兼、剣術指南役である。

「あなた、人間ね」

妖夢は背中に背負う長刀…楼観剣を鮮やかに抜き放つと、切っ先を彩花へと突き付ける。

「ちょうどいい…貴女の持っているなけなしの春を全て頂くわ！」

彩花はそっと橙を離れた場所へと移動させると、妖夢へと向き直る。

「いざ…！」

妖夢から放たれる二色の弾幕を回避しながら彩花は接近する。
右手に黒い槍を作り出し、妖夢へと突き出すが、妖夢は即座に楼観剣を使って弾く。

「はぁっ！」

お返しとばかりに放たれた妖夢の回し蹴りを彩花はバックステップで回避する。

離れる彩花へと追撃をかけるかの様に妖夢は目の前の空間を斬る。
白い一筋の線が走り、そこからいくつもの弾幕が放たれる。
その弾幕は妖夢の性格そのものであるかの様に真っすぐであり、故に鋭く、速く、しかし…それ故に避け易いものだった。

――餓鬼剣「餓鬼道草紙」

スペルの宣言が聞こえ、彩花はすぐに距離をとる。

腰を落として刀を構える妖夢は集中するかね様に息を吐く。まるで時間が遅くなったかの様な錯覚に陥った瞬間、妖夢が動いた。

一瞬で彩花から見て右から左へと大きく移動しながら刀を振るう。
その瞬間、振り抜いた空間からは大量の弾幕が現れ、一斉に散らばる。

再び妖夢が刀を構えるが、彩花は体を半身にしたまま動かない。

そして、妖夢が動いた瞬間、彩花も動いた。

左から右へと移動する妖夢を追いかける様に彩花は空中を走った。迫る弾幕を次々とくぐり抜け、一瞬で妖夢の目の前へと飛び込む。

「――っ！？」

まさか飛び込んでくるとは予想していなかったために反応が遅れてしまった妖夢の腹へと、拳大の大きさの弾幕を放つ。

妖夢は咄嗟に腰から白楼剣を抜き、刃の腹の部分でそれを受け止める。

「ぐっ、うぅ！？」

受け止めた瞬間に感じる弾幕の衝撃のあまりの強さに妖夢は思わず唸る。

そのまま数メートル吹き飛ばされ、空中でくるりと一回転して体勢を立て直す。白楼剣を握っている左手が痺れている事に若干の苛立ちと焦りを覚えながらも、彩花から視線を外さない。

「……」

彩花は観察する様に妖夢を見ていた。まるで心の奥まで覗かれてしまいそうな漆黒の瞳に、妖夢の頬を冷や汗が伝う。

「…まさかここまで強いなんて」

妖夢が立ち上がりながら呟く様に言うと、彩花は小さく微笑む。

「貴女のそのなけなしの春があれば、きっと西行妖も満開になる…」

妖夢は再び楼観剣を構えると、先程よりも強く握りしめる。

「悪いけれど…幽々子様の為にも退く事はできない」

彩花は頷くと、弾幕をいくつも作り出して空中に留める。

妖夢も楼観剣を構えて彩花を睨む。

「いきますよ?……妖怪が鍛えたこの楼観剣に、斬れぬものなど――恐らく無い！！」

BGM「広有射怪鳥事～Till When?～」

弾かれた様に飛び出した妖夢は一直線に彩花へと向かって来る。

それに対して、彩花は空中に待機させていた弾幕を一斉に妖夢へと発射する。

妖夢は弾幕の軌道を読み、的確に回避しながら彩花へと向かってくる。しかし、それを黙って見ている彩花ではない。

妖夢が最後の弾幕を避けた瞬間を狙って急接近すると、驚いている妖夢の腕を掴み、そのまま投げ飛ばす。

――ドクン

「…あっ！？」

空中で体勢を立て直しながら、妖夢は突然手に持っている楼観剣を鞘に納め、そのまま腰に宛がうと姿勢を低く構える。

「…居合？」

突然の妖夢が力を強め始めた事に疑問を浮かべていた彩花だが、その構えから放たれた力の強さを見た瞬間、咄嗟に横に跳んでいた。

そして、スペルの宣言も無く、無意識にその技は放たれていた。

――修羅剣「現世妄執」

彩花が横に跳んだ瞬間、先程まで彼女の首があった場所を一筋の光刃が通り過ぎていた。もし、あと一瞬遅れていたなら彩花の首は宙を舞っていたに違いない。

それを放った本人である妖夢は感じた事のない感覚に戸惑っていた。

――この感覚はなんだ？

彩花が自分を投げ飛ばすために掴んだ右腕…。

その手に触れた瞬間に感じた膨大な力、そして触れた場所からじわじわと入り込む様にして襲ってきた感覚。
触れていたのはほんの一瞬……しかし、まるで氷水の中に何時間も沈められていたかの様な、冷たくて、深い深い――――闇。

それを感じた瞬間から、妖夢は無意識に弾幕ごっこでは当たり前であるスペルカードの宣言もしないで、しかも明かに殺す勢いで技を放っていた。

妖夢は半人半霊である。
人間と幽霊のハーフである彼女にとって『死』という概念は身近にある。冥界に住んでいる事と、自分が既に半分死んでいる様なものだから…という理由もあるが、一番の要因は間違いなく西行寺幽々子であった。
彼女の『死を操る程度の能力』を身近で一番感じているためか、妖夢は『死』の気配に敏感だった。そのため、彼女は『殺気』にも敏感に反応し、剣士としては達人以上の力を発揮できている。
一対一の戦いにおいて殺気を読むという事は相手の動きを読む事に繋がるからである。

そんな気配を読むのに敏感だったからなのか、妖夢は感じてしまったのだ。

彩花の秘める巨大な霊力と、死とは違う『拒絶』という力の気配に……。

そして、それ故に本人は解っていないが、彼女の本能が今まで感じた事のない程の『恐怖』を感じて無意識に防衛機能が働いていたのだ。

がたがたと震える手足に力を込めて妖夢は彩花を睨む。
彩花も妖夢を見ていた。その瞳に浮かぶ感情は……戸惑いだった。

彩花は戸惑っていた。

先程、妖夢を投げ飛ばした瞬間から彼女の雰囲気が変わった。
怯えている様で、しかし混乱してもいる様だ。まるで自分の感情を制御できていないかのようだ。

彩花がどうしようかと一歩、足を僅かに開いた瞬間、妖夢は動いていた。

「っ！？」

先程とは比べものにもならない様なスピードで楼観剣を振り降ろしてくる。
彩花は咄嗟にバックステップをしながら楼観剣の刃の腹を左足で蹴って軌道を変える。
左へと流された勢いを殺さず、妖夢は空いている左手で白楼剣を抜くと、逆手に持って体を一回転させた勢いで突きを放つ。
白楼剣は迷いを断ち切る刀であり、切れ味は余り良くない。斬られても精々少し痛いくらいの感覚しか与えられないのだ。
だからこそ、妖夢は突きを放った。刀の形からして突きは切れ味には反映されない威力を持つ。白楼剣がいかに殺傷力が低い刀でも刀という形からして十分に威力はある。

彩花は眉間に寸分違わず繰り出された突きを体を大きく反らして

回避する。
その際に妖夢の顔を確認すると、明かに混乱しているのがわかった。

目が合った瞬間、妖夢は「あっ…」と声を漏らしたかと思えば、恐怖に怯えるかの様に楼観剣を振り抜いていた。

――修羅剣「現世妄執」

再び繰り出される飛翔する斬撃を彩花はその場から大きくジャンプする事で回避する。

階段へと着地した妖夢は思い出したかの様に緊張からか止めていた呼吸を再開する。

「…うっ…げほっ…げほっ…はぁ」

思わず俯いて咳き込んでしまった妖夢は震える自分の手が視界に入る。

「（何故…私は震えているんだ？）」

自分の無意識の行動に戸惑い、理解できずにさらに思考は混乱していく。

顔を上げれば自分と同じ様に戸惑った様な顔をしている黒い少女がいる。
今の彼女からは何も感じない…ただ霊力が多少強い程度の少女だ。

しかし、彼女に触れたあの瞬間に感じた死をも超える絶対的な『拒絶』の感覚。それを思い出す度に本能が警告を鳴らす。

――あれは危険だ

――触れてはならない

――在ってはならない

――近づいてはいけない

「…あ、貴女は」

気づけば勝手に口が動いていた。

「貴女は、一体……なんなのですか？」

彩花はその言葉で気づいた。

妖夢が何故自分を恐れているのかを。

彼女は触れてしまったのだ。自分の中にある“狂気”に。

かつて、抑えきれずに幻想郷を破壊しそうになったあの時の自分に…。

「……私は」

口から出たのは小さな声。しかし、確かに妖夢には聞こえていた。

「私は……ただの彩花。まだ生まれたばかりで、闇しか知らない影……黒しかない……ただの、影」

妖夢は思わず魅入っていた。

彩花が浮かべる笑顔に。先程の恐怖を打ち消すかの様に力強く、しかし今にも消えてしまいそうな儚い笑顔。

「……私の中の狂気を感じてしまったのでしょう？」

そう言われて妖夢はやっと自分の感じる恐怖の正体に気づく。

「恐がらないで…とは言わない。…でも、私は二度と間違わない…私は、もう自分には負けないと誓ったの。……だから、大丈夫…」

妖夢は楼観剣と白楼剣を鞘に納めると、深々と頭を下げた。

その光景に彩花も、恐る恐る近づいてきた橙も驚愕する。

「……貴女に何があったのかは知りません……しかし、貴女の強さと、それに最後まで気づかなかった自分の未熟さを痛感しました……私の、負けです」

そのまま、桜花と霊夢がやって来るまで三人は無言のまま佇んでいた。

Ｓｔａｇｅ　Ｃｌｅａｒ！

少女祈祷中……

妖々夢Ｓｔａｇｅ３（裏）（後書き）

全く勝負になっていないどころか途中から死合になっていた（汗）

そして彩花のキャラが定まらない！！（汗）

妖々夢Ｆｉｎａｌｓｔａｇｅ（前書き）

ほとけには　桜の花を　たてまつれ
我が後の世を　人とぶらはば

妖々夢Finalstage

Finalstage

『彼の世に嬢の亡骸』

BGM「アルティメットトゥルース」

妖夢の案内に着いていく形で桜花と霊夢、そして橙。

彩花は既に役割を終えた、とばかりに桜花と一体化した。

橙はその光景に驚いていたが、桜花と彩花は同一人物であるとわかるとすぐに懐いた。現在は桜花に肩車されてご満悦である。

霊夢は彩花の存在を知っても「ふ～ん…」ですませてしまったし、半人半霊の妖夢は自分と似た様なものだと自己解釈し逆に仲良くなってしまっている。

しかし、妖夢も幽々子の命令は忘れておらず、こうして桜花達を幽々子のもとに案内する事は結果的に残りの春度を集める事になる、と考えているのだ。……たぶん。

そんな時、桜並木を進む四人の周りをひらひらと蝶が舞いはじめる。

淡い紫や黄色、青や赤の蝶は桜花達の周りを少しの間だけ飛ぶと、奥へと向かって飛んでいく。

「…幽々子様が呼んでいます。どうぞ奥に…」

そう言って妖夢は奥に進むように促す。どうやら彼女の案内はここまでらしい。

妖夢にお礼をいって先に進む三人は、やがて巨大な桜の木の下にたどり着く。

「何よこの桜、枯れてるじゃない…」

霊夢が西行妖を見ながら無表情に呟く。

「ただの枯木ならよかったのだけれどね…そうでしょう、幽々子？」

桜花の声に答えるかの様に幽々子が姿を現す。

その姿は最後に見た時と少しも変わっていなかった。桜花は久しぶりに会った友人に声をかけようとして…

「久しぶ…「にゃあ！？…くぎゅっ！？」

突然現れた幽々子に驚いて、肩車の状態から落ちそうになった橙が思わず尻尾を桜花の首に巻き付けたために奇妙な声になってしまった。

「ふふふ…まったく、貴女も変わってないわね、桜花」

「ぐっ…げほっ…ひ、久しぶり…幽々子」

「はわわ…ごめんなさい！！」

桜花は、涙目になっている橙を地面に降ろして頭を撫でてやると、再び幽々子に向き直る。

「さてさて…それじゃあ、どうしてこんな事をしているのか教えてくれないかしら、幽々子？」

幽々子は手に持っている扇子で口元を隠すと小さく頷く。
そのままゆっくりと振り返ると西行妖を見上げる。

その隙に霊夢が桜花の隣にたって桜花に小声で質問をする。

「…ねぇ、あんた達知り合いなの？」

「ええ、私の友人の一人よ。――名前は西行寺　幽々子。この冥界を管理する亡霊のお嬢様よ」

「…ふ～ん」

霊夢は聞きたい事を聞き終えたのか元の自然体の姿勢に戻った。

―桜花Ｓｉｄｅ―

霊夢へのちょっとした情報提供をした後、幽々子はぽつりぽつりと話し出した。

「少し前、この白玉楼の蔵から一冊の本を見つけたの。それによれば、この西行妖の下に何者かが封印されているらしいということが解ったわ。私はそれが何なのか知りたいの」

「封印してあるくらいなんだから、解かない方がいいんじゃないの？」

霊夢がお祓い棒を軽く振りながら言う。

「そうね…でも、私は知りたいの。西行妖が一体何を封印しているのか…」

幽々子の言葉にチクリと胸の奥が痛むのを感じた。

西行妖が何者かを封印しているんじゃない。西行妖はその下で眠る者――幽々子の身体によって封印されているのだから。

あの日の光景は今でも鮮明に思い出せる。

朝日が昇ると同時に自らの胸に短刀を突き刺した幽々子の姿を…。

今から死ぬとわかっていながら微笑んでいた幽々子を…。

そして、死んだ幽々子を抱きしめて泣き叫ぶ紫の姿を…。

ぎりっ、と歯を食いしばる音が聞こえそうなほど、今の私は険しい顔をしているに違いない。

幸い霊夢や幽々子や橙にはばれていないのが助かった。

この顔は誰にも見せたくないから…。

「さぁ、幻想郷の春を返してもらおうかしら？」

私が黙っている間に話が進んだのか霊夢が幽々子にお祓い棒を突き付けていた。

「残念だけど、ここまできたら私にも意地があるのよ～。と、いうわけで……」

「桜の下に還るがいいわ、春の亡霊！」

「桜の下で眠るがいいわ、紅白の蝶！」

そして、戦いは始まった。

ＢＧＭ「幽雅に咲かせ、墨染の桜～Ｂｏｒｄｅｒ　ｏｆＬｉｆｅ～」

幽々子から放たれる大小様々な弾幕を回避しつつ、こちらからも弾幕で反撃をする。

幽々子の弾幕は規則的に並んでいる様でそうではない、という何とも避け辛いものが多い。と、言っても私は全然平気なのだが…。

ちらりと横目で見れば、霊夢も特に問題なく避けているようなので大丈夫だろう。

幽々子の弾幕はスピードが遅いものが多いので普通に回避できる。

幽々子が扇子を広げると何処からともなく一枚のスペルカードが現れた。

――亡郷「亡我郷―自尽―」

左右から挟む様に飛び交う幽霊が現れ、それを押さえ付ける様に右側からレーザーが撃ち出される。

霊夢は札を投げつけて幽霊を弾き飛ばすと、左に大きく旋回してレーザーを回避する。

私も霊夢の後をついて行きながら弾幕を放ち続ける。

すると、幽々子は今度はくるりと回転させながら左側からレーザーを撃ち出してくる。

「…ちっ！」

霊夢の腕を掴んで自分の後に投げ飛ばす様に移動させる。

その後、体を捻って迫るレーザーを回避すると、お返しとばかりに同じ様なレーザーを撃つ。

幽々子のスペルがブレイクすると、チャンスとばかりに霊夢が札を投げつける。

「これで成仏なさい！」

しかし、霊夢の札は幽々子にたどり着く前に大量の桜の花びらによって掻き消される。

「…さぁ、集まりなさい」

幽々子の周りに集まった花びらは、幽々子の背後へと移動し、徐々に融合して形を変えていく。

そして…次の瞬間、幽々子が両手を大きく広げるのと同時に、彼女の背後に巨大で美しい扇が現れた。

そして、幽々子だけではなく背後の扇からも弾幕が放たれ始める。

「…く、弾速は遅いけど数が多過ぎる！」

霊夢があちこちを忙しそうに飛び回り弾幕を回避したりお祓い棒で打ち消していく。

私は霊夢が弾幕を引き付けている間に隙を見て反撃をしていく。

「さあ、ひらひらと舞いなさい。――そして、美しく散りなさい」

――亡舞「生者必滅の理 - 魔鏡 - 」

新たなスペルの発動と同時に紫と桜色の蝶が一斉に幽々子から飛び立つ。
その蝶はまるで渦を描くかの様にこちらに押し寄せてくる。

「霊夢！」

「わかってる！」

私が霊夢へと指示を出すと、霊夢は懐からスペルカードを取り出す。

「封魔陣！！」

普通の札よりも一回り大きな札を目の前に突き出す様にして構える。

すると、赤と青の二色の障壁が交際するかの様に重なり、幽々子の蝶を消し去っていく。

「桜花、今よ！」

「ふっ…！！」

蝶が消えて視界が良くなった瞬間、私は槍形の弾幕を幽々子へと投げつける。

弾幕は幽々子の扇に次々と穴を空けるが、スペルブレイクしただ

けですぐに穴は塞がってしまう。

「…ちっ、纏めて吹き飛ばさなきゃ駄目だ！」

私の言葉に霊夢は顔を険しくすると、続いて飛んできたナイフ型の弾幕をお祓い棒で打ち落とす。

「桜花、あんたのスペルで何とかならない？」

「できない事はないけど、少し時間がかかるよ！？」

「構わないわ。私が時間を稼ぐから、纏めてぶっ飛ばしちゃいなさい！！」

「わかった！」

私は一旦退がってスペル発動の為に力を込めはじめる。

「…やらせないわ！」

――華霊「バタフライディルージョン」

白い七つの小さな光が一点に集まり、そこから爆発するかの様に蝶が飛び出してくる。

「やらせなさいよ！！」

――神霊「夢想封印」

それに霊夢の夢想封印がぶつかり合い、虹色の光が辺りを一瞬眩しく照らしていく。

「桜花、まだ！？」

「もう少し！！」

霊夢の夢想封印が徐々に押され始めてきた。

「あと少しっ！！」

そして、ついに光が弾けて視界が元に戻り、幽々子と視線が交際する。

「できた！いくわよ！」

――神蒼「夢想封印・蒼」

放たれた巨大な光弾が蝶弾幕を飲み込み、幽々子へと迫る。

「…っ！？」

幽々子は扇を盾にする様に回転すると、自分の周りに桜色の障壁を作り出す。

ドンッ、と二つの力がぶつかる様な音が響き、視界が一瞬真っ白になる。

光が収まると、そこには無傷の幽々子がいた。ただ、扇はなくなっていたので反撃の力が弱まり、弾幕も薄くなっている。

霊夢は今が攻め時とばかりに札を投げつけまくる。

「くっ…」

守りが薄くなった幽々子は手に持つ扇子で正確に霊夢の札を叩き落としていく。

――幽曲「リポジトリ・オブ・ヒロカワ - 神霊 - 」

幽々子はこちらの動きを制限する為に物凄い数の蝶を作り出すと、一斉に放つ。

ばらけて飛んでいく蝶と直接こちらを狙う蝶が交互に放たれ動きを制限してくる。

「…あっ！？」

そんな時、霊夢が一匹の蝶に被弾した。

「霊夢！？」

「大丈夫、この程度じゃ…あ、あれ？」

突然霊夢が慌て始めたので彼女の隣まで移動する。

「どうしたの、霊夢！？まさか、どこか怪我でもした！？」

霊夢はふるふると首を振ると顔をしかめる。

「やられた…！さっき私にぶつかった蝶に今まで集めていた春度を取られたわ！！」

「なんですって！？」

慌てて幽々子の方を向くと、彼女の手には桜色に輝く蝶が乗っていた。

「ご苦労様、これで西行妖も満開になるはずよ…」

「させるか！！」

その前に阻止しようと霊夢が飛び出す。

「もう遅いわ！」

――桜符「完全なる墨染の桜 - 開花 - 」

「きゃあ！？」

スペル発動の衝撃で吹き飛ばされた霊夢を後ろから受け止める。

「さぁ、その花を優雅に咲かせなさい、西行妖」

幽々子の背に再び扇が開かれ、蝶と桜の花びらが弾幕となって襲ってくる。

「…くっ！」

霊夢と私は大きく距離を離して弾幕の回避に専念する。

「桜花、どうするの！？あの桜、満開になっちゃうわよ！？」

霊夢が新しい札を取り出しながらこちらに視線だけ向けてくる。

しかし、私は知っている。彼女では……幽々子では西行妖を満開にできないということが。

「霊夢、無理に反撃しなくてもいい。一発だけに集中して幽々子に叩き込むのよ！」

「そんなこと言ってもあの弾幕じゃあ…」

たしかに、あんな密度の濃い弾幕に突っ込むのは危険だけど、絶対に機会はある！

「絶対に隙ができるはずよ。それまで回避に専念して！」

「わかったわよ、やってやろうじゃない！！」

二人で幽々子の周りを回りながら反撃のチャンスをうかがう。

「どうしたのかしら？早くしないと満開になってしまうわよ？」

なかなか反撃してこない私達を見て、幽々子は扇子で口元を隠しながら微かに笑みを浮かべる。

そして、西行妖が正に満開になろうとした瞬間……

――ピシッ

「……え？」

幽々子の背後の扇から小さな音が響いた。

幽々子の扇に小さな皹が入っていた。

「な、何で…っ！？」

ピシッ、ピシッ、と皹は徐々に広がっていく。

それを呆然と眺めている幽々子に、私達は狙いを定めていた。

「「夢想封印！！」」

「……ぁ」

こちらに気づき、慌てて防ごうとした幽々子だったが、流石に二人分の夢想封印を咄嗟に張った結界では防げなかったらしく、背後の扇共々吹き飛ばされた。

「……終わったの？」

霊夢が乱れた呼吸を整えながら私の隣に並ぶ。

しかし、私はまだ集中を切らしてはいない。そう、これだけじゃ終わらなかったはずなのだ。

「…桜花？」

「…何してるの、霊夢。構えなさい……まだ終わってないわ」

次の瞬間、一瞬、大気が揺れた。

ズンッ、と空気が一気に重くなる。

恐らくだが気温も二、三度は下がっただろう。

身のうさを　思ひしらでや　やみなまし
そむくならひの　なき世なりせば

ゆっくりと、幽々子が起き上がる。

その瞳には光が無く、正に死人の様で恐怖を覚える。

「あいつ、まだ動けるの！？」

霊夢が驚愕しているが、そんな訳がない。

二人分の夢想封印を、天敵である亡霊の幽々子がもろにくらったのだから、気絶くらいしている筈なのだ。

すぅ、と幽々子の身体が半透明になり、色が抜けて灰色になる。

そして、その口が微かに動く。

- ―― 「反魂蝶」 ―― -

BGM「ボーダーオブライフ」

再びズンッ、と空気が重くなり、同時に幽々子の背後にある西行

妖が散り始める。

――一分咲――

ほんのり朱に染まった西行妖の花びらが次々と蝶へと姿を変え、無差別吹き荒れる。

「…なっ!?」

霊夢は急いで懐から札を二枚取り出す。

「くっ…二重結界!!」

私達の周りを紅い結界が二重に重なる。蝶は結界に当たる度に音をたてて消えていく。

「一体、何なのよこれは!?」

霊夢は突然の事に混乱しながらも西行妖から目を離さない。

「彼女が……西行妖の開花を拒んだのよ」

「…彼女?」

―――三分咲―――

「くっ…！」

西行妖が散る度に蝶の数が増えていく。

霊夢の結界もいつまで耐えられるかわからない。

―――五分咲―――

ビシリ、と霊夢の結界に皹が入る。

「霊夢、もう少しよ、頑張って！！」

「くっ…ぅ…！」

――――八分咲――――

バキバキ、と結界に本格的に大きな皹が入る。

「も、う…無理…っ！」

ついに霊夢の結界が崩れ、目の前全てが蝶で埋まった正にその瞬間――

――パァン！！

と、いう音と共に全ての蝶がただの桜の花びらへと変化し、私達の後方へと風に乗って飛んでいった。

「今度こそ……終わったわね」

私は隣で肩で息をしている霊夢に手を貸して立たせる。

また元の枯れ木の姿に戻った西行妖の根本で、駆け付けた妖夢がアワアワしながら気絶している幽々子の看病をしている。

私も近くの桜の木に寄り掛かると、霊夢を座らせて大きく息を吐く。

「桜花さ～ん！！」

自分を呼ぶ声に顔を上げれば、橙が心配そうな顔でこちらに駆け

寄って来た。

「だ、大丈夫ですか！？」

「ええ、大丈夫よ。橙こそ、怪我はない？」

「あ、はい！！」

元気良く返事をした橙の頭を撫でながら、西行妖へと視線を向ける。

何故か、生前の幽々子が微笑んでいる様な気がした。

Ｓｔａｇｅ　Ａｌｌ　Ｃｌｅａｒ！！

少女祈祷中……

妖々夢Ｆｉｎａｌｓｔａｇｅ（後書き）

お、終わった…やっと妖々夢が終わりました！！

長かった…本当に長かったですよ…。

妖々夢Ｅｐｉｌｏｇｕｅ（前書き）

桜散り　冥界に舞ふ　花吹雪

懐かしき日を　思い出すかな

～鈴音桜花～

妖々夢Ｅｐｉｌｏｇｕｅ

妖々夢Ｅｐｉｌｏｇｕｅ…

雪が降っていた幻想郷に春が帰ってきてから既に一週間が経っていた。
博麗神社の桜も見事に咲き始め、既に満開となっている。

そして、春雪異変の後、博麗神社の桜が満開になったら宴会を開くという噂に誘われ、今日の神社の境内は妖精達や知り合いの妖怪達で大賑わいである。

「ふぅ…こんなところかしら？」

酒樽を運んでいた博麗の巫女――博麗霊夢は額にうっすら浮かんだ汗を袖で拭う。

幻想郷の端に存在する博麗神社はろくに整備されていない道中の険しさからか、普通の人間は途中で妖怪に襲われやすく、中々たどり着く事ができない。

そうなると、当然神社に来れるのはそれなりの実力者である事が多い。

実力者の多くは個性的であり、ぶっちゃけ濃いメンバーとなってしまう。

「お～い！霊夢、来たぜ～！！」

暗くなり始めた空から聞こえた声に霊夢が顔を上げれば当然というか、白黒のエプロンドレスに黒い帽子、箒に跨がった普通の魔法使い――霧雨魔理沙が笑いながら大きく手を振っている。

「あら、ちょっと到着が早かったかしら？」

今度は反対側から聞こえた声に霊夢が振り返れば、そこにいたのは紅魔館の吸血鬼姉妹――姉のレミリア・スカーレットと、妹のフランドール・スカーレット。そして彼女達の少し後をメイド長である十六夜咲夜が付き従う形でやって来た。

「丁度準備が終わったところよ。今日は快晴だったから月も出てるし、夜桜を見るには絶好の日和ね」

宴会と聞けば必ずやって来る白黒魔法使いと、何故か懐かれている吸血鬼姉妹にそう言うと、霊夢は縁側に腰掛けて夜空を見上げる。

「ん？えらく敷物の範囲が広いな。桜花とチルノも含めてもまだまだ余るし、まだ誰かくるのか？」

魔理沙が境内に敷かれた赤い敷物を見て首を傾げる。

「あぁ、桜花が知り合いを連れて来るから多めに準備しておけって…」

「ただいま～！」

噂をすれば影、というタイミングで桜花は何故か突然現れた空間の裂け目から顔を出した。

霊夢は険しい顔をしていたが、残りのメンバーは唖然とした顔をしている。

「桜花、あんたそれ…“スキマ”じゃないの…」

霊夢の呟きに桜花は満足げに微笑むと、スキマから地面に降りる。ついでに片手に掴んでいたものも地面に引きずり落とす。

「あ痛っ！？」

地面に落とされた紫色のドレスを着た金髪の少女は腰をさすりながら立ち上がる。

「ちょっと、桜花。私は宴会には行かないって言ったじゃないの！」

立ち上がった少女――八雲紫は不満げに桜花を睨む。

「なによ、異変に気づかずに寝坊しただけじゃなく、博麗大結界を弄って遊んでたくせに」

ピクリ、と霊夢の肩が揺れる。上げられた顔は不満げで、紫を半目で睨んでいる。

「最近結界の調整がやりにくいと思ったら…あんたのせいね？」

紫は霊夢に視線を向けると扇子を広げると、小さく微笑む。

「あら、博麗神社のおめでたい人ね」

「前半はそうで後半はそうじゃないわ」

霊夢はいかにも私は怒ってます的な視線で紫を睨むが、紫はどこ吹く風といった顔で受け流している。

「なぁ、さっきから黙って聞いてるけどそいつは誰なんだ？」

話に入れず不満そうな魔理沙が割り込んできた。よく見れば隣のレミリアも不満げな顔をしている。……フランだけはスキマがあった場所を見ながらキラキラと好奇心に目を輝かせているが…。

桜花はそんな彼女達を見てクスリと笑うと、紫の隣に並ぶ。

「紹介するわ。彼女は八雲紫。私と一緒に幻想郷を創りあげ、管理をしているスキマ妖怪よ」

紫はこんな風に紹介される経験がないためか少し頬を染め、それ

を隠す様に扇子を口元を隠すように広げる。

「はじめまして、八雲紫と申しますわ」

そう言って微笑む紫に対して…

「「胡散臭いわね」」

「胡散臭いな」

「胡散臭いですね」

「あのスキマもう一回みせて～！！」

上から霊夢とレミリア、魔理沙、咲夜、フランの順番である。

フランの頭を撫でながら拗ねてしまった紫に苦笑いしながら、桜花はぱんぱんと手を叩く。

「ほら、紫。残りの八雲一家を紹介しなきゃ…」

「……ぐすっ……うん」

紫が何もない空間に向かって腕を振ると、スキマが開く。

「じゃあ、紹介するわ私の家族の……「どりゃぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」……きゃぅ！？」

スキマを開けた瞬間、中から回転する砲弾のように飛び出したなにかが紫を跳ね飛ばした。

「うがぁぁぁぁ！！」

飛び出した“何か”は桜花へと一直線に向かって行く。

「…あら」

桜花がわざとらしい動きでそれを回避すると、神社の裏の木々を薙ぎ倒しながら停止する。

「な、何なのよ…」

盛大に顔が引き攣っている霊夢を横目で見ながら、桜花は倒れた木々の方を向く。

「…えっと、もしかして怒ってる？」

何の事かわからず首を傾げる他のメンバーの視界にユラリと立ち上がる人影が映る。

「桜花様、橙の服は私とお揃いにすると言ったじゃないですか！！」

立ち上がったのは金髪に金色の九本の尻尾を持つ少女――八雲藍であった。

「ら、藍様、落ち着いてください～！！」

遅れて出てきたオレンジ色のワンピース姿の橙が慌てて藍を止めに入る。

ちなみに、スキマから出た瞬間倒れている紫を踏んでいたのだが

……橙は気づいていないようだ。

「…くっ、橙が言うなら仕方がない」

「明日は藍様とお揃いを着たいです！」

「よしよし、明日が楽しみだよ♪」

そんなやり取りをしている八雲一家を見ながら桜花は苦笑い、霊夢は溜め息、魔理沙は盛大に引き攣った顔をしているし、紅魔館組は可哀相なものを見る目で見ている。

「と、とにかく、面白い奴らだってのはわかったぜ…」

魔理沙の一言でその場は収まった。

と、いってもその後、復活した紫が藍に説教したり、紫がいつまでも説教ばかりしているので見兼ねた霊夢が止めに入り、口論になった挙げ句に弾幕ごっこが始まったり……。

「あらあら…。皆元気ねぇ～。…ねぇ、桜花？」

「お邪魔します」

敷物に座りながら後ろを振り返った桜花の先には幽々子と妖夢がいた。

「ん…、いらっしゃい。元気そうで何よりだわ」

桜花は二人に笑いかけると、手に持った杯につがれた酒を飲む。
既に少し酔っているのか顔が赤い。

「迷惑かけたわね…」

幽々子は桜花の隣に腰を降ろすと扇子を口元にあてながらぽつりとそう呟いた。
桜花はクスクスと笑うと幽々子に猪口を渡す。それに酒をついでやると、幽々子はそれを飲んだ。

「気にしてないわ。だって、親友なんだから」

「……」

黙り込んだ幽々子の隣で桜花は再び杯に口をつける。

「少しだけ……思い出したの」

「…ん？」

幽々子が境内にある桜を眺めながら口を開いた。桜花は首を傾げながら幽々子の横顔を見る。

「ずっと昔…たぶん、私が生きていた頃。…こうやって、貴女と、紫と、一緒に笑っていた時があったのでしょう？」

桜花へと微笑みながらそう言った幽々子に、桜花は同様していた。

「（まさか…記憶が？）」

桜花は、幽々子が生前の苦しむばかりだった頃の記憶が戻ってしまったのではないかを心配していた。
あの頃の幽々子は見ているのも辛い程に追い詰められていたのだから。

「…クスッ。そんな心配そうな顔をしなくても大丈夫よ。私は私、変わらないわ」

「…そう」

桜花は俯きながら一言だけ返すと、また酒を飲む。

きっと、幽々子は完全に記憶を取り戻しても幽々子のままなんだろう。あれだけ壮絶な人生を送り、今は気楽に亡霊生活。性格や種族が変われど、それでも幽々子は幽々子なんだ、と。

桜花は小さく笑うと幽々子に向き直る。

「幽々子、私はいつまでも幽々子の親友だからね」

桜花の言葉に幽々子は生前と変わらない笑顔で頷いた。

「…ええ、ありがとう」

幽々子は扇子を畳むと懐に仕舞い込み、ゆっくりと立ち上がる。

「どうしたの、幽々子？」

座ったままの桜花が幽々子を見上げると、幽々子はウインクしな

がら歩き出した。

「恋人同士の空間に居続ける程、私は無粋じゃないわ」

「…それってどういう…っ!?」

桜花が疑問を口にしようとした瞬間、突然、背後から何かが抱き着いてきた。

「お～うか～～／／／」

慌てて振り向けば真っ赤になった自分の恋人の顔があった。

「あ……チルノ？どうしたの…って、酒臭っ!?」

背中から抱き着く形で頬をすりすりと擦り付けてくるチルノは明らかに酔っていた。

「チルノが酔うなんて…どれだけ飲んだのよ…」

ちらりと幽々子の方を向けば、幽々子は妖夢の半霊を片手に涙目の妖夢から逃げ回っていた。

「ほらほら～。早く追いつかないと、妖夢の半分を食べちゃうわよ～♪」

「わ、わわわ…食べないでください、幽々子様ぁ～!!」

桜花がそんな光景を呆然と見ていると、急に顔の両側を押さえ付けられて無理矢理振り向かせられた。

いつの間にか真正面に回っていたチルノは不機嫌そうな顔で桜花を見ている。

「…チ、チルノ？」

「桜花は…あたいらけを…ヒック……みへなきゃらめなのぉ～！！」

そう言うなりチルノは頭のリボンを外すと、続けて胸元のリボンまで外し始めた。桜花はそこでやっとチルノが服を脱ぎ始めた事に気づく。

「…ちょっ！？チルノ！？まさかここでするつもりなの！？…だ、だだだ駄目よ！？／／／／／」

慌てて鞘のついたベルトまで外し始めたチルノの肩を掴む。

すると、チルノは桜花を勢いよく押し倒した。

「あ、あわわわわ…／／／／／」

押し倒された桜花は酒の影響でうまく回らない頭でどうするか考える。

しかし、考えても考えてもチルノに美味しく頂かれる自分しか想像できず、軽くパニックになってしまった。

「桜花ぁ…／／／」

コートの前が開かれ、内側に着ている黒いシャツがあらわになる。

チルノは桜花の胸に顔を埋めるように抱き着いてくる。

何とか外そうとするが意外にチルノは力が強く、離れない。

「ぁっ…チルノ…だ…めぇ…／／／／」

胸元から伝わってくる感覚に思わず甘い声を出してしまった自分に赤面し、誰も見ていない事を祈りつつ、何とか上半身を起こす。チルノは相変わらず胸に顔を埋めたままだ。

「チ、チルノ…ここじゃ恥ずかしいから部屋の中に……チルノ？」

ふと、動きを止めたチルノの顔を覗くと…

「ね、寝て…る？」

そこには、しっかりと桜花に抱き着きながらもだらし無く少し涎を垂らしているチルノの寝顔があった。

桜花は、嬉しさ半分、虚しさ半分といった気持ちで周りを見渡す。

霊夢と紫はまだ上空で弾幕ごっこの真っ最中。
魔理沙とレミリア達は神社の中に入ったらしく姿が見えない。
幽々子と妖夢は後ろの方でまだ追いかけっこを続けている。

藍と橙の姿もない。おそらくはレミリア達と神社に入ったのだろう。

「まぁ……平和ならいいか…」

桜花の呟きは誰にも聞こえず……ただ、舞い散る桜だけが桜花の

言葉に答えるかの様にひらひらと舞い散るだけであった。

＞i29045—2130＜

——END

妖々夢Ｅｐｉｌｏｇｕｅ（後書き）

これにて、妖々夢は完全に終了となります。

次回からは少しオリジナルの異変等を入れようかなと思ってます。

では、次の幻想でお会いしましょう！

幻想郷縁起（前書き）

様々な妖怪や人間を纏めてきた幻想郷縁起だが、まだまだ幻想郷には出会った事もない人物が大勢いる。
今回は千年以上も行方不明だった博麗神社の神様とその姉について記そうと思う。
この二人は幻想郷の誕生や大きな戦いに関わっている者達である。
彼女達と友好な関係を築く為にも、この書物を役立ててほしい。

～稗田阿求～

幻想郷縁起

『幻想の守り神』

【鈴音桜花（ｓｕｚｕｎｅ　ｏｕｋａ）】

＞ｉ２５５８４―２１３０＜

・能力　あらゆるものを拒絶する程度の能力
・危険度　極高
・人間友高度　極高
・主な活動場所　博麗神社

◇◇◇

幻想郷の最も重要な場所である博麗神社に住む神が彼女、鈴音桜花である。
彼女は、小さいながらも、幻想郷の土台となる『人間と妖怪が共に暮らす理想郷』を作りあげた妖怪である。その光景を見た八雲紫が彼女と協力し、現在の幻想郷を作ったという。

【神になった妖獣】

桜花の種族は狼の妖獣である。長い青髪をポニーテールに纏めており、青い服を着ている。頭には獣耳があり九本の尻尾を持つ。普段は力を抑えているので一本か、もしくは全て隠している。

九本の尻尾を持つ妖獣は大妖怪と言える力を持つが、彼女の場合は大妖怪どころの力ではない。

噂によると、彼女は八雲紫よりも長生きな妖獣で、境界を操る彼女でさえ勝てない程の力を持っているという。

さらに、桜花は昔から幻想郷の住人達に拝まれ、信仰を集めて神となった。

彼女は妖怪の部類に入るが、自ら進んで人間を襲った事はないらしい。彼女は人間が好きで、人間に手を出す妖怪達には容赦しない。その性格からか、人里ではかなり高印象である。

【行方不明だった神】

彼女が最後に目撃されたのは今から千年以上も昔である。それ以来、何故か姿を現さずに行方不明となっていた。

本人に聞いても「寝ていた」としか答えない。もしかしたら本当に千年間寝ていたのかもしれない。

ぼんやりとだが、千年前、私が阿一だったころに彼女と出会った記憶があるし、それらしい記録も残っているので、幻想郷にいた事は確かである。

【この妖怪に纏わる逸話】

・幻想郷大戦

千年以上前に大きな戦いがあった。何者かが幻想郷を破壊しようと企み、それを実力のある者達が首謀者を倒して事なきを得た、という話である。

この戦いでの実力者達とは八雲紫、西行寺幽々子と当時の庭師の

魂魄妖忌、天魔、当時の博麗の巫女、そして大妖精とチルノである。
この時、何故か彼女は戦闘に参加していなかったらしい。詳しい事情は解っていないが、彼女が千年以上も行方をくらましていた事に何か関係があるのかもしれない。

【能力】

彼女の『あらゆるものを拒絶する程度の能力』は大変強力な力を持つ。
彼女が自分に触れる事を拒絶してしまえば、誰も彼女に触れる事ができなくなる。さらに、彼女が物の“存在”を拒絶した場合、その物は跡形も無く消滅する。
彼女にできない事は殆どない。よって、彼女との弾幕ごっこ以外の戦闘は大変危険である。

【対策】

彼女は基本的には人間には無害である。
彼女は幻想郷の全てを愛しており、よほどの事がないかぎり敵になる事はない。彼女を敵にまわす事はつまり、幻想郷を敵にまわす事と同じである。間違っても彼女と本気で戦おう等と考えてはいけない。

もしも彼女が不機嫌だったら妖精のチルノを連れて来るといい。
チルノは桜花の恋人なので、高い確率で彼女を止めることができる。

『陰から彩る少女』

【鈴音彩花（Ｓｕｚｕｎｅ　Ｓａｉｋａ）】

＞ｉ２５５８５―２１３０＜

能力・あらゆるものを拒絶する程度の能力
・分離と結合する程度の能力

危険度・極高
人間友好度・極高
主な活動場所・博麗神社

◇◇◇

何でもありの幻想郷だが、その中でも最も不思議なものに部類されるのが彼女、鈴音彩花である。

名前から解るかもしれないが、彼女は鈴音桜花の姉である。
姉と言っても本当に姉妹ではなく、むしろ同一人物だと言ってもいい。
本人達によると、「桜花の中にある人間らしい部分が形になった存在」らしい。
見た目は鈴音桜花から獣耳と尻尾を取って服と髪を黒くすればいい。顔つきはうりふたつだが、彩花は感情の起伏が乏しく、無表情が多いのでクールな印象を受ける。

ちなみに、“一応”人間である。

【日常】

彼女は、基本的には桜花と同化していて姿を見せない事が多い。
しかし、たまに博麗神社で博麗の巫女とお茶を飲んでいる場面が目撃されている。
また、どうやら化猫の橙にとても懐かれているらしく、時々神社の境内で遊んでいる姿を見る事ができる。

【能力】

彼女は能力を二つ持っているという珍しい人物である。
「あらゆるものを拒絶する程度の能力」は鈴音桜花と同じなので省略する。
もう一つの「分離と結合する程度の能力」は、文字通り一つのものを二つに分けたり、二つのものを一つにできる能力である。彼女自身もこの能力を使い、鈴音桜花から分離したり同化したりして行動している。

【彼女に関する逸話】

・幻想郷大戦

一応人間扱いになっているが、元は鈴音桜花と同一人物であるので、それなりに長生きをしている。
千年以上昔にあったこの戦いにも彼女は関わっているらしい。

しかし、本人に聞いても他の関係者に聞いても曖昧な返事しか返ってこない。

【目撃情報例】

・神社で博麗の巫女とお茶ばかり飲んでいる。余程暇なのだろうか？（人里の男性）

彼女は基本的には物静かな性格をしているので、静かにお茶を飲むのが好きなのだろう。

・たまたま出会ったので話し掛けたら、顔を背けて返事だけをしてすぐに走り去って行った。（人里の女性）

彼女は他人との会話が苦手なので、恐らく照れ隠しだと思われる。

・無口だけどいつも一緒に遊んでくれるよ！（化け猫の少女）

彼女は無口だが面倒見が良く、優しい性格をしている。特に子供の世話が好きだとか…。

【対策】

彼女も鈴音桜花と同じく、こちらから手を出さない限り何もしないし、寧ろ友好的な態度で接してくる。

少々感情表現に乏しいが、本人も改善しようとしているらしいの

で応援してあげると喜ばしい。
彼女は滅多に怒らないが、いざその怒りが爆発すれば幻想郷の崩壊に繋がりかねないので間違っても怒らせないようにしたい。

新たな…異変？（前書き）

オリジナルの異変だよ！！

～注意～

今回の異変は、作者の妄想により、ラストステージ以外の内容がとんでもない事になっております。

原作をこよなく愛する方々は注意してください。

新たな…異変？

春雪異変から一ヶ月。

特に特別な事があったわけでもなく、幻想郷はいつもの様に平和だが騒がしい日々を送っていた。

～博麗神社～

-霊夢Ｓｉｄｅ-

「霊夢、あなた全然修行とかしないけど……大丈夫なの？」

いつものように神社の境内の掃除をしていた私に、桜花はそんな言葉をかけてきた。

「修行なんか私の柄じゃないわよ。だいたい、今のところ別に困ってるわけじゃないし…」

「そう…」

桜花はそれだけ言うと自分の部屋に戻っていった。
何故、彼女があんな質問をしてきたのか…私は少し考えてみたが、別にどうでもいいと思い、再び掃除に専念する事にした。

そんな私にとっては別に気にならないような普通の朝を迎えた一日は、昼食後に大きく変わる事になる…。

「さて…」

境内の掃除を終え、私はいつものようにお茶を飲みながらぼー、としていた。

「…そろそろお昼よね」

立ち上がり、ぐっと背伸びをする。パキパキと背骨が鳴るのを心地良く感じながら神社の中に入ると、
冷蔵庫を開けて料理の材料を確認する。

「…む？」

材料が一人分しかない。

私だけなら別に気にしないのだが、今は桜花もこの神社に住んでいる。妖怪である彼女なら別に食べなくても平気だろうが…。生活費をいただいている立場としてはそれなりに恩を返さなければならない。

「…仕方ない。面倒だけど、買いに行くしかないわね」

私は冷蔵庫を閉めると神社の正面に置いてある賽銭箱へと向かう。

この賽銭箱は博麗神社の生命線にして家宝である。

最近は桜花が道を整備したり、桜花が里に宣伝をしたりしたおかげで参拝客も来るようになった。

…ん？

桜花しか働いていないような……。

…はっ！？ま、まさか、神社に参拝しにくる人達が私に複雑な感情を込めた目で見てくるのは、これが原因！？

…ま、まさかね？

何やら浮かんできた考えを道端に捨てる勢いで放棄していると、神社の正面に到着した。

「さ～て、今日はいくら入っているかし……ら？」

正直…目を疑った。

私の視線の先にある筈の賽銭箱が……なくなっていた。

「…は？」

…え？

…ナニコレ。

私の賽銭箱が…ない？

私のお金が……ヌスマレタ？

「……な、ななな……」

一瞬、目の前が真っ白になりそうだった。

買い物の資金であるお賽銭を取りに来たら…賽銭箱ごと盗まれた……？

「…わ、私の賽銭箱がぁぁぁぁあああ！？」

思わず絶叫した私はすぐに神社の中に戻ると、お札とお祓い棒を

手に取り、人生で最速と呼べるスピードで空へと舞い上がった。
その時の衝撃で空を飛んでいた鳥の妖怪達が蹴散らされ、鮮血が舞う。
血を浴びて服が汚れてしまったが、そんな事どうでもいい！！
「誰だぁぁ！！私の賽銭箱を盗んだのはぁぁ！！」
私は勘を頼りに真っすぐに霧の湖へと向かった。
この私を本気で怒らせた事、後悔するがいい！！

オリジナルシナリオ
～賽銭箱事変～

・キャラを選択してください。

「博麗霊夢（鬼巫女）」

・攻撃力　測定不能
・攻撃範囲　視界全て
・移動速度　測定不能

『スペルカード』

・必然「キングクリムゾン」
・煉獄「アマテラス」
・魔神「死狂い」
・絶望「鮮血の結末」
・永遠「レクイエム」

『特徴』

・当たり判定が無いに等しい。
・戦闘開始直後に必ず「キングクリムゾン」が発動する。

『説明』

博麗神社の家宝兼、生命線である賽銭箱を盗まれた事による怒りでダークサイドに堕ちた霊夢の成れの果て。

賽銭箱を盗んだ犯人を探して幻想郷を飛び回ることになる。
本人にはしっかりと意識はあるが、大半が怒りで我を忘れている状態なので、普段の彼女とは思えない言動や行動をする場合がある。
並の妖怪では手も足もでないほどの力を発揮しているが、これで真面目に修行をしていたら本当に手がつけられなかった可能性がある。

鬼巫女祈祷中……

新たな…異変？（後書き）

合宿が終わった…ふはははぁぁ！！

自由になった私は止められない！！

ずっと私のターン！！

…おや、隣の部屋の人じゃないか。え？うるさい？…ご、ごめんなさい（汗）

Ｓｔａｇｅ１（前書き）

きっかけは彼女の何気ない一言だった。

「今代の博麗の巫女って、どんな子？」

私は霊夢の事を教えてあげた。

天才的な才能を持っている事、周りに自然と人も妖怪もよってくる事、でも修行をしない子であると…。

彼女は少し考えてから私を指差して、少し怒った様に言った。

「桜花お姉ちゃんは甘すぎるよ。修行は大事なんだから！」

それから彼女は墓石から立ち上がると、先程とは違う真剣な目をして宣言した。

「これより、今代の『博麗の巫女との試合』を行います。姉様、準備を…」

彼女の桜色の髪が風に揺れ、『リン』と、今は彼女の腰に結び付けられた桜の髪飾りの鈴の音が響く。

――そして、彼女は動き出した。

Ｓｔａｇｅ１

Ｓｔａｇｅ１
『怒りの理由』

普通の魔法使い、霧雨魔理沙は焦っていた。
原因不明の強大な力が溢れるのを感じたのが１０分前。
何事かと急いで外に出てみれば、博麗神社の方角からとんでもない力を感じる。
それも、何というか…凄まじいまでの怒りや怨念の様な感情まで伝わってくる。

－魔理沙Ｓｉｄｅ－

「…おいおい、霊夢は大丈夫なのか？」

私はすぐさま準備を終え、博麗神社へ向かって飛び立った。
どうやらこの気配を出している原因は移動しているらしく、徐々にこちらに近づいているように感じられた。　博麗神社の方角からやって来るということは、最初に考えられるのは桜花だ。

こんな馬鹿げた力を振るえる存在なんてあいつ以外にいないだろう。

魔法の森を離れ、最近になって整備された参道が見えてきた頃、前方に小さな人影を確認したのでその場に停止して構える。

徐々に近づき大きくなる人影はどうやら紅白の服を着ているらしい。
この幻想郷で毎日紅白の衣装を着ている人物は一人しかいない。

「おーい、霊……夢…っ！？」

私はだいぶ近くまで来た親友に向けて声をかけようとして……。

――絶句した。

いつもの腋を見せびらかす様な巫女服は鮮血に染まっていた。

霊夢本人はどこも怪我をしている様には見えないのでおそらくは返り血なのだろう。

それはまだいい。妖怪退治をしていれば返り血くらいは浴びる可能性は十分にある。

私が驚いた一番の理由は…霊夢の纏うまがまがしいまでの“力”だった。

どう表現したらいいのかわからない程の“力”。霊力と魔力……あとは、怒り？

霊夢の扱う力の大半は霊力だ。

霊力は大抵は目に見えない透明な力で、どれだけ強くしても陽炎の様に周りの景色が揺らめいて見えるくらいだ。

しかし、今の霊夢の周りにははっきりと“紅い”オーラが見える。

霊夢自体が巨大化してしまったのではないかと思う程のオーラを前に私は開いた口が塞がらなかった。

「…れ、霊夢。…い、一体何が…？」

俯いていた霊夢は私の声にゆっくりと顔を上げる。

前髪で隠れてよくわからないが、髪の間から覗く霊夢の瞳は真っ赤だった。

「……魔理沙」

霊夢の声は酷く冷めていて、まるで極寒の地に放り込まれた様な寒気が全身を駆け抜ける。

「……神社の賽銭箱を見なかった？」

「…さ、賽銭箱？」

その時、私は大体の予想がついた。

きっと博麗神社の賽銭箱が盗まれるなりしたのだろう。

霊夢にとって賽銭箱は博麗神社の家宝であり、唯一の収入源でもあるのだから。

最近は桜花のおかげで参拝客も増えてきて、霊夢は毎日どのくらいの賽銭が入っているのかを楽しみにしていた。

それが盗まれたとあっては霊夢が怒るのも無理はない。

「すまないが賽銭箱は見てないぜ」

「そう…。じゃあね」

「…って、おい、霊夢！！ちょっと待てよ！！」

聞くだけ聞いてさっさと行こうとする霊夢の腕を掴む。

「……何よ」

ギロリ、とこちらを睨む霊夢。それに少し気圧されそうになるのをなんとか耐える。

「…あ、いや…その……何か手がかりとかないのか？なんなら探すの協力してやっても……」

「いらないわ」

きっぱりと断られた事に少しばかりカチンときた。

「…な、なんだよ。せっかく人が親切に手伝おうとしてるのに」

「いらないわ。足手まといよ」

「なっ！？」

そう言われてふつふつと怒りの感情が沸き上がってくる。

珍しく親切にしてやったのに足手まといだと？

「おい、霊夢。機嫌が悪いのはわかる。そりゃ愚痴や暴言だって言いたくなるさ。……だが、私を足手まといと言うのだけは許さないぜ！！」

霊夢の腕を乱暴に払いながら距離を取ると、ミニ八卦炉を構える。

霊夢は私に見下した様な視線を向けたまま構えもしない。

そんな姿を見て再び怒りが沸いて来る。

「霊夢…お前、いつから怒りで我を忘れるような奴になったんだ！？」

「うるさいわね…私はいつもと同じよ」

「…ちっ！」

――違う。

いつもの霊夢はこんなにも感情に流され過ぎる様な奴じゃない。

霊夢はあらゆるものから“浮いている”のだから。

多少感情を表に出す事はあっても、すぐに普段通りに戻る。

「霊夢…お前、本当は賽銭箱が原因で怒ってるわけじゃないんだろ？」

「私は賽銭箱を盗んだ奴を探してる。それ以外に理由は無いわ」

違うぜ、霊夢。

たぶん、お前はそんな事じゃここまで怒らない。

「…わからないなら、私がわからせてやる！！」

――霊夢、お前は何がそんなに許せないんだ？

－ＳｉｄｅＯｕｔ－

先に動いたのは魔理沙。ポケットからスペルカードを取り出し、ミニ八卦炉を霊夢へと突き出す。

「いくぜ！！」

――恋符「マスタースパーク」

発動したのは魔理沙の最も得意とするスペル「マスタースパーク」。極太のレーザーは一直線に霊夢へと向かっていく。

霊夢は向かってくるマスタースパークを無表情のまま見つめ、あと少しで触れるというところで動いた。

体を包む紅いオーラが凝縮する。

ゆらりと体が動く。

そして――

「キングクリムゾン」

＞ｉ２９５２５―２１３０＜

――決着は一瞬だった。

「…なっ……え？」

魔理沙は理解できなかった。

彼女の体は箒から落ちていた。

いつ攻撃されたのか、いつ霊夢は自分の背後に移動したのか、全てが解らなかった。

霊夢の使う技の中に“亜空穴”という瞬間移動に似た技はある。

しかし、それなら今まで何度か見た魔理沙は対処ができるはずなのだ。

「（なんだ、今の技は…？）」

魔理沙は無表情で自分を見下ろす霊夢を見た瞬間、意識を失った。

「……」

霊夢は落下していく魔理沙が森の“安全な木々の中に無事に落ちた”のを確認すると、移動を再開した。

賽銭箱を盗られて怒ったのは事実。

しかし、魔理沙の言う通り、それだけでないのも確かだった。

霊夢には何故自分がここまで怒っているのか、自分自身でわかっていなかった。

Ｓｔａｇｅ　Ｃｌｅａｒ！

鬼巫女祈祷中……

Ｓｔａｇｅ１（後書き）

Ｓｔａｇｅ１、あっという間でした（汗）

おそるべし、キングクリムゾン！！

最初はコメディーっぽくしようと思っていたのですが…何やら真面目な感じになってしまいました…（汗）

Ｓｔａｇｅ２（前書き）

「この封印って、簡単に解いていいのかしら？」

リボンの外れた髪を弄りながら金髪の少女は目の前の青い少女に言う。

「大丈夫よ。用事が終わったらかけ直してあげるから」

青い少女…桜花はそう言うとニッコリと笑った。

「まぁ、いいけど。……それで？私の封印を解いた理由は？」

金髪の少女は背伸びをしながら桜花へと視線を向ける。

「うん、ちょっと霊夢と戦ってきてほしいのよ」

「はぁ、霊夢と？」

「うん、あの子にもいい修行になると思うし…」

それに、と桜花は顔をあげる。

「ちょっと暴走してるみたいだからね。頭冷やすのに丁度いいでしょう。飽きたら勝手に終わってくれて構わないわ」

「…なんで私がその役をしなきゃいけないわけ？」

金髪少女の疑問に桜花はクスリと笑う。

「だって――貴女は何だかんだで優しいからね。…そうでしょ、ルーミア？」

金髪少女…ルーミアは頬を赤く染めながら小さく「…ばか」と呟いた。

Ｓｔａｇｅ２

Ｓｔａｇｅ２

『闇の女王』

霊夢は霧の湖の上空にいた。

鮮血に染まった服がだいぶ乾いてきたせいで少々気持ち悪さが無くなってきたな、なんて事を考えながらも少しずつ高度を下げる。

霊夢は賽銭箱が盗まれた現場である自分の神社を思い出す。

博麗神社には規模は小さいが結界が張ってある。

誰かが境内に入ったら結界が反応し、霊夢に知らせるのだ。

そして、結界は賽銭箱にもかけてあった。

あの賽銭箱は霊夢が結界を張り、桜花が破損・風化を拒絶して、

紫が盗難防止の術式を編み込むという、家宝としても防犯対策としても完璧な対策をしていた筈なのだ。

それが盗まれるなんて事はありえない。

ありえるとしたら、それはかなりの実力のある大妖怪か本人達しかないのである。

霊夢は最初に桜花が何かをしたのではないかと思ったが、彼女は午前中に霊夢がまだ掃除をしている目の前を通り過ぎて冥界へと遊びに行っている。

彩花の事も考えたが彼女も現在は桜花と同化しているのでおそらく違う。

次に怪しい紫は神出鬼没でどこにいるかわからない。

しかし、これら三人は違うと霊夢の勘は告げていた。

博麗の巫女の勘はよく当たる。的中率は八割を越える程だ。

勿論、違うという確証はない。しかし、桜花や彩花は何かあるならはっきりと言うし、紫もわかりにくいがヒント的な何かを必ず残すので違う。そうなると、おのずと身内には関係ない外部の犯行だとわかる。

そんなわけで、霊夢は力の強い人物を手当たり次第訪ねる事にしたのだ。

霧の湖に来た理由は、力を持つ者でチルノが一番距離的に近いからである。

――しかし

「あら、そんな険しい顔して何処に行くの？」

そこにいたのは“闇”だった。

以前見た時よりも長い金髪。身長は伸びているにもかかわらず変わらない幼い雰囲気。漆黒の剣を右手に握りしめ、霊夢を見る瞳は真紅に輝いている。

髪に結んであったリボンは――無かった。

「あんたは……ルーミア？」

宵闇の妖怪…ルーミアは楽しそうに笑って頷いた。

「さて、突然封印を解かれたと思ったら“霊夢と戦ってこい”なんて言われて、ちょっと疑問に思ってたけど……成る程、こういうわけね」

ルーミアはやれやれ、とわざとらしく肩を竦めてみせる。

「…封印を解かれた？あんたの封印を解いたのは誰なの？」

「さぁ？誰だと思う？」

ルーミアがおどけた様に両手を広げて首を傾げてみせる。

霊夢はお祓い棒を構えると、ルーミアを睨みつける。

「まぁ、いいわ……封印し直してあげる！！」

霊夢の姿が一瞬だけぶれる。

「キングクリムゾン！」

攻撃の過程を飛ばして結果のみを残す必殺の攻撃。瞬きする間に攻撃を終えた霊夢はルーミアの背後に移動していた。

先程の魔理沙はこれだけで終わった。

しかし、霊夢の勘はルーミアがこれだけでは倒せないと告げていた。

案の定、ルーミアは振り返りながら漆黒の剣を振り抜いてきた。

それを屈んで避けると、後方に大きく飛んで距離を離す。

「残念…その攻撃じゃ私は倒せないわよ？」

ルーミアの身体から闇が溢れ出す。

先程攻撃を当てた場所は傷一つ付いていない。

「今の私は“闇”そのものよ。さぁ、どうやって倒す？」

「…ちっ！」

霊夢は大きく腕を広げるとありったけのお札をルーミアへと投げつける。
しかし、焦っているのか、はたまた怒りのせいか、狙いが雑になっている。

「ほらほら、私はここよ？」

ルーミアは軽々と弾幕を避けてみせると、霊夢に向かって手を振ってみせる。
あきらかに相手を疲れさせる為の挑発だとわかっているのに霊夢は攻撃を止めない。

ルーミアは弾幕を避けながら霊夢を観察し続ける。
その真紅の瞳には若干の呆れと失望の色が浮かんでいた。

「……やめた」

突然のルーミアの呟きに思わず霊夢は攻撃を止めた。ルーミアはつまらなそうに霊夢を見下ろしながら髪をかきあげる。そして大きな溜め息をついた。

「…はぁ。……つまんないわね、今の貴女」

ルーミアの言葉にピクリ、と霊夢が反応する。

「…つまんない、ですって？」

「えぇ、そうよ。今の貴女はつまらない。…これなら大妖精や橙と勝負した方がまだマシよ」

ルーミアは周りに浮かべていた闇を消し去ると、剣を降ろす。その姿はさながら遊ぶ事に飽きた子供の様に見える。

「挑発にホイホイ引っ掛かる…感情に任せた雑な攻撃……何よりも自分の心に疑問を抱いている。…そんな状態じゃ彼女には勝てないわね」

霊夢はルーミアを睨みつけるが、ルーミアは呆れ顔で受け流している。

「あんたは…何が目的で、何がしたいのよ」

「さぁ？私がそれに答える義務は無いわ。私はただ頼まれただけだから。目的なら直接賽銭箱を盗んだ本人にでも聞いたらどう？」

ルーミアは剣を肩に担ぐと、くるりと背中を向ける。

「好きに戦えって言われたけど…はっきり言って今の貴女には興味無いわ。初心にかえって自分の気持ちに素直になってから出直しなさいな…そんな力任せの戦いに振り回されるようじゃ博麗の巫女失格よ？」

ルーミアの言葉に霊夢は歯を食いしばる。

「…何よ、私はいつだって自分に素直よ！！なのに…ああ、イライ

ラする！！何なのよ、いったい！！」

霊夢はスペルカードを構えると、ルーミアへと突撃する。

―煉獄「アマテラス」

スペルの宣言と共に霊夢の頭上に現れる巨大な黒い太陽。それをルーミアへと投げつける。

ルーミアは振り返りながらそれを剣で受け止める。

「……回せ」

霊夢の言葉に反応するかの様に黒い太陽が回る。

「…回せ回せ回せ」

ぐるんぐるん、と回りながら黒い炎を周りに撒き散らしながら太陽はルーミアをじりじりと押していく。

ルーミアは無表情のまま霊夢を見下ろす。

「回せぇぇ！！」

更に回転が速くなった黒い太陽にルーミアが完全に飲み込まれた。

そして、次の瞬間――

ドォォォォォン！！

黒い太陽は辺り一面を焼き払いながら破裂した。凄まじい爆風と炎が辺りに飛び散り、熱風が吹きすさぶ。

「……」

その中で、霊夢は険しい表情で立っていた。
ルーミアは爆発の直前に逃げたらしく気配も感じない。

「…ちっ」

先程のルーミアとの会話の内容が頭から離れず、霊夢は舌打ちをしながらその場をあとにした。

Ｓｔａｇｅ　Ｃｌｅａｒ？

鬼巫女祈祷中……

Ｓｔａｇｅ２（後書き）

鬼巫女は反則だが無敵ではない……という意味も込めて引き分け的な終わり方にしてみました。

では、また次回で！！

休憩（前書き）

貴女は自分の周りの人間の事をどれだけ理解していますか？

相手を思いやり、互いに歩み寄る事のできる人物がいますか？

案外、自分を思ってくれている人の存在に気づかない人は多いんですよ。

休憩

「……」

静かな神社の縁側に一人の少女が舞い降りる。この神社の巫女、博麗霊夢である。

紅白の巫女服は乾いて変色した血が付着しており、まるで怪我をして逃げ帰ってきた様な印象を受ける。

「……はぁ」

彼女は別に逃げ帰ってきたわけではない。

ルーミアとの戦闘が終わった後、多少なりとも冷静になれた彼女は着替えと状況整理の為に帰ってきたのである。

神社に入り、着替えを準備して風呂場へと向かうと血のついた服を脱ぎ、洗濯物用の籠へと入れる。

「…頭冷やさなきゃ」

自らの胸の内にあるよくわからない苛立ちを消すために水風呂にでも入ろうか等と考えながら戸を開くと――

「ふふふ…遅かったわね、霊夢！！」

タオルを巻いた幼児体型の吸血鬼姉妹の姉が風呂場の中央で真っ平らな胸をはって仁王立ちをしていた。

「……」

霊夢は無言で戸を閉める。

「ちょっ！？ちょっと待ってよ！！何で閉めるわけ！？」

閉めた戸を開けながらレミリアが叫ぶ。

「あぁ、はいはい……お帰りはあちらよ、お嬢様」

レミリアと少しも目線を合わせずに霊夢は出口の方を指差す。その顔には無表情であるが“帰れ”と顔に書いてあるように見える。

「いやいや、私もさっき来たばかりなのよ？」

「不法侵入したうえに勝手に風呂を使おうとしている様な奴を一般

的に客とは言えないわ」

霊夢はレミリアを見下ろしながらハッキリとそう言うと、タオルの背中側を掴み持ち上げる。タオルが外れないように胸元を押さえた状態で持ち上げられたレミリアは正につまみあげられた猫の様であった。

「きゃあ！ちょっと待ってよ霊夢！ちょっとしたおふざけのつもりだったの！」

「知らないわよ」

手足をバタバタとさせるレミリアを廊下に服と一緒に放り出すと戸を閉めて鍵までかける。神社の外に投げ出さないだけまだマシである。

「ちょっと、霊夢、酷いじゃないの！」

「うるさい。私は風呂に入りたいの。上がったら相手してあげるから大人しくしてなさい」

「私も一緒に入って…」

「日向に放り出すわよ？」

「う…わ、わかったわよ…」

レミリアは渋々引き下がると服を着て居間へと移動した。

◇◇◇

-霊夢Ｓｉｄｅ-

「はぁ、どいつもこいつも…」

レミリアの気配が離れたのを確認した私は風呂場に入ると、躊躇なく桶で冷水を掬い、一気に頭から浴びる。

ヒヤリとした感覚に僅かに体を震わせるが、気にせず再び冷水を浴びる。俯き、流れる水に髪に付着していた血の赤い色が混ざるのを眺めながら様々な考えを巡らす。

“――自分の気持ちに素直になってから出直してきなさいな”

ルーミアから言われた言葉を何度も頭の中で繰り返す。

自分の事は自分が一番解っている…はずだ。

しかし、ルーミアから言われたあの言葉がどうしても引っかかる。

考えても良い結論が出せず風呂から上がると、居間でくつろいでいるレミリアに視線を向ける。

そういえば、彼女は何をしに来たのだろうか？
いつもならば一緒にいる筈のメイド長もいない。と、すれば他の人に聞かれたくない内容なのだろうか？

「レミリア、あんた何をしにきたの？」

考えても始まらないので直球に質問する。

「ちょっと見過ごせない“運命”が見えたからね。その確認よ」

レミリアはちゃぶ台の上にあった煎餅を一つ摘むとかじりつく。

「見過ごせない運命？」

「えぇ、他の人間ならいざ知らず……それが“霊夢の運命”となれば…伝えないわけにはいかないでしょう？」

「…私の？」

そう、と最後の一口を口の中に放り込むと、レミリアは顎の下で手を組みながら私に視線を向ける。

「…ふむ」

しばらくの沈黙の後、レミリアは視線を神社の外に向ける。外はまだ青空が広がっており、白い雲もいくつか見える。

「浮雲の如く……か」

レミリアの呟きに私は首を傾げる。
そんな私を見てレミリアはクスクスと笑った。

私は少しムッ、としたがなんとか気持ちを落ち着かせる。レミリアはこうして人をおちょくるのが好きだ。真に受けていたら時間が勿体ない。

「霊夢、貴女は自分がどれだけ特異かわかってる？」

「何よ、突然…」

私が特異？何の事だ？

「貴女は何にも縛られない。流れる雲みたいにのらりくらりとしていて、自由に生きてる」

「…それが何？」

「つまりはあらゆるものから浮いている…。そう…重力、プレッシャー、圧力…そしてそれは貴女の感情に影響を及ぼすわ」

私は再び首を傾げる。正直、感情について話されても私にはわからない。

喜怒哀楽…人間にはそういった感情があり、それらが人間の表現を手伝い、周りに今自分がどんな気持ちでいるかを認識させる。

しかし、それらが私の能力と何の関係があるのだろうか？

「ハッキリと言えば、貴女は“浮き過ぎ”ているのよ。貴女、桜花と一緒に暮らしてるけれど、彼女からプレッシャーを感じた事とか

あるかしら？」

「……ないわ」

桜花と一緒に暮らし始めてからもうすぐ一年が経とうとしている。
それなのに彼女からプレッシャーを感じる事などなかった。

「でしょうね…。貴女は彼女の放つプレッシャーや殺気からさえも浮いているんだから」

「…あんたはどうなのよ」

「私？……そうね、正直に言うなら桜花のプレッシャーは辛いわ。私がふざけて霊夢の血を吸おうとした時なんか本気で殺気をぶつけられたし…」

レミリアは少し顔を青くしたかと思うと振り払うように首を振る。

「…とにかく、桜花は貴女を凄く大切にしてるわ。彼女にとって博麗の巫女は家族同然らしいからわからなくもないけど…。桜花って貴女に結構甘いしね」

「……」

今思えば、桜花は私の為に色々な事をしてくれている。

生活費、料理、参拝客を集める活動、参道の整備…。

「霊夢、貴女にとって桜花は何？」

「私にとって桜花は…」

私にとって桜花は一体何なのだろう。そんな事、考えた事もなかったし、気にもならなかった。

「それが貴女の悪いところよ。人の気持ちを無視し過ぎている。そして自分の気持ちからさえも浮いている…。流され過ぎて自分から歩む事を疎かにしている。桜花が修行不足と言っているのはこの事が大半だと思うわよ？」

「……」

私は何も言えずにレミリアを見つめたまま動かなかった。

「まぁ、ここからは自分で考えなさい。私はそろそろ帰るとするわ」

レミリアは立ち上がると日傘をさして外へと出る。

「…レミリア」

私は思わず彼女を呼び止める。

「…どうかした？」

「その……ありがとう」

振り返りながら首を傾げる彼女に私がそう言うと、レミリアは一瞬驚いた顔をした後、笑顔で空へと舞い上がって行った。

答えはまだ解らないけど、少し気分が良くなった様な気がして私は思わず口元が緩むのを感じた。

さて――じゃあ私も答えを探しに行かなくちゃね。

私はお祓い棒と札を準備して再び湖へと向かい飛び立った。

少女祈祷中……

休憩（後書き）

霊夢は『鬼巫女』から『腋巫女』へとジョブチェンジした！！

Ｓｔａｇｅ３（前書き）

「ふふ…どうやら、立ち直ったみたいだね」

先程まで立ち上っていた気配が消えたのを感じ、桜花は微笑む。

「うん、第一段階は合格かな？」

桜花の隣でリンも微笑んだ。

「ルーミアにはお礼を言わなきゃね」

「そうだね…『彼女』を次の相手にするところまでやってくれたし」

二人は笑い合いながら霊夢の到着を待つ――

Ｓｔａｇｅ３

Ｓｔａｇｅ３

『天魔襲来』

-霊夢Ｓｉｄｅ-

神社でレミリアとの会話を終えた私は再び霧の湖に来ていた。
前回来た時よりも霧は薄く、うっすらとだが対岸まで見通せる程だった。

昼を過ぎ、沈み始めた太陽の光に目を細めながら氷精の姿を探す。
しかし、今回も別の敵が現れる可能性もある。数時間前にルーミアに出会ったように、この湖は様々な妖怪や妖精が集まる。何故かは解らないが、今のところは大人しくしているので大目にみているが…。

私に驚いて弾幕を撃ってくる妖精を蹴散らしながら湖の中心へと

向かう。
この湖、一見かなり広く見えるが、案外そこまで広くない。
歩いて周りを回るのに一時間程度しかかからないのだ。空を飛んで一直線に突き進めば一刻も経たずに横断できる。
そんな霧の湖の上空を飛びながら中心部へと向かう。

「…ん？」

湖の中心に人影が見えたのでチルノかと思い降りてみるが、そこにいたのはチルノではなく、妖怪の少女だった。
黒い髪は腰の辺りまであり、優しげな顔は大人びた印象を受ける。着物を着こなし、腰の帯からは紅葉模様の布がふわふわと風に靡いている。
そして、最も印象的なのが背中から生えている巨大な漆黒の翼だった。

「…貴女が今代の博麗の巫女ですね？」

少女は紅葉のような形の大きな団扇をひらひらさせながらにっこりと微笑んだ。

「あんたは？見たところ妖怪みたいだけど…」

「私は射命丸　真矢。妖怪の山で天狗達を纏める天魔の役職を勤めています」

天魔…幻想郷のパワーバランスを保っている妖怪の一匹だ。妖怪の山に住み、天狗達を纏め、山の妖怪達から一目おかれる存在。

天狗達は縄張り意識が強く、侵入者には容赦しない。故に、妖怪の山は天狗達の独自の社会が築かれており、河童達との技術的同盟からその技術は幻想郷の中でも最先端を行くという。

「その天魔が一体何の用があって此処にいるのかしら?」

私の問いに彼女はクスリと笑う。

「いやなに…どうも此処で強い力同士のぶつかり合いがあったらしくてですね。一応、調査をしようかと」

その力の片方が自分である事に若干居心地の悪さを覚えながらも、私はそれを表情に出さない。

「ふ~ん…じゃあ、邪魔するわけにはいかないわね。…あ、そうだ、氷の妖精を見なかった?」

「氷の妖精…チルノさんのことですか?」

私は頷いて肯定する。

しかし、天狗の頂点に立つ天魔が妖精の名前を知っているとは…

…しかも『さん』付けで。

「何?あんたチルノと知り合いなの?」

「ええ、昔からの友人です」

友人ねぇ…。

「私はそのチルノを探してるのよ。何処にいるか知らないかしら？」

天魔は、数秒考えた後、湖の近くの森を指差した。

「たぶん、この森の中にある花畑でしょう。そこにも古い友人がいますから…。」

「そう、ありがとう」

にっこりと笑う天魔にお礼を言うと、背を向けて移動しようと――

「まぁ、待ってください」

「…っ！？」

突然、嫌な予感がした私は咄嗟に体を捻って無理矢理真横に飛ぶ。

その一瞬後、私がいた場所を空気の塊が通り過ぎていた。

「ほぅ、今のを避けますか…。」

天魔は団扇を振り抜いた体勢でニヤリと笑っていた。

「…不意打ちとは性格悪いわね。いきなり何なのよ。」

少しばかり怒気を含んだ私の言葉に天魔は目を細める。

「…ふむ、彼女からの情報では感情に振り回されていた、と聞きま

したが…。」

背中の漆黒の翼が勢いよく広がる。

「…ふふ、どうやらこの数時間で何かあったみたいですね。……いい目をしています。」

思わず苦笑いが出る。

レミリアに励まされるという珍しい経験をした後だけに何も言えない。

「今なら彼女に会っても大丈夫でしょう。ただし…」

天魔は団扇を頭上に掲げる。すると、彼女の周りに風が集まり始めた。

「…私を倒していきなさい！」

◇◇◇

天魔が頭上に掲げた団扇を振り下ろす。すると無数の弾幕が放たれ、一直線にこちらに向かってくる。

それに対し、こちらも札を投げつけて反撃する。アミュレットか

ら出る追尾弾も天魔のスピードに追いつけず、効果が半減している。

「まずは小手調べよ。」

天魔はスペルカードを取り出す。

――風符『幻想郷の春一番』

天魔の周りに集まった弾幕が突風で全包囲にばらまかれる。
狙いはつけず、ただ適当に弾幕を放つだけのスペル……しかし、
時折吹く突風により弾幕の速度が跳ね上がる。

「…くっ！！」

結界用の札を取り出して展開する。

「封魔陣！！」

弾幕自体の威力は低いので結界に当たるとあっさりと消えていく。

「む…中々硬いですね」

天魔は弾幕の量を増やすが結界は破れない。

「今度はこっちの番よ！！」

陰陽玉をいくつか周囲に展開する。

「夢想封印・瞬！！」

彼女のスピードに追いつくためにはこちらも素早い攻撃で攻めるしかない。

「ほう…」

天魔は目を細めてこちらの攻撃を眺める。

そしてこちらの攻撃に合わせて素早く回避していく。流石に簡単には当たらないと思っていたけど…まさかここまでとは思わなかった。

「ちっ…速い！！」

「中々のスピードよ。では、そろそろこちらも反撃しましょう」

天魔は逃げ回りながら二枚目のスペルカードを取り出す。

――神風『風神招来』

天魔が団扇を振り上げると、風が彼女へと集まり出す。

また最初の様に風と弾幕を使った攻撃かと思い、構えをとる。

しかし、背後から迫る気配に気付き、振り返った私は驚愕した。

最初に放った弾幕達が風によってこちらに向かって来ていたのだ。

慌てて回避の体勢に入るが、天魔本人からも弾幕が放たれるので挟み撃ちの形になる。

何とか隙間をくぐり抜けて回避する。

「ふむ、では次です」

間髪入れずに三枚目のスペルカードが発動する。

――覚醒『風神の目覚め』

今までの中で一番強い風が生まれる。風は徐々に舞い上がり、巨大な竜巻へと姿を変えた。

この風では普通の弾幕は届かない。

――どうする！？

普通の攻撃じゃ届かないし、あれだけ巨大な竜巻を避けるのは困難だ。

ならば――。

◇◇◇

-真矢Ｓｉｄｅ-

私の三枚目のスペルカードにより、勝負の流れは大きく変わった。
一応、回避するための場所はあるのだが、この風の流れでは上手く飛行できないだろう。

私は勝負の結末が見えた気がして自然と笑みが浮かぶ。

まぁ、才能はあるようだからまだまだ成長はするだろう。今回の敗北をきっかけに更なる精進を――

――神弓『夢想封印・弓』

「…え？」

一瞬、霊夢がいた場所が光ったと思うと、物凄い速さで矢の形をした弾幕が私に向かって飛んできた。

呆気にとられていた私は回避できず、自分の腹部へとぶつかる弾幕をただ見ているしかなかった。

◇◇◇

-霊夢Ｓｉｄｅ-

気絶した天魔を抱えて湖の近くの草むらに寝かせる。

「…ふぅ」

出発前に作っていた新しいスペカを使って何とか勝つことができた。

どんな影響も受けず、真っ直ぐ飛ぶ矢の弾幕を放つスペル『夢想封印・弓』……これは単発でしか撃てないかわりにスピードが凄く速い。

これならば風の影響を受けずに天魔の意表をついて攻撃できるので、彼女の竜巻を逆にめくらましとして利用して攻撃した。

どうやら思ってた以上に意表をつけたらしく、攻撃は直撃だった。

威力はそこまでないので深い傷もない。

「さて、と」

私は再び空に舞い上がると森の中に入っていくのだった。

Ｓｔａｇｅ　Ｃｌｅａｒ！！

少女祈祷中…

Ｓｔａｇｅ３（後書き）

大学の授業が始まるまでになんとか書き上げました！！

次回はようやく終盤、気合い入れて書きます！！

Ｓｔａｇｅ　Ｆｉｎａｌ（前書き）

花畑の中心でチルノは暗くなりつつある空を見上げていた。

「霊夢…遅いね」

隣のリンにそう言えば、彼女はクスクスと笑っていた。

「大丈夫、もうすぐくるよ」

リンの言葉にチルノはため息を吐いた。

「そっか、ならいいや。あたいは見てるだけで手は貸さないからね？」

「当然、じゃないと意味がないじゃん」

「違うよ、リンに手を貸さないって言ったんだよ」

「へぇ、私がやられると思ってるの？」

「…いや、そうじゃないよ。ただ…」

「ただ…？」

「霊夢をあまり嘗めない方がいいってことさ」

二人はただ、彼女を待つ。

Ｓｔａｇｅ　Ｆｉｎａｌ

日も暮れ、薄暗くなってきた森の中を霊夢はひたすら進んでいた。
周りの木々の陰からこっそりと妖精や小妖怪達が霊夢の方を見て、すぐに森の中へと消えていく。不思議な事に、誰一人として霊夢へと攻撃をしてくる者はいなかった。

「（何かしら……凄く強い力を感じる。でも、この力は…）」

森の中を進む程強くなる気配。

しかし、霊夢はその気配を知っていた。

「私と同じ霊力…。しかも、博麗の力…」

感じるのは博麗神社にいる時と同じ力。桜花や霊夢が持っている博麗の術式を扱う者が操る力である。
霊夢はお祓い棒を握る手に力を込めると、スピードを上げた。

◇◇◇◇◇

それから少し時間が経った頃、突然視界が開けたので霊夢は速度

を落とす。
暗くてよくわからないが、どうやら花畑に着いたようだ。
「遅かったわね。待ちくたびれたよ」
「っ！？」
前方の暗闇から聞こえた声に直ぐに戦闘態勢に入る。
すると、足元にあるいくつかの花が淡く光り出した。
霊夢は思わず空中にいるにも関わらずギョッとしてしまう。
「これは『月光花』だよ。月の光に当たると光る幻想の花…」
徐々に広がる光の中、花畑の中心に二つの人影があった。
一人はチルノだった。大きな岩の横にまるで従者の様に立ち、こちらを見上げている。普段の明るい印象とは違い、大人びた雰囲気をしている。
もう一人は知らない顔だった。チルノと大岩の前に立つ小さな少女。
桜色の肩より少し上くらいの髪。着ている服は多少デザインは違えど、間違いなく自分と同じ博麗の巫女が着る紅白の衣装だ。
こちらを見上げる桜色の瞳からは霊夢と同じだが、あきらかに巨大な力を感じる。
「よくぞ此処まで辿り着いた、今代の巫女よ」
桜色の髪の少女は凛とした声で霊夢へと声をかける。

「我が名は博麗リン。幻想郷を守護する博麗の神の一柱である」

「なっ、博麗の神は桜花じゃないの！？」

少女…リンの言葉に霊夢は驚愕する。

もはや毎日一緒に生活している桜花と同じく博麗の神を名乗る人物が目の前にいるのだ。怪しいと思うのが普通なのだが、霊夢はリンに言い返す事ができなかった。

彼女から感じる気配は間違いなく博麗のものであり、その膨大な量はまさに神そのものだったからである。

そんな霊夢を見てリンはクスクスと笑う。

目を細め、口元を隠すその笑い方は見た目に似合わず妖しい雰囲気を醸し出していた。

「ふふふ…姉様を呼び捨てにする巫女は其方（そなた）が初めてだ。まったく、話に聞いた通り、目上の者への態度がなっておらぬ」

ふわり、と宙に浮かぶと、霊夢と同じ高さへと浮かび上がる。

「姉様？…あんた、桜花の妹なの？」

「血は繋がってはいない。ただ、万を越える時を共に過ごしてきた間柄だ、姉妹と言っても間違いではないな」

微笑むリンに、霊夢は警戒を強くする。

「……あんたの目的は何？賽銭箱を盗んだのはあんたでしょ？」

霊夢はチルノの後に置いてある賽銭箱へチラリと視線を向ける。

「うむ、確かにあの賽銭箱を持ち出したのは私だ」

霊夢は納得した。彼女は自分と同じ博麗の力を持つ者。身内の気配を持つ彼女に防犯機能が反応しないのは当たり前だったのだ。

「賽銭箱を持ち出したのは、お前の精神の強さを見る為だ」

「精神の…強さですって？」

「そうだ、身近な大切なものを奪われる事に対して、どれだけ平常心を保っていられるか…そして、それにどう対処するかの反応を見た。結果は…まぁ、ぎりぎり持ち直したので、及第点だろう」

リンは一度、賽銭箱へと視線を向けると、霊夢に向き直る。

「霊夢、お前にとってあの賽銭箱はどんな役割がある？ただの賽銭という名の生活費が目当てか？」

「違うわ」

リンは霊夢が即答した事に「ほぅ…」と目を細める。

「最初はそうだったけどね。でもね、桜花が私の為に色々としてくれるのを見てると、ただの賽銭箱には見えなくなってきたのよ」

霊夢は真っ直ぐにリンの瞳を見詰めると、お祓い棒と札を構える。

「桜花や紫が一緒に古くなった賽銭箱を修理しようって言ってきて、

文句言いながらも三人で作業してて思ったの…」

三人で賽銭箱にあれこれ仕掛けを組み込んでいた時を思い出して、霊夢は思わず口元が緩むのを抑えられなかった。

「家族がいたら、きっとこんな感じなんだろうなって…紫が姉さんで、桜花がお母さんで……そう考えたら、今まで以上にその賽銭箱も大切に思えてきた！」

霊夢が最初に激怒した理由はこれだった。

孤児であった霊夢は先代の博麗の巫女に拾われ、彼女の後継者として様々な事を教わった。

魔理沙という親友もできたし、人里の皆とも仲良くなった。

しかし、霊夢が一番欲しかったものは“家族”だった。先代は霊夢に最低限の事を教えると、すぐに人里へと降りて天寿を全うしている。

一人神社で生活する彼女にとって、家族とは自らの知らないものであり、同時に憧れでもあった。

魔法使いになることを反対され、家族と縁を切ったという魔理沙の話を聞いた時には、家族と喧嘩できる羨ましさと嫉妬心から不覚にも涙目で怒鳴ってしまったのを覚えている。

そんな霊夢の生活を変えたのが桜花と紫であった。

実は一緒に住んでいた大妖怪にして神というとんでもない存在、鈴音桜花。

身長も高く、何かと霊夢の頭を撫でては、まるで自分を娘の様に扱う彼女に、最初はとにかく振り回された。

生活にも慣れ、一緒に大きな異変を解決した頃、八雲紫という姉の様な存在もできた。

胡散臭い発言や行動をしながらも何気に正しい道へと導いてくれる二人に、霊夢は表には出さずとも、とても感謝しているのだ。

「と、いうわけで…あんたが何を考えてるか知らないけど、その賽銭箱、返してもらうわよ！！」

「く…くくく、あっはははははは！！」

リンは思わず笑ってしまった。

別に霊夢を馬鹿にしている訳ではない。彼女の在り方が面白かったのだ。

「妖怪や神を自らの家族としたか！…面白い、実に面白いぞ、博麗霊夢！！歴代の巫女達とは明かに違う“色”をしている！！」

そう言うと、リンは深く深呼吸をしてから霊夢へと向き直る。

その時の顔は先程の妖しい雰囲気と違い、あどけない少女そのものになっていた。

「うん、お姉ちゃんが面白そうに話す理由がわかったよ。声だけ聞いてもわからない事は多いからね」

口調も見た目通りになったリンに、霊夢は呆気にとられるが直ぐに構え直す。

「…そっちが素なの？」

「ちょっと違うかな、これは人間だった時の私。さっきのは神様としての私。どっちも私である事に変わりはないよ」

リンは霊夢と同じ様に札とお祓い棒を取り出す。

「博麗にはある習慣があってね。代々、博麗の巫女は代替わりした時、私と一度は戦わないといけないんだ」

桜色の霊力がリンから溢れ出し、徐々に巨大化していく。

「さぁ、お前の力を私に見せてみよ！博麗霊夢！」

◇◇◇◇

札による弾幕が飛び交う中、霊夢はリンの周りを旋回しながら反撃の機会を伺っていた。

リンの放つ弾幕は速度も精密さも正に一流。的確な場所に放たれた弾幕はぎりぎりで回避しなくてはならないくらいに正確で、時折フェイントを交えては霊夢の行動を制限してくる。

「くっ…埒が明かない」

霊夢は急旋回で弾幕の範囲から逃れると、スペルカードを掲げる。

「夢想封印！！」

放たれた光弾は一直線にリンへと向かっていく。

「……」

向かってくる夢想封印をリンはじっと見詰める。

「…クス」

正に直撃する瞬間、リンは小さく笑うと、光弾を真っ二つにするように右手を振り上げる。

―博麗『夢想封印・剣』

次の瞬間、霊夢は横っ跳びにその場から離れる。

そして、彼女がいた場所を巨大な虹色の剣が通過していた。

「なっ！？」

驚愕に目を見開く霊夢は、漸く夢想封印ごと巨大な剣で両断される寸前だったと理解した。

しかし、霊夢は博麗の巫女として過ごした年月の中で、あのような技は見た事がなかった。先代が使っていた記憶もなく、古い書物にも載ってはいなかった。

「夢想封印とは、あらゆるものを封じる博麗に伝わりし秘伝の技。…この技に形はない。自由自在に形を変える。元々、妖怪退治を目的に編み出された技だ、あらゆる場面に対応できねば意味がない」

リンが腕を振ると、巨大な剣は砕け、無数の小さなナイフへと形を変える。

「行け！」

「っ、封魔陣！！」

霊夢は咄嗟に封魔陣による結界で弾幕を防ぐ。

リンは新しいスペルカードを取り出すと目の前に浮かべる。

―神技『夢想亜空穴』

リンの周りに黒い空間の穴が現れる。霊夢は咄嗟に札を投げつけるが、札は空間の穴に吸い込まれ、そのままのスピードで返ってきた。

「なっ、これは紫の…！」

その技は限りなく八雲紫のスキマに似ていた。

リンが手の平を“パンッ”と叩くと、霊夢の周りにも黒い穴が現れる。

咄嗟に身構えた霊夢はすぐに穴から離れる。
しかし、穴は何処までも霊夢を追い掛けてくる。

「さあ、逃げなさい」

リンが近くにあった穴の中に向かって弾幕を放つ。すると、吸い込まれた弾幕は霊夢の目の前にあった穴から飛び出してきた。

「くっ！？」

体を捻った霊夢へ再び弾幕が撃ち出される。

霊夢が穴へと札を投げても自分に返ってくるばかりで完全な一方通行である。
避けられない弾幕はお祓い棒で打ち落としながら防いでいくが、突然頭上に気配を感じ、上へと視線を向けると――

「ちょっ！？」

頭上の穴からリンが一直線に踵落としを仕掛けてきているところだった。
咄嗟に回避した霊夢は札を投げようとするが、リンは別の穴へと姿を消してしまった。

「結界を操るということは、スキマ妖怪の彼女までとはいかなくとも、境界を操る事に変わりはない。ならばこの程度使いこなせなければいけない」

いつの間にかもとの場所にいたリンは札をひらひらと振りながらそう言うと、ニヤリと笑う。

「これ、本当に人間にできるの？」

霊夢の不服そうな言葉にリンはむっ、とした顔をする。

「何を言う。博麗の技は全て歴代の巫女達と私が考え、実際に使われていたものだ。できるに決まっているでしょう」

「…そうなんだ」

「そうなのよ」

霊夢は札を二枚取り出すと、目の前に浮かべて力を込める。

「二重結界！！」

霊夢が作り出した二つの結界は一枚目と二枚目の間に穴を挟む様にして展開された。

「…っ！？…あぁ、そうか…考えたね」

リンは一瞬驚愕したかの様な顔をした後、納得したのか苦笑いをした。

二重結界は二つの結界を用いて弾幕の軌道をずらしたかの様に見せる事ができる。しかし、実際には一枚目で裏返った弾幕が二枚目で正しい方向に戻されて相手に向かうので、相手の撹乱様に使われる場合が多く、簡単に見切られてしまう。

しかし、霊夢はそれを利用した。

「裏の裏は表…でも普通なら正しい位置に戻る弾幕が、途中で穴に吸い込まれて再び最初に戻る…つまり、裏のまま…これでは永久に霊夢には届かない」

リンは霊夢の理解と応用の早さに感心した。まさか初見のスペルをあっさり攻略されるとは思わなかったのだ。

「（才能はある…いや、むしろ彼女は天才だね。修行次第では歴代最強になれるかもしれない…）」

リンはスペルを解除すると、お祓い棒を横に薙ぎ払う様に振り抜く。

霊夢も同じ様に振り抜くと、同じ様に放たれた弾幕がぶつかり合い、相殺される。

その間にリンは霊夢の背後へと回り込むと、蹴りを放つ。

しかし、持ち前の勘が働き、霊夢は屈んで蹴りを避けると、足払いをするかの様に下段の蹴りを放つ。リンは霊夢の頭上を飛び越えながら回避すると、夢想封印をばらまく様に放つ。

霊夢は安全な場所をすぐに見つけると、懐から陰陽玉を取り出し、振りかぶってリンへと投げつける。

投げられた陰陽玉は、リンへと届く前に力を解放して巨大な光弾と化した。霊夢にしては珍しい力技である。

「…ふっ！！」

目の前に迫る陰陽玉を、リンはあろうことかお祓い棒で打ち返してきた。霊夢は一瞬呆気に取られたがすぐに回避する。

「な…なんて無茶苦茶な事をするのよ」

背後にある木を薙ぎ倒してようやく止まった陰陽玉を回収しつつ、霊夢は頭の中に次の作戦を組み立てていく。

「霊夢、お前は力を込めすぎているのだ。本来はもっと繊細な力の循環が必要なんだ…こんな風にね！！」

リンの言葉と同時に現れる五十以上の光弾。その数に霊夢は戦慄した。

「なっ、ちょ…」

浮かぶ光弾に使われている霊力の繊細さに霊夢は息を呑む。合図と共に放たれる夢想封印を霊夢は全力で回避する。しかし、流石に数が多いため何発も腕や肩を掠っていく。

掠る度に背中に嫌な汗が浮かぶのを感じながら同時に通り過ぎる光弾に使われる力の使い方に思わず目が行ってしまう。

「（あぁ…こうすればもっと速く飛ばせるのか…）」

ある意味ピンチだというのに、霊夢は心の中でそんな事を思っていた。

「（さっきの空間移動を使ったスペルも…使えたら楽なのに……術式は…こう？）」

霊夢がそう考えた瞬間、残りの光弾が一斉に彼女へと殺到した。

◇◇◇◇

- リンＳｉｄｅ -

「……」

光弾が爆発した衝撃で立ち込めた煙りを見下ろしながら、私は険しい顔をしていた。

「こんなものか…」

いくら歴代の中で一番の才能があろうと、霊夢はまだ十代半ば程の少女だ。

実力的にはまだまだ歴代の巫女達には遠く及ばない。幻想郷でスペルカードルールが普及する前は正真正銘の殺し合いをしていたのだ。並大抵の実力では生き残れない様な環境で、博麗の巫女達は常に上位の実力をキープしていた。実際、それでも命を落とす巫女もいたのだから。

今の霊夢では当時の幻想郷の環境で生きていくにはまだまだ弱い。精々、中の上くらいである。

「うん、まずは霊力の制御を勉強させようかな…」

そんな事を呟きつつ、晴れつつある砂塵へと目を向ける。しかし――。

そこに、霊夢の姿は無かった。

「…え？」

私はすぐに周囲を警戒する。

確かに直撃したはずだった。あの距離で回避する方法はない。封魔陣も二重結界も間に合わない。

ならば、どうやって……？

「……っ、まさか！？」

私は霊夢の霊力を探知するために辺り一面に霊力を飛ばす。

すると、少し離れた林の中に霊夢の力を感じた。しかも、移動している。

これはつまり、彼女は私の攻撃を回避し、今も戦える状態にあるということだ。

しかも、おそらくだが霊夢は無傷である可能性が高い。なぜなら、あの状態で攻撃を回避する方法は一つしかないのだから。

「はっ！！」

気配のする林の中に向かって大量の弾幕を放つ。隙間もないくら

いに密集した弾幕を、やはり霊夢は回避した。
それも一瞬で場所を移動したかのように…
そして移動した場所は……
「…っ、上か！！」
さっき私が霊夢に繰り出した様に、今度は霊夢が私に向かって踵落としを繰り出していた。
咄嗟に体を捻って回避すると、擦れ違い様に霊夢と目が合った。
「（なんて…真っ直ぐな目…）」
そう思いながらもお祓い棒を霊夢へと振り抜く。しかし、既に霊夢の姿はない。
間違いない、霊夢は“夢想亜空穴”を使い、移動している！！
「末恐ろしい…」
たった一度見ただけの術をもう理解したというのだろうか…？
いや、力の流れに無駄が多過ぎる。おそらく完璧に理解したのではなく、感覚で使っているのだ。まさかここまでの才能があるとは思わなかった。

「これはもしかしたら、本当に歴代の巫女の中で最強になれるであろうな」

私は懐から最後のスペルを取り出した。

「うむ、楽しみだ」

にやける口元を隠すかの様にスペルの宣言をする。

―最終奥義『甦りし博麗伝説』

私を先頭にして歴代の巫女達が一斉に並ぶ。

霊夢が驚愕しているうちに、今度こそ私は彼女を逃がさない様に指示を出す。

「囲みなさい」

すると、巫女達の中から一人の巫女が前に出ると、札を取り出す。

『二重結界・縛』

術式が発動して霊夢の周りを囲む。この中にいる限り、いくら夢想亜空穴といえ抜け出す事はできない。

「今代の巫女に洗礼を」

今度は別の巫女が前に出る。

博麗の始まりにして原点。初代博麗の巫女――博麗霊樺。

『今代の巫女は頼もしいですね』

「そうだな、楽しみだよ…本当に」

だから、今は今後の為に眠りなさい。

『夢想封印・極』

その日、最後のスペルが宣言された。

Ｓｔａｇｅ　Ｃｌｅａｒ？

少女休息中…

Ｓｔａｇｅ　Ｆｉｎａｌ（後書き）

更新が遅れてすいません（汗）

バイトを始めたので、執筆する時間が短くなってしまったのです…（「○┐；）

Ｅｐｉｌｏｇｕｅ（前書き）

次回から原作に戻ります！

Epilogue

普通の魔法使い、霧雨魔理沙は博麗神社の階段を昇っていた。

普通なら愛用の箒に跨がりながら優雅に空から「こんにちは、うふふ…」なんて感じなのに、と若干美化されす過ぎたいつもの自分の姿を想像しながらも、こうして階段を昇っているのには理由があった。

ぶっちゃけ、霊夢の事である。

あの正に“鬼”と表現できる程に強くて恐ろしい霊夢は今までの付き合いのなかで初めて見た。

あれから一週間、怖くて博麗神社に近づけず、彼女は紅魔館とアリスの家で書物を読み漁る生活を送っていた。

あまりにもインパクトの強い見た目とオーラを纏った霊夢を思い出す度に、魔理沙は思わず周囲をキョロキョロと見回しては安堵の溜め息をつくという挙動不審な行動ばかりをしていた。

魔理沙にとってあの時の霊夢は正にトラウマものであり、夢に出てきたら絶対に泣ける自信がある。というか実際に夢に出たし、泣いた。

そんなこんなで魔理沙はこの一週間、調子が悪くてしかたがない。

具体的に言えば紅魔館に侵入したのはいいがいつものように借りていこうとした本を置き忘れたり…。アリスの家では柄にもなく、つい上海人形を胸元に抱いていつの間にか寝ていてアリスに見られたり…。

ちなみに夢に霊夢が出てきて泣いて跳び起きたのがその時だった

りする。おかげでアリスは信じられないものを見たかの様に目を丸くして驚いていたのを覚えている。慌てて弁解しようにも流れる涙を抑えきれず、逆に若干頬を染めたアリスに頭を撫でられて慰められてしまった。

とにかく、魔理沙はこの一週間ろくに安心する日が無く、このままではノイローゼになってしまいそうだったので、あれはきっと夢だ、そうに違いない、と現実逃避をしながら今まで通り博麗神社で霊夢とお茶を飲む日々に戻ろうと、勇気を振り絞りここまでやって来たのである。

空からではなく、階段を使っているのは何となくである。決していきなり霊夢の目の前に降り立つのが怖い訳ではない。……たぶん。

そんなこんなで階段を上りきった魔理沙が目にしたのはいつもと変わらぬ博麗神社。

最近よく手入れや補整されて参拝客も増えてきた境内にはそれに伴って修理・強化された賽銭箱が置いてあった。

――あぁ、やっぱり私の妄想だったのか。

あまりにもいつも通りな境内を見て、魔理沙はやはりあの霊夢は疲れていた自分が勝手に思い浮かべた妄想の産物だったんだ、と自己完結すると、神社の裏手へと回る。いつもと同じなら、そこで霊夢がお茶を飲んでいるか、昼寝をしている筈である。

「お～い、霊夢、遊びに来たぜ！！」

建物の角を曲がりながらいつもと同じ様に声をかける。

そう、きっといつもと同じ様に怠そうな霊夢が返事をしてくれると信じて――。

「惜しいっ！！もう少し力を抑えてもう一回！！」

「ん、了解よ、師匠」

「……え？」

魔理沙が目にしたものは、桜色の巫女服を着た少女に指導されつつ、どう見ても“真面目”に修行している霊夢だった――。

「なん…だと…？」

呟かずにはいられなかった。思わず手に持っていた箒を落としてしまい、カランと地面に当たり音をたてる。

その音で気付いたのか霊夢が振り向くと近付いてくる。

「なんだ、魔理沙じゃないの…いらっしゃい。お茶ならそこにあるから勝手に飲んでていいわよ。私、今修行中だから」

そう言って縁側を指差す霊夢の肩を魔理沙はガシッ、と掴むと無表情で霊夢を見詰める。はっきり言って不気味である。

「なぁ、霊夢…」

「な、何よ…気持ち悪い」

魔理沙は帽子を取ると、目を閉じて何かを悟ったかの様に優しい微笑みを浮かべた。

「ははは…私はきっとまだ夢を見ているんだ。だから、霊夢…私を殴ってくれ」

「…は？」

あまりにも突然の要望に霊夢は顔を引き攣らせる。

「あんた何を言って…」

「いや、いいんだ。これはきっと悪い夢なんだ。いつものお前に会いたいんだ、現実に帰してくれ…」

「……」

今まで見たことがないくらいの魔理沙の微笑みに霊夢は盛大に引いた。邪念が一切無い事に更に引いた。つまりはドン引きである。

「さぁ、私を夢から覚まして…」

「ふんっ！！」

「ぎゃん！？」

にじり寄る魔理沙に、いつの間にか背後に回っていたリンが踵落としを喰らわせる。

小さい悲鳴を上げて倒れた魔理沙を見下ろしながら、霊夢は安堵の溜め息をついた。

「…ありがと、師匠」

「…いや、気にしないでいいよ」

慰めるかの様な視線を向けてくるリンに、霊夢はただ苦笑いするしかなかった。

◇◇◇◇◇

「……ん」

がやがやとした喧騒で魔理沙は目を覚ました。

どうやら博麗神社の一室に寝かせられていたようだ。

かけてあった毛布を退かして立ち上がると背伸びをして二、三回首を回す。外の光は薄暗く、既に日が落ちてしまったのだと理解できる。

しかし、外は何やらがやがやと大勢の人の声が聞こえる。

魔理沙は寝起きで上手く働かない頭を使いながらふらふらと襖を開ける。

そこには大勢の人間や妖怪がいた。どうやら宴会らしい。

はて…?、と魔理沙は首を傾げる。

宴会があるなんて話は聞いていない。何やら悪い夢を見ていた気がするが、思い出さない方がいい気がして無理矢理に思考の片隅へと追いやる。

「おや、魔理沙、起きたのね」

背後から聞こえた声に振り返れば、そこにはいつもの様に真っ青な髪と服を着た桜花がいた。

「ん、ああ…つい寝ちまったみたいでさ。今起きたんだ」

何故か苦笑いする桜花を不思議に思いつつ、もう一度周りを見渡す。

レミリア達、紅魔館組や幽々子と妖夢、八雲一家までいる。

「なぁ、これ何の宴会なんだ?私は何も聞いてないんだが…」

帽子を被り直して縁側に腰を下ろすと、魔理沙は桜花を見上げる。

「ああ、博麗の巫女の正式な就任祝いよ」

「はぁ?就任祝い?」

「博麗の巫女はね、私の妹と模擬戦をして初めてちゃんと名前が引き継がれるの」

魔理沙は帽子の端を持ち上げながら険しい顔をする。

「もしかして、お前の妹って、桜色の髪をした背の小さい奴じゃないだろうな？」

「あら、魔理沙は会った事があるのね」

桜花の返事に思わず魔理沙はガクリ、と肩を落とす。

「夢じゃなかったか…」

「…はい？」

結局、あの光景が夢じゃないと解った魔理沙は桜花に詳しい話を聞いて、ようやく納得したのか宴会の中に混じって行った。

「ふふ…。本当に飽きない子達だよ、まったく」

桜花は一人笑いながら酒の入った猪口を傾ける。

「本当だよね～」

するといつの間にいたのか、桜花の隣にフワリとリンが降り立つ。

「ん？宴会に混じらなくていいの？」

「もぅ、私が騒がしいの嫌いなの知ってるでしょ？」

リンと桜花は並んで座ると、宴会会場である境内をぐるりと見渡す。

妖怪も人間も、同じ様に騒いで、飲んで、歌って、踊っている。

「…うん、いいね」

桜花はそう呟くと隣のリンの頭を撫でる。

「お姉ちゃん…もしかして、私が人間だった時の事考えてる？」

「…うん」

桜花はあの時、今の様に人間と妖怪が仲良く暮らせる様になるなんて難しいと思っていた。精々、お互いに不干渉だとか、手を出さなければ…、といった不完全な形でさえ良くできたと言える程だったのに、こうしてお互いに笑いあいながら暮らしていける理想郷ができた。

「リン、私は今凄く嬉しいし、幸せだよ。…うん、諦めないでよかったと思ってる」

そう言って微笑む桜花の形にリンは寄り掛かると目を閉じて小さく頷いた。

「大丈夫、お姉ちゃんならこれからも上手くやれるよ。人間だった私が妖怪であるお姉ちゃんと仲良くなれたみたいに…」

二人は宴会の喧騒を聞きながら静かに笑い合った。

END

Epilogue（後書き）

幻想郷縁起２（前書き）

この度は、幻想郷の古参メンバーの内の二人について記そうと思う。

どちらも幻想郷のパワーバランスを保っている者達の一人なので、是非、私の書いたこの幻想郷縁起を役立てて欲しい。

～稗田阿求～

幻想郷縁起２

『小さな天狗の長』

「射命丸　真矢（Ｍａｙａ　Ｓｙａｍｅｉｍａｒｕ）」

＞ｉ３２１９０―２１３０＜

能力
・眠りを操る程度の能力

危険度
・高

人間友好度
・普通

主な活動場所
・妖怪の山

◇◇◇

射命丸真矢は天狗の頂点である『天魔』である。

彼女自身は鴉天狗であり、射命丸文の祖母にあたる。
見た目は着物を着た十代前半の小柄な少女の姿をしているが、これは本当の姿ではない。彼女は天狗の中では最高齢であり、老化による身体能力の低下を妖力で補っているため、少女のような外見になっているだけである。

しかし、それとは反対に年齢と共に成長した巨大な翼を持っている。広げた大きさは四メートル以上であり、彼女が何千年と生きた証でもある。

彼女は幻想郷が完成した後、仲間の天狗を連れて妖怪の山に移り住んで来た。

当時の妖怪の山には鬼が住んでいて、長い交渉の末、八雲紫の提案により、鬼は地底に潜り、天狗に山を明け渡したという。

『彼女の友人関係』

彼女は幻想郷の創立者、八雲紫と鈴音桜花とは友人関係にある。

彼女がまだ若い頃、強い妖怪の詳細を記した書物を作るのが趣味であったらしく、二人とはその取材で出会ったらしい。

一時期、妖怪の山に住み着いていたが、当時の妖怪達とはあまり友好な関係を築けていなかったようで、よく二人の世話になっていたという。

彼女が腰に着けている腰布は鈴音桜花が友好の証に作ったもので、妖怪の山の滝と、秋にそこを流れていく紅葉の様子を表しているらしい。

『能力』

彼女は「眠りを操る程度の能力」を持つ。

この能力は対象を眠らせたり、逆に眠りから覚ましたりできる能力である。

他にも、普段は眠っている潜在能力を覚醒させたりすることもで

きる。逆に相手の能力を一時的に封印したりもできるため、応用性が高い。

また、彼女は天狗であるため「風」を操る力もある。これは天狗なら殆どの者が持っている力であり、珍しいものではない。

しかし、彼女は長年の経験から風を使う力は一流であり、孫にあたる射命丸文にもその才能は受け継がれている。

『この妖怪に関する逸話』

・幻想郷大戦

彼女はこの戦いに参戦していたメンバーの一人である。

当時は天魔に就任したばかりで忙しい時期だったのだが、親友達と幻想郷を守る為に護衛もつけずに単身で戦場に駆け付けたという。

『目撃情報例』

・仕事熱心で真面目なので自慢の長ですね。（部下の天狗）

彼女は真面目な性格で、仕事はしっかりやるタイプらしく、人気は高いようだ。

・放浪癖があるのがたまに傷でしょうか。（秘書の天狗）

彼女はよく博麗神社に遊びに行くらしい。しかし、仕事はしっかり終わらせているため誰も文句を言えないでいるとか。

・いつか御祖母様以上の風使いになりたいですね。（射命丸文）

彼女の孫ならばきっと実現可能であると思う。私も応援するので是非頑張ってほしい。

◇◇◇

彼女は手を出さなければ何もしてこないので、見かけたら気軽に話しかけてみるといい。私達が知らない昔からの知恵等を教えてくれる事がある。

妖怪の山に入りたい時は彼女の部下に頼めば護衛をつけてくれる程の待遇はしてくれる。しかし、不法侵入者には厳しいので、無断で山に入るのはやめておいた方がいい。閻魔にも負けないくらいの長い説教が待っているに違いない。

◇◇◇◇◇

『桜色の神女』

「博麗リン（Ｒｉｎ　Ｈａｋｕｒｅｉ）」

＞ｉ３２１７２―２１３０＜

能力

・言霊を操る程度の能力

危険度
・高
人間友好度
・極高
主な活動場所
・四季の花畑

◇◇◇

博麗神社には二柱の神がいる。
一柱は鈴音桜花。そして、もう一柱が彼女、博麗リンである。

彼女は大昔に亡くなった人間の少女である。その時に桜花が妖力が篭った髪飾りを着けて埋葬した。その後、長い時間をかけて彼女の霊力と髪飾りの妖力が融合し、不完全な霊体となって成仏せずにこの世に留まり続けたのである。
やがて、彼女の力によってなのか周囲には全ての四季の花が咲き乱れ、魔避けや怪我の治療に使う薬草を求めて多くの人間が訪れるようになる。
そして、四季の花畑と名付けられたその場所で彼女は長い時間をかけて上位の霊へと進化していったのであった。

それから数千年後、彼女はその周囲の民達から守り神として崇められるようになる。花畑には社が建てられ、一番高い丘の上には神社が建てられた。これが博麗神社である。
彼女は姉と慕う鈴音桜花も一緒に奉るように指示を出すと、花畑にある自らの墓石と社を拠点とし、神社は鈴音桜花の拠点とした。
これにより、博麗神社には二柱の神が存在する事になったのである。

『鈴音桜花との関係』

彼女は鈴音桜花の事を「お姉ちゃん」と言い、慕っている。
生前の彼女は鈴音桜花と大の仲良しで、よく一緒に遊んでいたのだという。
彼女が死んだ時、桜花は彼女の死を悲しみ、妖怪でありながら彼女の為に涙を流したという。
その後、桜花は彼女を埋葬する時に絆の証として髪飾りを彼女の死体に着けてあげた。それが彼女の新たな人生の幕開けになるなど、夢にも思わなかったに違いない。
彼女が桜花を姉と呼ぶのは、妖怪と人間の壁を越えた確かな絆の証であり、幻想郷の礎でもあるのかもしれない。

『博麗の巫女との関係』

彼女は滅多に人前に姿を表さない。しかし、彼女と度々顔を合わせるのが鈴音桜花と博麗の巫女である。
彼女は代々、博麗の巫女の修行等の指南役を勤めている。新しい代に変わる度に必ず一度は模擬戦を行うのが習わしであり、その時に今後の修行内容を考えるのだという。

『彼女と幻想郷』

リンは『言霊を操る程度の能力』を持っている。
言葉には力があり、言葉通りの効果を生み出す力があると言われている。
彼女はこの力を使い、幻想郷中の会話を聞く事ができる。どんな

秘密でも声に出してしまえば言霊として彼女のもとへと届くのである。

そして、何か悪巧みを企んでいる者がいたら桜花に知らせ、すぐに博麗の巫女が駆け付けるという仕組みなのだ。

声に出さずにすれば良いのだが、そのような面倒な事をするような人物は幻想郷といえどもスキマ妖怪くらいのものだろう。

更に言うならば、彼女は魔法使いにとっては天敵である。魔法を使うにも強大な魔法ほど詠唱が必要であり、それらは言霊として正確にリンへと伝わってしまう。要するに何が起きるのかあらかじめ解ってしまうのである。

彼女とまともな勝負をしたければ一切喋らない覚悟が必要となるだろう。

『歴代巫女の総纏め』

彼女は生前の幼い姿のまま、その時の博麗の巫女と似た服装をして無邪気な笑顔を見せるが、神としての仕事をする場合は表情ががらりと変わる。

幼い見た目からは表現できないような圧力と、厳格な言葉遣いは、とても普段の彼女とは思えない程の違和感を生み出す。

彼女が仕事をする時は必ず歴代の博麗の巫女の魂が数名現れる。歴代の巫女達は死んだ後も彼女を敬い、力を貸してくれているのだという。リンによれば強制ではなく、彼女達が望んで手伝ってくれているらしい。これも一種のカリスマと言えるだろう。

『目撃情報例』

・あの子、意外と寂しがり屋さんだから友達になってあげてほしい

わ。（鈴音桜花）

私は一応面識はあるし、友達であると思っている…。こんなに体が弱くなければ遊びに行くのだけれどね。

・あそこの花畑は一息入れるのに丁度いいのよ。リンとお喋りするのも楽しいわ。（風見幽香）

花を大切にする者同士、気が合うのだろう。よく見るとこの二人は顔つきが似ているので姉妹に見えなくもない。

・もう少し修行を楽にできないかしら？（博麗霊夢）

…自業自得でしょうに。

◇◇◇◇◇

幻想郷縁起２（後書き）

イラストに少々力を入れてみました。どうでしょうか？

よかったら感想をくださいね！！

萃夢想Ｐｒｏｌｏｇｕｅ（前書き）

今回から原作に戻ります。

萃夢想Ｐｒｏｌｏｇｕｅ

長かった冬も終わり、極端に短かった春も終わりを迎え、夏の気配が強まりつつあった。

そんな中でも、幻想郷では花見が続いていた。

そのお花見は幻想郷の少女を集めるだけではなかった。

数日おきに繰り返される宴会。それと同時に幻想郷全土にゆっくりと――しかし、確実に妖気が満ちてきていた。

宴会が行われる度に増していく妖気。しかし、まだ何も起きてはいない。

そんな幻想郷の様子に違和感を覚えた数人の少女達が調査を始めた。

次の宴会まで、あと――3日。

◇◇◇◇◇

「おかしい…」

博麗神社の縁側で博麗の巫女――博麗霊夢は考えていた。

「いくらなんでもこんなに宴会ばかりで誰も不思議に思わないなんて……」

最後に宴会が開かれたのは二日前。その五日前にも、そして、その更に四日前にも宴会は開かれている。

流石にこれだけ短い間隔で宴会が行われれば何かあるのでは、と気づく者がいてもおかしくなかった。

「どうして誰も気付かないのかしら…。しかも、この妖気…」

まるで霧だ、と霊夢は思った。あやふやで、薄く広く、幻想郷に広がっている妖気。今は何も起きていないが、これが原因で何か起こらないとも限らない。

「こうしちゃいられないわ…」

霊夢は立ち上がると、お札とお祓い棒を手に取る。

「まずは――紅魔館かしらね。霧といえばあいつらだし…」

そう呟きつつ、霊夢は空へと飛び上がると、一直線に霧の湖の方へと消えていった。

そして、そんな霊夢を見送る影が一つ。

「……思ったよりも早かったわね」

いつも何時とて青い服を着た桜花は、既に見えなくなった霊夢の方を見ながら呟いた。

桜花はこの異変に最初から気付いていたのだが、あえて何も言わなかった。

と、いうのも、この異変は実際に幻想郷をどうこうしようという目的ではないからである。

原因は一人の酒と宴会好きな少女が始めた事であり、桜花がどうこう言う事もないと判断したから、というのもある。

「はてさて、霊夢は彼女を見つける事ができるかしら？」

神社の縁側で、桜花はクスクスと笑うのだった。

◇◇◇◇

東方萃夢想～Ｉｍｍａｔｅｒｉａｌ　ａｎｄ　ｍｉｓｓｎｇ　Ｐｏｗｅｒ～

『主人公を選択するのこと』

『青き神獣』

鈴音桜花～Ｏｕｋａ　Ｓｕｚｕｎｅ～

『弾幕』

・妖力弾（弱）

威力は小さいがスピードが速く、真っ直ぐ飛ぶ弾幕。

・妖力弾（大）

相手に触れると爆発する弾幕を放つ。威力は大きいが、弾速が遅い。

・ホーミングアミュレット

相手をある程度追尾する弾幕を放つ。高低差に強く、真上にも飛ばせる。

『技』

・爪撃三連

爪で斬りつける近距離技。追加で三回まで斬りつける。隙が小さくて使いやすい。

・瞬速の舞

相手に突進しつつ回転蹴りを放つ。移動中はグレイズ判定あり。

・月影

空中専用技。空中から高速で落下して地面を殴り、衝撃破を左右

に飛ばす。

・拒絶の壁
カウンター技。結界を張り、相手の近接攻撃を受け止め、即座に投げ飛ばす。弾幕はそのまま相手に跳ね返す。

『スペルカード』

・壱符
神霊「夢想封印・青」
言わずと知れた桜花が使う夢想封印。青い五つの光弾が相手へと向かい、触れると爆発する。

・弐符
神霊「夢想封印・爪」
爪に夢想封印を纏わせて振り抜くスペル。巨大な五つの斬撃が相手へと飛ぶ。振り抜く爪にも攻撃判定がある。

少女祈祷中…

萃夢想Ｐｒｏｌｏｇｕｅ（後書き）

黄昏フロンティアさんの描くキャラクターの絵は綺麗ですよね。
憧れます。

Ｓｔａｇｅ１（前書き）

神霊廟でなかなかマミゾウが倒せない！！

Ｓｔａｇｅ１

『主の仇討ち』

Ｆｉｒｓｔ　Ｄａｙ～１０：００～

－博麗神社－

◇◇◇◇◇

－桜花Ｓｉｄｅ－

ぽかぽかと温かい日差しを浴びながら、私は縁側で煎餅をかじっていた。

今回の異変の犯人は間違いなく伊吹萃香であり、霊夢が勝手に解決するだろうから、私はこうして神社でのんびりとしているわけだ。

そんな平穏な一時は、一人の来訪者により脆くも崩れ去る事になる。

「こんにちは」

挨拶をされて振り向けば、そこには紅魔館のメイド長――十六夜咲夜が立っていた。

「あら、貴女が一人なんて珍しいわね。主のお嬢様はどうしたの？」

咲夜は常にレミリアの傍におり、出かける時も大抵一緒にいる。こうして一人で出歩く時は食材の買い出しくらいしかないので、とても珍しいと言えるだろう。

「それが…お休み中のところを突然やってきた霊夢に叩き起こされたうえに、弾幕ごっこでこてんぱんにやられてしまいまして。…現在は拗ねて妹様と一緒のベッドでお休みになっているわ」

「……」

私は思わず頭を抱えてしまった。

異変解決に積極的になったのはいいが、考えなしにも程がある。もう少し冷静になるかと思っていたが……修行の内容を厳しくしようかしら。

「…それは、家の巫女が失礼をしたわ。……それで、貴女は何故ここに？」

咲夜は苦笑いしつつも、懐からナイフを数本取り出す。

「いえ、大した理由はないのですが……主がやられて黙っておくのもどうかと思いまして…」

「……要するに、仕返し？」

「まぁ、有り体に言えばそうなるわね…」

私は溜め息をつくと、咲夜を半目で見据える。

「……何で霊夢本人の所に行かないのよ」

「彼女が今、何処にいるかわからないし……部下の失敗は上司の責任でしょう？」

「…はぁ」

もう、どうでもよくなってきたので、私は神社の境内へと向かい、咲夜と向き合う。

「…まぁ、確かに悪いのは家の霊夢だしね。相手になりましょう」

「では、主の仇討ちをさせていただきましょう」

「…まだ死んでないでしょ」

◇◇◇◇◇

ＢＧＭ『メイドと血の懐中時計』

咲夜が投げつけるナイフを、桜花は次々と回避する。
しかし、回避してもナイフは向きを変えて背後からも桜花に襲い掛かる。
咲夜が時間を止めて、ナイフの向きを変えているのである。

しかし、一度戦った事がある桜花だからこそわかる。
咲夜が能力を使うと、一瞬、世界が歪む様な感覚を受ける事を。
だからこそ、桜花は焦らずにナイフを回避しつつ、弾幕を放つ。

桜花の弾幕を回避しながら、咲夜は苦い顔をすると、一旦距離を開ける。

「…やっぱり、一度戦った相手とはやりにくいわね」

咲夜は新しいナイフを取り出す。両手に一本ずつ、いつものより大き目のナイフを握りしめると、地面を蹴って桜花へと接近する。

桜花は、先程まで弾幕ばかりを放っていた咲夜が急に接近戦を仕掛けてきた事に驚くが、瞬時に冷静な思考に切り替え、構えをとる。

しかし、咲夜は手にしたナイフを山なりに投げると、スペルカードを取り出した。

「――っ、フェイント!?」

桜花は投げられたナイフに一瞬、気を取られてしまい、咲夜への反応が遅れてしまった。
一瞬の隙を、この瀟洒なメイドは見逃さない。

―幻符『殺人ドール』

それは紅霧異変で見た事のあるスペルだった。

咲夜の周囲に浮かぶ無数のナイフ。それらは一斉に桜花へと向き直り、放たれた。

それらを、桜花は大きく円を描く様に走り抜けることで回避する。
しかし、咲夜が時を止めた後、再び別の方向からナイフが襲い掛かってくる。

「きりがない…なら！」

桜花は爪に妖力を篭めると、三回連続で振り抜く。
桜花の青い妖力が放たれ、周りのナイフを砕いて塵に変えていく。

咲夜は時間早めたり、遅くしたり、止める事はできても戻す事はできない。
咲夜のナイフは一度砕けば使えなくなるのである。

「…よし、これで――」

「――これで、なにかしら？」

背後からの声に、桜花はハッとして振り返る。

そこには、先程囮に使ったナイフを再び両手に持った咲夜がいた。

二人の距離は腕一本分程――完璧に咲夜のナイフの射程内である。

咲夜の瞳が真紅に染まる。

桜花はその光景を見て思った。

それはまるで――。

そう…レミリアみたいだ、と。

―傷魂『ソウルスカルプチャー』

次の瞬間には、桜花は既に動いていた。

爪に再び妖力を纏わせて、振り返りながらの連撃を放つ。

咲夜は、一瞬身を屈めたかと思うと、普通の人間では捉える事ができない程の速さでナイフを振り回す。

誰か観客がいたのなら、二人の両手は肩から先が見えなかったことだろう。

ぶつかり合うナイフと爪。

二人は互いを睨んだまま、腕を振り続ける。
いくつもの火花が散り、既に打ち合った回数は三桁を越えている。
このまま永遠に続くかと思われた打ち合いは、鈍い金属音と共に終わりを迎えた。

空中に二つの金属片が舞う。
咲夜の持つナイフが、両方とも根元から折れていた。

咲夜は桜花との距離を開けると、折れたナイフを見つめ、深く溜息をついた。

「はぁ…私の負けね」

そう言うと、彼女は両手を上げて降参の意を伝えた。

桜花も苦笑いで構えを解く。

「驚いたわ、まさか自分の時間を早めて攻撃してくるなんて」

「あれはあまりやりたくないのよ…疲れるから」

そう言うと、咲夜は腕をぷらぷらと振る。

「きっと、明日は筋肉痛でしょうね」

彼女の言葉に、思わず桜花はクスクスと笑った。

「まぁ、私に速さで挑むのは間違いね。私の戦闘スタイルはスピードがメインだから」

そうね、と言いながら咲夜は悩ましげに額を押さえる。

「すいません、お嬢様。仇は取れませんでした…」

「だから死んでないでしょ!!」

Ｓｔａｇｅ　Ｃｌｅａｒ!!

少女祈祷中…

Ｓｔａｇｅ１（後書き）

更新遅れてすいません（汗）

次はできるだけ早く書き上げたいです。

では、次回をお楽しみに！！

ｓｔａｇｅ２（前書き）

いつの間にかＰＶが５７万を超えていました！！

応援してくださっている皆様、ありがとうございます。

＞ｉ３３４９１―２１３０＜

stage2

Ｓｔａｇｅ２

『風神少女』

Ｆｉｒｓｔ　Ｄａｙ～１４：００～

－博麗神社－

◇◇◇◇◇

－桜花Ｓｉｄｅ－

昼を過ぎて気温も高くなり、心なしかぽかぽかとしてきた時間帯。
そんな中、私は相変わらず神社の縁側に腰掛けて紫が持ってきた書物を読んでいた。

その書物は藍が書いた物らしく、三途の川の距離を求めた計算式がビッシリと懸かれている。

「三途の川って、人によって長さが違うはずなんだけど…」

そう呟いた私はまた一つ、頁をめくる。

複雑な式の羅列は、人間には絶対に理解できない部分も多く、見ただけで嫌気がさす程の雰囲気を醸しだしている。

私はそんな式を眺めながら団子を一つ口に放り込む。

――うん、美味しい。

それから、ふと顔を上げて爽やかな青空を眺める。

霊夢は今頃何処を飛び回っているのやら…。

意気揚々と出発したものの、中々目当ての相手が見つからず、苛々している霊夢の姿を想像して思わず口元が緩む。

この異変の犯人は簡単には見つからない。

なぜなら、今の彼女には姿がないから。

幻想郷に薄く広がる霧――。

これが彼女の今の姿であり、存在感も薄く、簡単には気付けない。

私は、次の宴会までに霊夢に見つけられるのか、少しの期待を持ちながら見守る事にしている。

「――と、言いたいところだけど」

私は立ち上がりながら再び空を見上げる。

傍観すると決めたばかりなのに、こちらに向かう気配がある。

しかも、かなり速いスピードだ。

おそらく幻想郷で三番目くらいに速いだろう。

ちなみに、一番は私、二番目が真矢だ。

「それにしても、この気配、どこかで――真矢？……いや、違う。真矢に似てるけど、少し違う。……これは――」

「あややや、やっと許可をもらえましたよ！！」

明るい声と共に、空から一人の少女が降りてきた。

肩にかかるくらいの黒髪、白いブラウスに黒のミニスカート。背中には黒い翼。手には一台のカメラが握られている。

鴉天狗の少女――射命丸文は、満面の笑みで私の前に立った。

「――なるほど、真矢の親戚の誰かね？」

「あやや？お祖母様を知っているということは、貴女が鈴音桜花さんで間違いないですね？」

お祖母様――か。

真矢も、私と会わないうちに幸せな家庭を作っちゃって……。

私は、彼女がまだ若い頃からの知り合いだし、友人――よりは年下の妹みたいな感じだったから、感慨深いわね。

「真矢をお祖母様と呼ぶということは、貴女が文ちゃんで間違いないわね？

真矢から話は聞いてるわ。可愛い孫だってね」

「そんな、お祖母様ったら……」

頬を染めながら恥ずかしがる文を改めて眺めてみる。

髪の長さを変えたら、正に真矢そっくりである。真矢の場合は妖術で身体能力を補ってるから、本当はもうだいぶ歳なのだが――。

それに、若い頃の真矢よりも更に元気がいい。真矢はどちらかと言えば内気で、趣味の書物作りの情報集め以外は滅多に自分のテリトリーから出なかった。

しかし、この子は一年中どこかを飛び回っている様な印象を受ける。良く言えば行動的、悪く言えば落ち着きが無いと言える。

「今日はお祖母様の許可を得て、私と手合わせして頂こうかと思いまして…」

「手合わせ？」

そう言うと、文はポケットから手紙を取り出して私に差し出す。
中を確認すると、どうやら真矢からの手紙らしい。

『私の孫が一通りの修行を終えたので、前々から会いたいと言っていた貴女に会わせる事にしました。
修行の成果をみるつもりで相手をしてあげて下さい。

～真矢～』

彼女らしい簡潔な文章だった。でも、それが彼女らしくて、思わず口元が緩んだ。

「わかったわ。手合わせの件、喜んで受けましょう」

私は背伸びをしつつ、文の頭に手を乗せる。
文は嬉しそうに笑うと、大きくバックステップで距離を取る。

「では、お相手、お願いします。いきますよ！」

-Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ-

◇◇◇◇◇

BGM「風神少女」

文の手に握られた紅葉を彷彿とさせる天狗の団扇が、ひらり、と動く。ほんの少し、そよ風程度を起こす程の動きだった。

しかし、文が目を見開くと同時に空気の塊が撃ち出された。微かに目に見える程度の密度に集まった風が桜花に迫る。

桜花は右腕をゆっくり持ち上げると、煙を払うかの様な様子で横に振り抜く。

パァン、と何かが破裂する様な音が響き、彼女の青い髪を通り抜ける風が靡かせた。

「――風の圧縮具合は合格。でも、もう少し形を整えた方がいいわね。じゃないと、今みたいに軽く撫でただけであっさり形が崩れるわ」

文は目を見開いて驚いた。

今の風は文が小手調べのつもりで放ったとはいえ、それなりに力を篭めた弾幕だった。

そして、それは呆気なく打ち消され、さらには注意点まで教えてもらった。

しかも、その内容が祖母の言う文の課題の一つと同じだった。

文は修行を終えたとはいえ、天狗の中ではまだまだ若い。そんな彼女には当然ながら苦手な事もある。それが風の形を整える事であった。

彼女は『風を操る程度の能力』を持っている。

そんな彼女は、風を使った攻撃をする時、無意識に無駄な工程を省いているのだ。

天狗達が風を使った攻撃をする場合、「風を集める」「圧縮する」「形を作る」という最低でも三つの工程をこなしているのだ。他にも色々とあるのだが、大まかな工程にはこの三つが必ず入る。

文はこの工程のうち、三つ目の「形を作る」という工程を行っていない。

能力のおかげで形を作らずとも圧縮された風自体が強力で、威力が高いからだ。

しかし、この方法だと桜花や紫などの力の強い妖怪達には通用しない。少し力を入れて払えば、形の決まっていない風はあっさりと霧散する。

当然、真矢と友人であり、天狗達とも仲がいい桜花はあっさりとその事を見抜いた。

文が再び団扇を振るうと、今度は風の刃が現れる。先程よりも空気の密度が高く、はっきりと刃の形が目に見える。

桜花は再び腕を振るうと、爪による斬撃で風を打ち消す。そしてそのまま地面すれすれの体勢で前へと走り出す。

一瞬でトップスピードに達した桜花は、文の目の前で急停止する。文には桜花の動きは見えていなかった。

交際する視線――桜花は笑い、文は驚愕した顔で桜花を見下ろしている。

腕を振り抜いた体勢で固まっていた文は、ハッ、とすると、急いで腕を戻しながら打撃を行う体勢に入るが、その前に桜花の右手がすでに文の腕を掴んでいた。

「その腕の振り方じゃ間に合わないよ。私を相手にするなら、まずは接近を許しちゃいけない」

次の瞬間――文は空中に投げ飛ばされていた。

「――ふぇ？」

一瞬の浮遊感を感じた文は、その後、重力に従い落下する感覚を覚えた。

ハッ、と我に返った文は空中で素早く体勢を立て直す。

神社の境内の端に着地した文は、その場から動かない桜花へと視線を向ける。

桜花が振り返る時、髪を括る紐に付けられた鈴が、凛、と音を奏で、穏やかな笑顔を向けられた。

――あぁ、遠い。

文は心の中でそう呟いた。

自分には遠すぎて触れることさえできない、と彼女は俯いた。

「――文」

名前を呼ばれて顔を上げる。

そこには、先程よりも穏やかな顔をした桜花がいた。

「貴女はまだまだ強くなれる。今はまだ弱くても――貴女は、いつか真矢だって越えられる。だから…今できるだけの全力で、かかって来なさい」

文は目を見開いた。

「（私が…お祖母様を……越える？）」

文は立ち上がると、一枚のスペルカードを取り出した。

そのカードを少し見詰めた後、文は再び顔を上げる。

「桜花さん、私は――本当にお祖母様を越えることができるでしょうか？」

その質問に、桜花は頷く事で肯定する。

次の瞬間――文の姿は巨大な竜巻で見えなくなった。

――神風「風神招来」

同時に聞こえたスペルの宣言に、桜花は目を細める。

文が使ったスペルは、真矢が使っていたスペルと同じだった。

風を集める動作をそのまま攻撃として使うスペル、「風神招来」は、攻撃というよりも、次のスペル発動の為の布石として使われる。

文の周りに集まる風はみるみる大きくなり、遂に目で見える程の密度を持ちはじめる。

文は懐から新しいスペルカードを取り出す。

それは、まだ何も描かれていない白紙のカードだった。

それに力を込め、徐々にその表明に絵が浮かび上がる。

「私は風――幻想郷の風になる！！」

文の言葉と同時に、スペルカードがふわり、と宙に浮く。

――「幻想風靡」

次の瞬間――文は飛んだ。

そのスピードは風も後押しをしているのか、桜花でさえ目で追うのがやっとである程速かった。

文が通った後には赤い閃光が瞬くのみで、普通の人間であれば一瞬たりとも姿が見えない。

しかし――空中を縦横無尽に飛ぶ文を、桜花はその青い瞳で捕らえた。

文がこちらに向き直るのとほぼ同時に、桜花も迎撃の体勢に入っていた。

文が桜花へと向かう。現在の速度であれば、二人の間など一瞬で埋まってしまうだろう。

桜花は文が来るタイミングに合わせて腕を振り抜く。

桜花の放った横に振り抜く攻撃は、上か下に避ける以外に回避する方法がない。しかし、下に回避してしまえば地面に激突してしま

うので、大抵の人なら上に回避すると思う攻撃を――文は下に移動する事で避けた。

文は桜花の腕が通り過ぎたのを確認すると、地面に激突する瞬間、身体を起こし地面を右足で全力で蹴った。

あまりにも速い速度と風の後押しもあり文の右足がぎしり、と軋むが、文は止まらなかった。

そのまま、完全にがら空きとなった桜花の胸元へと飛び込む。

――しかし

――ズキッ

「――あっ！？」

突然響いた足の痛みにバランスを崩し、前のめりに倒れる様に、文は桜花の胸元へと頭から飛び込んだ。

桜花は躓いた様に倒れ込んでくる文を抱き留める様に腕を広げ、文がぶつかると同時に胸元に感じる強烈な衝撃にたまらず息を吐いた。

「――ぐっ、はぁ！！」

そのまま二人は縺れ合いながら地面を二、三回転がると、賽銭箱に桜花が背中を打ち付ける形で停止した。

◇◇◇◇◇

「痛った～。あれ、なんか柔らかい――って、あれ？」

文が激しい衝撃から目を開けた時、最初に見たものは“青”だった。

慌てて身体を起こそうとするが、背中を押さえられる感覚から、漸く自分が誰かに抱きしめられているのだと理解した。

「――ぅ」

「――っ！？」

頭上から聞こえた声に慌てて顔を上げると、苦痛に歪んだ自らが尊敬する大妖怪の顔があった。

「あれ――桜花様？」

文の声に桜花は目を開くと、腕を離してくれた。

「あ、あの…桜花様、私…ぁ」

慌てて謝ろうとした文の頭に桜花の手が乗せられた。

「凄いじゃない、文。まさかあそこで下から攻められるとは思わなかったわ」

「え、で、でも…」

桜花は鳩尾辺りを押さえてニッコリと笑う。

「ふふ、貴女の攻撃……確かに私に届いたわよ」

「――あ」

躓いたとはいえ、あのタイミングと位置関係からして文の攻撃はどのみち桜花に届いていただろう。

文は信じられないという気持ちで立ち上がろうとするが、足に響く痛みに再び座り込む。

「痛っ！！」

「あら、腫れてるわね。地面を蹴った時に捻ったのかしら…」

桜花は文を横抱きに抱き抱える。所謂お姫様抱っこである。

「え…えぇ！？お、桜花様、ちょっと！？」

「ふふ、いつの間にか“さん”づけから“様”になってるわよ？」

文は顔を真っ赤にしながら俯く。

しかし、俯くと視線は自然と桜花の首から下――つまり胸元へと向かうわけで……。

「（さっきの柔らかい感触って――まさか…／／／）」

遂に限界を超えた文は目を回しながら気を失うのであった。

Ｓｔａｇｅ　Ｃｌｅａｒ！！

少女祈祷中…

Ｓｔａｇｅ３（前書き）

忙しくて更新が遅くなりました！！

しかも、今回は短めの内容です。

Ｓｔａｇｅ３

『夜の始まり』

Ｆｉｒｓｔ　Ｄａｙ～１９：００～

－博麗神社－

◇◇◇◇◇

－桜花Ｓｉｄｅ－

夕日が沈んでいくのを眺めながら、私は神社の屋根から星の瞬く夜空へ、ひらり、と身を踊らせた。

昼間に犯人が見つけられなかった霊夢は、明日に備えて札やお祓い棒の点検をしている。

見つからないのが余程悔しいのか、夕飯を僅か数秒で食べ終えると、部屋に篭って黙々と作業を続けている。

私は、そんな霊夢の雰囲気から逃げる様に、夜の散歩へと出発する。

夜は妖怪の時間――。

神社の上空を飛び回ると、霧の湖へと体を向ける。
最近、参道の整備に忙しくて中々暇が無かったので、久しぶりに笛を取り出して適当に記憶にある曲を吹きながら移動した。

湖に行くなら、まずはチルノの家へ寄るとしよう。最近あまり構ってやれていないから、拗ねているかもしれないし…。

チルノが機嫌を損ねたらとにかく大変なのだ。
この前は悪戯し過ぎてふて腐れたチルノに、どうすれば許してくれる？、と聞いたら――“三日間、あたいと○○○したらゆるしてあげる”と言われた事がある。
本当に三日間も相手をさせられたので、解放された時には正に色んな意味で満身創痍…。腰が抜けて立てなかった。
どれだけ体や精神を鍛えても、あの感覚だけはどうしても耐え切れない。――というか、二日目辺りから記憶が曖昧でよく思い出せない。
様々なプレイを試されたというのはぼんやりと覚えているけど…。

――閑話休題

自分の記憶に悶絶していたら、いつの間にか霧の湖へと到着していた。

しかし、目の前にある湖からは妖精の気配が全く感じられなかった。

かわりに感じるのは――とても大きく、もっと妖しい気配。

目の前の空間が裂ける。

裂けた空間から覗く目玉と人間の手のようなもの。

裂け目の両端には鮮やかな赤いリボン。

その隙間の中から、八雲　紫は優雅に地面へと降り立った。

「おはよう――そして、こんばんは、桜花」

紫は畳まれた傘を片手に持ち、白を基準にした生地と、紫色で複雑な曼陀羅の書かれた生地を使った――ドレスと陰陽師の着物が組合わさった様な服を着ていた。

長い金髪も纏められ、さっぱりとした印象を受ける。

ただ、いつもの倍、胡散臭い雰囲気を感じさせる格好だ。

アンバランスに思える不思議な服なのに、紫が着ると似合ってし

まうのだから不思議だ。

「こんばんは、紫。貴女が此処に来るなんて珍しいわね。何かあったの？」

紫はスキマから取り出した扇で口元を隠すと、いつもの胡散臭い笑みを浮かべる。

「ふふふ…どうかしら。でも、貴女も気づいたから此処に来たのでしょう？」

紫はスキマに腰掛けて湖の方へ視線を向ける。

私もつられて見てみると、湖の中心辺りに明らかに自然に発生したものとは別の霧が発生していた。

その霧から感じるのは強い妖気。

力の象徴たる“鬼”の気配。

「彼女がたまたま、此処にいるのに気づいて様子を見に来たのだけれど……」

「紫の知り合いなのね？　私に鬼の知り合いはいないからね」

「まぁね、古い友人の一人よ」

妖気を纏った霧は相変わらず湖の上をふわふわと漂うだけで、まるで私達を見て、楽しんでいる様な印象を受けた。

「ねぇ、紫。彼女を私に紹介してはくれないの？」

「そうねぇ…。じゃあ、私と戦って勝ったら紹介してあげる。方法は……久しぶりに弾幕ごっこでもしましょうか。仕事の息抜きも兼ねて、ね？」

「いつも大半を藍に押し付けてるくせに…」

「あら、式神を上手く使えるのも実力の内よ？」

「…はぁ」

◇◇◇◇◇

ＢＧＭ「夜が降りてくる～Ｅｖｅｎｉｎｇ　Ｓｔａｒ～」

紫がスキマを広げると、中から無数のクナイ型の弾幕がこちらに向かってくる。
速度は遅いが範囲が広く、隙間も小さい。
仕方がないので、爪で切り裂いて消していく。しかし、数が多くて全てを捌けない。
私は、自分が通れるくらいの穴を空けるつもりで腕を振る。
私の爪に当たった弾幕達はあっさりと霧散していった。

しかし、そんな事を紫が黙って見ている筈がなく――紫が空間をなぞる様に腕を動かすと、私へと一直線にレーザーの様な弾幕が放たれる。
それを半身になりながら避けると、次は頭上に隙間が開き、中から墓石が降ってきた。……なんて、罰当たりな。

少々気が引けるが、墓石を蹴り飛ばして逆に紫へと飛ばしてやった。
まさか飛ばしてくるとは思わなかったのか、紫は一瞬、目を見開くとスキマを開く。スキマは墓石を飲み込むと、跡形もなく消えてしまった。

「脅かさないでほしいわ…」

「こっちこそ、急に墓石なんかが降ってきて驚いたわよ」

お互いに顔を見合わせて笑うと、同時に距離を詰める。

紫は手に持っている傘を広げると、それで体を隠す様にその場でくるりと回転する。
そして、傘が突然発光したかと思うと、四方向に光を放ちながらまるで回転鋸の様にこちらに向かってきた。

私は地面を殴ると、砕けて浮き上がった岩を紫に向かって蹴り飛ばした。
しかし、その岩は紫の傘にぶつかった瞬間に砕け散ってしまった。
一体、あの傘はどれだけ固いのだろうか。おそらく、紫が境界を弄ったんだと思うけど…。

「――ふっ！！」

私は小さく後ろに跳びながら槍型の弾幕を四本投げつける。
すると、紫は傘を回すのを止めて普通に回避した。

「あら、何故その傘で弾こうとしないのかしら？」

「もぅ、あんなに妖力の篭った弾幕を弾こうとしたら、流石に私の傘ももたないわよ」

「ありゃ、ばれてたんだ」

流石は紫だ。私が弾幕にこっそり仕込んだ妖力に気付くなんて…。
昔からの知り合いなだけあって、私の癖や性格をよくわかっている。

「じゃあ、お返しね♪」

「…げっ！？」

紫の周りに無数の小さなスキマが開いたかと思うと、色々な物が飛び出してきた。

墓石、卒塔婆、道路標識……果てには自販機まで飛んできた。

というか、自販機や道路標識は最早見るまで形を忘れていた。久しぶりに見たな、この形…。

とにかく、ひたすら飛んでくる物を避け続ける。

半減しようとこちらが弾幕を撃っても紫がスキマで無効化してしまう。

むぅ…やはり紫の相手は大変だ。

「仕方ない、ちょっと荒々しいけど…」

ポケットの中から一枚のスペルカードを取り出す。

―神霊「夢想封印・爪」

両手に纏わせた夢想封印を、思いっきり振り抜くことで前方に飛

ばす。
夢想封印は、スキマから飛び出してくる物を次々と両断しながら進んでいく。

「ふふ、無駄よ」

しかし、紫は余裕の顔で目の前に一際大きなスキマを開いた。
紫のことだ、スキマを使ってスペルを跳ね返そうと考えているんだろう。しかし――。

「残念、それじゃ無理だよ、紫」

私の夢想封印は紫のスキマを“切り裂いて”彼女に命中した。

「…がっ…なっ！？」

腹部に直撃したためか前屈みに地面に膝をついた紫に歩み寄って助け起こす。
ぶつかる寸前に威力を落としたから、強い衝撃はあれど彼女の体は切断されてはいない。
まぁ、やろうとも思わないけど。

「くっ…何故？」

紫は私を見上げながら尋ねる。

「いくら空間の境界であるスキマでも、紫が作り出している以上、私の夢想封印は効果を与える。
簡単に言えば、妖力で作られてるなら、強制的に封印できるわけ」

「そういうことか…。能力に頼りすぎた私の負けね…」

「そういう事。でも、紫も本気じゃなかったでしょ？　スペルを一枚も使わないなんて…」

紫は苦笑いすると、しっかりと立ち上がった。
お腹を摩りながら傘を広げると、スキマに腰掛ける。

「実は、スペルカードを持ってきてないのよ」

「あら、どうかしたの？」

紫は扇で顔を隠しながら照れた様に笑った。

「えっと…寝ぼけて忘れてきたの…てへ♪」

「……え？」

「……」

「……」

二人とも無言でその場に固まった。

勿論、それからしばらくの間、何とも言えない空気が続いたのは言うまでもない。

◇◇◇◇◇

Ｓｔａｇｅ　Ｃｌｅａｒ！！

少女祈祷中……

Ｓｔａｇｅ３（後書き）

少々手違いで、パソコンの中にある私のイラストがいくつか消えてしまうというハプニングが…。

心が折れそうになりました（泣）

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1320p/

東方～青狼伝～

2011年11月6日02時06分発行